

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡 9

(池島 II 期地区 02-1 調査区・06-2 調査区)

——級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書——

一〇〇九年十二月

2009 年 12 月

財団法人 大阪府文化財センター

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡9

(池島II期地区 02-1 調査区・06-2 調査区)

——級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—

財団法人 大阪府文化財センター



1 06-2 調査区 第13-b面 東側 造構集中部（南から）



2 06-2 調査区 第14-2面 水田検出状況（南から）

卷頭図版 2



06-2 調査区 第10面 小形仿製鏡

序 文

本書は、当センターが 1989 年以来発掘調査を進めてまいりました恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査の池島Ⅰ期地区と池島Ⅱ期地区をつなぐ施設部および池島Ⅱ期地区の報告書です。治水緑地の調査は、これまでに福万寺Ⅰ期地区・池島Ⅰ期地区の調査を終了し、現在は福万寺Ⅱ期地区・池島Ⅱ期地区的調査を進めています。

河内平野は、弥生文化が早くに普及したところとして知られ、早くから稻作が定着した地域のひとつです。大阪では、平野や生駒山地の扇状地を中心に数多くの人間生活の痕跡が確認され、日本列島の弥生文化研究の中心地域として数々の弥生時代の遺跡が発掘調査されております。

本遺跡も、既往の調査によって弥生時代前期から現代に至る各時代の農耕関係の遺構が確認されています。これまでの調査で、弥生時代各時期の水田、古代の条里制に伴う水田区画など、日本列島の農耕を考える重要な資料に恵まれた遺跡であることが明らかになっています。本書に収められた、池島遺跡（その8）調査区および池島・福万寺遺跡Ⅱ（その6）調査区では、既往の調査同様に現代から弥生時代に至る各時期の水田遺構が確認されました。最後になりましたが、調査の過程でお世話になった地元の皆様をはじめ大阪府土木部、同部寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会など関係諸機関、指導助言を賜った多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも当センターの調査にご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成 21 年 12 月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野正好

例　　言

- 1 本書は、東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがる地域に計画された恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡II期地区 02-1 調査区および 06-2 調査区の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人大阪府文化財センターが一級河川恩智川治水緑地池島遺跡発掘調査（その8）として平成14年2月22日～平成16年2月27日の間委託を受け、現地調査を平成14年6月3日～平成16年2月27日に実施し、さらに池島・福万寺遺跡II発掘調査（その6）として平成18年9月1日～平成20年5月30日の間委託を受け、現地調査を平成18年10月6日～平成20年4月30日に実施し、さらに池島・福万寺遺跡II発掘調査（その10）として平成20年9月1日～平成22年9月30日の間委託を受け、平成20年9月1日～平成21年6月30日に遺物整理を実施した発掘調査の報告書である。
- 3 調査は、以下の組織体制で行なった。

02-1 調査区

[調査] 平成13年度

調査部長 井藤 徹、調整課長 赤木克視、中部調査事務所長 藤田憲司、調査第二係長 國秉和雄、技師 廣瀬時習、専門調査員 鹿野 崑

[調査] 平成14年度

調査部長 玉井 功、調整課長 赤木克視、中部調査事務所長 藤田憲司、調査第四係長 國秉和雄、技師 廣瀬時習、専門調査員 鹿野 崑

[調査] 平成15年度

調査部長 玉井 功、調整課長 赤木克視、中部調査事務所長 小野久隆、調査第三係長 國秉和雄、技師 廣瀬時習、専門調査員 福田由里子

06-2 調査区

[調査] 平成18年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 小野久隆、池島支所長 寺川史郎、調査第一係長 広瀬雅信、技師 廣瀬時習

[調査] 平成19年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 小野久隆、池島支所長 寺川史郎、調査第一係長 広瀬雅信、班長 宮崎泰史、技師 廣瀬時習、専門調査員 飯田浩光、乾 哲也

[調査・整理] 平成20年度

調査部長 赤木克視、調査課長 田中和弘、中部調査事務所長 寺川史郎、池島支所長（兼）調査第一係長 金光正裕、主査 陣内暢子、技師 湯本 整、専門調査員 飯田浩光

[整理] 平成21年度

調査部長（兼）調査課長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査グループ長 寺川史郎、調査グループ主幹（兼）池島総括 小野久隆、主査 陣内暢子

- 4 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、調査グループ主査 片山彰一が担当した。木製品・自然木の樹種・種子遺体・石材の同定は調査グループ主査 山口誠治が行い、また出土遺物に関しては、瓦の同定を調査グループ副主査 駒井正明が行なった。

- 5 本報告書の作成にあたり、地震痕跡については寒川 旭氏（独立行政法人 産業技術総合研究所）、陶磁器に関しては森村健一氏（堺市長官室）、縄文土器に関しては大野 薫氏（大阪府教育委員会）、魚類遺存体については丸山真史氏（京都大学大学院・現 樅原考古学研究所）にご指導いただいた。記して厚く御礼申し上げる。
- 6 発掘調査・整理の実施にあたり下記の関係諸機関、方々にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表する。（順不同）
大阪府寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人東大阪市施設利用サービス協会、財団法人八尾市文化財調査研究会、大庭重信氏（財団法人 大阪市文化財協会）、別所秀高氏（鴻池新田会所）、松田順一郎氏（財団法人 東大阪市施設利用サービス協会）
- 7 分析については、以下の分析をそれぞれの業者に委託して行なっている。分析結果については本文中にその概要を記した。

02－1 調査区

放射性炭素 14 年代測定 (AMS) 分析：株式会社パレオ・ラボ

06－2 調査区

花粉・珪藻・植物珪酸体分析：株式会社パリノ・サーヴェイ

土壤薄片作製鑑定・土壤軟X線写真撮影：株式会社パレオ・ラボ

- 8 本書の執筆は陣内暢子・廣瀬時習・飯田浩光・乾哲也・後川恵太郎が分担して行った。目次に執筆分担を記載している。巻末の表 6 掲載遺物一覧は陣内が作成した。編集は飯田が行い、廣瀬が補佐した。
- 9 本調査で出土した遺物および写真・実測図等の記録類は、財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

- 1 実測図の基準高は、東京湾平均海水面（T.P. 値）を使用している。
- 2 遺構平面図の座標値は、世界測地系に基づく国土座標第VI系で標記している。また本書で用いた方位は座標北を基準とした。ちなみに磁北は西に $6^{\circ} 18'$ 、真北は東に $0^{\circ} 12'$ 振っている。
- 3 本書中の遺構位置などの表記においては、第1章第3節で記述した区割にしたがって表記しており、「5g」「6f」もしくは「5g区」「6f区」などと表記している。
- 4 発掘調査および遺物整理については、(財)大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年)に準拠した。
- 5 地層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』1990・2005年版に基づいている。
- 6 遺構全体平面図は500分の1、遺構図は20分の1もしくは40分の1、遺物実測図の縮尺は下記を原則とする。ただし、一部必要に応じて任意の縮尺を設定しており、その都度スケールを表示している。

〔遺物実測図の縮尺〕

土器：4分の1　土製品：3分の1　瓦：6分の1　石製品：3分の2・2分の1・3分の1

骨角製品：3分の1　木製品：2分の1・4分の1・6分の1　金属製品：2分の1・4分の1

- 7 遺構番号については遺構の種類に関わらず1から番号を付した。なお、02-1調査区（その8）の遺構番号には番号の前に「A」を、06-2調査区（その6）の遺構番号には「B」を付け、「A〇〇」「B〇〇」のように区別のつくよう表記している。また、平面図や遺構図に記載している遺物や遺物出土状況図の遺物については「土器〇〇」「銅鏡〇〇」のように、遺物の種類の後に遺物挿図番号を付け、表記している。
- 8 池島I期地区の遺構番号・遺構名称については、『池島・福万寺遺跡3』に基づいて記述している。
- 9 本文中では、引用および参考とした文献を「(〇〇〇〇 1990)」という形で記載し、本文末尾に引用・参考文献一覧を掲載している。
- 10 遺物実測図は以下のようない原則に基づいて掲載している。
 - ・口縁（または底部）残存部分が6分の1未満の土器は、実測図の口縁部（底部）水平線を途中で切って表現する。
 - ・遺物の赤色顔料塗布（または赤漆）の部分は朱彩、黒漆は黒で表す。
 - ・サヌカイト製品の新欠は黒く塗りつぶす。
 - ・木製品の焦げはアミフセで表す。
- 11 図1・4は、国土地理院発行2万5千分の1の地形図『大阪府東南部』「信貴山」平成10年発行を縮小したものである。
- 12 図4の遺跡名・遺跡の範囲は、大阪府教育委員会『大阪府文化財分布図』2001年による。

目次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査にいたる経緯と経過

| | | |
|------------------------|------------|---|
| 1. 池島・福万寺遺跡の位置と調査..... | (廣瀬) | 1 |
| 2. 調査の経緯..... | | 2 |
| 1) 02-1 調査区 | (廣瀬) | |
| 2) 06-2 調査区 | (飯田) | |
| 3. 調査方法..... | (廣瀬) | 4 |

第2章 地理的・歴史的環境..... (飯田)

| | | |
|---------------|--|---|
| 1. 地理的環境..... | | 6 |
| 2. 歴史的環境..... | | 8 |

第3章 基本層序 (廣瀬) 10

第4章 調査成果

| | | |
|-------------------------------|-----------------------|-----|
| 1. 現代～古墳時代面の調査..... | (遺構：廣瀬 遺物：陣内) | |
| 1) 第1面・第1面ベース(第1 b面) | | 13 |
| 2) 第2面..... | | 21 |
| 3) 第3面..... | | 27 |
| 4) 第4面..... | | 30 |
| 5) 第5面..... | | 33 |
| 6) 第6面..... | | 36 |
| 7) 第7面..... | | 39 |
| 8) 第8面..... | | 43 |
| 9) 第9面..... | | 49 |
| 10) 第10面 | | 58 |
| 2. 弥生時代～縄文時代面の調査..... | | |
| 1) 第11面・第11面ベース(第11 b面) | (遺構：乾 遺物：陣内) | 69 |
| 2) 第12面・第12面ベース(第12 b面) | (遺構：乾・後川 遺物：陣内) | 84 |
| 3) 第13面・第13面ベース(第13 b面) | (遺構：飯田 遺物：陣内) | 110 |

| | | |
|------------------------------|---------------|-----|
| 4) 第14-2面・第14-2面ベース(第14-2b面) | (遺構:飯田 遺物:陣内) | 139 |
| 5) 第15面 | (遺構:飯田) | 162 |

第5章 総括

| | | |
|---------------------|-----------|-----|
| 1. 近世～古墳時代の調査成果 | (廣瀬) | 164 |
| 2. 弥生時代～縄文時代晩期の調査成果 | (飯田・乾・後川) | 165 |

写真図版

挿図目次

| | | | |
|----------------------|-------|----------------------|----|
| 図1 池島・福万寺遺跡の位置 | 1 | 図26 第8面 平面図 | 44 |
| 図2 池島・福万寺遺跡の調査区配置 | 2 | 図27 第2-1～8面 条里坪境 断面図 | 45 |
| 図3 02-1・06-2調査区の地区割り | 4 | 図28 第8面 遺構図 | 46 |
| 図4 周辺の道路分布図 | 7 | 図29 第8面 出土遺物(1) | 47 |
| 図5 調査地 断面図 | 10・11 | 図30 第8面 出土遺物(2) | 48 |
| 図6 第1b面 平面図 | 14 | 図31 第9面 平面図 | 50 |
| 図7 第1面 遺構図 | 15 | 図32 第9面 遺構図(1) | 51 |
| 図8 第2-1面 遺構図 | 16 | 図33 第9面 遺構図(2) | 52 |
| 図9 第1面 出土遺物(1) | 17 | 図34 第9面 遺構図(3) | 55 |
| 図10 第1面 出土遺物(2) | 18 | 図35 第9面 出土遺物 | 56 |
| 図11 第1面 出土遺物(3) | 19 | 図36 第10面 平面図 | 58 |
| 図12 第2-1面 平面図 | 22 | 図37 第10面 A391微高地 平面図 | 60 |
| 図13 第2面 出土遺物(1) | 25 | 図38 第10面 遺構図(1) | 61 |
| 図14 第2面 出土遺物(2) | 26 | 図39 第10面 遺構図(2) | 62 |
| 図15 第3-1・2・3面の変遷 | 27 | 図40 第10面 遺構図(3) | 63 |
| 図16 第3-2面 遺構図 | 28 | 図41 第10面 遺構図(4) | 64 |
| 図17 第3面 出土遺物 | 29 | 図42 第10面 遺構図(5) | 65 |
| 図18 第4面 平面図 | 30 | 図43 第10面 出土遺物 | 67 |
| 図19 第4面 出土遺物 | 31 | 図44 第11面 平面図 | 71 |
| 図20 第5面 平面図 | 33 | 図45 第11面 遺構図 | 73 |
| 図21 第5面 出土遺物 | 35 | 図46 第11b面 平面図 | 75 |
| 図22 第6面 平面図 | 36 | 図47 第11b面 遺構図(1) | 77 |
| 図23 第6面 出土遺物 | 37 | 図48 第11b面 遺構図(2) | 78 |
| 図24 第7面 平面図 | 39 | 図49 第11b面 遺構図(3) | 79 |
| 図25 第7面 出土遺物 | 40 | 図50 第11b面 遺構図(4) | 80 |

| | | | |
|-----------------------|-----|----------------------------|-----|
| 図51 第11b面 遺構図(5) | 81 | 図79 第13b面 遺構図(2) | 125 |
| 図52 第11面 出土遺物 | 82 | 図80 第13b面 遺構図(3) | 126 |
| 図53 第12面 平面図 | 85 | 図81 第13b面 遺構図(4) | 128 |
| 図54 第12面 遺構図(1) | 87 | 図82 第13b面 遺構図(5) | 129 |
| 図55 第12面 遺構図(2) | 89 | 図83 第13b面 遺構図(6) | 130 |
| 図56 第12面 遺構図(3) | 91 | 図84 第13b面 遺構図(7) | 132 |
| 図57 第12面 遺構図(4) | 93 | 図85 第13b面 遺構図(8) | 133 |
| 図58 第12面 遺構図(5) | 94 | 図86 第13b面 遺構図(9) | 134 |
| 図59 第12面 遺構図(6) | 95 | 図87 第13面 出土遺物(1) | 136 |
| 図60 第12面 遺構図(7) | 97 | 図88 第13面 出土遺物(2) | 137 |
| 図61 第12b面 平面図 | 99 | 図89 第14-2面 遺構図(1) | 140 |
| 図62 第12b面 遺構図(1) | 101 | 図90 第14-2面 平面図 | 141 |
| 図63 第12b面 遺構図(2) | 102 | 図91 第14-2面 遺構図(2) | 143 |
| 図64 第12b面 遺構図(3) | 103 | 図92 02-1調査区 第14-2面 水田域 平面図 | 144 |
| 図65 第12b面 自然科学分析(1) | 105 | 図93 第14-2面 遺構図(3) | 146 |
| 図66 第12b面 自然科学分析(2) | 106 | 図94 第14-2面 遺構図(4) | 147 |
| 図67 第12面 出土遺物(1) | 108 | 図95 第14-2面 遺構図(5) | 148 |
| 図68 第12面 出土遺物(2) | 109 | 図96 第14-2面 遺構図(6) | 148 |
| 図69 第13面 遺構図(1) | 110 | 図97 第14-2面 遺構図(7) | 149 |
| 図70 第13面 平面図 | 111 | 図98 06-2調査区 第14-2面 水田域 平面図 | 150 |
| 図71 第13面 遺構図(2) | 114 | 図99 第14-2面 遺構図(8) | 151 |
| 図72 第13面 遺構図(3) | 115 | 図100 第14-2b面 平面図 | 153 |
| 図73 第13面 遺構図(4) | 116 | 図101 第14-2b面 遺構図 | 155 |
| 図74 第13面 遺構図(5) | 117 | 図102 第14面 出土遺物(1)02-1調査区 | 157 |
| 図75 第13面 遺構図(6) | 118 | 図103 第14面 出土遺物(2)02-1調査区 | 159 |
| 図76 第13b面 平面図 | 121 | 図104 第14面 出土遺物(3)06-2調査区 | 160 |
| 図77 第13b面 遺構図(1) | 123 | 図105 第14面 出土遺物(4)06-2調査区 | 161 |
| 図78 第13b面 B419微高地 平面図 | 124 | 図106 第15面 平面図 | 162 |

挿入表目次

| | | | |
|------------------------|-----|--------------------|---------|
| 表1 第12面 立木・流木の樹種 | 86 | 表4 B240溝植物遺体同定結果一覧 | 173 |
| 表2 B342土坑出土魚骨 | 126 | 表5 B240溝珪藻分析結果一覧 | 174 |
| 表3 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果 | 172 | 表6 掘載遺物一覧 | 175～196 |

挿入写真目次

| | | | |
|------------------------------------|----|---|-----|
| 写真1 02-1 調査区 第1面 東半(北東から) | 13 | 写真31 06-2 調査区 第10面 東半 全景(南から) | 59 |
| 写真2 02-1 調査区 第1b面 北半(北東から) | 13 | 写真32 10面 B49・B85溝(南から) | 59 |
| 写真3 第1~2~4面 A51島畠 断面(南西から) | 13 | 写真33 10面 A260ピット(東から) | 59 |
| 写真4 02-1 調査区 1b土坑 断面(北西から) | 13 | 写真34 12面 A509流路 断面(南から) | 88 |
| 写真5 第1面 A1井戸(南から) | 15 | 写真35 11b面 B197流路 断面(東から) | 88 |
| 写真6 第1面 A2井戸(南から) | 15 | 写真36 12面 B209高まり 断面(東から) | 88 |
| 写真7 02-1 調査区 第2~1面 南半(北東から) | 23 | 写真37 12面 B199高まり、B200溝、B203高まり 断面(東から) | 88 |
| 写真8 第2~1面 B3畦畔とB4水口(南東から) | 23 | 写真38 06-2 調査区 第12b面 故溝底部分 (南から) | 102 |
| 写真9 02-1 調査区 第3~1面 北半(西から) | 28 | 写真39 06-2 調査区 第12層下面 故溝 検出状況(南から) | 102 |
| 写真10 06-2 調査区 第3~2面 西半(南から) | 28 | 写真40 13面 A633水口(南から) | 110 |
| 写真11 第3~2面 B15条里畦畔(南から) | 28 | 写真41 06-2 調査区 第13面 東半(北から) | 110 |
| 写真12 06-2 調査区 第1b~8面 条里坪境 (南から) | 28 | 写真42 B499流路 下部 断面(南から) | 115 |
| 写真13 06-2 調査区 第4面 東半(北西から) | 31 | 写真43 B267流路 東肩 断面(南から) | 115 |
| 写真14 02-1 調査区 第4面 北半(南東から) | 31 | 写真44 13b面 B266土坑(西から) | 116 |
| 写真15 02-1 調査区 第5面 南半(北東から) | 34 | 写真45 13b面 B287土坑(東から) | 117 |
| 写真16 06-2 調査区 第5面 東半(北西から) | 34 | 写真46 06-2 調査区 第13b面 西半(北東から) | 120 |
| 写真17 06-2 調査区 第6面 西半(南から) | 38 | 写真47 06-2 調査区 第13b面 遺構集中部 (南から) | 120 |
| 写真18 第6面 A116水口(南東から) | 38 | 写真48 13面 B340土坑(南西から) | 125 |
| 写真19 02-1 調査区 第7面 南半(西から) | 41 | 写真49 14~2面 B428土坑(南から) | 130 |
| 写真20 06-2 調査区 第7面 西半(南から) | 41 | 写真50 13b面 B390ピット(南から) | 134 |
| 写真21 02-1 調査区 第8面 北半(北東から) | 43 | 写真51 06-2 調査区 第14~2面 西半(南東から) | 139 |
| 写真22 06-2 調査区 第8面 東半(南から) | 43 | 写真52 第14~2面 A677土坑 出土土器(北から) | 140 |
| 写真23 02-1 調査区 第3~7面 条里坪境 (西から) | 45 | 写真53 第14~2面 A678土坑 出土土器(東から) | 140 |
| 写真24 06-2 調査区 第2~7面 条里坪境 (南から) | 45 | 写真54 02-1 調査区 第14~2面 畦畔(東から) | 144 |
| 写真25 第8面 B42土坑 断面(南東から) | 46 | 写真55 第14~2面 A674溝・A676高まり(南から) | 144 |
| 写真26 第9面 A120坪境溝(西から) | 53 | 写真56 第14~2面 B429~436杭(南から) | 145 |
| 写真27 第9面 溝群(B43・56~59)(南から) | 53 | 写真57 第14~2面 B440溝 断面(東から) | 149 |
| 写真28 第9面 B45溝(南から) | 53 | 写真58 06-2 調査区 深掘トレンチ② 断面(南から) | 162 |
| 写真29 06-2 調査区 第7~11b層(南から) | 53 | | |
| 写真30 02-1 調査区 第10面 A391微高地(南から) | 59 | | |

卷頭図版目次

図版1

1. 06-2調査区 第13b面 東側 遺構集中部
(南から)
2. 06-2調査区 第14-2面 水田検出状況(南から)

図版2 06-2調査区 第10面 小形仿製鏡

図版目次

図版1 遺構

1. 02-1調査区 第2-1面 北半 全景
(北東から)
2. 第2-1面 A57水口(北から)

図版2 遺構

1. 06-2調査区 第2-1面 西半 全景
(北東から)

2. 第2-1面 B1・B2島畠と水田(北から)

図版3 遺構

1. 06-2調査区 第2-1面 東半 全景
(北西から)
2. 02-1調査区 第3-1面 南半 全景
(北東から)

図版4 遺構

1. 02-1調査区 第3-2面 北半 全景
(北東から)
2. 06-2調査区 第3-2面 東半 全景(南から)

図版5 遺構

1. 第3-3面 A101坪境(東から)
2. 第3-3面 A105畦畔(南から)

図版6 遺構

1. 02-1調査区 第4面 北半 全景(西から)
2. 06-2調査区 第4面 西半 全景(南から)

図版7 遺構

1. 02-1調査区 第6面 南半 全景(北東から)
2. 06-2調査区 第7面 東半 全景(南東から)

図版8 遺構

1. 02-1調査区 第8面 南半 全景(北東から)
2. 第8面 B42土坑(北西から)

図版9 遺構

1. 02-1調査区 第9面 南半 全景(北東から)
2. 02-1調査区 第9面 南半 全景(南から)

図版10 遺構

1. 06-2調査区 第9面 東半 全景(南から)
2. 02-1調査区 第10面 北半 全景(南東から)

図版11 遺構

1. 第10面 A391微高地(北から)
2. 第10面 A242土坑・A243ピット(南から)
3. 第10面 A243ピット(西から)
4. 第10面 A282土坑(北から)
5. 第10面 A374土坑(南東から)

図版12 遺構

1. 06-2調査区 第10面 西半 全景(北東から)
2. 06-2調査区 第10面 東半 全景(南から)

図版13 遺構

1. 02-1調査区 第11面 南半 全景(南東から)
2. 02-1調査区 第11面 畦畔(西から)

図版14 遺構

1. 06-2調査区 第11面 西半 全景(南から)
2. 06-2調査区 第11b面 西側 全景(北東から)

図版15 遺構

1. 02-1調査区 第12面 北半 全景(西から)
2. 第12面 南半 水田域B(南東から)

図版16 遺構

1. 06-2調査区 第12面 西半 全景(南から)
2. 第12面 B213~219杭と立木・流木(南西から)

図版17 遺構

1. 06-2調査区 第12面 東半 全景(南から)

2. 第12面 A527水口（南東から）
 3. 第12面 B198溝（北から）
 4. 02-1調査区 第12面 土器437（南東から）
 5. 06-2調査区 第12面 土器460（北から）
- 図版18 遺構
 1. 06-2調査区 第12b面 西半 全景（南から）
 2. 06-2調査区 第12b面 欽溝（南東から）
- 図版19 遺構
 1. 02-1調査区 第13面 北半 全景（西から）
 2. 02-1調査区 第13面 南半 全景（西から）
- 図版20 遺構
 1. 第13面 A561～563畦畔、A633水口（西から）
 2. 06-2調査区 第13面 西半 全景（南から）
- 図版21 遺構
 1. 第13面 B335溝（南東から）
 2. 第12面 B240溝・第13面 B335溝断面
 （北西から）
- 図版22 遺構
 1. 06-2調査区
 第13b面 東側 土坑・ピット群（南から）
 2. 第13b面 B340土坑（南から）
- 図版23 遺構
 1. 第13b面 B341土坑（西から）
 2. 第13b面 B342土坑（左）・B404ピット（右）
 （西から）
- 図版24 遺構
 1. 第13b面 B349ピット（北西から）
 2. 第13b面 B374土坑（南から）
- 図版25 遺構
 1. 第13b面 B401ピット（南から）
 2. 02-1調査区 第14-1層 牙製垂飾508
 （南西から）
- 図版26 遺構
 1. 02-1調査区 第14-2面 南半 全景（西から）
 2. 06-2調査区 第14-2面 東半 全景（南から）
- 図版27 遺構
 1. 第14-2面 A674溝と水田域（南西から）
 2. 06-2調査区 第14-2面 畦畔検出状況（南から）
- 図版28 遺構
 1. 第14-2面 B440溝と水田（北西から）
 2. 第14-2面 B422溝 土器出土地点と断層
 （南東から）
- 図版29 遺構
 1. 06-2調査区 第14-2b面 東半 全景
 （南から）
 2. 第14-2b面 A691溝（東から）
 3. 第14-2b面 B491ピット（南から）
 4. 02-1調査区 第14-2b層除去面 足跡（南から）
 5. 02-1調査区 第14-2b層中 土器出土状況（西から）
- 図版30 遺構
 1. 02-1調査区 第15面 北半 全景（南から）
 2. 06-2調査区 北側法面（南から）
- 図版31 遺物
 陶器、瓦、転用円板
- 図版32 遺物
 土製防錐車、砥石、金属製品
- 図版33 遺物
 金属製品、小形彷彿鏡、錢貨、土師器、須恵器
- 図版34 遺物
 須恵器、サヌカイト片、弥生土器、石廬丁
- 図版35 遺物
 石器、サヌカイト片、弥生土器
- 図版36 遺物
 弥生土器、土製防錐車、石廬丁、サヌカイト片
- 図版37 遺物
 弥生土器、石器、サヌカイト石核、サヌカイト片
- 図版38 遺物
 繩文土器、牙製垂飾
- 図版39 遺物
 繩文土器、木製品
- 図版40 遺物
 木製品
- 図版41 遺物
 木製品

第1章 調査にいたる経緯と経過

1. 池島・福万寺遺跡の位置と調査

池島・福万寺遺跡は、大阪府東部の八尾市福万寺町・福万寺北町と東大阪市池島町にかけて所在する遺跡である。条里地割が明瞭に残る地域として知られた地域で、現在の景観は、玉串川が天井川化し河道が固定された中世以降大きくなっていると考えられる。遺跡中央部を南北に流れる恩智川は、条里地割に組み込まれた直線的な人工河川と推定されている。遺跡の規模は、東西約 1.2 km、南北 1.7 km、総面積 130ha である。

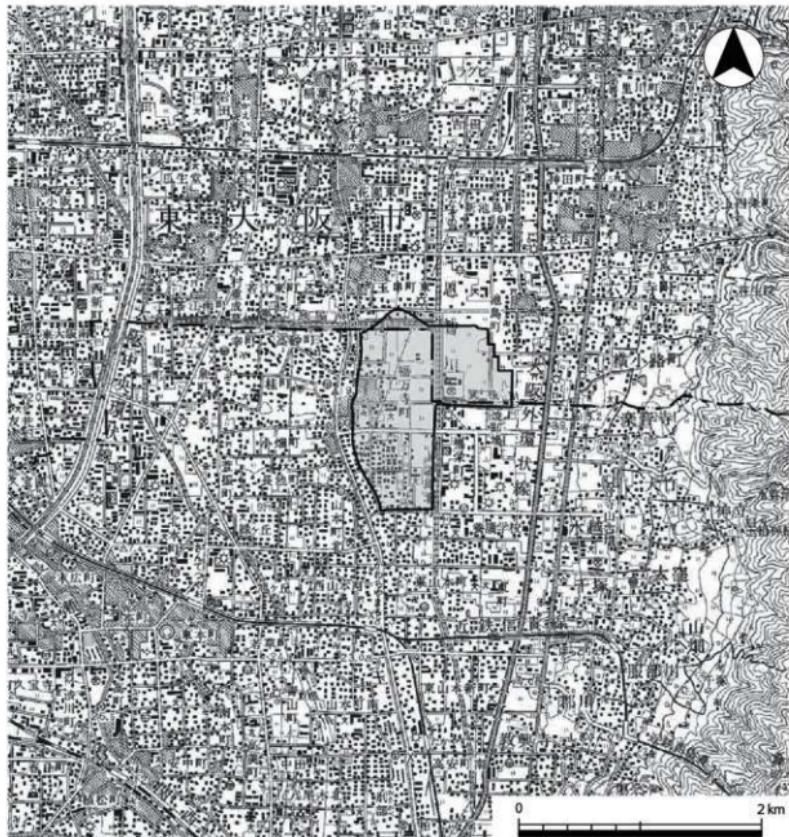


図1 池島・福万寺遺跡の位置（大阪府東部東大阪市・八尾市付近）

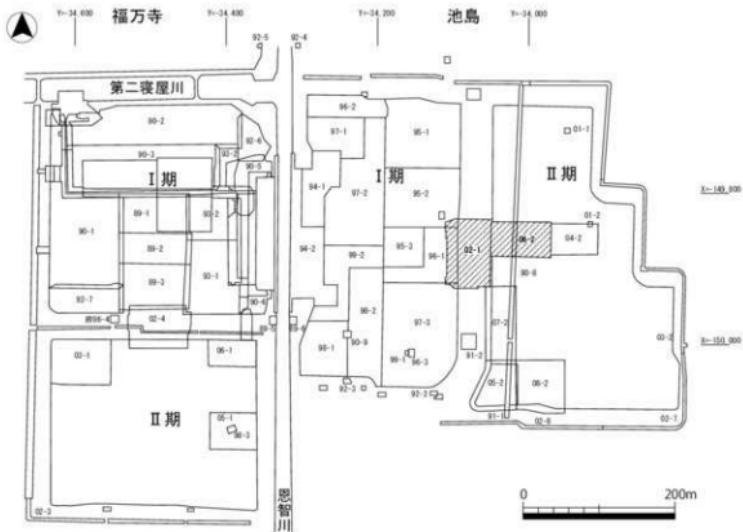


図2 池島・福万寺遺跡の調査区配置

当遺跡では、大阪府による恩智川治水緑地建設に伴って、発掘調査が1982年度より継続して実施されている。恩智川治水緑地建設にあたっては、遺跡範囲全体のおよそ3分の1の40.2haが調査対象地となっている。

これまで当センターが実施した発掘調査では、遺構・遺物の調査とともに地形環境との関連性やその変遷について積極的に検討を行ってきた。そのなかでは関連諸科学的研究との連携に大きな力を注ぎ、発掘調査データの蓄積と検討から、現在までに福万寺地区を中心に時期的な景観変遷の理解が進んでいる。これまでの調査成果については概要報告書および報告書等が刊行されている。

2. 調査の経緯

池島・福万寺遺跡の発掘調査は、多目的遊水地としての恩智川治水緑地の建設に先立つて行われているもので、下流の大阪市および周辺の市町村を洪水被害から守るために、豪雨時には増水した河川の水を一時的に貯留する機能も持っている。

当遺跡では、治水緑地建設設計画以前にも東大阪市遺跡保護調査会による調査が行なわれている。治水緑地建設にあたり、1981年から大阪府教育委員会により試掘調査2箇所、発掘調査が5箇所で行われた。その後、1989年から大阪府教育委員会の指示により福万寺I期地区・池島I期地区的池床部の調査は、財團法人大阪文化財センター（現 財團法人大阪府文化財センター）が行うことになった。福万寺I期地区については1989年4月から調査を開始し、1995年3月に調査を終了した。また池島I期地区については、1989年から当センターによって部分的な確認調査が実施され、1994年から施設部といわれる恩智川に面した越流堤部分から調査を開始し、2002年3月をもって池床部のすべての調

査を終了している。これらの調査の詳細については、既に福万寺Ⅰ期・池島Ⅰ期の両地区の総括報告書が刊行されており、それらを参照されたい。

2002年2月からは、池島Ⅰ期地区の調査の終了に合わせて、当調査の関わる池島Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設建設に先立つ調査が開始された。福万寺Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設の建設に伴う調査も2003年2月からはじまり、現在では池島Ⅱ期・福万寺Ⅱ期の両地区とも池床部の調査が進行している。両Ⅱ期地区については、各調査区毎に整理作業が実施され、現在までに7冊の報告書が刊行されている。

本書に関わる調査は、2002年2月22日に大阪府土木部と当センターが契約を締結した2002年2月22日から2004年2月27日の3年度にわたる債務契約に基づく発掘調査（事業名称：池島遺跡その8）と、2006年8月31日に大阪府土木部と当センターが契約を締結した2006年9月1日～2008年5月30日の3年度にわたる債務契約に基づく発掘調査（事業名称：池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査その6）の発掘調査の2件である。

その8については、既に2006年2月に概要報告書を刊行しているが、その後の整理作業の進捗により、若干の異同が生じてきた。そのため、この事業については本書をもって正式報告とする。以下、調査区ごとに調査の経過を詳述する。

池島遺跡その8（02-1調査区）

当地区の現地での調査は2002年6月3日に開始し、2004年2月27日をもって終了した。その経過を記すと、2002年8月29日に近世後期の水田景観の良好に残る第2-1面南半の航空測量に伴う空撮を行い、続いて同年9月5日に第2-1面北半の空撮を行った。同年11月4日に第3-3面北半の空撮を行い、同7日に同面南半の空撮を行った。続く同年11月22日には第4面南半、同28日には同面北半の撮影を行った。2003年3月4日には古墳時代の遺構面である第10面南半の撮影を行い、続いて同月13日に同面北半の空撮を行った。以降、調査は弥生時代の各面に及び、同年3月18日には弥生時代後期の水田面第11面南半の空撮を行い、続いて同27日に同面北半の空撮を行った。同年5月10日には弥生時代中期の第12面北半の空撮を行い、同年6月7日には同面南半の空撮を行った。この後、同年8月7日に第13面北半、同年9月1日に第13面南半、同年10月11日に第14-2面南半、同月27日に第14-2面北半の空撮を行い、最後に橋脚部分について縄文時代後期の遺構面の調査を行った。（廣瀬）

池島・福万寺遺跡Ⅱその6（06-2調査区）

当調査区の現地での調査は2006年10月6日に開始し、2008年4月30日で終了した。まず近代・近世の遺構面を確認するためのトレーナー調査を実施し、断面記録を作成した。その後近代の耕作土および近世の洪水堆積土の機械掘削を2006年12月18日～22日に行い、2007年1月5日より遺構面の本格的な調査を開始し、近世～縄文時代晩期までの約20の遺構面を調査した。空中写真測量については、第1回目を2007年3月8日に第3-1面で実施した。その後、中世の第3-2面（3月）・第4面（4月）、古代の第9面（6月）、古墳時代の第10面（7月）について実施した。弥生時代については、後期の第11面（7月）、中期の第12面（10月）、前期末～中期初頭の第13面（11月）を実施した。そして最終回の空中写真測量を縄文時代晩期～弥生時代前期中葉の第14-2面について2008年2月5日に実施した。尚、弥生時代前期末～中期初頭の第13b面において、集落跡を検出した。この成果を受け、2007年12月8日に当該面の現地公開を実施し、約100人が現地を訪れた。また、調査期間中に大阪府立弥生文化博物館主催の発掘体験や、中学生・高校生の体験学習・見学会を実施した。（飯田）

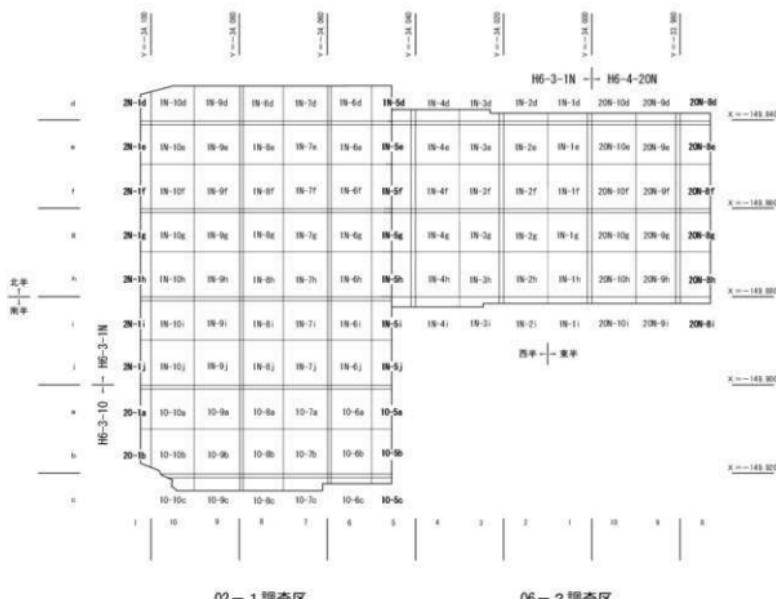


図3 02-1・06-2調査区の地区割り

3. 調査方法

池島・福万寺遺跡では、各調査区に調査開始年度と請負契約に記された工区数字の順に略称を付与している。本書に関わる調査は、それぞれ、

池島遺跡（その8） ⇒ 02-1調査区

池島・福万寺遺跡II（その6） ⇒ 06-2調査区

と呼称され、本書では文中に関連する周辺調査区をも含めてこうした呼称に統一して説明を行う。

通常、当遺跡の工期が複数年度にまたがる調査にあたっては、各年度ごとに調査区を設定し分割して調査を行うが、面積の関係上当調査区では調査区を1つのトレンチとして東半・西半とに分けて調査を行った。写真撮影、測量などについては、この東半・西半を境に東西に分けて調査を行っている。

調査にあたっては、当センターの2003年8月刊行の『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』に沿って調査を行っている。調査は世界測地系に基づいて調査を行い、本報告にあたってもすべてその方式に従った。しかし、今までに刊行されている当遺跡に関わる『池島・福万寺遺跡』1・2・3の報告書では日本測地系によって位置関係が報告されている。『池島・福万寺遺跡』4・5・6・7の報告書および本書に関して先述のように世界測地系を採用して位置情報を記載しているため、位置の照合にあたっては注意を要する。なお、世界測地系による座標値は日本測地系による座標に比べて、およそ南に730m、東に550mずれるので注意されたい。

当センターの発掘調査においては、通常、まず現代の盛土とその下の用地買収以前の耕作土をバックフォーにて除去し、そこから人力掘削を開始する。しかし、池島・福万寺遺跡II期地区調査においては、近代から近世遺構面については、幅2mのトレンチ調査を行ない確認を行なったうえで、近世後期の遺構面の直上まで機械掘削を行なう「人力掘削3」という調査掘削作業を行うことになっている。このため、06-2調査区の調査開始にあたっては、世界測地系に沿って、図3に示したようにX=-149,840・149,860・149,880ライン、Y=-33,980・34,000・34,020の各ライン南にトレンチを設定し掘削して、分層を行い調査を進め機械掘削の深度の確認を行うこととした。ただし、当調査区の場合、部分的に現代の盛土が分厚く堆積していたことから、まずこの部分の除去作業をバックフォーにて行い、この後に人力掘削3の調査掘削を行った。一方、02-1調査区については、機械掘削にて、現代表土を除去し、ここを機械掘削終了面として調査を開始している。

調査区の区割りについては、世界測地系に準じた国土座標第VI系に基づき、H 6と表記される第I～II区画、2,500分の1地形図の北東隅を起点とした1N・20Nなどと表記される100m四方の区画の第III区画、それをさらに10等分し南北軸にアルファベット小文字(a～j)、東西軸にアラビア数字(1～10)を与えた10m四方の区画のIV区画を用いて、遺物の取り上げなどの位置を表記して調査を進めた。具体的には「H 6-3-1N-6j」などと表記される。なお、こうした調査方法のため現地調査を含む本報告に関わるすべての北は座標北となっている。また、標高は東京湾平均海面(T.P.)を基準としている。

各遺構面の測量にあたっては、縮尺100分の1の平板測量を基本とし、周辺調査区との関連を含めた重要な面に関しては航空測量に伴う空撮を実施した。遺構図に関しては、各遺構によって任意の縮尺を設定し、平面図・断面図などを作成した。

調査は部分的な遺構面の検出を含めると02-1調査区では25面、06-2調査区では20面の調査を行っている。このなかで、第11層以下の各層については土壌層上面とともに下面の自然堆積層上面である「b面」の調査を行っている。b面は土壌化が及ばなかった部分の上面である。「b面」の調査は、土壌層上面では検出できない最終景観以前の遺構の痕跡や自然地形の復元を目的として行った。(廣瀬)

第2章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

当遺跡は、河内平野の南東部に位置し、生駒山西麓から派生する扇状地と低地との境界に立地する。生駒山から流下する箕後川・長門川などの小河川、および旧大和川水系の玉串川・恩智川などがもたらす土砂が、遺跡形成に多大な影響を与えてきた。高橋 学氏は、河内平野沖積面の地形について類型化しているが、当遺跡はその類型のうちの三角州Ⅰa帯、つまり弥生時代中期頃までに河川の搬出した土砂で陸化した場所に位置する（高橋 1991）。河角龍典氏は、当遺跡周辺のさらに詳細な微地形分類を試み、生駒山西麓の扇状地帯、自然堤防、後背湿地、旧河道について形成時期から類型化している（河角 1999）。この類型では、池島Ⅱ期地区の位置は鎌倉時代以降に形成された扇状地帯と天井川化した玉串川との間の排水不良になりやすい後背湿地に該当する。

河内平野の古環境を復元した梶山彦太郎氏・市原 実氏によれば（梶山・市原 1986）、両氏の設定した時代区分の内の「河内湾Ⅰの時代」（約 7000 ~ 6000 年前）は縄文海進の時期に当る。当遺跡でも池島Ⅰ期地区において海成層がみられ、海成層下底近くで約 6300 年前のアカホヤ火山灰が確認されている。また、この海成層最上部での放射性炭素年代が 4300cal.yr.B.P.（縄文時代中期初頭）であり、当遺跡出土の最古の土器が縄文時代中期末葉の北白川 C 式であることから、中期以降に周辺が陸化していくとされる（高橋 1997、河角 2002）。縄文時代晚期から弥生時代前期には、河内潟は河内潟へと淡水化し、湖岸線も後退して、当遺跡付近は低湿地へと変貌する（地学団体研究会大阪支部編 1999）。この低湿地に初期水田が営まれるようになる。弥生時代中期には、生駒山西麓から流下する小河川のもたらす土砂により、遺跡周辺はさらに陸地化が進む。弥生時代後期、河内潟の水面の上昇や河川の氾濫の頻発に伴い、当遺跡周辺の低地部の集落は、生駒山麓の扇状地など比較的高い場所へと後退していく。古墳時代には、当遺跡の集落跡は、弥生時代中期後半に形成された微高地や、弥生時代後期前半の流路堆積物などにより生じた微高地などに営まれていた。古代から中世にかけては、佐堂遺跡や水走遺跡で

| | | | | | | | | | |
|----|---------|----|--------|----|---------|----|--------|-----|----------|
| 1 | 意岐部遺跡 | 23 | 河内寺跡 | 45 | 圓手遺跡 | 67 | 心合寺山古墳 | 89 | 跡部遺跡 |
| 2 | 荒江寺跡 | 24 | 木塚古墳 | 46 | 丸の木塚古墳 | 68 | 西の口遺跡 | 90 | 跡部銅鐸出土地 |
| 3 | 吉田遺跡 | 25 | 丸山古墳 | 47 | 上六万寺遺跡 | 69 | 樂音寺跡 | 91 | 大子堂遺跡 |
| 4 | 塙古山古墳 | 26 | 神津祭原遺跡 | 48 | 船山遺跡 | 70 | 萩山古墳 | 92 | 勝軍寺跡 |
| 5 | 額田寺跡 | 27 | 水走寺跡 | 49 | 鶴井古墳群 | 71 | 大光寺山遺跡 | 93 | 木の本遺跡 |
| 6 | 辻子谷遺跡 | 28 | 五条古墳 | 50 | 岩瀬山遺跡 | 72 | 禿山古墳 | 94 | 田井中遺跡 |
| 7 | 法通寺跡 | 29 | 客坊山古墳群 | 51 | 二本松古墳 | 73 | 西の山古墳 | 95 | 菴香寺跡 |
| 8 | 輔古墳群 | 30 | 五条山古墳群 | 52 | 往生院金堂跡 | 74 | 花岡山古墳 | 96 | 弓削寺跡 |
| 9 | 若宮古墳群 | 31 | 市尻遺跡 | 53 | 酒井川東遺跡 | 75 | 花岡山遺跡 | 97 | 郡川東塙古墳 |
| 10 | 正興寺山遺跡 | 32 | 山塙遺跡 | 54 | コモ田遺跡 | 76 | 向山1号墳 | 98 | 郡川東塙古墳 |
| 11 | 神並古墳群 | 33 | 瓢箪山古墳 | 55 | 北星敷遺跡 | 77 | 向山2号墳 | 99 | 教尊寺跡 |
| 12 | 夫婦塚古墳 | 34 | 五里山古墳群 | 56 | 西代遺跡 | 78 | 向山瓦窯跡 | 100 | 忍野弥生時代遺跡 |
| 13 | 千手寺山遺跡 | 35 | 巨摩磨寺遺跡 | 57 | 平掌遺跡 | 79 | 双子塚古墳 | 101 | 忍野銅鐸出土地 |
| 14 | 巣尾古墳群 | 36 | 小若江遺跡 | 58 | 大賀世古墳 | 80 | 愛宕塚古墳 | 102 | 忍野城跡 |
| 15 | 辻子谷古墳群 | 37 | 新上り坂遺跡 | 59 | 淨土寺谷古墳群 | 81 | 薦光寺跡 | 103 | 大県郡条里遺跡 |
| 16 | 額田山古墳群 | 38 | 玉串遺跡 | 60 | 常光寺古墳 | 82 | 桂山古墳 | 104 | 山ノ井遺跡 |
| 17 | つぼ塙古墳 | 39 | 花園遺跡 | 61 | 貝花遺跡 | 83 | 中谷山古墳 | 105 | 岩戸古墳群 |
| 18 | みかん山古墳群 | 40 | 花屋敷遺跡 | 62 | 淨土寺跡 | 84 | 穴太庵寺 | 106 | 信貴苑苑内古墳 |
| 19 | 豊浦谷古墳群 | 41 | 北島遺跡 | 63 | 壹振1号墳 | 85 | 久宝寺寺内町 | | |
| 20 | 鶴立遺跡 | 42 | 五合田遺跡 | 64 | 山本町北遺跡 | 86 | 東郷魔寺 | | |
| 21 | 孤塙遺跡 | 43 | 段上遺跡 | 65 | 鏡塙古墳 | 87 | 高麗寺跡 | | |
| 22 | 皿池遺跡 | 44 | 下六万寺遺跡 | 66 | 心合寺跡 | 88 | 洗川庵寺 | | |

遺跡地名（番号は図 4 に対応）

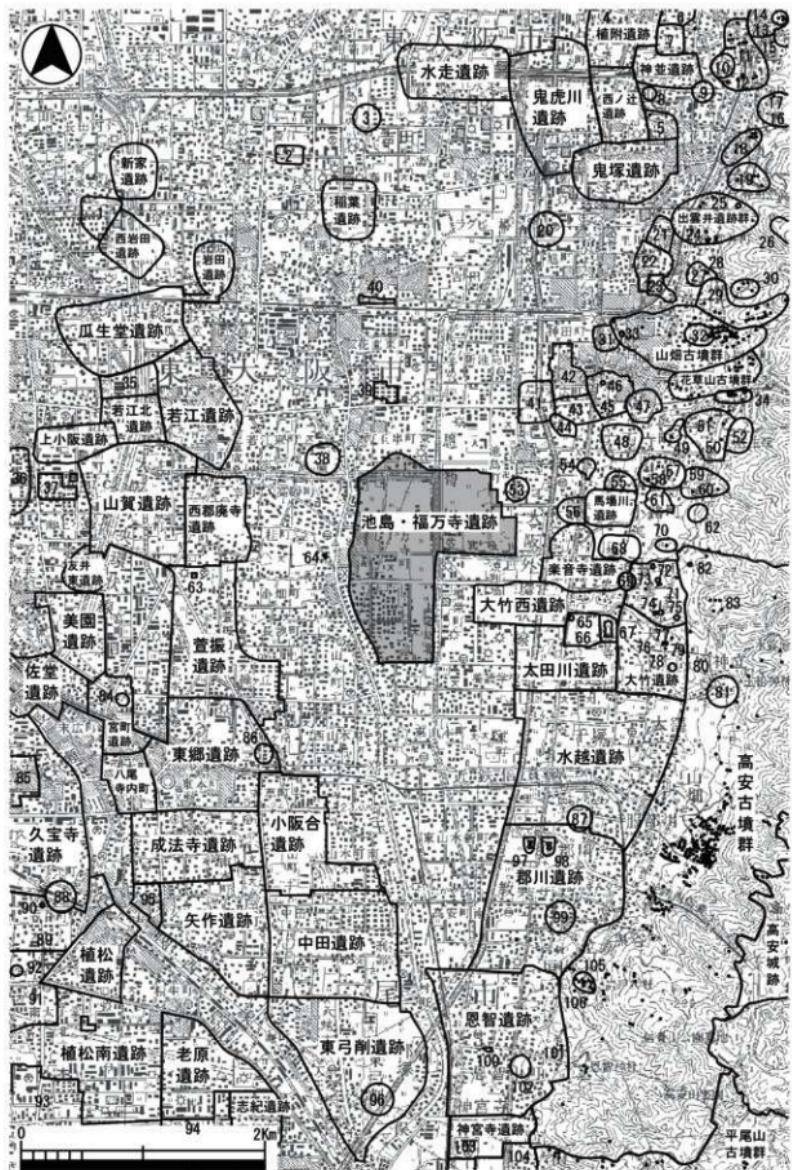


図4 周辺の遺跡分布図

堰や堤防の跡が確認されており、地方豪族や国司の支配下での局地的な河川改修により、この地域一体の川筋が固定されていった（地学団体研究会大阪支部編 前掲書）。

旧大和川水系の一つであり、遺跡西側を流れる玉串川は、1704年の大和川付け替え直前のルートを流れるようになった時期を、古代の条里型地割の施行以降とする説（高橋 1995）と、古墳時代中期とする説（阪田 1997）がある。この川は中世後半から近世初頭にかけて天井川化し、度重なる氾濫による堆積物をもたらし、その土砂を利用して島畠が營まれた（高橋 1995）。また、当遺跡のほぼ中央を流れる恩智川については、周囲における条里遺構の坪境線の方向などから、10世紀前半から12世紀後半頃のいずれかの時期に人工的に設定された排水河川であったと考えられている（井上 2002）。

2. 歴史的環境

生駒山西麓では、神並遺跡、正興寺山遺跡、山畠遺跡などで後期旧石器時代のナイフ形石器が採集されており、この頃から人間の活動の痕跡が認められる。

縄文時代早期には、神並遺跡で集石土坑や土偶が確認され、集落の存在が想定されている。恩智遺跡では前期から晩期の各時期の土器が出土し、縄文時代の拠点的集落と評価されている。後期には、縄手遺跡で竪穴住居や埋甕などが確認されており、集落が継続的に營まれていたようである（大野 1997）。

縄文時代晩期前半には馬場川遺跡や恩智遺跡などの集落が扇状地に營まれるが、後半には鬼虎川遺跡、水走遺跡などの集落が沖積地にも出現する。鬼虎川遺跡の東隣の鬼塚遺跡では、滋賀里IV式後半期の土器に押圧痕が認められ、水稻耕作の存在を示唆する。しかし明瞭な水田遺構が確認できるのは弥生時代前期中葉からであり、当遺跡のほか、若江北遺跡、山賀遺跡、志紀遺跡などで初期水田が検出されている。

弥生時代前期前葉から中葉には、山賀遺跡、跡部遺跡、中田遺跡、大竹西遺跡など、主に平野部に位置する遺跡で集落が營まれ始める。ただし、これら集落の多くは前期の間に廃絶し、中期には鬼虎川遺跡、亀井遺跡などの大規模環濠集落や、瓜生堂遺跡、水越遺跡、恩智遺跡などの拠点的集落が成立する。また、大阪市加美遺跡や瓜生堂遺跡の方形周溝墓のような規模の卓越した墳墓も中期に出現している。

弥生時代後期には、沖積地の環濠集落が衰退し、生駒山西麓の扇状地周辺において小規模な集落が数多く認められるようになる。鬼塚遺跡、山畠遺跡、岩滝山遺跡、馬場川遺跡、大竹遺跡など、当遺跡東側の山麓沿いに集落が分布する。このうち山畠遺跡と岩滝山遺跡の集落は、標高80～100mの山麓に突如出現し、弥生時代の終わりに姿を消す典型的な高地性集落である。遺跡西方の平野側では、亀井遺跡、田井中遺跡、恩智遺跡などの集落が後期に存続する一方、新たに若江北遺跡、西都廃寺遺跡、萱振遺跡、中田遺跡、久宝寺遺跡、弓削遺跡などの集落遺跡が現れる。

古墳時代の庄内式期から布留式前半期には、弥生時代後期以来の扇状地の集落群が、馬場川遺跡、水越遺跡などを除いて衰退するのに対し、沖積平野の集落群は飛躍的に発達し、他地域に先駆けて庄内形甕がみられる。とりわけ長瀬川右岸の東郷遺跡、成法寺遺跡、小阪合遺跡、矢作遺跡、中田遺跡、東弓削遺跡は、「中田遺跡群」として1遺跡で把握すべきとされる大規模集落であり（山田 1994、市村 2006）、加美遺跡、久宝寺遺跡の大集落とともに卓越した存在である。これら遺跡からは瀬戸内海沿岸地域や山陰地域などの外來系土器が多量に出土し、列島規模での活発な交流が遺跡群の隆盛を裏付ける。

布留式後半期には、平野部の大集落群は萱振遺跡や久宝寺遺跡の一部などを除いて姿を消す。ただし小阪合遺跡では、最近の調査で当該期の河川跡から祭祀遺構が発見され、内行花文鏡、鹿角装刀剣、鉄鉤、玉類、有孔円板、ミニチュア土器などが出土した（樋口 2007）。一方、生駒山西麓の扇状地では、

前期から中期にかけて楽音寺・大竹古墳群が造営される。向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳、中ノ谷古墳、心合寺山古墳、鏡塚古墳の順に、前期から中期まで首長墓が築造され続ける。心合寺山古墳では、導水施設を表現した家形埴輪が出土している。低地部では、心合寺山古墳にやや先行して、鞠形埴輪の出土で知られる萱振1号墳や、精巧な家形埴輪が出土した美園古墳などの小形の方墳が確認されている。

古墳時代中期から後期にかけては、当遺跡の福万寺1期地区でも集落跡が確認されている。移動式竈や羽釜・甑からなる炊飯具セットや韓式系土器が出土し、渡来系集団の居住が想定されている（江浦1991）。周辺の集落遺跡でも、北烏池遺跡、縄手遺跡などで韓式系土器が、また郡川遺跡では馬歯や製塙土器など馬匹生産を窺わせる遺物が出土しており、これら集落の展開に渡来人の関与が想定される。

郡川遺跡内では、中期終わりから後期初頭頃にかけて、当地域では先駆けて横穴式石室を採用している前方後円墳の郡川西塚古墳と郡川東塚古墳が築かれる。5世紀末から7世紀初頭頃には、山畠古墳群、高安古墳群などの群集墳が生駒山西麓沿いに造営される。高安古墳群には、ミニチュア炊飯具形土器を副葬する古墳がみられ、渡来系集団の関わりが看取される。そして6世紀後半～末には、全長15mを越す大阪府最大級の横穴式石室を持つ山畠2号墳や愛宕塚古墳が築造された。

7世紀代、生駒山西麓の東高野街道沿いで、古代寺院が数多く建立される。河内寺廃寺では素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、7世紀前半頃にはこの地域に仏教文化が浸透していた。当遺跡の南東1kmにも心合寺跡が所在し、7世紀中葉頃の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している（大阪府立近つ飛鳥博物館編2007）。7世紀後半には高安山中に古代山城の高安城が、白村江の戦いを契機に667年に築城される。調査により倉庫と考えられる礎石建物跡が確認されている。

当遺跡付近は、現地表面に条里型地割が良好に遺存していることで知られている。発掘調査から、この地割は10世紀前半まで通り、これとは別の正方位地割が7世紀中頃から後半にかけて施行された可能性が想定されている。この7世紀代の地割は、律令国家主導による施行とされており、中河内では当遺跡のほか、志紀遺跡や美園遺跡などで7世紀代に遡る条里遺構が確認されている（市村2007）。

平安時代には、当遺跡一帯は荘園「玉櫛荘」の範囲に該当する。「玉櫛荘」は当初摂閑家の所領であったが、1137（保延3）年、宇治平等院の建立の際、平等院に寄進され、以後室町時代にかけて平等院領となっている。前述の10世紀前半施行の条里型地割は、この荘園開発との関わりが指摘されている。

鎌倉時代に至り、この地域は開発領主の水走氏の所領となる。水走氏の地名が残る東大阪市水走遺跡では、12世紀後半の大溝や13世紀前半の土壙墓、13世紀中葉から15世紀の集落が確認されている（若松・上野2002）。池島・福万寺遺跡では、（財）八尾市文化財調査研究会による調査で13世紀前半から15世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑などが確認されており、屋敷地跡と考えられている。

南北朝時代、玉櫛荘は楠木氏の支配下に入り、当遺跡周辺も同氏の拠点であったようである。南北朝合一の後は、河内国守護の畠山氏がこの一帯を支配するようになる。当遺跡の北西約2kmの若江遺跡では、同氏が築いた若江城の遺構と考えられる15世紀前半の溝や井戸、土坑などが確認されている。若江城は、その後16世紀中頃に三好氏の居城となり、この時期の幅5m以上の溝が巡る方形区画や建物跡、礎石や石垣など、城郭に相応しい遺構が検出されている。

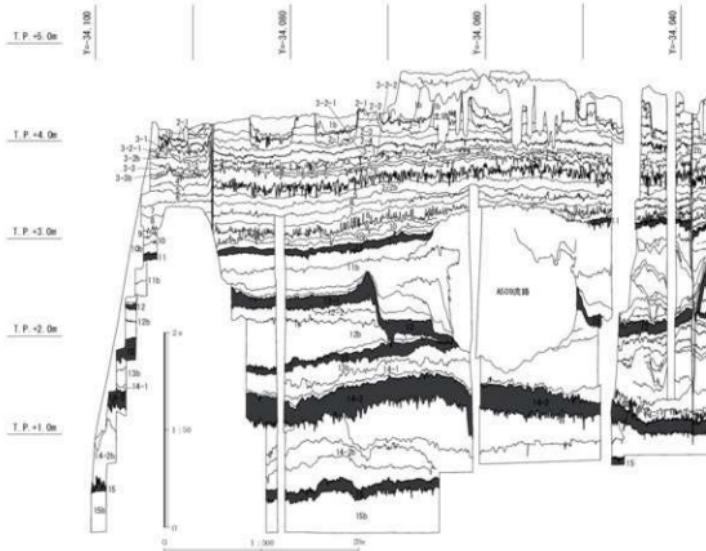
江戸時代に入ると、「池ノ島村」は幕府領に、「福万寺村」は狭山藩北条氏領となる。宝永元（1704）年の大和川付け替え工事は、当地域一帯の農業に多大な影響をもたらした。旧河床地帯に多くの畑地が開発され、砂地に適している木綿の栽培が盛んに行なわれるようになる。当遺跡でも木綿栽培などが行なわれたと考えられる島畠が多数確認されている。（飯田）

第3章 基本層序

本報告に関わる調査にあたっては、池島Ⅰ期地区との連続性に注意を払い、基本的に層序認識の統一を図った。しかし、06-2調査区の調査では古代以降の堆積環境が既往の調査成果と異なる部分があり、その層序的な連続性を十分に理解したとは言えない。調査では、水成堆積物による旧地表面の埋積、地表面となった水成堆積物の上部の搅乱・土壌化を1サイクルとした繰り返しの結果とし、層位的な状況を示し、各層の土壤とその母材を認識することに力点をおいてきた。このため、各層の土壤部分をa層、母材となつた自然堆積層をb層として呼称し、同一層番号のa層・b層（例：第2-1 a層・2-1 b層）と呼称して調査を行ってきた。以下各層の状況を記述する。

【第1層】近・現代の作土層で、下部の第1 b層を搅拌したオリーブ褐色2.5Y4/3の粗砂を含む砂質シルトのa層と、色調が部分により異なる橙色5YR6/8～黄橙色10YR7/8の極細砂～極粗砂からなるb層である。遺跡全域で確認されるが、部分により層厚は異なり、厚いところではb層が50cmを超える。

【第2層】色調は部分により相違しているが、極細砂～中砂を多く含む近世から中世末にかけての砂質系の土壤化層である。およそ4層に分層が可能で、第2-1層：黄灰色2.5Y4/1・第2-2層：灰色5Y5/1・第2-3層：灰色7.5Y5/1・第2-4層：灰オリーブ色7.5Y5/2の部分により極細砂から中砂を多く含む層であり、遺存状況は地域により異なっている。大きく第2-1・2-2層と第2-3・2-4層に分けることが可能である。また、非常に部分的ではあるが第2-3 b層を検出した部分がある。また、第2-4 b層は、わずかにしか見られない部分もあるが、下部に粘性の強い粘土～シルト、上部に極細砂からなっている。



【第3層】シルト～細砂を主体とした土壌化層と自然堆積層からなる層である。およそ3層に分層可能で、第3-1層は黄褐色2.5Y5/3系のシルト混砂質土、第3-1b層は灰オリーブ色7.5Y6/2～4/2のシルト～粘土であった。第3-2層は暗青灰色5B4/1～青灰色10BG5/1の極細砂～細砂混シルトの層、第3-2b層は、暗青灰色5BG4/1の粘土～粘質シルトであった。第3-3層は青灰色5B4/1の粘土～シルトを主体とする粘性のあるシルトの土壌であり、第3-3b層は、明黄褐色10YR6/6～2.5Y7/6の極細砂～細砂であった。南北方向の条里畦畔を境に土質・色調も相違するなど、ベースに含まれる氾濫堆積物の状況により土質が変化している。東ほど粘性が強くなっていく。02-1調査区では、最下部に粘性の強いシルトと細砂の自然堆積層が遺存している部分もあった。

【第4層】オリーブ黒色10Y3/1の粘土～シルトで構成され、細砂～中砂が混じる。02-1調査区では上層に比べて粘性が強く大きく変化したが、東ほど上層の粘性が強く類似した土壌になり識別が難しかった。02-1調査区では、前述の第3層のb層が遺存している部分で、良好に同層が残っている。

【第5層】暗緑灰色7.5GY4/1の中砂～粗砂の混じる粘土～シルトで構成され、上部に酸化カルシウムの見られる部分がある。上下ともb層を挟まず遺存状況は悪い。西ほど酸化カルシウムが多く層下部が分かれにくく、第4層との境が明瞭ではない。

【第6層】緑黒色10GY2/1の粘土～シルトの層である。粘性は強いが東ほど細砂～中砂を多く含む。上下ともb層を挟まず遺存状況は悪い。

【第7層】暗灰色N3/の粘土～シルトである。地形的に高くなる東ほど砂質混じりで、全体の土質も変化してゆく。なかでも、06-2調査区の坪境より東の十七ノ坪は、下層の砂粒がかなり巻き上げられ、土質が大きく変化し、砂混じりのシルトである。また、上下ともb層を挟まず遺存状況は悪いが、東に行くほど特に悪くなり、層厚も薄くなっていく。

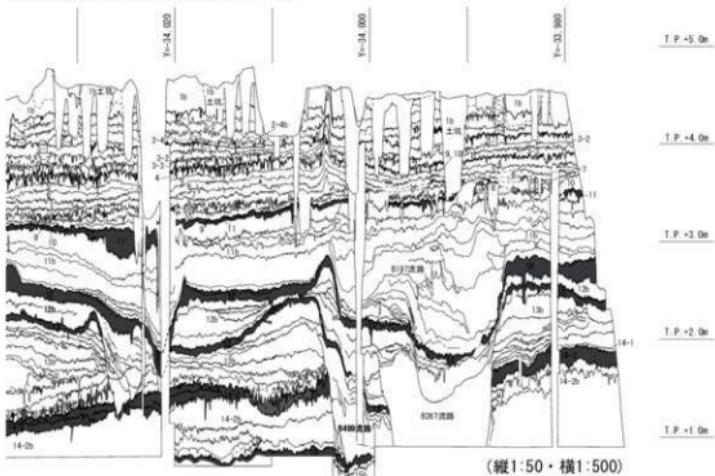


図5 調査地断面図(X=-149,860 ライン)

【第8層】青灰色10BG5/1の極細砂～細砂の混じる古代と考えられる粘土～シルト層である。東ほど砂質が混じるとともに、第7層同様に層厚も薄くなり、遺存状況は悪くなる。地震による地形の変形構造が見られ、上下層と合わせて交じり合ったような状況を呈する部分もあった。

【第9層】オリーブ灰～青灰色10Y5/2～10BG5/1の極細砂～細砂の混じる粘土～シルト層である。第8層に比べて色調が大きく変化し、色調が明るくなるとともに、土質も大きく変化している。上層の地震による変形の影響のためか遺存状況は非常に悪く、ほとんど識別が不可能な部分もみられる。

【第10層】オリーブ灰～暗灰色10Y5/2～N3/の古墳時代の層と考えられる粘土～シルト層である。06-2調査区東側では極細砂～細砂が多く含むのに対し、西側では粘性が強く、砂が比較的少ないという違いが見られる。02-1調査区では粘性が強いが、南の微高地ではやはり砂が多く含まれている。また、東側ほど上層からの削平で遺存状況は悪い。

【第11層】灰色N4/の有機物を多く含む粘土～シルトのa層と暗オリーブ色5GY4/1の極細砂の多く含まれるシルト質層と灰白～浅黄色2.5Y8/1～7/3の中砂～極粗砂の2つのb層からなる弥生時代後期と考えられる層である。上部と下部が粘土～シルトで構成され、この間に粗粒の氾濫堆積物層が調査区全域に厚く堆積している。なかでも、第12面のA509流路部分やB197流路部分は、堆積が厚く、この部分では第11面段階には微高地を形成している。この第11 b層の氾濫堆積物中には、若干ではあるが、上部の安定した時期があるようで、土壤化の進行した部分的な層がみられた。

【第12層】基本的には、暗オリーブ灰～黒色2.5GY4/1～2/1の極細砂～細砂を含む粘土～シルトのa層と明黄褐～暗オリーブ灰色2.5Y7/6～2.5GY4/1のシルト～粗砂と灰～暗灰色N4/～N3/の極細砂～細砂を含む粘土～シルトのb層からなる弥生時代中期の層である。上部を第11 b層によって覆われて遺存状況は良好である。また、この第12 a層はA532微高地部分などでは2～3層に分層が可能で第12-1・12-2・12-3層というように3層に分層している地区がある。実際には、これら下部の層に伴う遺構は確認されていないが、注意を要する。また、B225微高地では、後述するように畠の可能性も指摘される部分が見られたほか第12～13層にかけて層中に土壤化した帯が見られるなど、注意を要する層である。

【第13層】暗青灰色10BG4/1～3/1・灰～黒色N4～N2/の極細砂～細砂を含む粘土～シルトのa層と調査区全域に厚く堆積する粘土～シルトで構成される明青灰～暗青灰色10BG7/1～3/1の氾濫堆積物層のb層や灰色N5/などの粘土～シルトからなるb層で構成される弥生時代中期～前期の層である。上部を第12層で削平されている部分もあるが、第12 b層で覆われているも多くみられた。東ほど第13 b層の堆積が厚く地形的には東に微高地が広がり西はほぼ平坦な地形となる。したがって、東は、細粒のシルト～極細砂を中心とした層で、西は粘性のある粘土～シルトの層となっている。

【第14層】縄文時代晩期～弥生時代前期の層で、第14-1層と第14-2層に分層が可能であった。第14-1層は暗灰～オリーブ黒色N3/～10Y3/1の細砂の混じる粘土～シルトのa層である。第14-2層は黒～青黒色N2/～5BG2/1のシルトのa層であり、酸化カルシウム塊を含む層である。第14-2 b層は、灰色5Y4/1のシルト～細砂や黄褐色2.5Y5/4の細砂～粗砂、灰色5Y4/1シルト～極細砂、オリーブ黒色5Y3/1粘土～シルトで構成されるb層である。全体的に黒味の強い泥炭質の土壤であるが、水田が築かれていた部分は砂質が多く含まれている。

【第15層】緑黒色10GY2/1の粘土のa層と下部の明オリーブ灰～暗オリーブ灰色2.5GY7/1～3/1の有機物を含むb層からなる縄文時代後期の層である。02-1調査区の調査区西半の深掘部分および06-2調査区深掘トレーンで確認している。(廣瀬)

第4章 調査成果

1. 現代～古墳時代面の調査

1) 第1面・第1面ベース（第1b面）（図6、写真1・2）

当遺跡周辺は、調査開始以前までは水田・畠からなる田園的な景観が比較的広範囲に広がる地域であった。調査の第1段階である機械掘削前後の状況は、農耕関連遺構ということになる。ただし、本書で報告する2調査区では機械掘削前後の調査の手順が相違している。後述する第1面に関しては、06-2調査区の場合、調査区内の20mピッチに設定した幅2mのトレンチ部分のみの調査であり、おおよその遺構配置は確認できたものの、全体は調査を行っていない。

第1面は、現在耕土を除去した面である。基本的には、現在耕土を除去した部分で確認される粗砂混じりの極細砂～細砂を主体とする氾濫堆積物の上面である。従来池島I期地区で第1ベース層（1b層）といわれる近世後期の氾濫堆積物層の上面である。02-1調査区の西半部分は、調査以前に治水緑地の堤防が築かれていた関係で、上部が搅乱を受けていたため当該層は遺存しておらず、第2層が露出した状態であった。また、06-2調査区も、東側の3分の1程度の部分は、調査開始以前に削平を



写真1 02-1調査区 第1面 東半（北東から）



写真2 02-1調査区 第1b面 北半（北東から）



写真3 第1～2-4面 A51島崖 断面（南西から）



写真4 02-1調査区 1b土坑 断面（北西から）

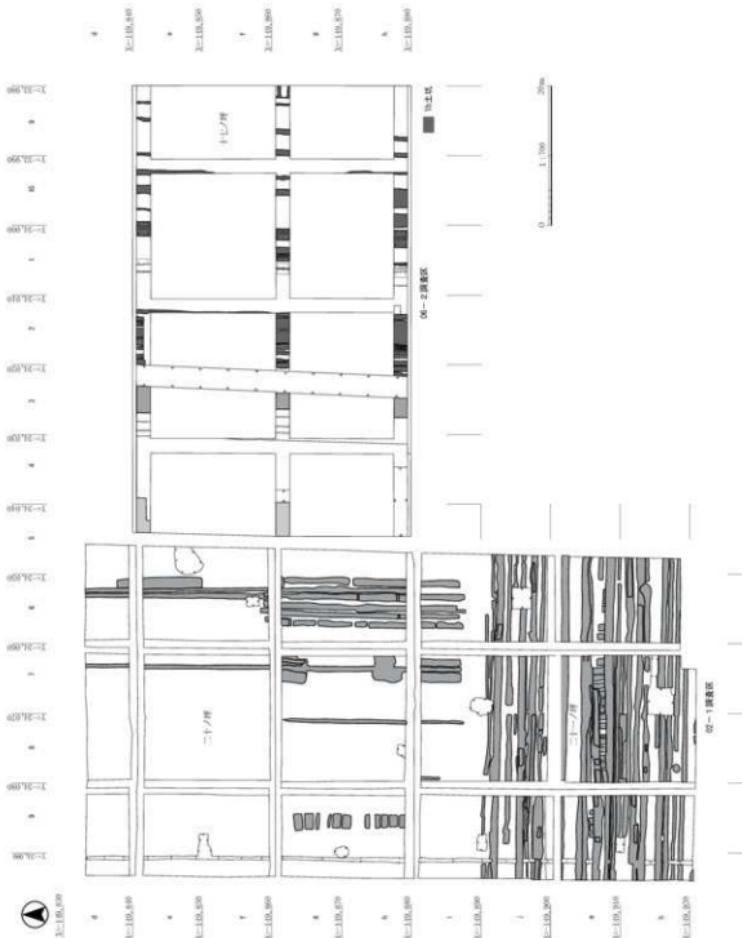


図6 第1b面 平面図

受けており、ほとんど第2-1層が露出した状態であった。

地形は、削平を受けている部分が不明であるが、調査区南部の、第二十一ノ坪東側や北東部の第十七ノ・二十ノ坪の境の南北坪境付近が高い。しかし、北東端部も削平を受けて不明なため本来の状況については分らない部分が多い。

遺構は、從来から「1b土坑」(写真3・4)といわれてきた「天地返し」を意図したと考えられる土坑や、耕作に伴うと考えられる溝、井戸などが確認されている。溝は、第十七ノ・二十ノ坪では南北方向、第二十一ノ坪では東西方向に統一されている。こうした溝の方向は、近世末から近代初頭にかけての土地

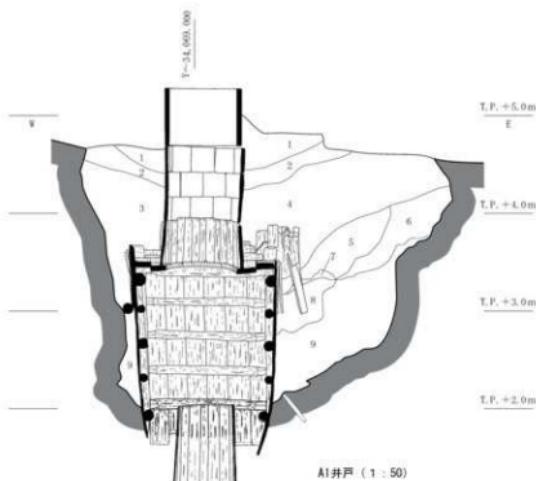


写真5 第1面 A1井戸(南から)

- 1:暗灰岩
(中～細粒砂・シルトブロック含む)
- 2:暗灰岩
3:暗灰岩
(中～粗粒砂・シルトブロック含む)
- 3:オリーブ岩
(中～粗粒砂・粘土ブロック・K-A.木片含む)
- 4:暗灰岩
5:暗灰岩
(中～粗粒砂含む・やや粘性強くシルト多い)
- 5:灰岩
(ジルトブロック含む)
- 6:灰岩オリーブ
7:緑墨
8:にぶい黄褐色
9:暗青岩
(中砂含む・ブロック状に粘質シルト)

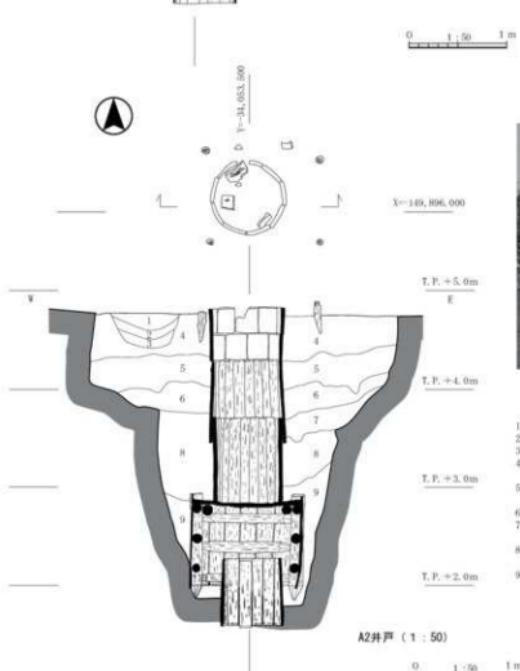


写真6 第1面 A2井戸(南から)

- 1:灰黃岩
108E4/2 細砂混シルト
- 2:灰黃岩
108E5/2 細砂混シルト
- 3:灰黃岩
108E5/2 シルト
- 4:塊
107W4/4 シルト
- 5:にぶい黄褐色
108E5/3 シルト
(細～中砂多く混じる・粘土ブロック多い)
- 6:灰オリーブ
7,534/2 塵細～細砂混粘質シルト
- 7:暗青岩
108E6/2 灰黃褐色
108E6/2 細砂混粘質シルト
(粘土～シルトブロック)
- 8:暗青岩
108E6/1 細～中砂混粘質シルト
(粘土～シルトブロック含む)
- 9:暗青岩
108E6/1 細砂混粘質シルト

図7 第1面 遺構図

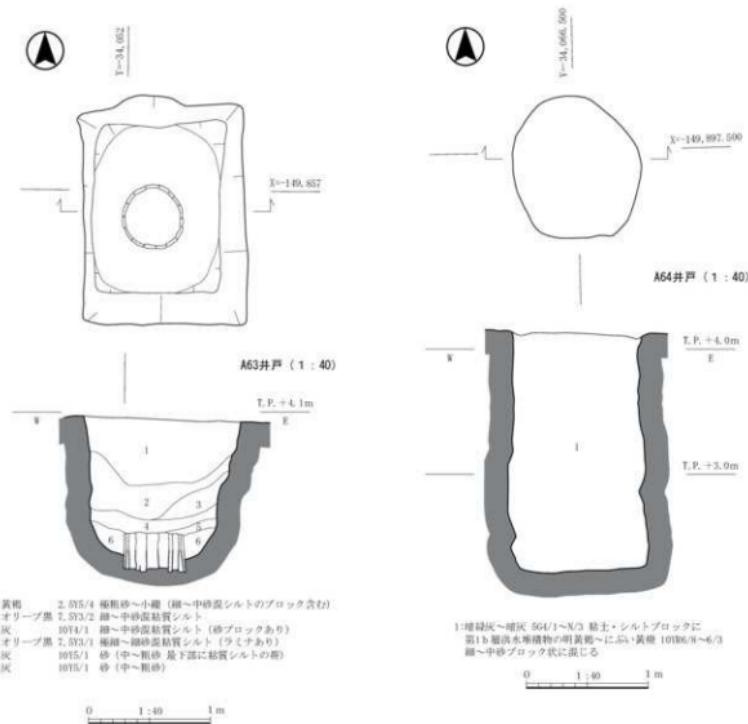
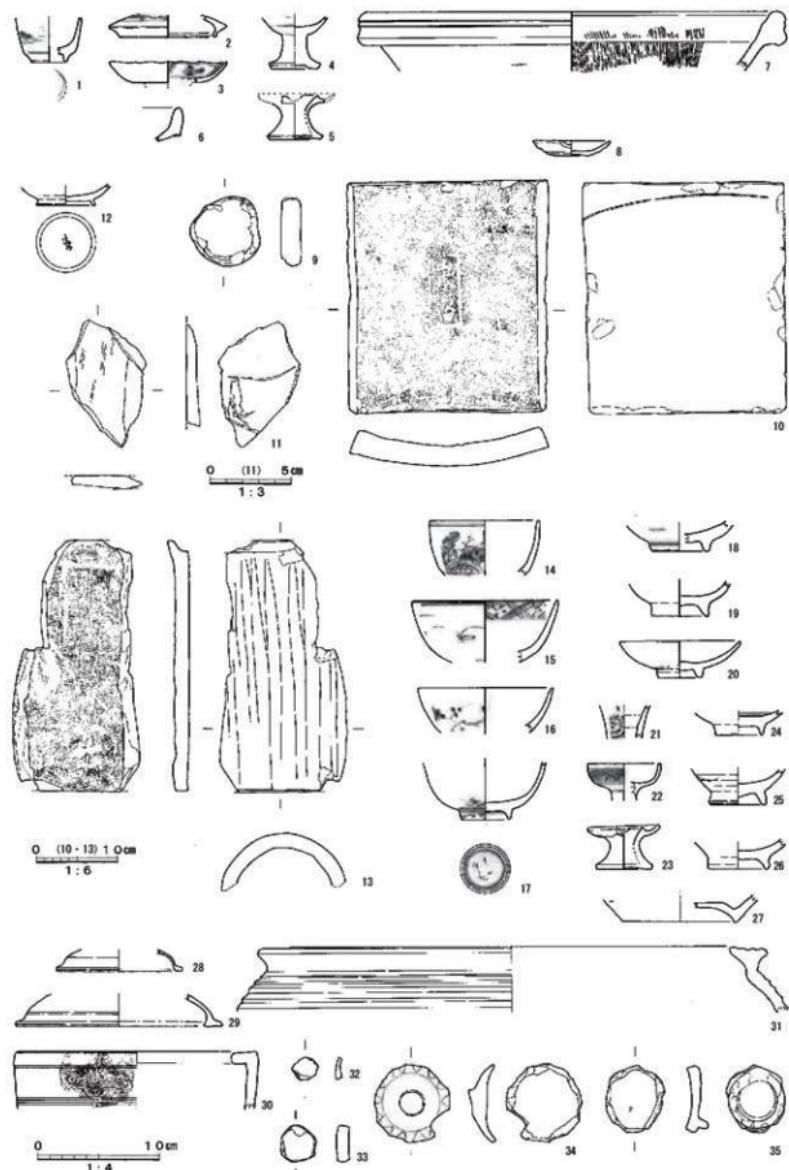


図8 第2-1面 遺構図

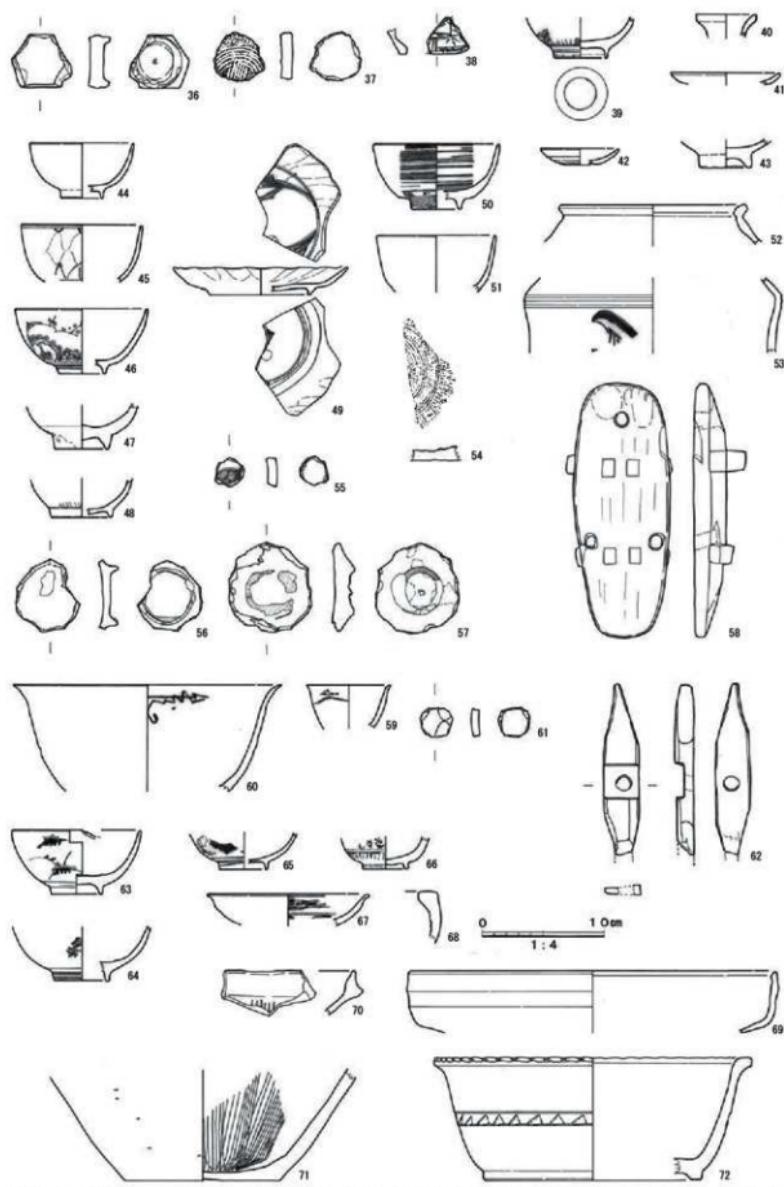
利用図とも符合し、当該遺構面の時期比定の基準となるものである。第二十一ノ坪土坑群は、重複が激しく、規模も大小が見られた。一方、第二十ノ坪の土坑は、およそ幅1.0 m前後の深さ30 cm程度の長さ不統一なもの、その他に長さ2.0 m×幅1.5程度の深さ約10 cm程度のものが並んで見られた。06-2調査区の第二十ノ坪では、東西3.0 m・南北0.8 m程度の長方形で南北に列になって並ぶ土坑が検出された。また第二十ノ・十七ノ坪境の東側で密集した部分が見られたが、その東では密度は低い。又、この調査の東端部分の第十七ノ坪の04-2調査区との境部分で東西方向の幅2.0 m程度の土坑を確認した。第十七ノ坪は、坪内において土坑の方向が途中から変わる状況が04-2調査区西側で確認されている。土地利用の問題とも絡む可能性が高い。第二十ノ坪・二十一ノ坪の状況から、これらの土坑の位置は、第2-1面の島畠部分にあたる場合が多く、地形的に高い島畠部分を意図的に選んで掘られたものと考えられる。

井戸は、02-1調査区で、A1・2・63～65井戸を確認した(図7-8、写真5・6)。このうち、A1井戸については調査開始時点においても埋没しきらず、内部が空洞になっており、底部分から現代の遺物が確認されている。また、A63井戸(図8)は、方形の掘り方で底部に桶枠を持つ構造で、最下



1～7：機械削除面。8～11：A1井戸。12：A2井戸。13：A9把手。14～35：(02～1) 第1層

図9 第1面 出土遺物(1)



36～38：(02-1) 第1層、39：A10 漢、40：A24 漢、41：A25 漢、42・43：A26 漢、44～58：A1b 土坑、59～62：(02-1) 第1b層、63～72：(06-2) 第1層

図10 第1面 出土遺物(2)

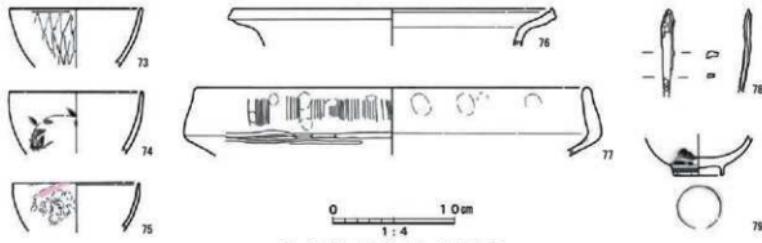


図 11 第1面 出土遺物(3)

部は後述する弥生時代中期の洪水堆積物の途中に達している。検出面は第2—1面であるが、埋土上部が1b土坑で搅乱されていたため輪郭の検出が第2—1面になったため、他の井戸同様に第1面段階の遺構の可能性が高い。A64 井戸(図8)は、平面円形の幅1.7mの直径の土坑で深さは、約1.9mほどである。掘り方のみで、構造物は検出されなかったが、垂直に深い遺構である。後述する第12b層の氾濫堆積物層まで掘り込んでいる。(廣瀬)

第1面出土遺物(図9~11)

【02-1調査区】機械掘削終了面(図9-1~7) 機械掘削終了面から陶磁器、土師器、瓦等が多数出土した。1は瀬戸染付壺、2は波佐見染付重ね鉢蓋、3は稜花口縁の伊万里染付芙蓉手皿、4は波佐見染付仏飯具、5は京・信楽系灯明台、6は土師器炮烙、7は備前播鉢である。17世紀から19世紀のものである。

第1面A1井戸(図9-8~11、図版31)から磁器、瓦、砥石等が少量出土した。8は京・信楽系灯明皿、9は瓦転用円板、10は井戸瓦、11は砥石である。8は焼成時にリング状の重ね道具を使用した痕跡として、外面部の色調が他と比べ異なる。又、使用痕のススが付着している。19世紀のものである。10は、凹面に「山本新田」と刻印されている。山本新田は大和川付替え後、宝永5年(1708年)に玉串川河川敷に帶状に開かれた新田である。池島・福万寺遺跡の福万寺側の西の位置にある。何故、池島側の井戸から出土しているのか疑問である。他に4枚同じ刻印を持つ井戸瓦が出土している。11は凝灰質頁岩製で、砥面が1面残存する。第1面A2井戸(図9-12)から陶磁器、瓦等が少量出土した。12は肥前系京焼系碗で外底面に「清水」の印が施されている。18世紀のものである。第1面A7溝から陶器片2点、土師器片2点が出土した。いずれも細部で詳細は不明であるが、土師器の1点は羽釜か鍋の口縁片で16~17世紀かと思うものである。第1面A9暗渠(図9-13、図版31)から土師器片2点、陶器片2点、瓦1点(13)が出土した。13は丸瓦で近世かと思うものである。玉縁が短く、四面に布目痕がある。暗渠に使われていたと考えられる。

第1層(図9-10-14~38、図版31)から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が多数出土した。14~18は波佐見染付碗、19は肥前系青磁碗、20は波佐見白磁皿、21は波佐見染付瓶、22は波佐見赤絵仏飯具、23は京・信楽系灯明台、24は肥前系刷毛目碗、25は唐津鉄釉碗、26は肥前系碗、27は京・信楽系土瓶?、28は備前伊部手蓋、29は京・信楽系鍋蓋、30は土師器火鉢、31は丹波甕、32~37は転用円板、38は土製品の人形である。

主に17世紀後半から19世紀までのもので18世紀のものが多い。17は高台内に呉須で「大明年製」

のくずれと思う銘がある。22は焼成後、赤彩で蓮弁が描かれている。28は「伊部手」と呼ばれる薄くきれいな光沢のある製品である。転用円板は、33が瓦質土器でその他は陶磁器である。池島・福万寺遺跡で出土した転用円板の重さは10g前後が多いが、それより重いものが多い。38は人を表しているが何かは不明である。

第1b面A10溝（図10-39）から磁器1点（39）と須恵器片1点が出土した。39は波佐見染付碗で18世紀中頃のものである。高台内に呉須で團線が描かれ、高台に離れ砂が少し付着している。第1b面A24溝（図10-40）から陶器1点（40）と瓦細片1点が出土した。40は備前徳利である。16世紀末から17世紀初めのものである。第1b面A25溝（図10-41）から土師器2点（41）が出土した。41は土師器皿で18世紀ぐらいかと思う。内外面使用された痕跡のススが付着している。第1b面A26溝（図10-42・43）からは陶磁器、瓦等が少量出土した。42は京・信楽系灯明皿、43は肥前系碗である。19世紀、18世紀のものである。第1b面A35溝から磁器染付片1点が出土した。細片だが、一重網目文が施され、18世紀かと思うものである。第1b面A39溝から陶磁器片2点、瓦片1点が出土した。いずれも細片だが、磁器染付片1点は破片の周囲を加工しようとしているような剥離が見られる。陶器は捕鉢底部片である。

第1b面A1b土坑（図10-44～58、図版31・40）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、下駄等が多数出土した。44は肥前系白磁碗、45は伊万里染付碗、46・47は波佐見染付碗、48は波佐見白磁瓶、49は伊万里染付皿、50・51は肥前系碗、52は中国製かと思う褐釉壺、53は肥前系壺、54は丹波捕鉢、55～57は転用円板、58は差歛下駄である。48は釉の下に削り痕が見え、高台に離れ砂が付着している。49は内面に捻花文が描かれ、外底面に呉須で銘款の痕跡がある。高台に離れ砂が付着している。50も高台に離れ砂が付着している。53は素焼きの上に鉄絵が施されている。55は景德鎮窯系の盤の底を転用している。57は見込みに輪状の砂目があり、豈付は糸切り痕がある。51は19世紀のものであるが、それ以外は17～18世紀のものである。58はスギ材の露卯で、前壺1、横緒孔2、枘孔4で、歯が斜め後ろに摩滅している。右足用か。

第1b層（図10-59～62、図版31・40）から陶磁器、土師器、瓦質土器、木製品（62）等が出土した。59は波佐見染付环、60は波佐見染付鉢、61は磁器転用円板、62は木製品で紡織具糸巻きである。陶磁器は17～18世紀のものである。

【06-2調査区】 第1層（図10-63～72）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が出土した。63～65は波佐見染付碗、66は波佐見染付瓶、67は波佐見染付皿、68は瓦質土器火鉢、69は土師器炮烙、70は丹波捕鉢、71は堺捕鉢、72は陶器鉢である。63は口縁が一部階段状に低くなっているどのように水平の口縁につくのか不明である。63・64・66は高台に離れ砂が付着している。69は使用痕跡として内面に炭化物が付着している。71は内面に焼台の痕跡がある。陶磁器は72以外、17世紀後半から18世紀のものである。

第1b面B1b土坑（図11-73～78、図版33）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が少量出土している。73・74は伊万里染付碗、75は肥前系京焼系赤絵碗、76は土師器羽釜、77は土師器炮烙、78は不明鉄製品である。75は赤と黄色で模様が描かれているが、剥落していて詳細は不明である。75が18世紀のもので、それ以外は17世紀のものである。

第1b層（図11-79）から磁器1点（79）が出土した。波佐見染付碗で、高台に離れ砂が少し付着している。18世紀のものである。（陣内）

2) 第2面 (図12、写真7、図版1・2・3)

第2層は、近世～中世末頃と考えられる土層である。第2層は、前述の即応の調査において粗い砂粒を多く含む砂質系の耕作土が連続し、層間にb層を挟まないことから、第2-1面を除くと遺構面の遺存状況があまり良好でない場合が多い。従来から、第2-1～2-4層のおよそ4層程度に分層されてきたが、02-1・06-2調査区とも4層に分層が可能であった。02-1調査区段階では、これまでの調査との関係から4面にわたる面的な調査を行った。しかし、第1b層に覆われた第2-1面以外は遺存状況も悪く、地形的な変化も見られなかった。こうしたことから、06-2調査区調査開始段階において、改めて土層の観察を行い調査方針を再検討した。そして、第2-1層と第2-2層の層境が不明瞭でわからにくかったことや、土質も第2-1・2-2層と第2-3・2-4層に様相が分かれしたことから、本調査では第2-1面と第2-3面の2つの遺構面について調査を行った。通常、第2層の各面は島畠を特徴とする水田景観が広がる面であるが、当調査区は恩智川からも遠く前述の微高地のため全体の地形がやや高く、第2-1面を除くと島畠はあまり見られず、僅かに調査区南西部で盛土による島畠の痕跡を確認した。

地形は、削平を受けている部分が不明であるが、調査区南部及び東部が高い地形である。

第2-1面では、坪境畦畔・畦畔、水口、島畠と、2本の並行する畦畔に挟まれた水路状の遺構等を確認した。第2-1面では、従来から地下水による島畠とその間に掘削された水路状の水田遺構が検出されている。本書で報告する2つの調査区においても同様な島畠とその間の水田面を確認している。第2-1面は、前述の第1b層の氾濫堆積物を除去した面で、洪水による浸食などのために若干の削平を受けているが、当遺跡の各調査面のなかでも遺構面の遺存状況の良好な面である。

第十七ノ・二十ノ坪境の南北坪境では、B7高まりが検出された。この高まりの西側にはもう1条のやや低いB5高まりが並列するように検出された。両高まり間を水路として利用したものと考えられる。この坪境西側の第二十ノ坪では、02-1調査区から06-2調査区の西端部分にかけて、南北方向の島畠状の高まりとその間に溝状に伸びる水田を検出した。それぞれの島畠の幅には1.1～5.4mと差があるが、A48～A50島畠の間は幅1mほどの細い溝で区切られている。これらの島畠は、「地下水型」といわれる島畠造成部分の周辺を掘削し、掘削した土壤を盛り上げて造成されたものである。

また、B2島畠から東ではB3畦畔(写真8)を境に地形が高くなり、B6坪境まで平坦な地形が続いている。この部分は、前段階で全面にわたってB1b土坑を検出した部分で、遺存状況が非常に悪い部分であるが、検出した遺構面は若干の凹凸を持っていた。また、B6坪境より東は、大型のB1b土坑の連続でやはり遺存状況が悪いが、東端部でB9・10島畠を検出したほか、B8-1・2島畠が存在していたようである。これは、B1b土坑で搅乱を受けているため本来は複数であった可能性もある。

第2-1面では島畠の広がる景観が復元され、「地下水型」といわれる島畠が、条里地割に伴う坪境を境に北半の第二十ノ坪は南北方向、南半の第二十一ノ坪は東西方向に確認された。しかし、第二十ノ坪と第二十一ノ坪の東半部では、「1b土坑」の掘り込みによって大きく搅乱を受け、島畠の残りが悪い。

また、第二十一ノ坪では、A53島畠および、A55島畠は後述する第2-4面段階に第2-4b層の氾濫堆積物を芯にして造られた島畠をベースにしており、「地下水型」の島畠ではない。A56坪境は、調査区中央部でA57水口が作られ、この部分で第二十ノ坪と第二十一ノ坪の田面間を繋ぎ、給排水を制御している。第二十一ノ坪には、坪境から南にA51・52・53・54・55島畠(写真3)が造られているが、A51・52・53・54島畠では、前述の水口の延長上に島畠を横切って南北方向にA58・

59・60溝を設けて水路としている。また、擾乱のため正確には確認できなかったが、A53・55島畠間はA62溝によって区切られていたものと考えられる。

第2-2面以下の各層は、先述のように何れも遺存状況が悪いことから、土質の大きく変わる第2-3面を検出した。しかし、この面も含めて第2-3・2-4面ともほとんど遺構は確認できなかった。

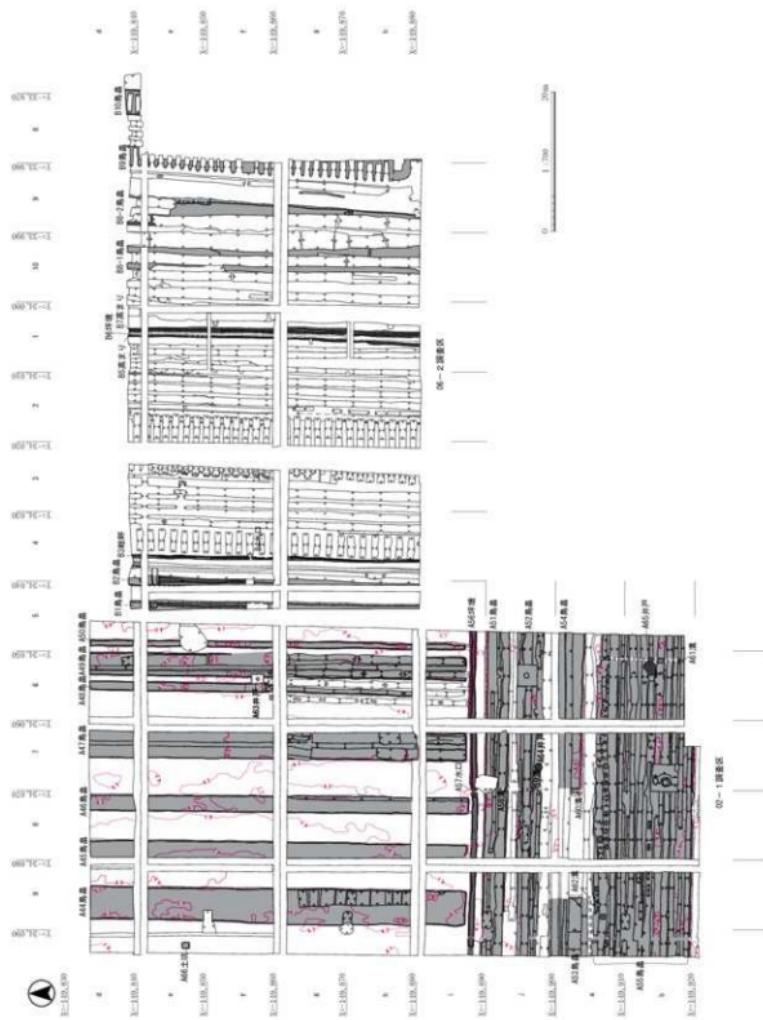


図12 第2-1面 平面図



写真7 02-1調査区 第2-1面 南半（北東から）



写真8 第2-1面 B3 脊群とB4 水口（南東から）

また、06-2調査区南東端部では第2層の最下部で下部の自然堆積層がやや分厚く遺存する部分を確認した。但し、調査区端部で土層断面でも島畠等の盛り上がりを明確にはできなかった。しかし、これらの状況から、両調査区では第2-2層以下の各面の島畠は無いと考えられる。（廣瀬）

第2面出土遺物（図13・14）

【02-1調査区】 第2-1面 A63 井戸（図13-80、図版31）からは須恵器転用円板1点（80）等が極少量出土した（第1面の遺構）。第2-1層（図13-81・82、図版31）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦等が少量出土した。81は龍泉窯系青磁碗、82は丹波擂鉢である。81は線描蓮弁文が施され15世紀第4四半期のもので、82は17世紀第2四半期のものである。第2-1層と断定できない第2-1層～2-2層・2-3層から出土したものとして図13-83～88（図版40・41）を掲載した。83は肥前系碗、84は肥前系灰釉碗、85は漆器椀、86～88は不明木製品である。83は縁釉流しかけで、83・84は18世紀のものである。85は赤漆に黒漆で三方に丸に亀甲に花菱文を描いている。86はスギ材で棒状を呈し、箸かもしれない。87はヒノキ材で下駄の歯かと思うもので、88はヒノキ材で木釘が1本残っていて、裏面に生きているか不明だが段があり、浅い線刻がある。

第2-2層（図13-89～94、図版31・32）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、金属製品（94）等が出土した。89・90は波佐見染付碗、91は備前壺、92・93は転用円板、94はキセルの雁首である。89・90は18世紀のもので、91は15世紀のもので内面に自然釉が付着している。94は18世紀後半かと思うものである。92は須恵器、93は瓦を転用したものである。

第2-3面 A73 坪境から陶器擂鉢体部片1点、土師器羽釜鈕片1点、瓦質土器擂鉢片1点が出土した。いずれも細片で詳細は不明だが、土師器と瓦質土器は16世紀かと思うものである。

第2-3層（図13-95～108、図版31・32）から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、砥石等が多数出土した。95・96は景德鎮窯系青花碗、97は漳州窯系青花碗、98は波佐見染付碗、99・100は唐津皿、101は肥前系灰釉碗、102は土師器鍋、103～105は転用円板、106は砥石、107・108は不明石製品である。95は16世紀前半のもので、96は高台内に吉祥文「永保長春」が吳須で描かれ、内面は万頭心で鳥文が描かれている。16世紀第4四半期のものである。97は草花文が描かれ17世紀初めのものである。98～101は17世紀のものである。99は見込みに砂目が3箇所あり、灯明皿に転用されている。100は見込みに胎土目が3箇所ある。101は三日月高台である。102は16世紀かと思うものである。転用円板の103は瓦質土器、104は瓦、105は丹波擂鉢を転用している。106は凝灰質

頁岩で、砥面が5面ある。107は先端に敲打痕があるように見える。

第2-4層(図13-109～図14-127、図版31・33・40・41)から陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、銭貨、漆器椀、下駄、不明木製品等が多数出土した。109・110は景德鎮窯系青花碗、111は景德鎮窯系青花皿、112は唐津灰釉碗、113・114は丹波擂鉢、115は緑釉陶器、116は土師器皿、117は瓦質土器擂鉢、118・119は瓦質土器土管、120・121は転用円板、122・123は銭貨、124は漆器椀、125・126は不明木製品、127は差歎下駄である。109・110は16世紀前半のものである。111は16世紀末から17世紀初めのもので、内面に密教法具を文様化した羯磨文が描かれ、高台内部に線状の印が施されている。線状の印は所有を示すものらしい。113は鉄軸が掛けられた18世紀のもの、114は17世紀第3四半期のものである。116は灯明皿でススが付着している。117とともに16世紀かと思うものである。120は13世紀第3四半期の龍泉窯系青磁碗、121は17世紀第2四半期の肥前系碗を転用したものである。122は残りが悪く北宋錢の「元祐通寶」か「元豐通寶」かは不明である。123は第1b層～2～3層のいずれかから出土したものであるが、「元祐通寶」なのでここで掲載した。124はブナ科材で、外面に赤漆に黒漆で鳥の足を描いている。125はスギ材で蓋かと思われるが、孔1個と木釘5本が残っていた。126もスギ材で、側面に木釘が5本(内1本は痕跡のみ)残っていた。127は側溝出土だが、出土年月日から第2-4層に掲載した。スギ材で、柄孔2個のうち1個に柄が残っていた。

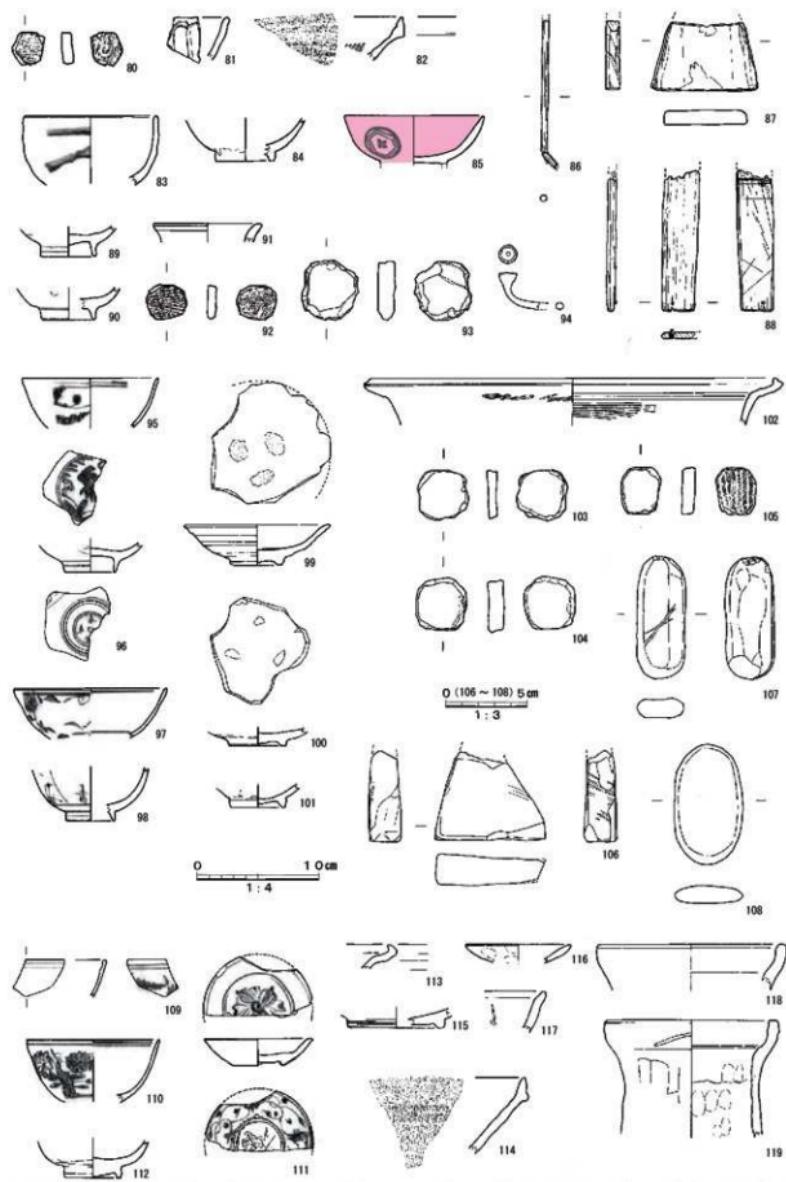
時期のわかる少ない遺物からであるが、第2-1層、第2-2層が18世紀、第2-3層、第2-4層が16世紀から17世紀と考えられる。

【06-2調査区】第2-1・2層(図14-128～132・137、図版32・39)は第2-1層か第2-2層から出土したものである。陶器、土師器、瓦質土器、須恵器、瓦・刷毛?(137)等が少量出土した。128は龍泉窯系青磁碗、129は波佐見染付碗、130は土師器皿、131は瓦質土器ミニチュア羽釜、132は土製品である。128は転用円板かもしれないが、15世紀のものである。129は18世紀のものである。130は実測可能のため実測したが、13世紀ぐらいの古いものかもしれない。131は16世紀から17世紀かと思うものである。132は大型紡錘車かと思うもので、周縁が磨滅していて、孔から紐ずれと思われる痕跡がある。137はヒノキ材で2枚が合わさり、線刻上に小孔がある。

第2-2層(図14-133～136)から磁器、土師器、瓦器、瓦、漆器椀(136)等が少量出土した。133は波佐見染付碗、134は転用円板、135は丸瓦である。133は18世紀のもので、内外面気泡が多く、高台内に呉須で銘?が施されている。134は17世紀後半の波佐見青磁碗を転用したものである。135は近世のものである。136は土圧でひしゃげているが、ブナ科材で外面に黒漆、内面に赤漆が施されている。

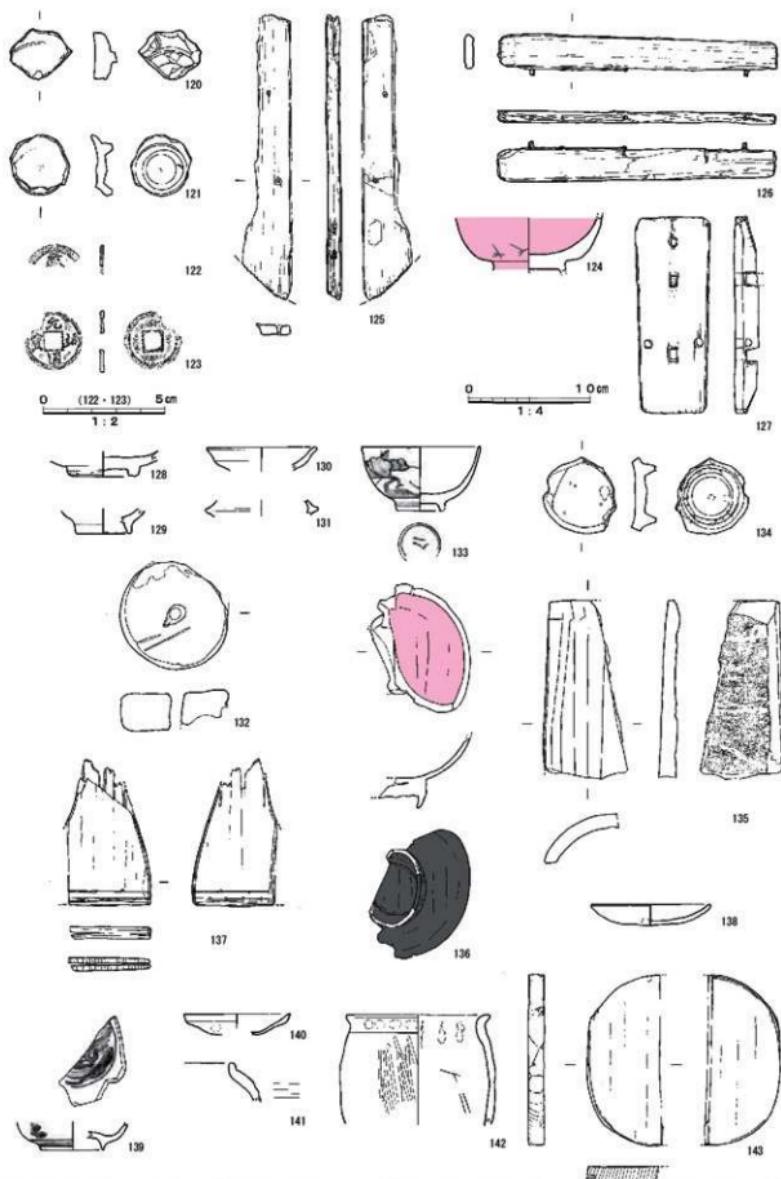
第2-3面B12土坑(図14-138)から土師器皿1点(138)が出土した。口縁部外面にススが付着しており、灯明皿と考える。17世紀から18世紀かと思うものである。

第2-3・4層(図14-139～143、図版31・39)からは、陶磁器、土師器、瓦質土器、須恵器、木製品等が少量出土した。139は景德鎮窯系青花碗、140は土師器皿、141は土師器羽釜、142は混入の弥生土器甕、143は曲物の底板?である。139は蛟龍文を描き、万頭心で高台内にノックング痕がある。16世紀第4四半期のものである。140は16世紀末から17世紀初めかと思うものである。141は大和型で本来は瓦質のもので、16世紀かと思うものである。143はスギ材で、側面に釘孔と思うものが1箇所ある。第2-3面まで18世紀のものが出土しているが、第2-3・4層になると16～17世紀のものが主になってくる。(陣内)



80~83 井戸、81~82: (02-1) 第2-1層、83~88: (02-1) 第2-1-2-2層・2-3層、89~94: (02-1) 第2-2層、95~108: (02-1) 第2-3層、109~119: (02-1) 第2-4層

図13 第2面 出土遺物(1)



120 ~ 122, 124 ~ 127: (02 - 1) 第2 - 4層, 123: (02 - 1) 第1 b ~ 2 - 3層, 128 ~ 132 - 137: (06 - 2) 第2 - 1 - 2層, 133 ~ 136: (06 - 2) 第2 - 2層,
138: B12 土坑, 139 ~ 143: (06 - 2) 第2 - 3 - 4

图 14 第2面 出土遺物 (2)



図 15 第3-1・2・3面の変遷

3) 第3面(図15、写真9・10、図版3~5)

第3面は、第2~4層およびその下部に部分的に残る第2~4b層を除去した面である。第3層は、粘性の強いシルト~細砂を基調とした層で、大きく3層に分層が可能であった。調査では、第3-1・3-2・3-3面の各面の検出を行った。しかし、第3層の時期は調査された治水緑地全域とも洪水が頻発し、各層とも部分的な洪水堆積物の被覆による遺構面の更新が激しかったと考えられている。

本来であれば、第3層は各層間に自然堆積層を挟むことが多く、遺存状況の良好な場合が多い。各層は部分的にさらに細分が可能な場合も見られた。しかし、当調査区では氾濫堆積物の供給が少なかったためか、確実な自然堆積層の被覆はほとんど確認されず、やや擾拌を受けた自然堆積層の残骸と作土層が連続する状況であった。

地形は、削平を受けている部分が不明であるが、各面とも基本的には南の第二十一ノ坪の東側と東の第十七ノ坪が高いことから、大局的には南東が高く北西にかけて緩やかに低くなっている。

遺構は、第3-1・3-2・3-3面各面において、条里地割りに伴う幹線畦畔やそれらを接続する支線畦畔を確認した。本書では、各層の遺構の変遷をわかるように提示した(図15)。これまでの池島I期地区的調査においては、第2~3面にかけてはとくに島畠の



写真9 02-1調査区 第3-1面 北半(西から)



写真10 06-2調査区 第3-2面 西半(南から)



写真11 第3-2面 B15条里畔(南から)



写真12 06-2調査区 第1b~8面 条里坪境(南から)

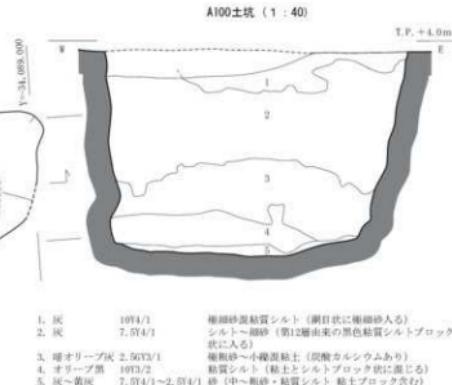
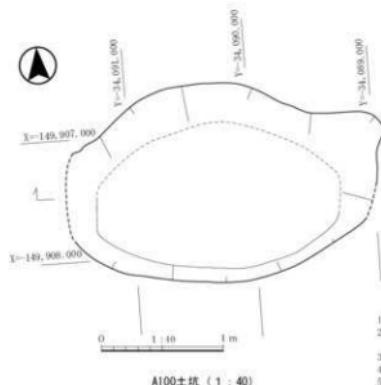
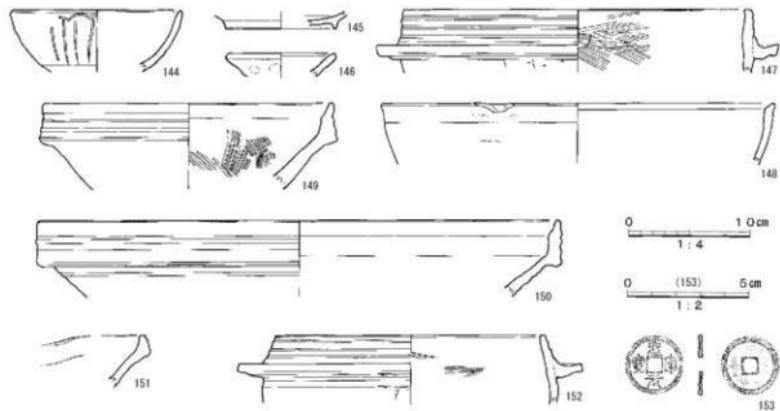


図16 第3-2面 遺構図



144～150：(02-1) 第3-1層、151：(02-1) 第3-2層、152・153：(02-1) 第3-3層

図17 第3面 出土遺物

発達する状況が見られたが、今回の調査では第2面段階に第二十ノ坪に僅かに見られただけである。

また第3-3面の北西部において、地割りに沿った幹線畦間をつなぐ支線畦群が北東から南西に斜行してつながるなど興味深い状況が見られた。このほか検出された第3-3面の第二十ノ坪付近の一部では、遺構面が小さな凹凸が激しい状況であった。遺構面の状況から、廃絶時の状況を推定する鍵となる可能性もある。(廣瀬)

第3面出土遺物(図17)

【02-1調査区】 第3-1層(図17-144～150、図版31)から陶磁器、土師器、瓦質土器、須恵器、瓦等が出土した。144は龍泉窯系青磁碗、145は景德鎮窯系端反皿、146は土師器皿、147は土師器羽釜、148は瓦質土器鉢、149・150は備前擂鉢である。144は線描蓮弁文が施され、15世紀第4四半期のものである。145は16世紀末から17世紀初めのものである。146は内外面にススが付着し灯明皿と考える15世紀後半かと思うものである。147・148は16世紀かと思うものである。149・150は16世紀末のものであり、149はかなり使用された痕跡がある。

第3-2層(図17-151)から磁器、土師器、東播系須恵器、須恵器等が極少量出土した。151は東播系須恵器片口鉢で、12世紀中から後半かと思うものである。

第3-3面 A101坪境から土師器片2点、瓦器片2点が出土した。

第3-3層(図17-152・153、図版33)から土師器、瓦器等が極少量出土した。152は土師器羽釜、153は錢貨である。152は16世紀かと思うもので、153は北宋錢の「聖宋元寶」である。

第3-1層、3-2層、3-3層も遺物が少なく、15世紀後半から16世紀のものが出土しているとしかいえない。

【06-2調査区】 第3-1層から陶磁器片、土師器片、瓦質土器片、須恵器片、瓦片等が極少量出土した。磁器は染付で18世紀かと思うもので混入と考える。瓦質土器は羽釜片で15世紀から16世紀かと思うものである。また、第3-3層から土師器片2点、瓦器(?)片1点が出土した。土師器片1点は15世紀かと思う皿である。(陣内)

4) 第4面 (図18、写真13・14、図版6)

第4面は、第3層下部の第3-3 b層を除去した造構面である。第3層に比べて粘性が強くなることが特徴で、上層に比べると細粒の粘質の土壌で構成されている。なかでも02-1調査区では、比較して粘性が強く粘土を主体としている。従来から、この段階前後の各面から第9層にかけて粘性が強い傾

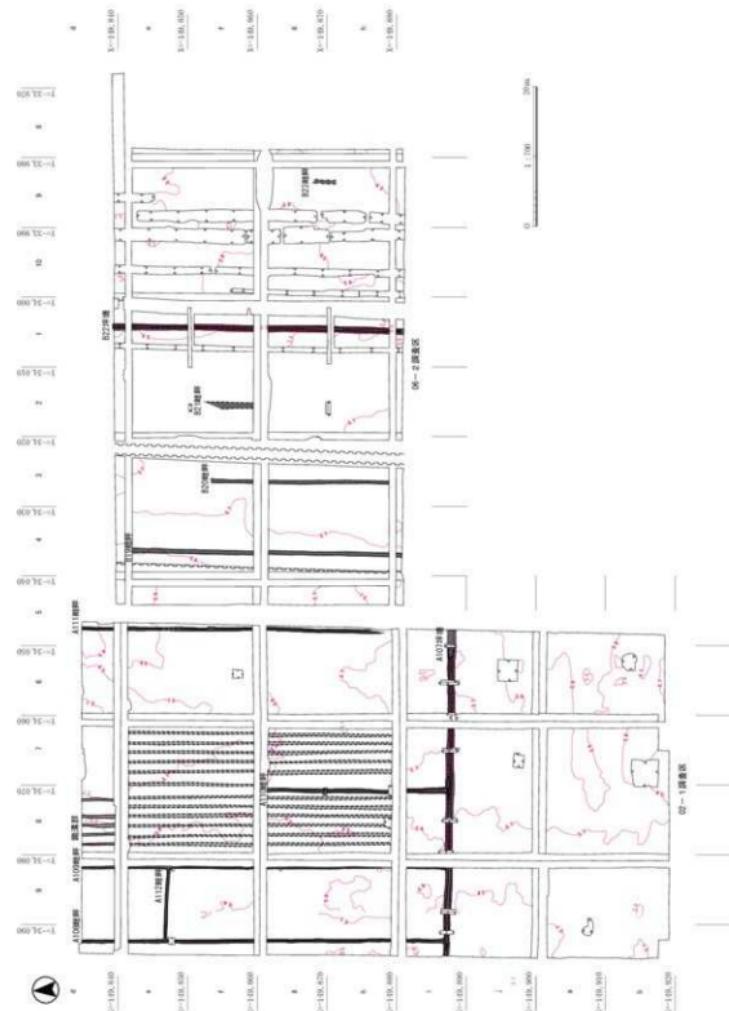


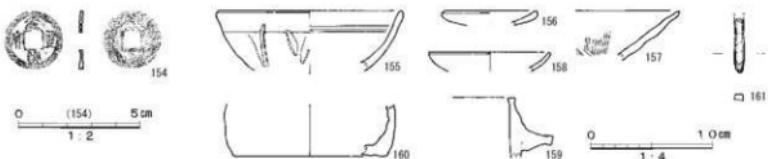
図18 第4面 平面図



写真13 06-2調査区 第4面 東半(北西から)



写真14 02-1調査区 第4面 北半(南東から)



154 : (02-1) 第4層、155~161 : (06-2) 第4層

図19 第4面 出土遺物

向である。02-1調査区にあたる調査区北西部では第3-3 b層の氾濫堆積物に被覆されて良好に遺構面を検出したが、大部分は第3-3層からの攪拌により遺構面の遺存状況は悪かった。

地形は、東および南が高く西に低くなると考えられる。02-1調査区北部中央～南東部にかけての地域が高く、そこから東西に低くなってゆくが、全体的に見れば、東の06-2調査区側に向かってわずかに高くなり、B22坪境の東側ではその傾斜が比較的明瞭であるが、その西側は比較的平坦であった。遺構面の標高は一番低い北西部でT.P.3.55m前後、その他はおよそT.P.3.60~3.70m前後、坪境より東でT.P.3.80~3.90m程度である。

第4面では、第3-3面同様に条里地割りに伴う畦畔を良好に検出したほか、02-1調査区の北部で歛立と考えられる盛り上がりとその間の低まった部分からなる溝群が良好に検出された。これは、A109畦畔とA110畦畔間に及びA110畦畔から東へ10.00mの間に幅1.50m程度の間隔で溝が検出されたものである。溝埋土は自然堆積層であったことからこれらの溝は歛立てに伴う歛間の溝である可能性が高く、その間が本来は歛立てであったと考えられる。こうした畦畔に囲まれた歛立て遺構は、既往の調査においても確認されており、一部の歛自体が良好に形態を残して検出されている。当調査区でも、最北端部分の低いところ（網フセ実線部分）では、歛立てが良好に検出された。こうした痕跡については、畠作の痕跡と考えることが妥当であるが、水稻稲作と畠作が平行して行われた「混作」、水稻稲作収穫後の季節に「二毛作」を行ったなどの考えが可能である。

そのほか第3-3面同様に支線畦畔が検出された。この面の畦畔は通常の条里地割り幹線畦畔に直交する畦畔であった。また、06-2調査区も含めて、第二十ノ坪では、ほぼ11~12mピッチで南北方向に延びる長地型の幹線畦畔を検出した。第二十一ノ坪は、第3-3 b層の被覆も見られず、第3-3

層からの攪拌によってかなり上面を削平されて、畦畔等の遺構を検出できなかった。第3—3層段階の攪拌の痕跡や足跡などが多数見られた程度である。(廣瀬)

第4面出土遺物(図19)

【02—1調査区】 第4層(図19—154、図版33)から土師器、瓦器、銭貨(154)等が出土した。土師器皿片が多い。13世紀から15世紀かと思うものであるが、小破片のため掲載出来なかった。154は北宋の「元豐通寶」である。

【06—2調査区】 第4面B19畦畔から土師器片1点、13世紀初めかと思う瓦器椀片1点が出土した。第4面B20畦畔から土師器片2点が出土した。

第4層(図19—155~161、図版31)から土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、須恵器、瓦、木製品等が出土した。155は龍泉窯系青磁碗、156は土師器皿、157は土師器皿?、158は瓦器椀、159は瓦質土器羽釜、160は瀬戸灰釉壺、161は不明木製品である。155は蓮弁文が施され14世紀中頃のもので、156・159は16世紀かと思うものである。157は皿にしては大きく、内面がハケメ調整で何か不明である。158は14世紀前半、160は内外面に自然釉が付着し、15世紀のものである。161はスギ材で、先端が炭化している。第4層出土の時期のわかる遺物は14世紀から16世紀と幅広い。(陣内)

5) 第5面 (図20、写真15・16)

第5面は、第4層を除去した面である。第4層と第5層の間には間層がほとんど挟まず土壌化層の連続であるが、第5層は7.5GY4/1の中砂～粗砂の混じる粘土～シルトの粘土の層である。06-2調査区のB27坪境より東では、第4層自体がやや砂質が多く含んでいるため、層識別は容易であった。ま

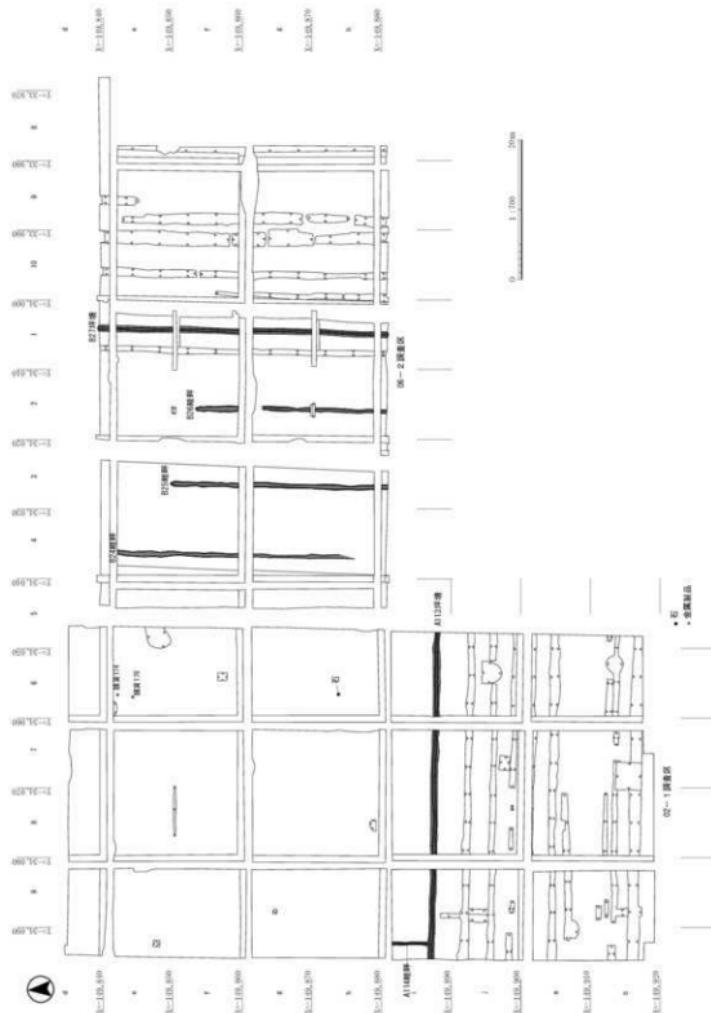


図20 第5面 平面図



写真15 02-1調査区 第5面 南半（北東から）



写真16 06-2調査区 第5面 東半（北西から）

た、02-1調査区の第4層下部には酸化カルシウムの塊が層状に見られた。但し、第二十ノ坪も東の06-2調査区の方向に行くにしたがい、粘性は弱まり、逆に粗粒砂が目立つようになってゆく。地形的には、これまで同様に全体的に見れば、若干東が高い。しかし、02-1調査区北部の中央から南東部にかけての地域は、後述する第11b層の氾濫堆積物が厚く、この付近に若干高い南北方向の帯がみられる。遺構面の標高は、T.P.3.50～3.80 m程度である。

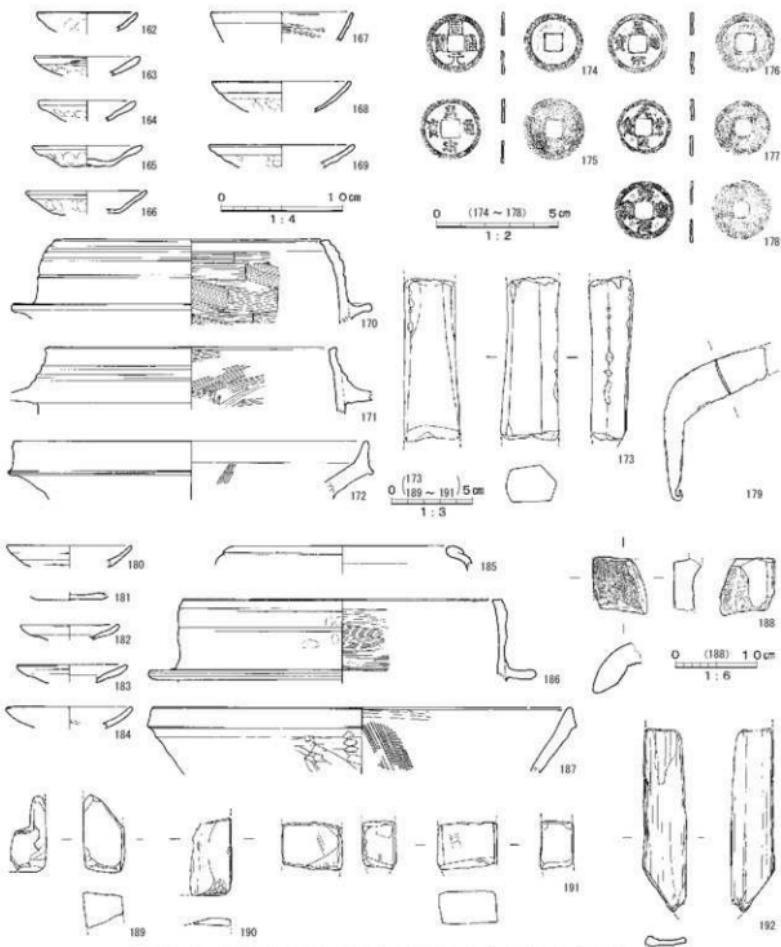
遺構面は、上層からの明瞭な踏み込み等は目立たないが、第4層下部に多く見られた酸化カルシウムの塊が検出面でも目立った。遺構の検出はほとんどなく、わずかに第二十ノ坪でA113坪境とそこから派生するA114畦畔、B24～26畦畔、B27坪境が検出されたのみである。A113坪境・B27坪境とも、高さ0.17～0.20 mほどの高まりを持つ畦畔で、水路等は確認されていない。このほかの遺構は検出されていないが、02-1調査区の第二十ノ坪の条里地割に伴う幹線畦畔推定位置の付近の第5層の除去作業中に、銅錢が5枚出土しているが、出土状況は明瞭ではない。このほか、錢が出土したと同じ条里畦畔の南側で拳大の礫が第5面検出中に出土している。これに関しては、条里地割りに伴う坪境付近に礫が見られることがたびたび指摘されている。（廣瀬）

第5面出土遺物（図21）

【02-1調査区】 第5面A113坪境から瓦質土器かと思う破片が1点出土した。第5層（図21-162～179、図版32・33）から土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、砥石、錢貨、鉄製品等が出土した。162～166は土師器皿、167～169は瓦器椀、170は土師器羽釜、171は瓦質土器羽釜、172は備前播鉢、173は砥石、174～178は錢貨、179は鐵鎌である。162・163が13世紀、164～166・170・171が15世紀かと思うもの、167～169は13世紀後半から13世紀末かと思うものである。172は内外面に自然釉（内底面はゴマ灰という）が付着し、15世紀後半のものである。173は砂岩製で、砥面は6面である。179は茎部を折り曲げ柄からはずれにくくしている。錢貨は174が後周の「周通元寶」、175・176は北宋の「皇宋通寶」、177は北宋の「元豐通寶」、178は北宋の「聖宋元寶」である。

時期のわかる遺物は、13世紀のものと15世紀のもので、14世紀のものがない。

【06-2調査区】 第5面B25畦畔から瓦質土器片1点が出土した。第5面B27坪境から14世紀かと思う瓦質土器鉢口縁片と11世紀前半かと思う土師器椀高台片1点が出土した。第5層（図21-180～187・189～192、図版32・40）から輸入磁器、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、瓦、砥石等が出土した。180は閩江窯系白磁皿、181は華南沿海窯系白磁皿、182・183は土師器皿、184は瓦器椀、



162～179：(02-1) 第5層、180～187、189～192：(06-2) 第5層、188：第6面B32 神跡

図21 第5面 出土遺物

185・186は土師器羽釜、187は瓦質土器擂鉢、189は不明石製品、190・191は砥石、192はスギ材で不明木製品である。180は15世紀後半のもの、181は外底面が部分的に露胎で、回転ケズリ調整の13世紀第1四半期のものである。182・183・186は15世紀かと思うもので、184・185・187は14世紀のものである。189は結晶片岩製で、段が生きているとして何になるのか不明である。190は粘板岩製の表面破片で、底面が2面でススが付着している。191は流紋岩質溶結凝灰岩製で、底面が4面である。

06-2調査区の第5層は14世紀から15世紀の遺物を含んでいる。(陣内)

6) 第6面 (図22、写真17、図版7)

第6面は第5層の土壤化層を除去して検出される遺構面である。第6層は、第5層からの攪拌で遺構面は遺存していない。粘性が強いが、細砂～中砂を多く含む粘土層である。東ほど砂質は強くなる。

地形は、前段階同様に全体的には東ほど高いが、前段階から顕著になってきた02-1調査区の南東

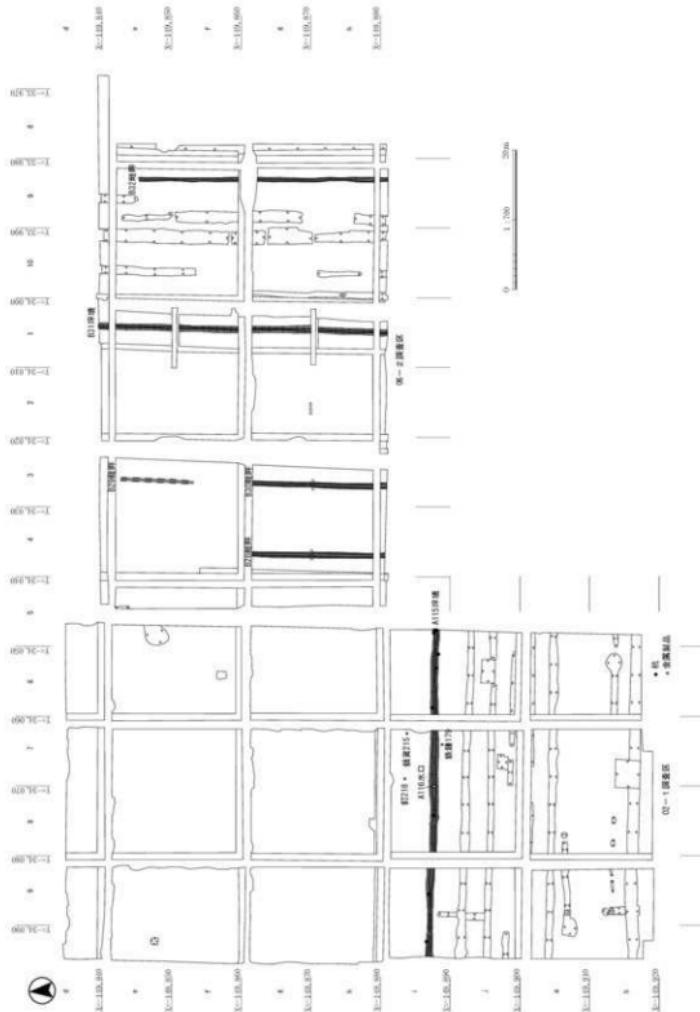
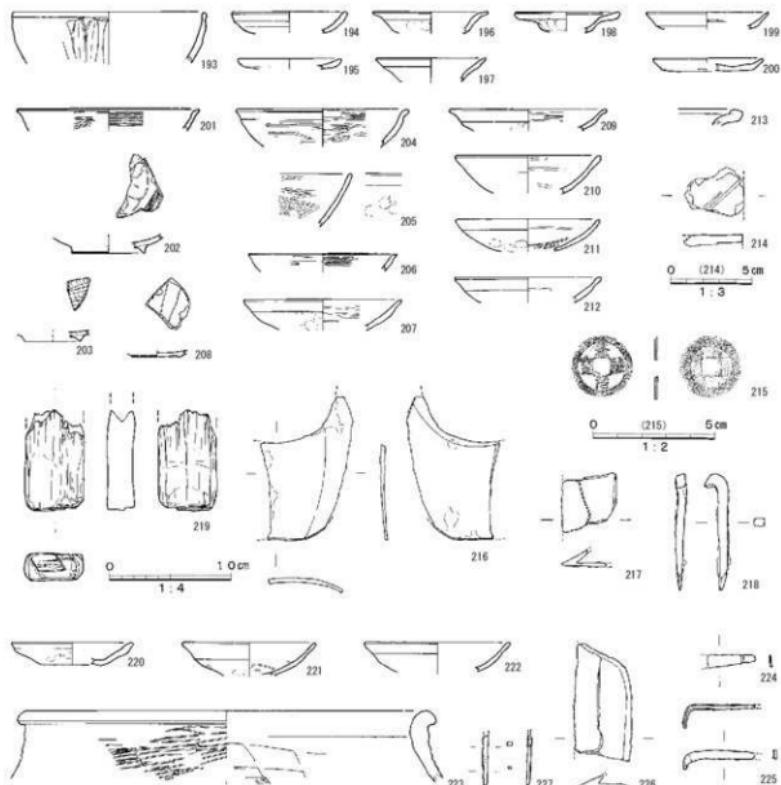


図22 第6面 平面図

から北西方向に伸びる第 11 b 層の高まりの影響を受けて北側中央部から南東部にかけての地域が若干高く、そこから東西に低くなつてゆく部分が見られた。遺構面の標高は T.P.3.40 ~ 3.70 m である。

遺構は上層からの攪拌で遺存状況は悪いが、A115 坪境のほか、B31 坪境、B28 ~ 30・32 畦畔が確認された（写真 17、図版 7）。A115 坪境では、中央部付近に写真 18 のような A116 水口が確認された。A116 水口は、第 6 面の検出中に確認されたことから本来は上層の第 5 面段階の暗渠等の掘形の可能性もある。しかし、いずれにしても、この水口の築かれた位置は上下の条里地割において幹線畦畔が確認されていた位置に近く、幹線畦畔との関係でこの位置に設定されていたと考えられる。

このほか、A115 坪境精査中には、坪境畦畔の肩部付近から杭及び杭跡が確認された。いずれも単独で杭間の間隔も統一性はない。また当面で検出したものであるが、先述の A116 水口同様に帰属面が当面とは限らない可能性も多い。第 6 面の坪境検出時に確認されていることから、どちらかといえば上層の坪境に対する護岸等の補強作業のものと考えることが適当かと思われる。



193 ~ 219 : (02 - 1) 第 6 層、222 : B28 畦畔、220・221、223 ~ 227 : (06 - 2) 第 6 層

図 23 第 6 面 出土遺物



写真17 06-2調査区 第6面 西半(南から)

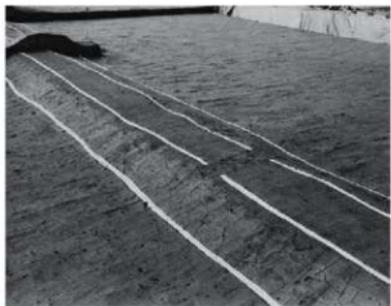


写真18 第6面 A116水口(南東から)

また06-2調査区では、第二十ノ坪において2条の幹線畦畔、第十七ノ坪において1条の幹線畦畔を確認している。いずれも、土壤が水田部分より若干ではあるが砂質が強い感じであった。(廣瀬)
第6面出土遺物(図23)

【02-1調査区】第6面A115坪境からは土師器片、瓦器片が少量出土した。いずれも細片だが、土師器片には14世紀から15世紀かと思うへそ皿の破片がある。瓦器片は12世紀末から13世紀初めかと思うものと13世紀後半かと思うものがある。

第6層(図23-193~219、図版31~33・41)から磁器、土師器、瓦器、須恵器、銭貨、鉄製品、木製品等が多く出土した。土師器皿、瓦器楕が多い。193は龍泉窯系青磁楕、194~198は土師器皿、199・200は瓦器皿、201~212は瓦器楕、213は土師器羽釜、214は砥石、215は銭貨、216は鉄鋤、217は鉄鋤か鍬、218は鉄釘、219は不明木製品である。193は蓮弁文が施され14世紀初めのもの、土師器皿は主に12世紀から14世紀かと思うもので、瓦器皿は13世紀、瓦器楕は12世紀前半から13世紀後半のものがあり、13世紀代中頃から後半のものが多い。201・202は大和型である。214は珪質片岩製の表面破片で、砥面は1面である。215は北宋の「景祐元寶」である。219は下端を突出させるような加工痕がある。コウヤマキ材で作られており特殊なものかもしれない。

【06-2調査区】第6面B28畦畔(図23-222)から瓦器楕片2点が出土した。222は13世紀末から14世紀初めのものである。第6面B30畦畔から13世紀代かと思う瓦器楕口縁片1点と瓦器片1点が出土した。第6面B32畦畔(図21-188)から丸瓦1点(188)が出土した。188は凸面が平行タタキ調整でススが付着し、凹面が面取りが広くスジ状の段になった布目痕があり、室町時代かと思うものである。

第6層(図23-220・221・223~227、図版33)から土師器、瓦器、瓦質土器、鉄製品等が出土した。土師器皿が多い。220は土師器皿、221は瓦器楕、223は瓦質土器甕、224は鉄小刀?、225はかすがい?、226は鉄鋤か鍬、227は鉄釘である。220は14世紀後半かと思うもの、221は13世紀末から14世紀初めのもの、223は15世紀かと思うものである。

池島1期地区の第6層出土遺物は、13世紀、13世紀末から14世紀初めのものが多く、今回報告の遺物の時期と齟齬をきたさない。(陣内)

7) 第7面 (図24、写真19・20、図版7)

第7面は土壤化層である第6層を除去して検出される面である。第7層は、暗灰色N3/の粘土～シルトの層で、極細砂～中砂を含む。第6層よりやや砂粒が多く、色調も淡く薄い。粘性は強いが、砂の混りが多く層上部に部分的に炭酸カルシウムが多く見られる。06-2調査区の東側は、酸化して茶褐色

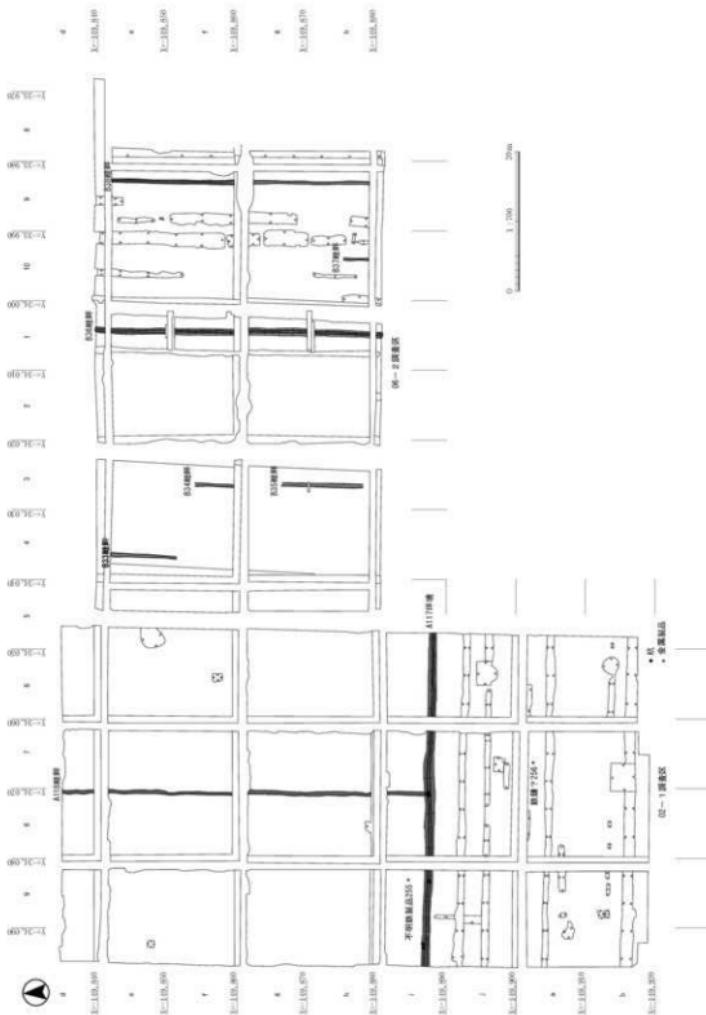
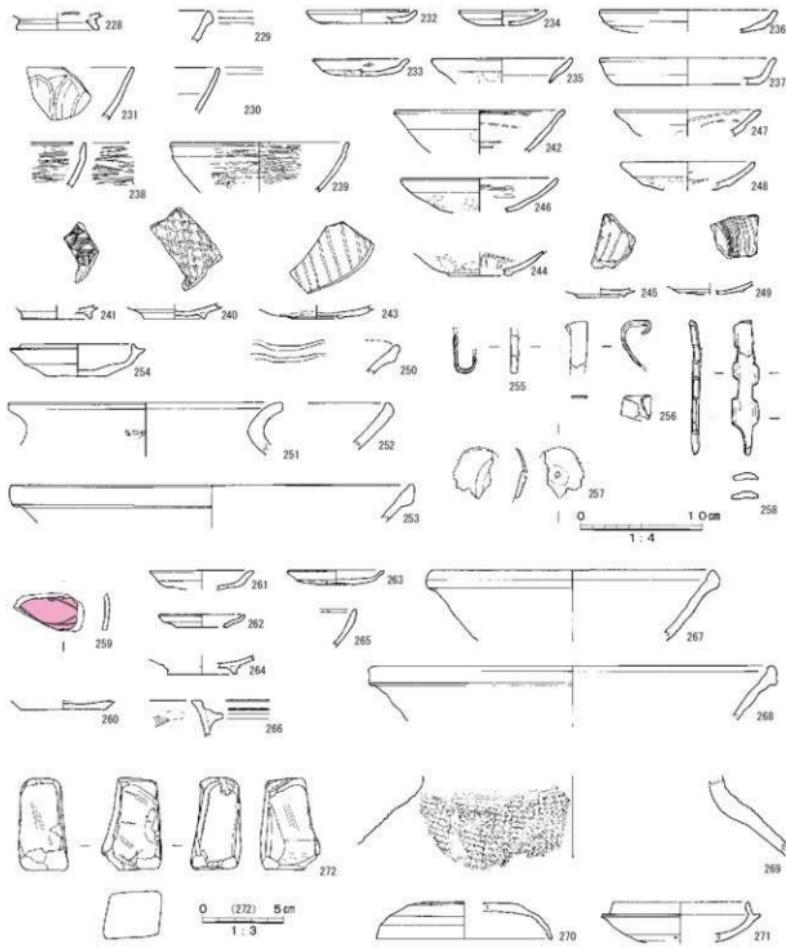


図24 第7面 平面図



228 : AII17 坪境。229 ~ 258 : (02 - 1) 第 7 層。259 : 836 坪境。260 ~ 268 : (06 - 2) 第 7 層。269 ~ 272 : (02 - 1) 第 7 ~ 9 層

図 25 第 7 面 出土遺物

色に変質している。上面は第6層からの踏み込みなどで凹凸が多く、遺存状況は悪い。

地形は、これまで同様に基本的には東と南が高く、下層の第11b層の氾濫堆積物の影響による東への地形的な変化が顕著になってきている。しかし、同様な盛り上がりが02-1調査区北部中央から南東部にかけての地域にあり、その部分はわずかに周辺より地形的に高い。

これに関連して、06-2調査区の東半は東に続く04-2調査区に向かって第7層以下第11層までの層が大きく変化していくので説明しておきたい。先述のように、これは第12層の弥生時代中期の遺



写真19 02-1調査区 第7面 南半（西から）



写真20 06-2調査区 第7面 西半（南から）

構面を被覆している第11b層の氾濫堆積物の影響によるもので、基本的には調査区全域に堆積しているものである。なかでも、02-1調査区の東半から04-2調査区にかけては第12面の段階の地形的な起伏が激しく、この低い部分を中心に東ほど厚く氾濫堆積物が堆積している。

遺構は坪境・条里畦畔（写真19・20、図版7）が検出された。西では東西方向のA117坪境及びそこから二十ノ坪の北に延びるA118畦畔が検出された。A117坪境は幅約1.0m・高さ約0.3m程度である。A118畦畔はほとんど色調の相違として検出されたのみで、第6層の擬似畦畔状を呈するが、周辺に比べてやや攪拌の度合いが少ないようであった。東では、B36坪境およびB33・35・37・38畦畔が確認された。B36坪境は、幅0.8～1.2m・高さ0.21m程度である。当面で検出された畦畔は、位置的には条里畦畔推定位置に近いが、遺存状況が悪く、位置的にも上面の畦畔に伴う可能性も否定できない痕跡程度の遺構である。（廣瀬）

第7面出土遺物（図25）

【02-1調査区】 第7面A117坪境（図25-228）から土師器、瓦器等が少量出土した。228は瓦器椀高台で大きくしっかりしている。11世紀後半のものである。

第7層（図25-229～258、図版31・32・41）から磁器、土師器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、須恵器、鉄製品、木製品等が多く出土した。229・230は華南沿海窯系白磁碗、231は龍泉窯系青磁碗、232～237は土師器皿、238～249は瓦器椀、250は瓦質土器鉢、251は東播系須恵器甕、252・253は東播系須恵器鉢、254は須恵器杯、256は鐵鎌？、255・257は不明鉄製品、258は不明木製品である。229・230は13世紀前半のもので、231は鍋蓮弁文が施され13世紀第4四半期のものである。土師器皿は13世紀代のものが多く、12世紀や15世紀と思われるものもある。瓦器椀は12世紀から13世紀のもので、13世紀代のものが多い。238は楠葉型、249は大和型である。250は14世紀かと思うもので、252は12世紀中頃、253は12世紀末から13世紀初めかと思うものである。254は下からの巻上げと見える。256は刃の部分が曲げられている。255・257はそれぞれ貴重物、飾釘の頭部かもしれない。258は両側面を凹凸させている。コウヤマキ材で作られており、特殊なものかもしれない。第7層は13世紀のものが主に出土している。

図25-269～272は第7～9層のいずれかから出土したもので、ここに掲載した。269は瓦質土器甕、270は須恵器杯蓋、271は須恵器杯、272は砥石である。269は13世紀から14世紀かと思うもので、270・271は6世紀第4四半期のものである。272は凝灰質頁岩製で、砥面が4面で右側面に

削られたような段がある。

【06－2 調査区】

第7面B36 墳境（図25－259、図版39）から14世紀から15世紀かと思う土師器皿片1点、6世紀末から7世紀初めかと思う須恵器杯片1点、漆器椀片1点（259）が出土した。259はカツラ材で、赤漆に内面は黒漆で文様を描いている。第7面B38 畦畔から外面平行タタキ調整、内面當て具痕のある須恵器片1点が出土した。

第7層（図25－260～268、図版31）から磁器、土師器、瓦器、東播系須恵器、須恵器等が出土した。260は華南沿海窯系白磁皿、261・262は土師器皿、263は瓦器皿、264・265は瓦器椀、266は土師器羽釜、267・268は東播系須恵器鉢である。260は13世紀第1四半期で外底面回転ヘラケズリの後、釉が線状に付着している。261は13世紀後半、262は15世紀かと思うものである。263は13世紀かと思うもので、264・265は12世紀前半から中頃のものである。265は楠葉型である。266は大和型（？）の14世紀かと思うもので、267・268は12世紀末から13世紀初めのものである。第7層は主に12世紀から13世紀の遺物が出土している。

池島Ⅰ期地区の第7層出土遺物は11世紀末から13世紀のもので、今回報告の遺物の時期と齟齬はきたさない。（陣内）

8) 第8面(図26、写真21・22、図版8)

第8面は土壤化層である第7層を除去して検出される遺構面である。第8層は、上面は第7層からの攪拌によって削平されているが、灰色N4の粘土～シルトの層で、細砂を僅かに含んだ層である。西半部分の層下面是凹凸に大きく変形し、下層の第9層が変形している。これについては、從来から地震による地形の変形構造と指摘されているものと考えられる。また、02-1調査区の調査では、松田順一郎氏(財団法人東大阪市文化財協会、現 財団法人東大阪市施設利用サービス協会)に実見していくだき同様なご教示をいただいた。

地形は、第7面の記述でも指摘した、第11b層の影響による地形の傾斜がさらに顕在化した状況である。したがって基本的に東ほど高く、02-1調査区の中央部北から南東部にかけての地域が若干高い。

遺構は坪境のほか、06-2調査区で畦畔の痕跡の可能性がある筋状の変色痕跡と土坑1基・溝1条が確認された。

A119 坪境溝は、北側に若干の高まりを持つ溝で、高まりは上幅0.10～0.30m、高さ0.10mを測る。溝は、幅1.00～1.20m、深さ0.10mを測る(図版8)。周辺部に比べて、埋土は第7層との区別がつきにくいかやや淡い色調を呈する粘土～シルトである。坪境溝内から杭跡及び石を検出したが、いずれも上層に関連するもの可能性をぬぐえない。このほか二十ノ坪北東部で縄を2点検出した。

B41 坪境(図27、写真22)は、幅0.7～1.05m、高さ0.25mのものである。B39 畦畔は、わずかに色調の違う筋状の部分がみられたもので、本来畦畔であったのかどうかは確定できない。

B40 溝(図28)は、東側を現代の水路の矢板打設による地形の落ち込みによって切られているが、現状で長さ2.5m、幅0.84m、深さ0.07mである。埋土は1層で、遺物も出土していない。

B42 土坑(図28、写真25、図版8)は、B41 坪境の東で確認されたものである。規模は、長軸2.66m・短軸1.63m、深さ0.66mの長方形の遺構である。埋土は、掘り上げてすぐに埋め戻したような状況で、下層の第8層～11b層上部の各層がブロック上に混じりあったような状況を呈している。調査では第8面の検出時に確認されたため当面で記述するが、埋土に第8層と考えられるブロックが混じっていることを考えると、本来は上層の遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

こうした遺構は、これまでにも池島I期地区の調査などで第7面段階に同様な遺構が検出されている。いずれも、すぐに埋め戻したかのように、埋土が下層のブロックで構成されていることを特徴としている。遺物もまったく出土しない場合が多く、性格等は不明である。(廣瀬)



写真21 02-1調査区 第8面 北半(北東から)



写真22 06-2調査区 第8面 東半(南から)

第8面出土遺物（図29・30）

【02-1 調査区】 第8面 A119 坪境溝から土師器片、瓦器片等が極少量出土した。いずれも破片だが、瓦器片の中に12世紀かと思うものがある。第8層（図29-273～図30-336、図版31・32・41）から黒色土器A類、黒色土器B類、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、須恵器、錢貨（328）、鉄製品（329）

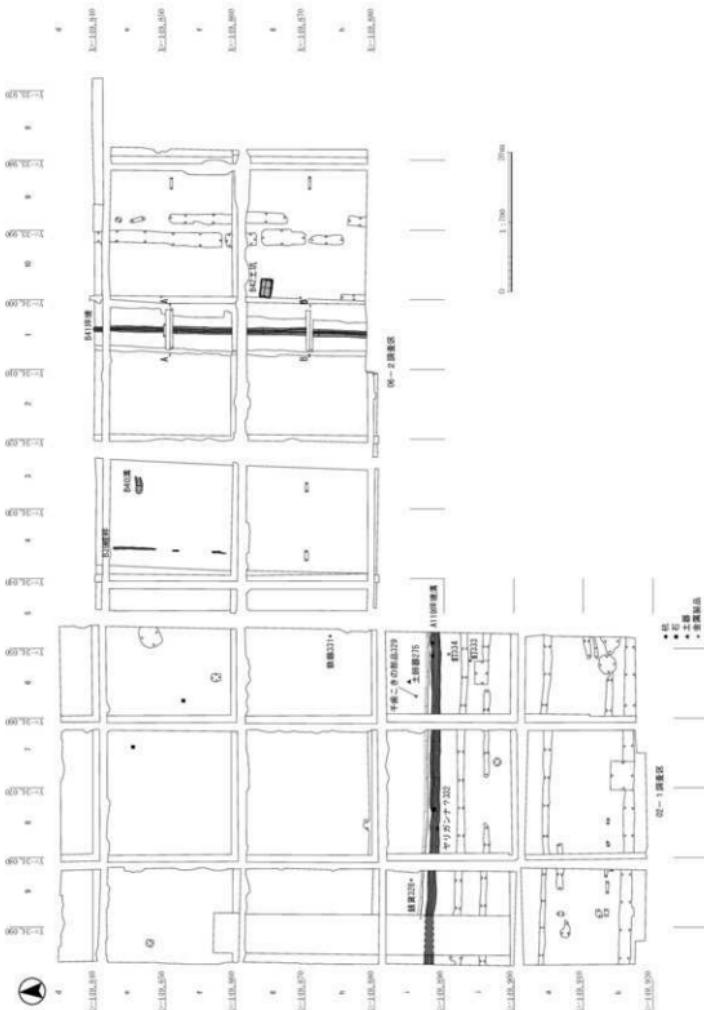


図26 第8面 平面図



写真23 02-1調査区 第3～7面 条里坪境（西から） 写真24 06-2調査区 第2～7面 条里坪境（南から）

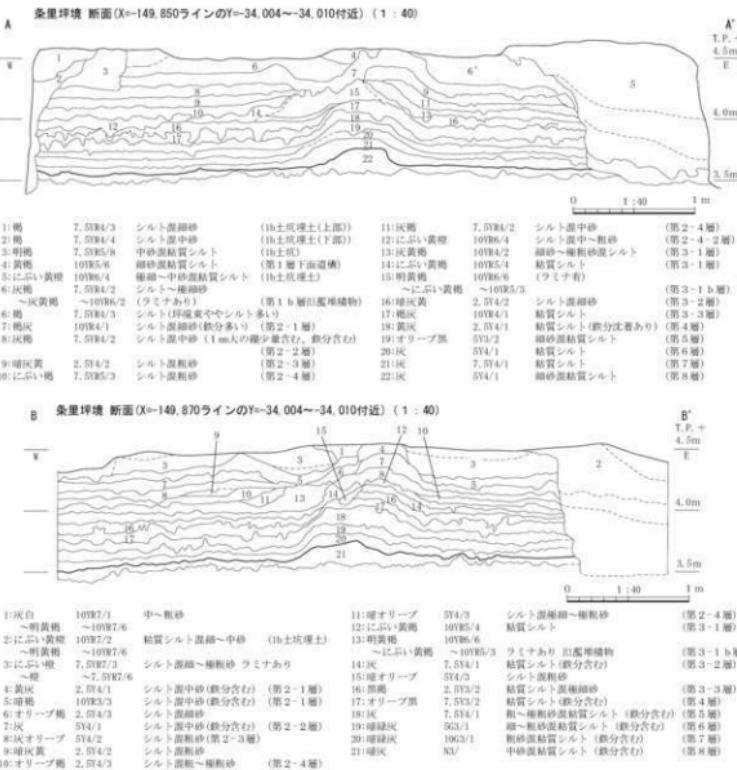


図27 第2-1～8面 条里坪境 断面図

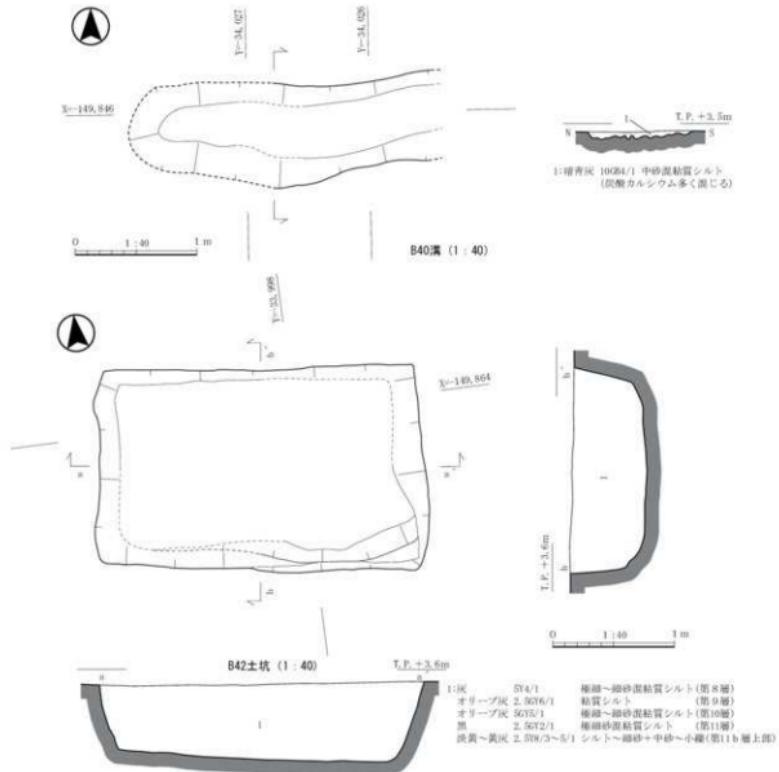


図 28 第8面 遺構図



写真 25 第8面 B42 土坑 断面（南東から）

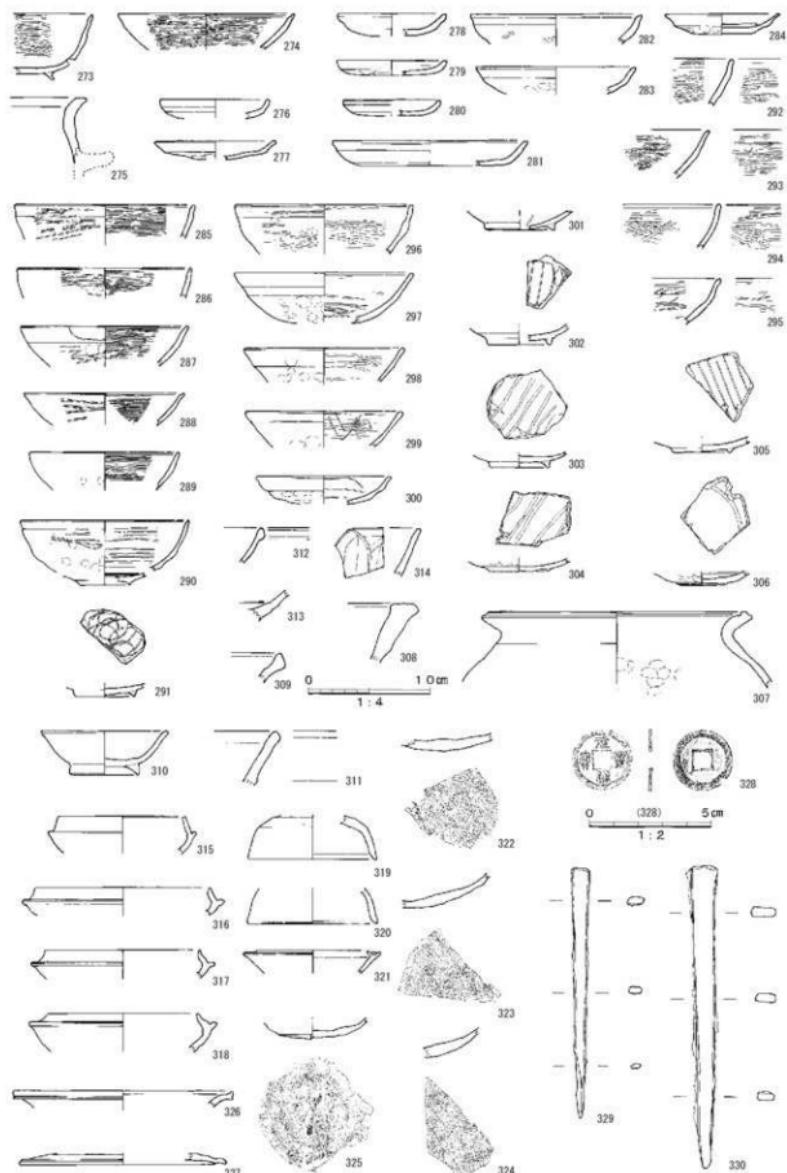
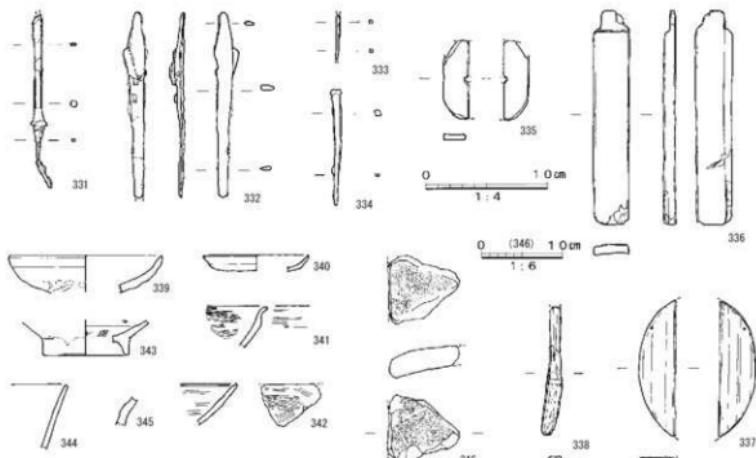


図29 第8面 出土遺物(1)



331～336：(02-1) 第8層、337：B41坪境、338：B42土坑、339～346：(06-2) 第8層

図30 第8面 出土遺物(2)

～334)、木製品(335・336)等が多く出土した。細片が多く、瓦器椀が多い。273は黒色土器A類椀、274は黒色土器B類椀、276～283は土師器皿、284は瓦器皿、285～306は瓦器椀、275・307は土師器羽釜、308は瓦質土器鉢、309は東播系須恵器鉢、310は灰釉陶器瀬戸山茶碗、311は陶器、312・313は華南沿海窯系白磁碗、314は龍泉窯系青磁碗、315～318・321は須恵器杯、319・320・327は須恵器蓋、326は須恵器壺、322～325は須恵器杯片でヘラ記号を施されたものである。329と331は第8～9層出土であるがここに掲載した。273～275は10世紀かと思うもので、従来の第8面の年代のものである。土師器皿は12世紀代のものが多い。284は13世紀前半かと思うもので、瓦器椀は12世紀中頃から13世紀前半のものが多い。285～288・290・291は大和型である。290は径がもう少し小さいかもしれない。307は12世紀かと思うものである。310は内外面無釉の部分があり、外底面に糸切痕が、内面に重ね焼痕がある。13世紀のものである。須恵器は下からの巻上げと考えられ、6世紀第4四半期から7世紀前半のものが多い。328は北宋の「元豐通寶」である。329は細いので千歯こきの歯かと思うものである。330は馬鍔の歯、331は鉄鍔、332は刃先が反っているのでヤリガンナカと思うものである。333・334は鉄釘である。335はスギ材で、半円形に近いものに孔が開いているので紡錘車かと思うものである。336はスギ材の不明木製品で上端が段になっている。

【06-2調査区】 第8面B41坪境(図30-337、図版40)から木製品の曲物と思われるもの1点(337)が出土した。337はスギ材で、紐孔かと思う小孔1個が残存し、孔に繊維かと思うものも存在している。第8面B42土坑(図30-338)から13世紀かと思う土師器皿片1点と瓦器片1点、不明木製品1点(338)が出土した。338は断面が四角く、現状は折れ曲がっている。コウヤマキ材で作られており、特殊なものかもしれない。

第8層(図30-339～346、図版31)から土師器、瓦器、須恵器、東播系須恵器、磁器、瓦、製塙器等が出土した。339は土師器皿、340は瓦器皿、341・342は瓦器椀、343は華南沿海窯系白磁碗、344は須恵器杯?、345は製塙器皿、346は平瓦である。339・340が13世紀かと思うもの

で、341・342は12世紀後半のもの、343は内面に櫛描文が施され13世紀前半のものである。346は側面を面取りし、凸面は平行タタキ調整で、凹面は布目痕がある平安後期以降中世前半のものである。344・345は下からの巻上げと考えられ、8世紀かと思うものである。

池島I期地区の第8層出土遺物の時期は、9世紀から10世紀のものと11世紀後半から12世紀初めのものがあり、後者が量的に少ないため第8面は10世紀としている。今回報告する第8層出土遺物は12世紀から13世紀のものが多く、従来の時期と齟齬をきたしている。(陣内)

9) 第9面(図31、図版9・10)

第9面は第8層の土壤化層を除去して検出される面である。第9層は、上部を第8層からの攪拌によって削平されているが、青灰色10BG5/1の粘土～シルトの土層で、東に行くにしたがい第10層との識別が困難になり分層できなかった。理由としては、先述の第8層が変形のため非常に分離しにくかつたことや、層厚が非常に薄く下層の第10層との層境が不明瞭なためである。02-1調査区南半の高い部分では第9層に当たる層が薄く、下層の第10層がほとんど見え隠れする状況であった。また、06-2調査区部分でも、東半ではこの部分を第9・10層相当として分層できなかった。

地形は、前段階同様に第11b層の氾濫堆積物により、東ほど高く、これまで同様に02-1調査区中央部から南東部にかけての地域が若干高くなっている地形である。このほか、02-1調査区の南半部分が、後述する第10・11面の地形を反映して高くなっている。

この面では坪境、溝、土坑、石などを検出した。出土遺物等も少なく前後関係も不明な遺構が多いが、東西南北を意識した遺構が大半を占めるなか、A134溝・B49溝(図32)の二つだけが方向を異にしている。この二つを含めて、遺構の帰属面については問題が多い。

坪境は、02-1調査区のA120坪境溝(写真26)と06-2調査区のB45溝(図32、写真28、図版10)がその可能性が高い。A120坪境溝は、第8面段階での土層観察において坪境溝下部に同様の第9層がやや窪んだ状況で確認された。また、坪境溝の溝北側は幅1.40m程度の畦状の高まりを確認した。B45溝は、前段階の坪境より若干西にずれるが、幅0.9m、深さ0.17m程度の浅い溝である。ただし、このすぐ西側にはB46溝(図32)が位置し、規模的にはこちらのほうが大きく、深さもやや深めである。両者の関係は同時並存していたのかも不明である。

このほか、第二十一ノ坪の調査区南端部分では東西方向の幅0.20m程度の浅い溝が13条検出され、一部の溝には切り合い関係も見られたが、埋土はほとんど変わらない。このほかこれらの溝群と切り合いで持つ南北方向のA135溝を調査区南東端部で確認した。

06-2調査区では、調査区東半の第十七ノ坪でB43～59・63～72・74～90・92・93・98・99・102・104～106・117溝(図32・33、写真27～29、図版10)の53条の溝を検出した。大部分は南北方向のものであるが、一部は東西方向を指向している。溝は、いずれも幅0.3～0.5m、深さ0.2～0.3m程度のもので、幅のわりに深い溝が多いことが特徴である。溝間には、切り合い関係があることから複数回にわたって掘削された溝の集積と考えられる。

従来から、第8層から第9層にかけてこうした遺構が集中する部分が池島I期地区においても確認されている。これらの遺構を含めて今回の遺構群も、第十七ノ坪でしか検出されていないことから、いずれも坪境に規制されている可能性が高い。また、今回第9面で検出を行なったが、断面観察では第8層の途中まで輪郭線が上がる可能性のある溝も見られた。しかし、いずれの調査においてもこうした遺

構群は地形的に高い部分で検出される場合が多く、各層の層厚が薄いなどの問題もあって、帰属面を確定しにくい状況である。

第9面ではA128・131・133溝と坪境に切られる形でA134溝を確認した。この溝は、調査区南西端部から北端中央部に延びる溝で、先行して調査を行った調査区南半部ではこの溝周辺にはほとんど第



図31 第9面 平面図

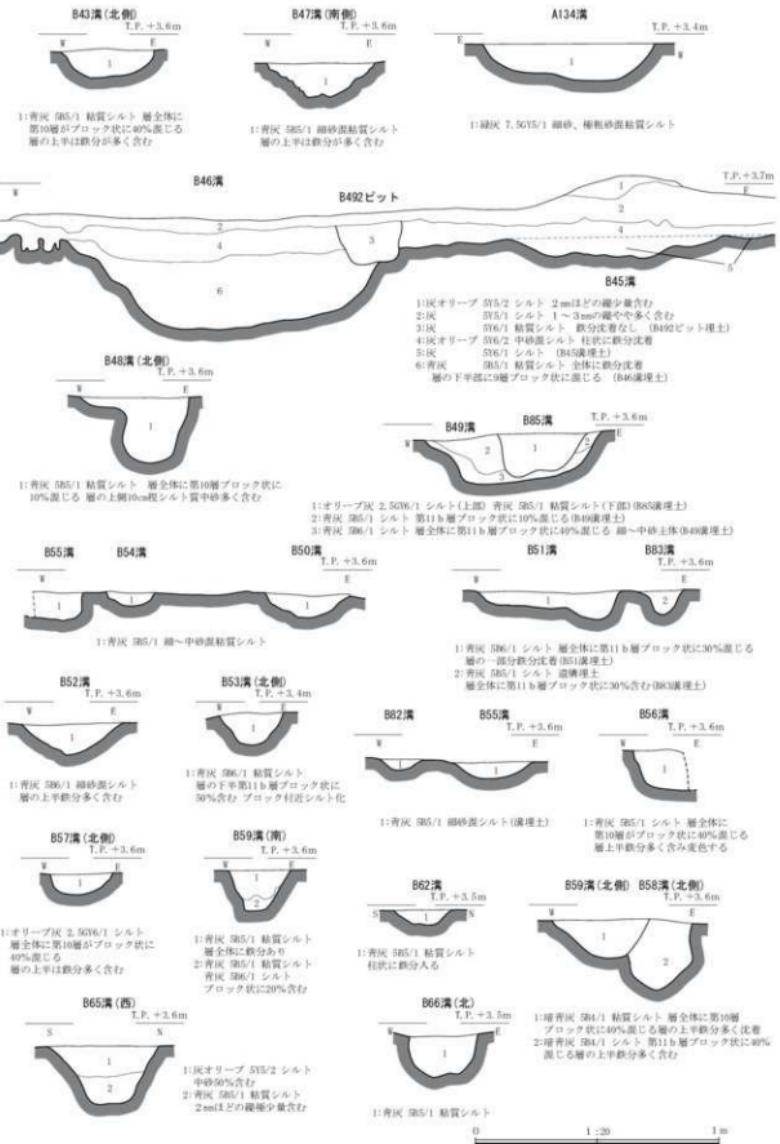


図32 第9面 遺構図(1)

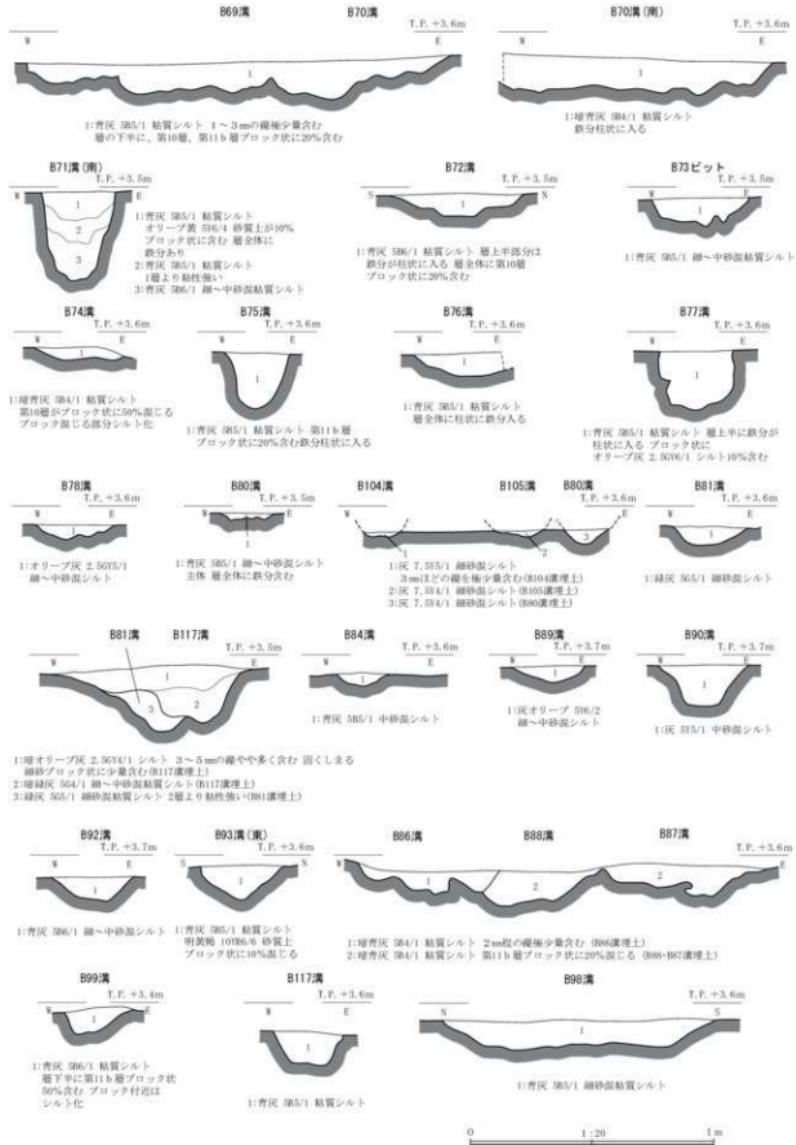


図33 第9面 遺構図(2)



写真26 第9面 A120 坪境溝（西から）



写真27 第9面 溝群 (B43・56～59)（南から）



写真28 第9面 B45 溝（南から）



写真29 06-2調査区 第7～11b層（南から）

9層が見られなかったため第10面の溝として認識していた。しかし、調査区北半の断面を確認したところ、第9面に掘り込み面があることがわかったため、第9面のA134溝として認識されたものである。幅0.50～0.70m、深さ0.10～0.15m程度の溝で、総延長80.00mを超える溝である。埋土も調査区南半では見分けにくく、やや粘質の暗い粘土～シルトの土層であったが、北半では溝底部にわずかに細砂～中砂を確認できた部分があった。この溝の延長部分と考えられる溝が池島I期地区の97-3調査区で検出されている。97-3調査区では溝54と呼称されているもので、幅も1.00m弱、深さ0.30mのやや幅広の溝である。

このほか検出面は第10面であるが、時期的にこの面に関わると見られるA374土坑と、調査区東の法面部分の第10層よりやや上部分の壁からA390ピットを検出した（図34・図版11）。直径0.40～0.50m程度の遺構で、底部付近からほぼ完形の土師器が置かれたような状況で出土した。A374土坑から出土した土師器（図43-392）は、8世紀初め頃のものである。A390ピットから出土した土師器も体部下半に指頭圧痕が明瞭に残り内面には暗文が丹念にめぐらされ、同時期頃のものであろう。これまで福万寺I期地区を中心に、ほぼ同様な土器埋納ピットが第9面において検出されており、当地域での古代における土地開発との関連が指摘されている。当遺跡における土器埋納遺構については福万寺I期地区的調査成果を基礎にして江浦 洋（江浦1996）、山崎頼人・秋山浩三・朝田公年が、池島I期地区的成果も交え、土器や銭などの埋納遺構を集成している（山崎・秋山・朝田2000）。井上智博は、福万寺I期地区的正式報告の中で、これらを整理して古代から中世における農耕祭祀との関連の

中で再検討している。井上は、第9a面（当調査区第9面相当）においては地割り等の境界部分だけではなく、非水田域の可能性が高い微高地と水田域の境界付近などにも分布し、続く第8a面段階では畦畔の近くに分布するものが目立つと指摘している（井上編2002）。時期的には飛鳥時代に相当する面に土器埋納遺構が多く、奈良時代に関する資料は少ない。出土遺物総体のなかでも奈良時代の資料は少ない。今回報告する土器埋納遺構は時期的に見て資料的に少ない奈良時代に相当する時期の資料であり、広大な当遺跡調査地内における開発の中でどのように位置付けることができるのか興味深い。

最後に、それらの様相について周辺調査区との関係などの問題点をまとめたい。当調査区の調査に当たっては、西接する95-2・96-1・97-3の各調査区との層位的な整合性を勘案しながら調査を行ってきた。これらについて、整理作業の過程で遺物なども加えて検討を行い、層位の整理を行った結果、いくつかの面で池島I期地区における統一された層序認識とは齟齬をきたしている可能性が高い。第3面の各枝番号の層序の対応関係、第5～9面の各面の対応関係などである。具体的には、今回の報告では出土遺物からみて第8・9層の時期が大きく相違している。これは、本書でも後述しているように池島II期地区ではI期地区に比べて下層の弥生時代の地形が高い。このため、第8・9・10層の遺存状況が非常に悪く、遺物にも混じりが多い。しかし、一方でこのことはこの地域が長期に安定していた時期があるということである。

こうしたことから、この地域は、各時期に安定期に利用されていた可能性が高く、遺物の混じりも多いのであろう。（廣瀬）

第9面出土遺物（図35）

【02-1調査区】 第9面A120坪境溝（図35-347～349）から土師器、瓦器、黒色土器A類、東播系須恵器、瓦、石等が出土した。347は土師器杯か皿、348は瓦器椀、349は丸瓦である。347・348は12世紀前半のもので、349は中世かと思うものである。

第9層（図35-350～376、図版41）から土師器、須恵器、瓦器、木製品等が多く出土した。350は土師器椀？、351・352は須恵器杯・杯B、353・354は須恵器壺である。7世紀後半から9世紀かと思うもので、従来の第9層の時期を示す遺物である。上からの混入や下からの巻上げと考えられる遺物として、355～359は土師器皿、360は瓦器皿、361～365は瓦器椀、366は土師器羽釜、367・368は須恵器杯蓋、369～373は須恵器杯、374は須恵器碗？である。376は不明木製品である。375は土師器高杯で9～10層出土であるがここに掲載した。土師器皿は12世紀代のものが多く、360は12世紀末から13世紀初めかと思うものである。瓦器椀も12世紀代のものが多い。366も12世紀代かと思うものである。須恵器杯蓋、杯は6世紀末から7世紀前半のものが多い。368は天井部にヘラ記号がある。375は7世紀かと思うものである。376はヒノキ材で小孔が1個あり、表、裏面に無数に線刻がある。まな板かもしれない。

【06-2調査区】 第9面B43溝（図35-377）から土師器片3点と黒色土器A類椀1点（377）が出土した。377は10世紀中頃かと思うものである。第9面B44溝から須恵器細片3点が出土した。第9面B45溝（図35-378・379、図版31）から土師器片4点、須恵器片2点（378）、磁器片1点（379）が出土した。378は須恵器杯、379は華南沿海窯系白磁碗である。378は7世紀前半、379は13世紀前半のものである。巻上げ、混入と考えられる。第9面B46溝から土師器片1点、6世紀かと思う須恵器片1点が出土した。第9面B47溝から須恵器片2点、弥生土器底部1点が出土した。第9面B48溝から土師器片2点、6世紀末から7世紀初めかと思う須恵器杯蓋片1点が出土した。第9面B49溝か

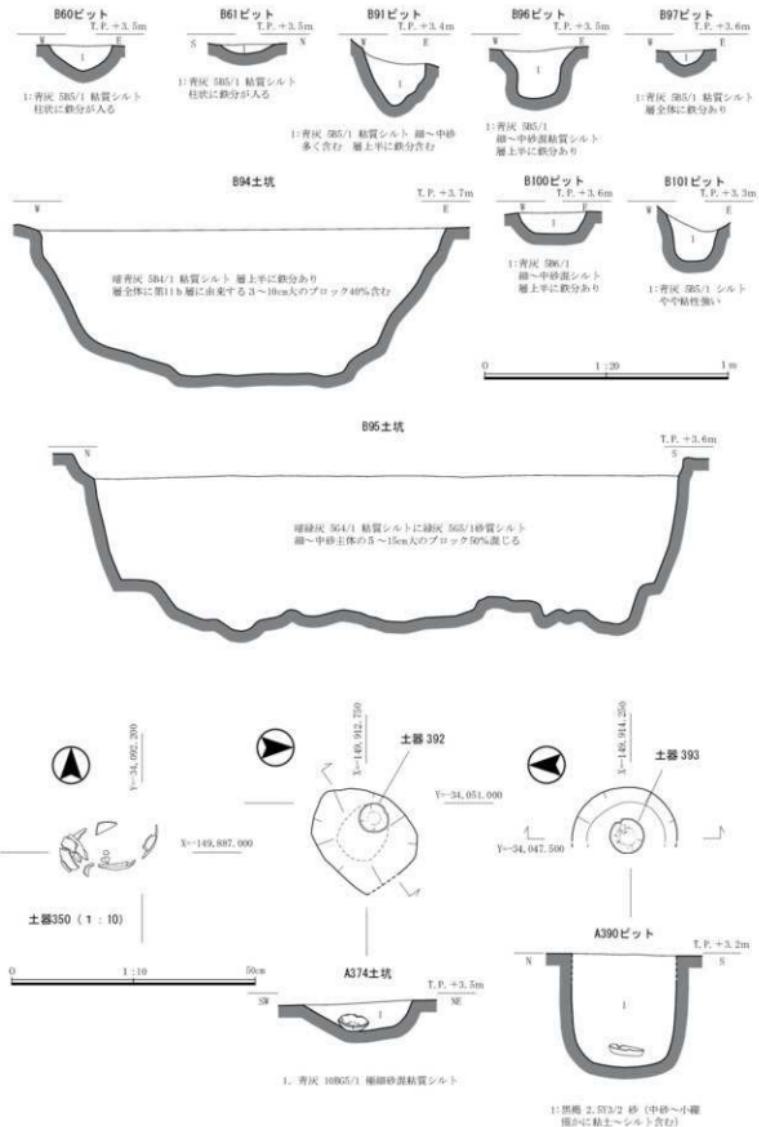
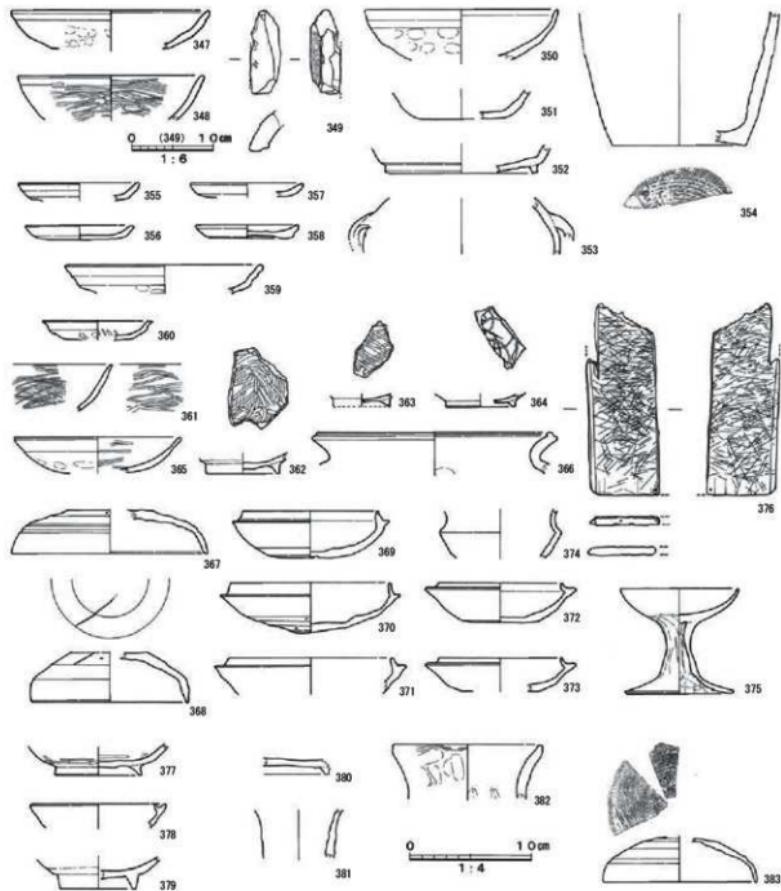


図34 第9面 遺構図(3)



347～349：AI20 溝、350～376：(02～1) 第9面。377：B43 溝、378～379：B45 溝、380～383：第9面

図35 第9面 出土遺物

ら土師器片極少量と弥生V～VI様式の弥生土器底部1点が出土した。第9面B50溝から須恵器片1点と土師器片1点が出土した。土師器片は9世紀ぐらいの杯かもしれない。第9面B51溝から7世紀前半かと思うへラ切り未調整の須恵器片1点が出土した。第9面B52溝から須恵器片1点が出土した。第9面B53溝から須恵器片2点、14世紀かと思う瓦器挽片1点が出土した。第9面B54溝から土師器片1点出土した。第9面B55溝から須恵器片、土師器片、弥生土器片、石等が極少量出土した。第9面B56溝から瓦器？片1点が出土した。第9面B57溝から8世紀かと思う須恵器壺片1点、土師器片1点等が出土した。第9面B58溝から須恵器片1点、土師器片2点等が出土した（第9面B106溝として土師器片3点が出土した）。第9面B59溝から土師器壺片1点、土師器片1点が出土した。第9面B65溝

から土師器皿片 1 点が出土した。て字状口縁で 11 世紀後半のものである。第 9 面 B75 溝から須恵器片 1 点、土師器片 1 点が出土した。第 9 面 B80 溝から土師器片 1 点が出土した。第 9 面 B104 溝から 6 世紀かと思う須恵器杯片 1 点が出土した。第 9 面 B105 溝から 7 世紀前半の須恵器杯蓋片 1 点が出土した。第 9 面 B117 溝から 6 世紀末から 7 世紀初めかと思う須恵器杯片等 2 点、土師器片 5 点が出土した。

第 9 層（図 35 – 380 ~ 383、図版 33）から須恵器、土師器、製塙土器等が少量出土した。380 は土師器杯 B 高台、381 は須恵器壺頸部、382 は製塙土器、383 は須恵器杯蓋である。380 は外底部にススが付着しており、381 は内面に自然釉が付着している。380 ~ 382 は 8 世紀から 9 世紀かと思うもので、従来の第 9 層の時期を示すものと思う。383 は巻上げと考えられるが、天井部に線刻と思うものがある。

池島 1 期地区の第 9 層出土遺物は、7 世紀から 8 世紀が主で、第 9 層の上限は 6 世紀まで遡る可能性があるのに対し、今回報告する出土遺物は 6 世紀末から 9 世紀のものの中に 12 世紀のものがかなり混入している。（陣内）

10) 第10面 (図36、写真31、図版10~12)

第10面は、第9層を除去し検出した面である (図36)。極細砂～細砂混じりの粘土～シルトを母材とする土壤化した土層である。第9層の堆積が薄く、また部分的に第8層の粘土～シルトが混ざり合って残る部分があり、遺構面の遺存状況はよくない。また、池島I期地区での調査成果においては、第

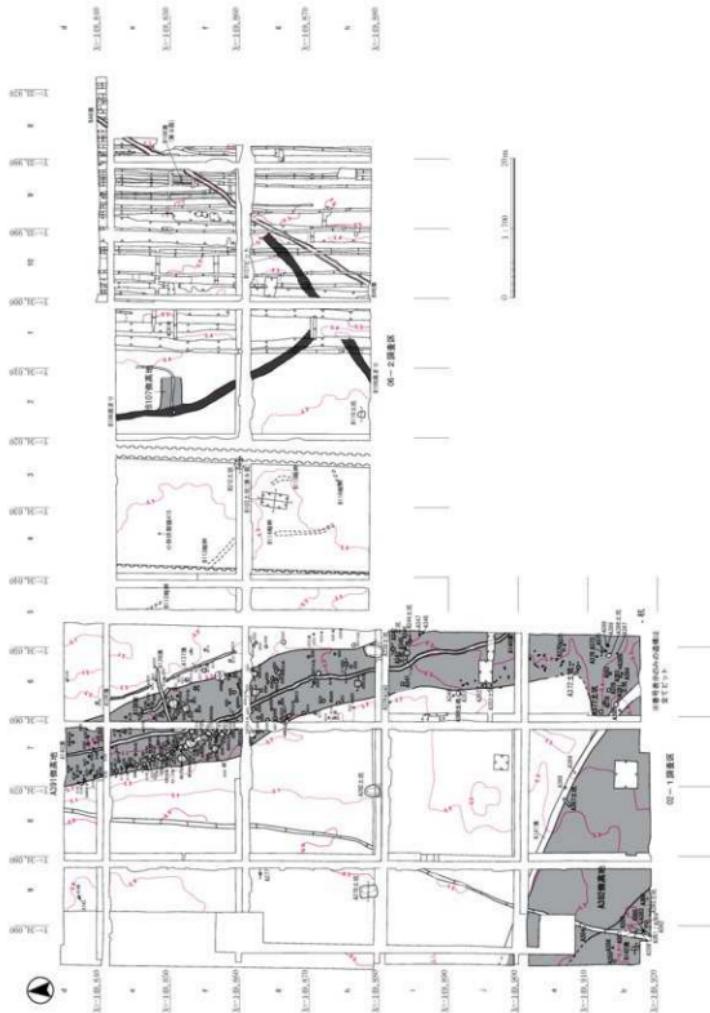


図36 第10面 平面図



写真30 第10面 A391微高地（南から）



写真31 06-2調査区 第10面東半 全景（南から）

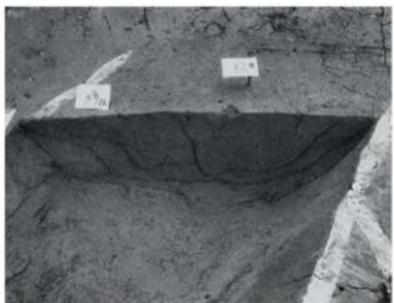


写真32 第10面 B49・B85溝（南から）



写真33 第10面 A260ピット（東から）

10層がおよそ2～3層に分層されたが、当調査区では明瞭に細分できる部分が見られないことから單一の層として認識し、古墳時代に対応する第10面として調査を行った。また、第9面の記述において説明したように、東側の06-2調査区の部分では第9層と第10層が分層出来ず、第9・10層相当層という認識をした。この部分では、第10面の検出に当って第9層を平面的に少しづつ下げてゆくことにより、遺構等の検出を行った。先述の第11b層の氾濫堆積物によって高くなった02-1調査区の中央北から南東に伸びるA391微高地は、粘性のある層がほとんど無くなり、第11b層が露出し粗粒堆積物がベースとなり、部分的な凹凸に土壤化した粘性のある粘土～シルトが堆積したような状況であった。

第10面の地形は、前段階までの状況がさらに顕在化した状況である。したがって、基本的には東が高く西が低い地形である。しかし、前述のように、A391微高地の南西には南東部で接合するA392微高地が扇状に広がりその間に南東から北西に低くなる谷状の地形がある。また、A391微高地より東は全体的に高くなっているが、やはりA391微高地の東にも谷状の若干低くなった部分がみられ、その東にB108・109高まりによって西を区切られたB107微高地が広がっている。

第10面は、微高地とそれに挟まれた若干低い谷状の部分からなる。遺構は、その微高地部分を中心として溝、土坑、ピットを検出した。また、東の微高地に挟まれた谷状の部分からは、痕跡程度ながら水田畦畔と考えられる筋状の痕跡を検出している。

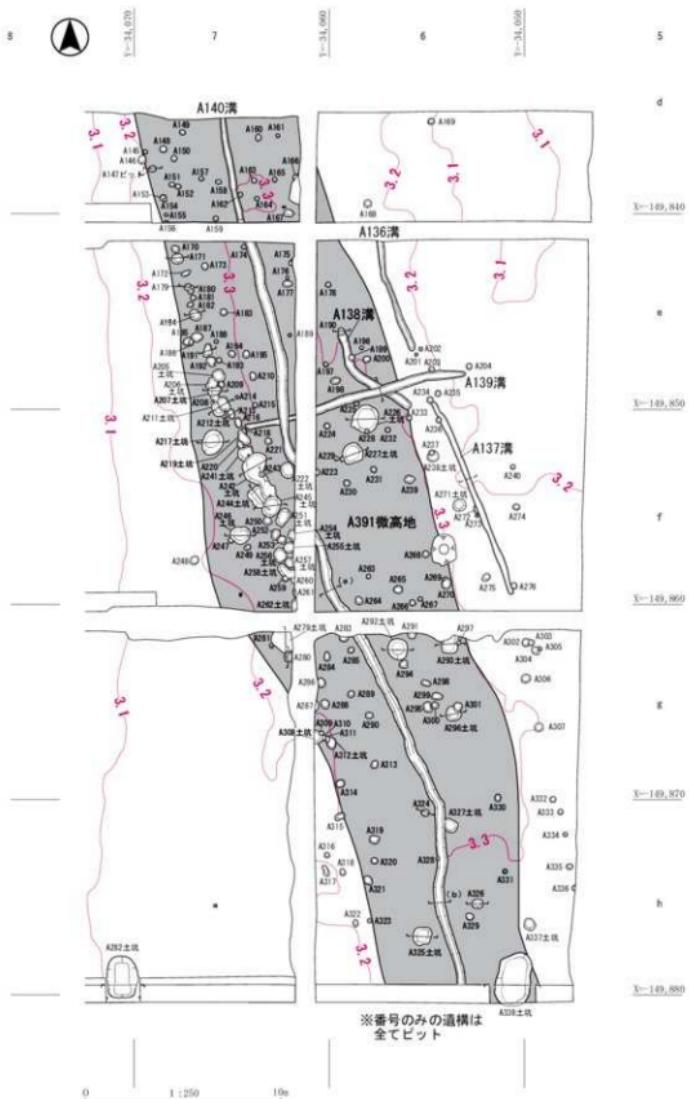


図37 第10面 A391 微高地 平面図

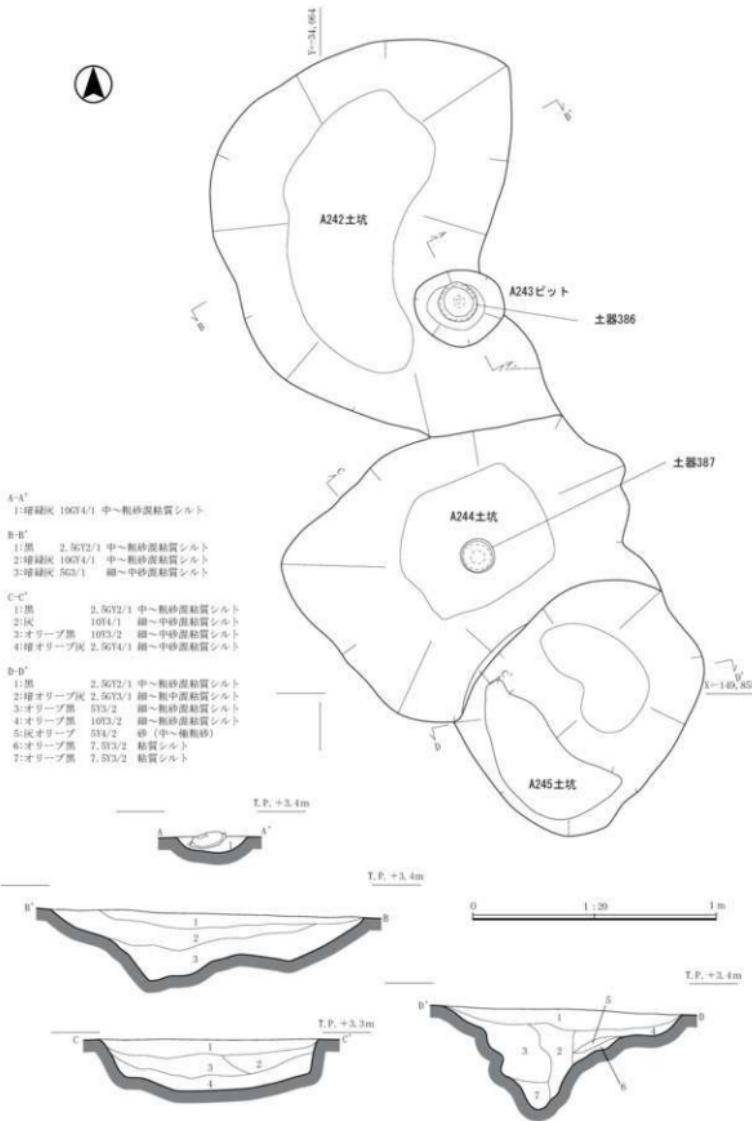


図38 第10面 遺構図(1)

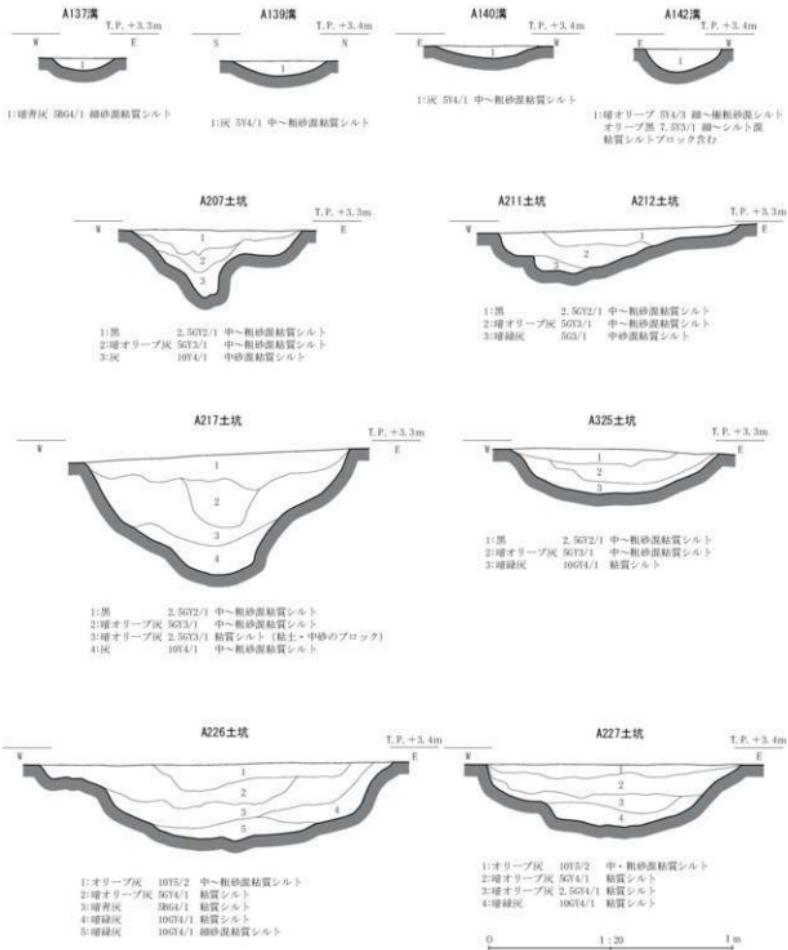


図39 第10面 遺構図(2)

溝は、まずA391微高地の中心を通るA140溝(図39)、同じくA391微高地の東縁部分を微高地に沿って延びるA136・137溝(図39)、A391微高地に直交するA139溝(図39)がある。また、A392微高地の東端を微高地の縁にそって延びるA141溝、06-2調査区東側で南西から北東に伸びるB49溝(写真32)を確認した。このB49溝は第9面の調査において確認されたものである。検出されたベース層は、先述した第9層・10層が分割できなかった部分であるため、遺構の帰属面についても疑問もある。しかし、第9面の南北方向の溝の検出段階ではほとんど検出できなかった事や、第9面の他の遺構とは方向性が大きく食い違うことなどから、第10面の遺構の可能性を考えた。

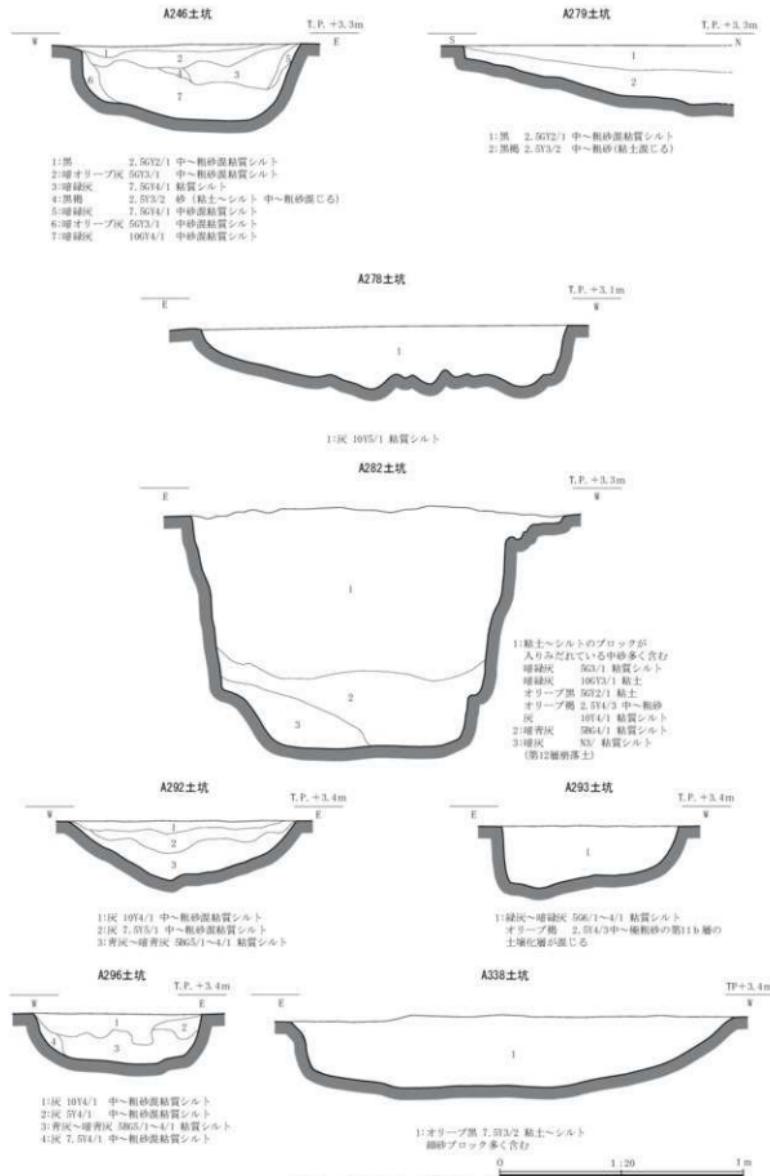


図40 第10面 遺構図(3)

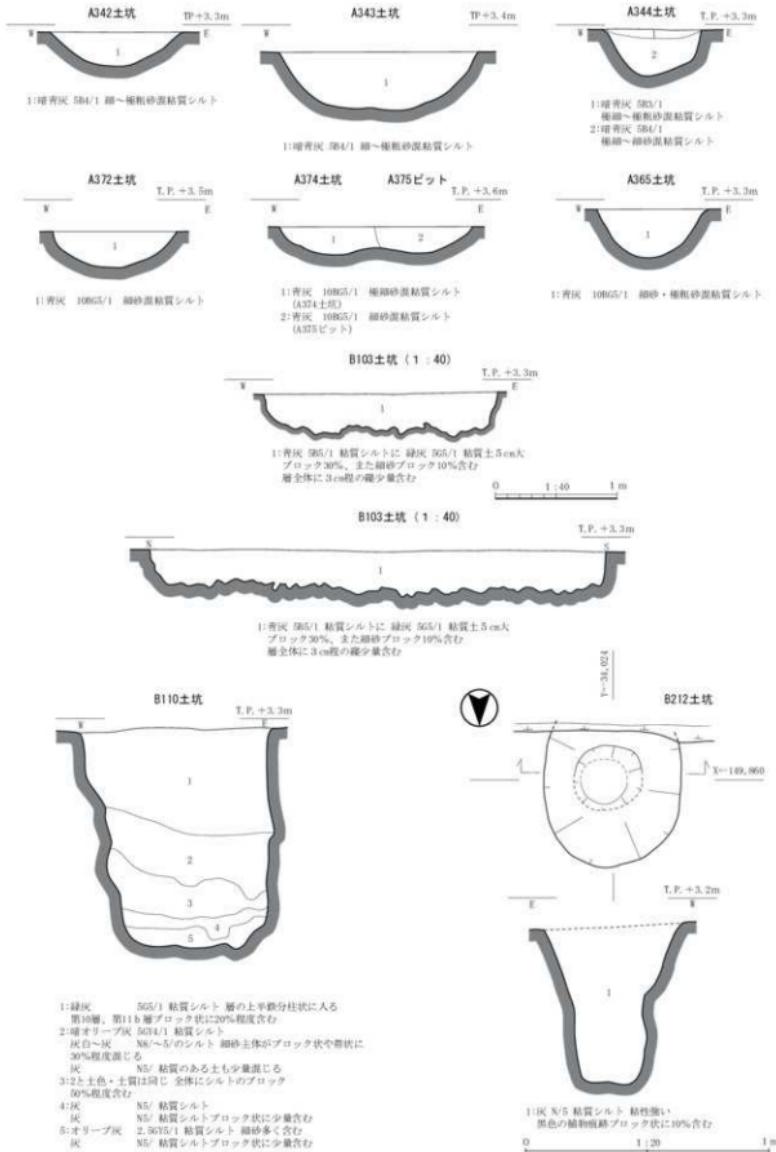


図 41 第 10 面 遺構図 (4)

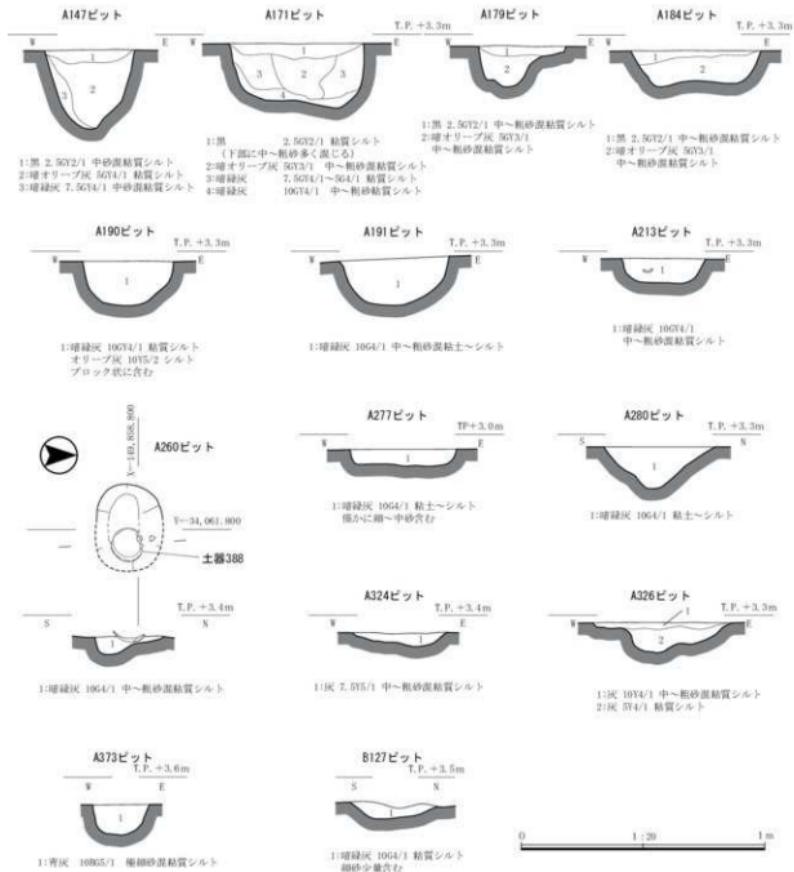


図42 第10面 遺構図(5)

第10面では、A391微高地とA392微高地の南西端部、両微高地の交わる部分から土坑・ピットなどを多数検出した。特に調査区北半のA391微高地でその傾向が顕著であり、いくつもの土坑とピットが切り合っていた(図37、写真30)。しかし、土坑・ピットは平面において建物などの構築物が復元できるような規則性のある並び方をするものは見られず⁶、微高地の形状に沿って列状に並ぶものが見られた程度である。遺構は、基本的に粗粒堆積物のベースに掘り込まれていることから、肩部が崩れるなどの状況が見られる場合が多く、形状は不整形になるもののが多かった。埋土は比較的単純で单層の遺構が多かった。ここでは、そのうち遺物が出土した遺構を取り上げる。

A243ピット、A244土坑の底から土器が出土した(図38、図版11)。A243ピットは径0.29m、深

さ 0.07 m。完形に近い須恵器杯身が出土した。口径 13.4 cm、器高 4 cm、6 世紀後半の所産と思われる（図 43－386）。A244 土坑は最大幅 1.40 m、深さ 0.21 m で両脇の土坑に比べると比較的整った形である。完形の須恵器杯蓋が出土した。口径 14.2 cm、器高 4.6 cm、6 世紀前半の所産と思われる（図 43－387）。A260 ピット（図 42、写真 33）は、土層觀察用トレーナーにかかって検出されたものであるが、直径 0.27 m、深さ 0.07 m。完形に近い須恵器杯蓋が出土した。口径 12.6 cm、器高 4.0 cm、6 世紀後半の所産と思われる（図 43－388）。

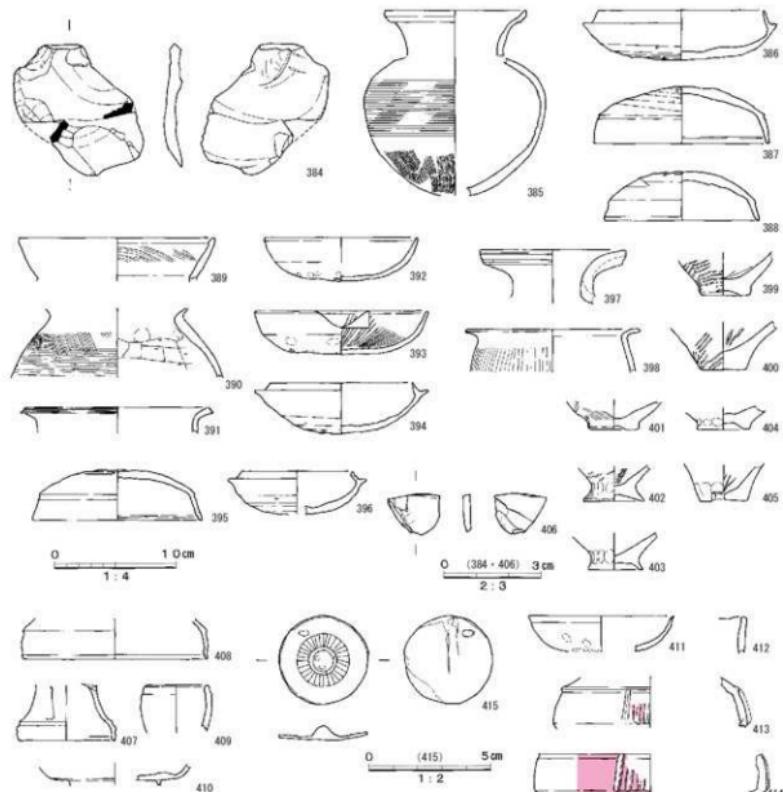
このほかのピットは、基本的には埋土も単層が多く、遺物を出土しない不整形で浅いものが多い。一部、埋土の状況から柱痕などの可能性も考えられたが、明瞭なものはほとんどなかった。

上述した微高地以外の場所で、A282 土坑のような遺構もわずかではあるが検出した。A282 土坑（図 40、図版 11）は、ほぼ方形で深さが 1.00 m 以上あり、埋土は粘土ブロックを主体としており、人為的に埋め戻された状況が想定される。当面で検出されたほかの土坑とは、規模や埋土において大きく異なる。A278 土坑（図 40）も同様に人為的に埋め戻されたような埋土の大型土坑である。B103 土坑（図 41）および B110 土坑（図 41）は形状や埋土の様相などから類似した遺構である。從来から池島 1 期地区で第 7 面を中心に確認されている大型土坑と同様なもの可能性が高く、本来は上層の遺構の可能性が高い。

当調査区の第 10 面では、後述するように須恵器を出土する遺構が 02－1 調査区の南東～北西に伸びる微高地を中心に検出された。遺構の配列などから明瞭な建物などの痕跡は確認できなかったが、今後の調査において南東に伸びる微高地の延長線上に集落域が検出される可能性もある（廣瀬）。

第 10 面出土遺物（図 43）

【02－1 調査区】第 10 面 A137 溝から土師器片 3 点、弥生土器片 1 点が出土した。第 10 面 A139 溝から土師器片 2 点が出土した。第 10 面 A140 溝（図 43－384）から須恵器片 1 点、土師器？片 1 点、サヌカイト片 1 点（384）が出土した。第 10 面 A179 ピットから土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A190 ピットから土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A191 ピットから庄内式甕口縁片 1 点が出土した。第 10 面 A205 土坑から土師器片 1 点、弥生土器高杯脚？片 1 点が出土した。第 10 面 A207 土坑から須恵器杯蓋口縁片 1 点が出土した。6 世紀後半から 7 世紀にかけてのものである。第 10 面 A212 土坑（図 43－385）から須恵器壺 1 点（385）が出土した。A213 ピットから出土した破片と接合した。385 は外面格子状タタキにカキ目を施し、内外面に自然釉が付着している。6 世紀前半かと思うものである。第 10 面 A241 土坑から土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A242 土坑から土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A243 ピット（図 43－386、図版 33）から須恵器片 1 点（386）が出土した。386 は 6 世紀第 2 四半期から中頃のものである。第 10 面 A244 土坑（図 43－387、図版 34）から須恵器杯蓋 1 点（387）が出土した。387 は口縁内部に段の名残があり、6 世紀第 2 四半期のものである。第 10 面 A246 土坑から土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A247 ピットから土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A260 ピット（図 43－388、図版 34）から須恵器杯蓋 1 点（388）、土師器片 2 点が出土した。388 は 6 世紀第 4 四半期のものである。第 10 面 A277 ピットから土師器片 2 点が出土した。第 10 面 A279 土坑（図 43－389～391）から布留式甕 2 点（389・390）、弥生土器甕 1 点（391）、土師器片が少量出土した。389・390 は布留 II～III 期のものである。391 は口縁端部に凹線文 2 条を施され、弥生 IV～4 様式かと思うものである。混じりと考える。第 10 面 A280 ピットから土師器片 1 点が出土した。第 10 面 A282 土坑から 13 世紀かと思う土師器皿口縁片 1 点、12 世紀かと思う瓦器椀口縁片 1 点等数片が出土



384: A140 漢、385: A212 土坑、386: A243 ピット、387: A244 土坑、388: A260 ピット、389～391: A279 土坑、392: A374 土坑、393: A390 ピット、394～406: (02-1) 第10層、407～415: (06-2) 第10層

図43 第10面 出土遺物

した。第10面A294 ピットから7世紀前半と思うヘラ切り未調整の須恵器杯片1点が出土した。第10面A295 ピットから6世紀後半から7世紀前半の須恵器杯蓋片1点が出土した。第10面A324 ピットから須恵器杯蓋口縁片1点が出土した。6世紀後半から7世紀にかけてのものである。第10面A326 ピットから土師器片2点が出土した。第10面A338 土坑から13世紀くらいの瓦器片1点、弥生土器片2点が出土した。第10面A341 ピットから土師器細片2点が出土した。第10面A343 土坑から黒色土器A類片1点、土師器片1点が出土した。第10面A373 ピットから土師器片1点が出土した。第10面A374 土坑(図43-392、図版33)から土師器片1点(392)が出土した。8世紀初めかと思うものである。第10面A375 ピットから8世紀かと思う土師器杯口縁片1点が出土した。第10面A390 ピット(図43-393、図版33)から土師器片1点(393)が出土した。口縁部の欠けは故意かもしれない。内面に放射状暗文を施している。8世紀初めかと思うものである。

第10層(図43-394～406、図版34)から須恵器、土師器、弥生土器、サヌカイト片等が多く

出土した。弥生土器が多く、甕口縁が多い。土師器の中で布留式甕口縁も数点出土している。395は須恵器杯蓋、394・396は須恵器杯、397～405は弥生土器で、397が壺、398が甕、399・400が甕底部、401～403は鉢底部、405是有孔底部、406はサヌカイトチップである。394は第11b層掘削時に粘土の塊として出土し、完形である事から第10面の土坑、ピットにもともと入っていたのかかもしれない。6世紀第4四半期から7世紀初めのものである。395は6世紀第2四半期で、外面に自然釉が付着している。396は7世紀前半、弥生土器は398が弥生IV-2様式である以外、弥生V様式である。397は口縁端部に擬似凹線文2条を施されている。

【06-2 調査区】 第10層(図43-407～415、巻頭図版2、図版33)から、須恵器、土師器、弥生土器、製塙土器、鏡等が出土した。407は須恵器高杯脚、408は須恵器杯蓋、409は須恵器堤瓶?、410は須恵器杯B、411は土師器杯、412は製塙土器、413・414は弥生土器台付鉢、415は小形仿製鏡である。407が三方スカシ孔を持ち、5世紀中頃から第4四半期かと思うもので、408は6世紀第2四半期、409は6世紀第4四半期以降のものである。410～412は8世紀かと思うものである。412は二次焼成で赤色化している。413・414は吉備系かと思われ、外面に棒状浮文と一部赤彩も施されている。弥生中期末から後期のものである。414が第11面出土なので第11層に掲載してもよいものかもしれない。415は径3.59×3.60cm、高さ0.54cm、重さ9.1gを測る重圓鏡である。平縁で幅0.5cmの櫛歯文帯と1円圏をもつ。鉢は鉢孔がない。平縁に0.25×0.4cmの不定形の孔がある。この小孔は懸垂を意図したものではないかと湯本・飯田氏は類推している(註1)。又、湯本・飯田氏は、池島I期地区西端部の庄内式後半から布留式前半の遺構が集中する集落域で方格四乳鏡、画文帶同向式神獸鏡の破片が出土し、東南端で布留式後半と考えられる167土坑から内行花文鏡の破片が出土していることから、II期地区で同時期の集落がなければI期地区の集落との関係の中でこの小形仿製鏡も存在すると考えている。

池島I期地区では庄内式段階からTK209型式(II型式5段階、6世紀末から7世紀初)の遺構が微高地から検出され、第I期(庄内式)、第II期(布留I・II期)、第III期(布留III～IV期)、第IV期(須恵器出現以降～TK209式段階以前)に分けられた。池島I期地区では第I期に属する遺構が多く、何箇所かにまとまっていた。今回報告した遺構はA279土坑が布留式期と思う以外、第IV期のものが目立つ。池島I期地区の第IV期の遺構は他の第I～III期に比べ散在していて少なかった。(陣内)

2. 弥生時代～縄文時代面の調査

1) 第 11 面・第 11 面ベース (第 11 b 面)

第 11 面 (図 44、図版 13・14)

遺構面の状況と検出遺構

第 11 面は、第 10 層の土壤層を除去した面である。第 11 層は、灰色で粘土～シルトの土質で粘性が強く、しまりがよい土壤である。土壤化していることや、下層の第 11 b 層の状況などから、池島・福万寺遺跡 I 期地区の第 11 層に相当する土壤層の可能性が考えられる層である。しかし、第 10 b 層によって覆われておらず、層の対応は難しい。

地形は、全体に南東から北西方向に傾斜し、02-1 調査区の北西で最も低くなる。また、第 10 面の状況と同様に第 11 b 層中の氾濫堆積物によってつくられた南北方向の微高地が 2ヶ所あり、その部分は第 11 b 層が厚く堆積して盛り上がっていた。その部分は上面の削平が大きく、第 11 層の残りが悪くなってしまい、部分的に第 11 b 層が露出していた。そのため、微高地縁辺での第 11 層の状況は不明な部分が多い。遺構は、高まり、溝、堤、畦畔、土坑、ピットを検出した。以下、第 11 面検出地形、遺構について詳述する。

微高地とその周辺 (図版 13)

A440 微高地は、南北約 60 m、東西約 10 m の範囲で検出され、細長の長方形を呈する。南南東から北北西に走行し、更に北側の調査区外にのびている。微高地の高さは均一で、水田域との比高差は 0.1 ~ 0.4 m である。微高地を形成する土は、細砂～粗砂を主体とする第 11 b 層の氾濫堆積物である。微高地上は上面の削平により第 11 層が遺存しておらず、第 11 面段階での状況については不明である。

微高地南西側には、微高地の西に沿うように、長さ 18.2 m、幅 0.7 ~ 1 m、高さ 0.03 m の A442 堤があり、その東側に接して、長さ 14 m、幅 0.7 ~ 0.9 m、深さ 0.05 ~ 0.14 m の A438 溝が検出されている。A442 堤を形成する土は第 11 層と同様で、ブロック土などではなく確実に盛土であるとの判断はできなかった。堤、溝とも残りは悪く、途中で途切れているが、本来は A440 微高地に沿ってさらに北側に伸びていたものと考えられる。第 11 b 面でもほぼ同じ場所に溝が検出されており、第 11 b 面であわせて詳述する。

B494 微高地は、南北約 40 m、東西約 40 m の範囲で検出され、調査区東側全体が微高地になっており、更に南北の調査区外にのびている。微高地の高さはほぼ均一で、水田域との比高差は 0.2 ~ 0.3 m である。微高地を形成する土は、Y = -33.980 から Y = -33.990 付近は、細砂～粗砂を主体とする第 11 b 層の氾濫堆積物が主体であり、その部分には第 11 層が遺存していない。それ以外の部分でも第 11 b 層が高くなっているため、第 11 層の残りが悪い。微高地に沿うような溝は検出されなかったが、B494 微高地とその周辺は上面の削平によって、第 11 面の遺構が削られてしまった可能性も考えられる。また、標高のコンターラインも上面の遺構などによって途切れており、そのまま図示している。主に第 11 b 層で形成された 2つの微高地は、第 12 面の平面図に記載した A509 流路、B197 流路にそれぞれ対応しており、流路の堆積によって形成された自然堤防であることがわかる。

A441 微高地は、南北約 15 m、東西約 40 m の範囲で検出された。東南東から西北西に走行し、更に調査区外にのびている。微高地の高さはほぼ均一で、水田域との比高差は 0.1 ~ 0.4 m である。先述の 2つの微高地とは異なり、第 11 層が遺存しており、微高地を形成する土も氾濫堆積物を主体としたも

のではない。微高地が形成された要因としては、第 12 面の A532 微高地の高さが踏襲されたものと考えられる。

微高地北側に沿って、長さ約 30 m、幅約 0.7 ~ 1.1 m、水田面からの高さ 0.1 m、微高地からの高さ 0.03 ~ 0.1 m の A439 高まりが検出された。高まりを形成する土は第 11 層と同様でブロック土などではなく、確実に盛土であるとの判断はできなかった。

微高地南西側で検出された溝は、A436 溝が検出長 4.6 m、幅 1 m 前後、深さ 0.1 m 前後で、A437 溝が検出長 4.7 m、幅 0.5 m 前後、深さ 0.1 m 前後である。残りが悪く、途切れた状態で検出された。第 11 b 面でも同じ場所に溝が検出されており、第 11 b 面であわせて詳述する。

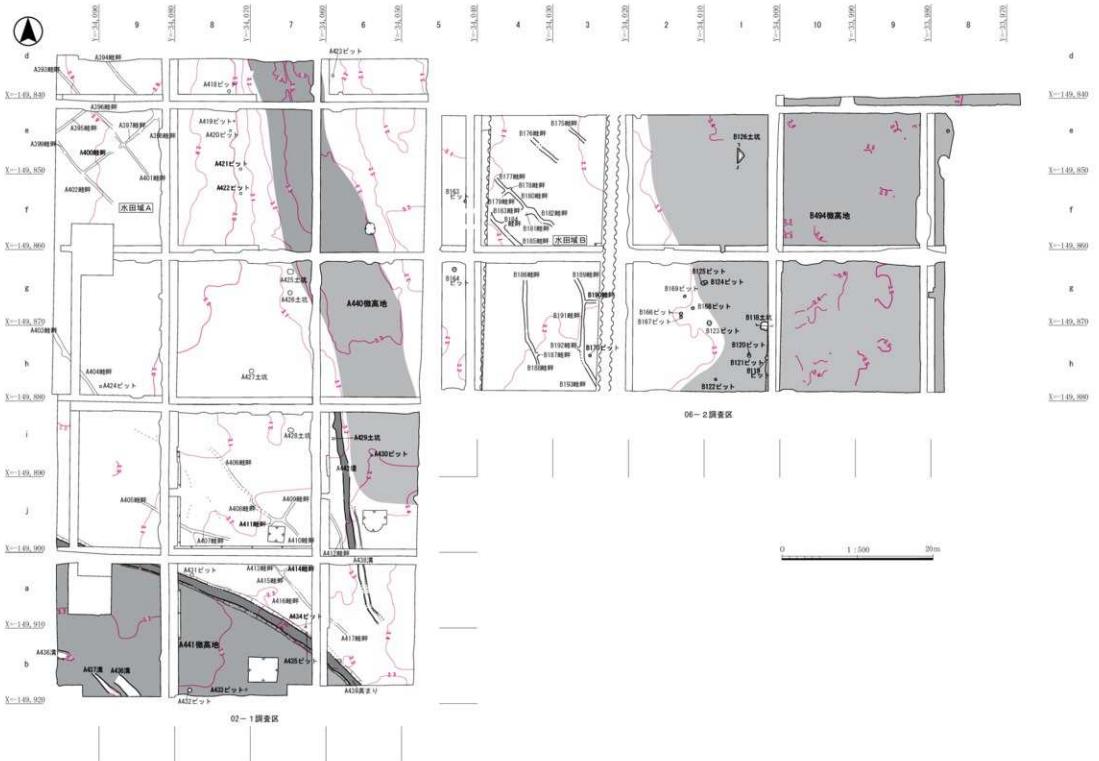
水田と畦畔（図版 13・14）

畦畔は 44 条が検出されたが、全体に残りが悪く、途切れで検出したものが大半を占める。高さも 0.01 ~ 0.05 m ほどであり、正確な水田区画がわかるものは水田域 A の北西部のみで、約 25 m の正方形である。水田域 A の畦畔は基本的に南東 - 北西方向に幹線小畦畔（江浦 1994）を造り、その間をそれに直交する形の支線小畦畔でないでいる。幹線小畦畔は等高線に直交し、支線小畦畔は等高線に平行しており、地形を利用しながら水田を形成したことがわかる。水田域 A は、西接の 95 - 2 調査区の水田域 J 地区（廣瀬編 2007）と同様のものであると考えられる。

水田域 B は、水田域 A に比べて全体に残りが悪く、畦畔は痕跡的に検出した。そのため、掘削は行っていない。水田構造は水田域 A と同様で、幹線・支線小畦畔によって構成されている。また、水田域 A と B を分ける A440 微高地は、池島 I 期地区の 4 微高地と考えられ、水田域 B は池島 I 期地区の水田域 I 地区に対応する可能性がある。

その他の遺構（図 45）

微高地の縁辺を中心にして土坑を 7 基、ピットを 27 基検出したが、先述のように微高地縁辺には第 11 層が残っていない部分が多く、厳密な帰属面については不明である。B118 土坑は、東側を側溝で削ってはいるが、南北長 1.2 m、東西復元幅約 1 m の長方形を呈し、深さ 0.3 m である。埋土と平面形状の特徴から、第 9 面の方形土坑であると考えられる。ピットは径約 0.3 ~ 0.5 m の円形または梢円形を呈し、深さは 0.1 ~ 0.4 m ほどである。平面的にまとまって検出されず、柱痕も確認できなかつたため、建物などを復元することはできなかつた。（乾）



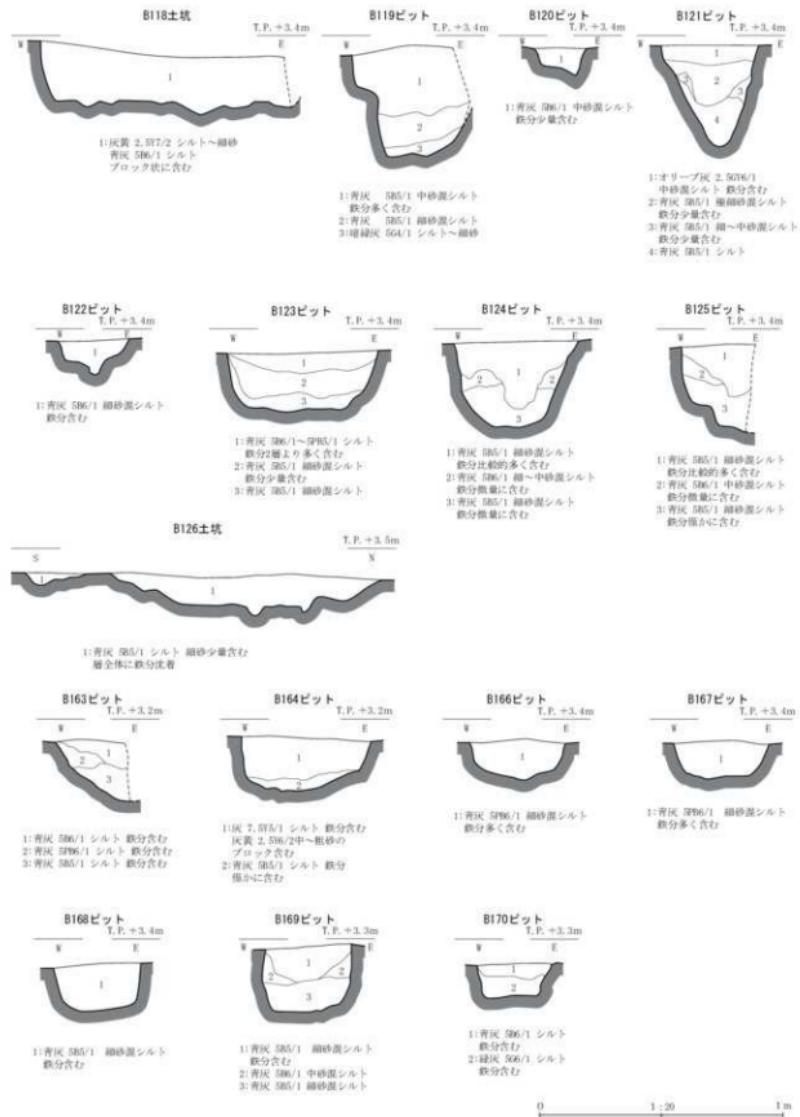


図 45 第 11 面 遺構図

第11面ベース（第11b面）（図46、図版14）

遺構面の状況と検出遺構

第11b面は、先述の第11層を除去した第11b層の氾濫堆積物層の上面である。第11b層は、堆積の状況や周辺の成果から考えて、弥生時代後期以前の氾濫堆積物層である。ただ、第11b層は1回による氾濫で堆積したものではなく、安定と氾濫を繰り返しながら堆積したものと考えられる。第11b層は大きく分けて、最も下部の極細砂を主体とするシルト、その上の中砂～極粗砂、最上部の極細砂を主体とするシルトの3つに分けられる。この内、中砂～極粗砂の部分が第11面の微高地に対応する自然堤防を形成するものである。

地形は、第11面と大きな変化はなく、全体に南東から北西方向へ低くなっている。微高地も同様に検出され、ベース面から盛り上がっていることが確認された。

遺構は溝、土坑、ピットを確認した。以下、第11b面検出地形、遺構について詳述する。

微高地と溝（図47・48）

A502溝はA695微高地の西に沿うように検出され、長さ30.4m、幅0.5m前後、深さ0.2mである。当溝は、第11面のA438溝と位置、方向が一致している。A504溝は第11面のA439高まりの直下から検出され、長さ29.5m、幅2m前後、深さ0.1m前後である。

次にA694微高地南西で検出された溝群について述べる。A505溝は長さ14.4m、幅0.5m前後、深さ0.3m前後である。断面はU字形を呈し、埋土下半部に砂を多く含む。A506溝は長さ9.2m、幅1m前後、深さ0.4m前後である。断面は逆三角形を呈し、埋土はレンズ状に堆積しており、最上部の1層は第11層に対応している。A507溝は長さ5m、幅0.5m前後、深さ0.3m前後である。断面はU字形を呈し、埋土下半部にブロック土を含む。A508溝は長さ5m、幅1m前後、深さ0.1m前後である。これらの溝群は南東から北西方向に走行し、第11面のA436・A437溝と、位置、方向が一致している。よって、第11層中に掘削されたと考えられ、趙氏の示す下面検出遺構D（趙1995）に対応する。また、第11面でも検出していることから考えると、第11面段階でも溝が継続して使われていたか、第11面段階では溝が機能しておらず、溝痕跡の凹みのみを検出したかの2つが考えられる。しかし、上面によって溝自体が削平されているため、どちらの場合かが判別できなかった。溝の機能としては、微高地に形成されていること、水田域に近いことから、水田への給水を目的とした溝であったと考えられる。

調査区中央で検出されたB173溝は、長さ約40m、幅5m前後、深さ0.4m前後である。地形に沿って南東から北西方向にのび、断面形は全体になだらかな傾斜を持っているため、自然地形の落ち込みである可能性が高い。

調査区東側では溝を4条検出した。B128・B141溝は、その形態、位置関係から、第9面の溝群の掘り残しと考えられる。B129溝は、長さ15m、幅0.5m前後、深さ0.1m前後である。南東から北西に向かってのび、微高地でも最も高い部分に形成されている。B148溝は、長さ12.2m、幅0.7m前後、深さ0.05m前後で、東西にのびる。

水田について

調査区北西で第11面の水田域Aを検出したが、第11b面でも同じ場所に畦畔の痕跡が検出され、水田域Aとした。部分的にしか検出されず、長さは5～10mである。水田域Aとは畦畔の方向が同一であるが、検出場所が若干異なっており、特に第11面のA393畦畔とA394畦畔のあいだで畦畔痕跡が検出されたため、別の水田域が形成されていた可能性もある。

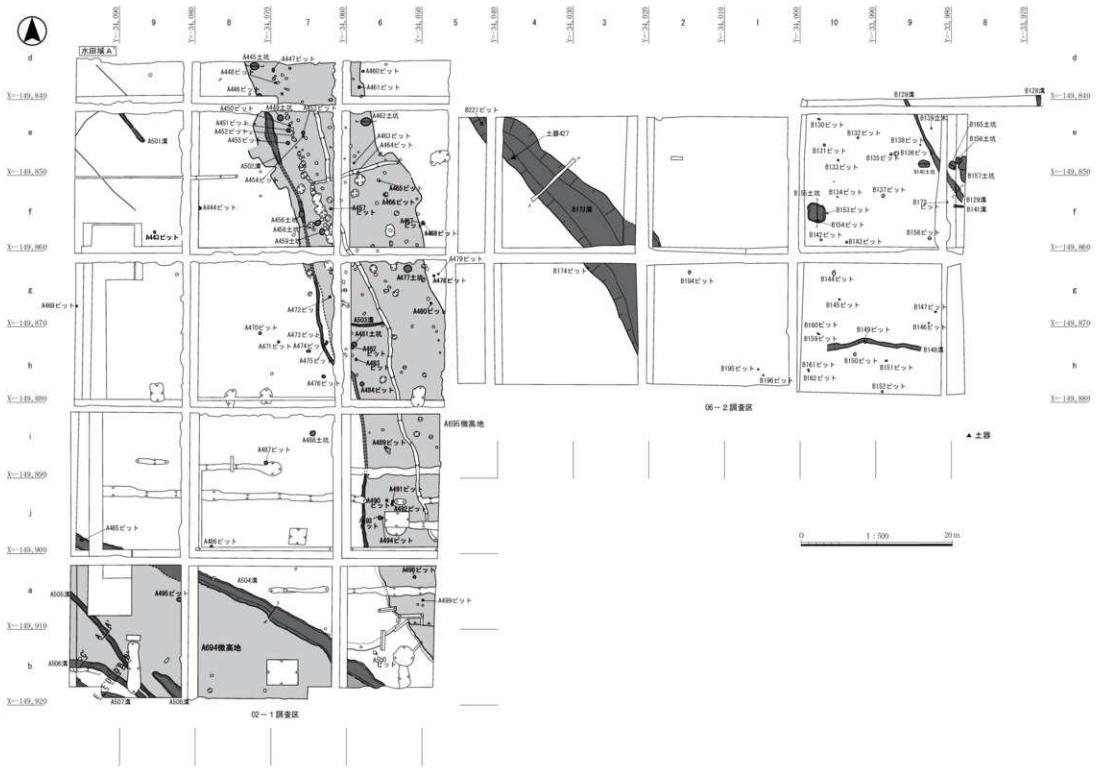


図 46 第 11 b面 平面図

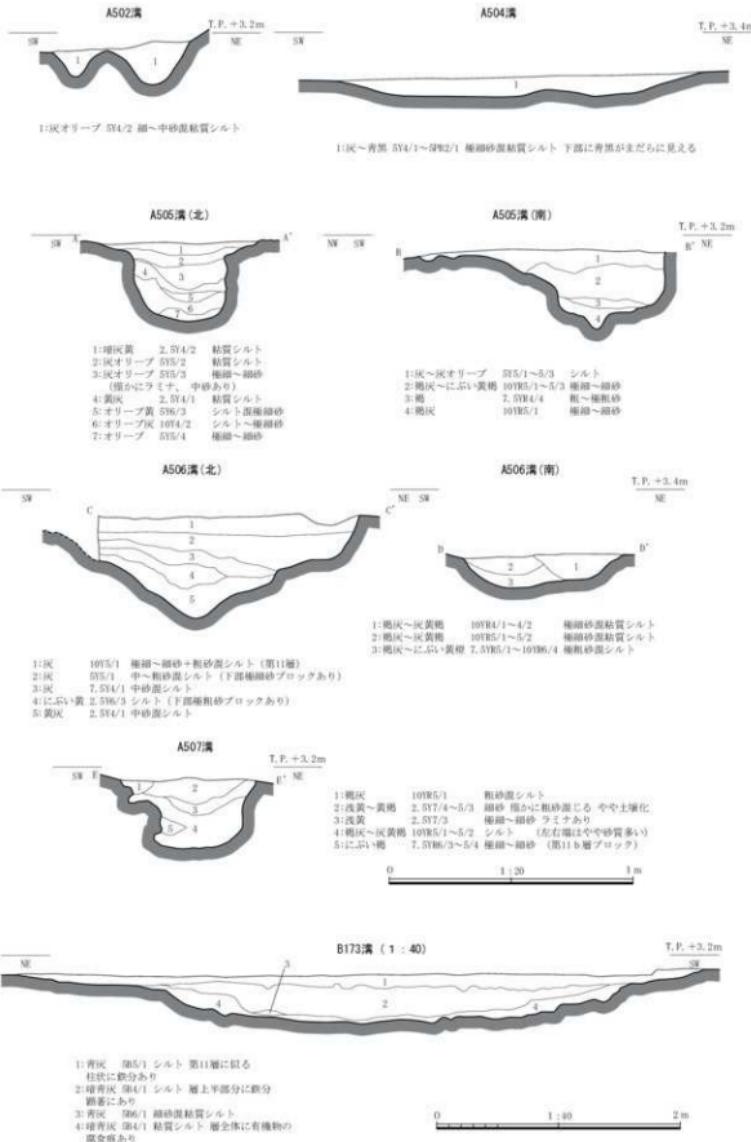


図47 第11b面 遺構図(1)

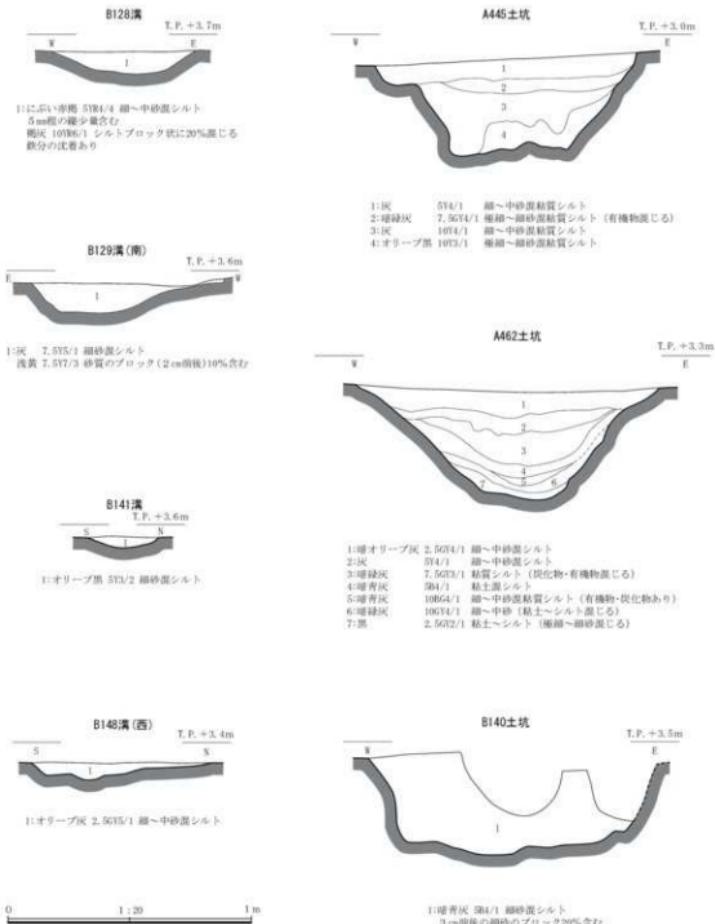


図 48 第 11 b 面 遺構図 (2)

その他の遺構 (図 48 ~ 51)

調査区全体にわたって土坑、ピットを検出したが、規則性はなく、ピットには踏み込みや植物の生痕と考えられるものも含まれる。また、上面遺構の掘り残しも当面で検出していると考えられ、遺構の帰属面には注意が必要である。

B140 土坑 (図 48) は第 9 面の溝によって削平されているが、検出長 1.19 m、幅 1 m 前後の長方形を呈し、埋土にブロック土が多く含まれる。**B157 土坑** (図 49) は東側が調査区外ではあるが、南北 3.5 m、東西検出長 1 m の方形、または長方形を呈し、埋土にブロック土が多く含まれる。そういう特徴

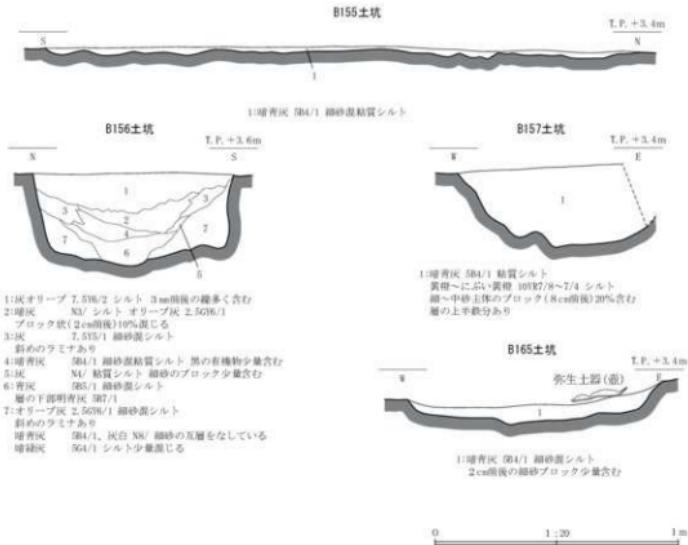


図 49 第 11 b 面 遺構図 (3)

から、これらの土坑は第 9 面の方形土坑であると考えられる。

A445 土坑(図 48)は長軸 1.2 m、短軸 0.9 m、深さ 0.4 m 前後で、楕円形を呈し、断面は逆台形である。A462 土坑(図 48)は長軸 1.4 m、短軸 1 m、深さ 0.4 m 前後で、楕円形を呈し、断面は楕円形である。B156 土坑(図 49)は長軸 0.82 m、短軸 0.8 m、深さ 0.38 m で、楕円形を呈し、断面は逆台形である。埋土に植物とみられる有機物や炭を含んでおり、A462 土坑と共に通しているが、性格は明らかではない。B165 土坑(図 49)は長軸 1.05 m、短軸 1 m、深さ 0.18 m で、楕円形を呈し、断面は皿形である。当初は土坑に気付かず掘削したため、弥生土器片を浮いた状態で検出した。この土器は本来は埋土中に存在していたと考えられる。土坑の性格は不明である。

ピットは深さが 0.1 m に満たないものが大半で、深さが 0.2 m 前後のピットのみ述べることとする。B133 ピット(図 50)は径 0.2 m、深さ 0.3 m、B134 ピット(図 50)は径 0.24 m、深さ 0.17 m、B142 ピット(図 50)は径 0.33 m、深さ 0.4 m、B143 ピット(図 50)は径 0.28 m、深さ 0.31 m、B144 ピット(図 50)は径 0.44 m、深さ 0.31 m、B150 ピット(図 51)は径 0.37 m、深さ 0.23 m、B161 ピット(図 51)は径 0.23 m、深さ 0.18 m、B172 ピット(図 51)は径 0.56 m、深さ 0.71 m である。これらのピットは微高地周辺に集中しているが、柱痕は検出されず、規則性も見出せなかった。埋土は暗青灰～青灰のシルト～粘質シルトを主体としている。(乾)

第 11 面出土遺物(図 52)

【02-1 調査区】

第 11 層から庄内期に入るかもしれない弥生？土器裏口縁片 1 点、弥生 V～VI 様式の裏底部片 1 点等

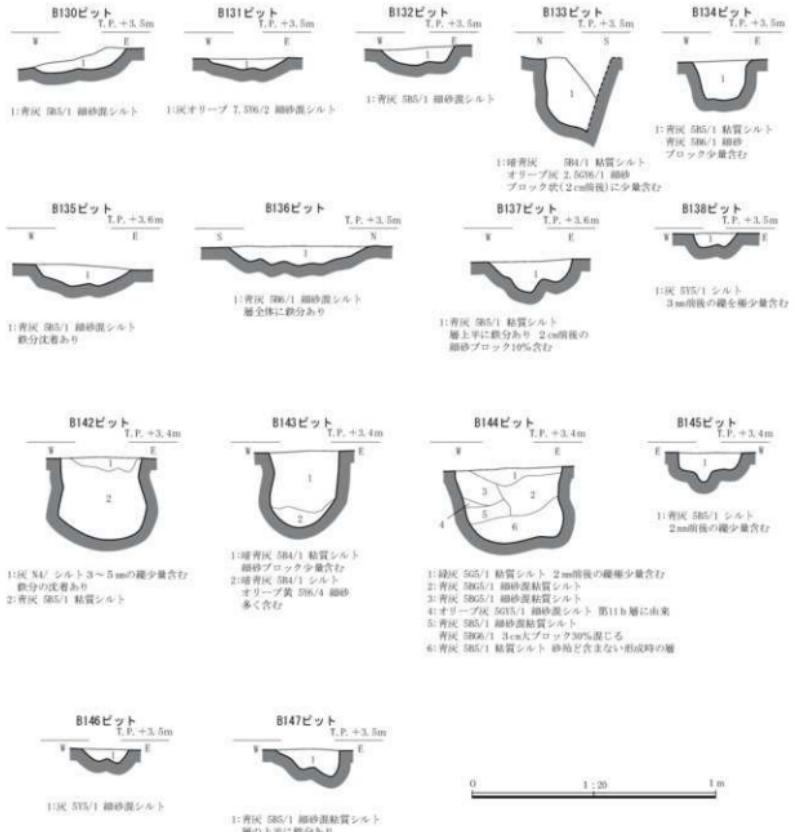


図 50 第 11 b 面 遺構図 (4)

弥生土器片数点と土器師器片数点が出土した。

第 11 b 面 A445 土坑から弥生中期かと思う弥生土器表片 1 点が出土した。

第 11 b 面 A506 溝から弥生後期と思う弥生土器表片 1 点他弥生土器片が極少量出土した。

第 11 b 層 (図 52 - 416 ~ 420、図版 34・41) から弥生土器、布留式土器片 1 点、サヌカイト片 1 点 (418)、木製品等が少量出土した。416・417 は弥生土器表、419・420 は不明木製品である。416・417 は弥生IV 様式である。419 はブナ科材で径 1.5 cm の孔が 1 個あいている。420 はケヤキ材で側面が弧状に上に突出している。どのような形になるのか不明である。

[06-2 調査区]

第 11 面 B119 ピットから弥生土器片 1 点が出土した。

第 11 面 B125 ピットから須恵器片 1 点が出土した。

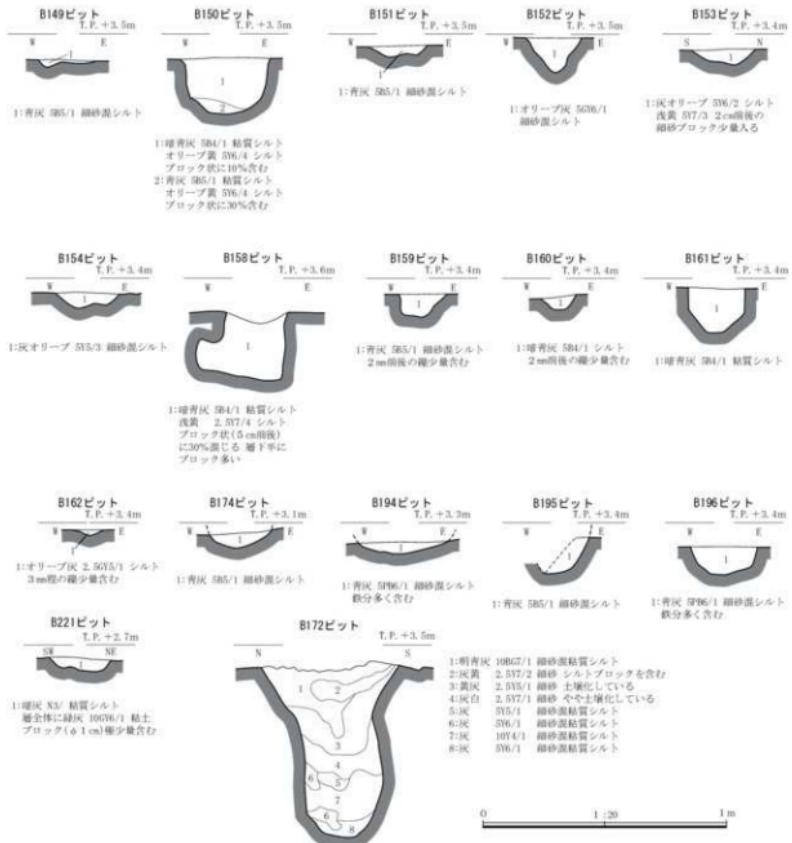


図 51 第 11 b面 遺構図(5)

第 11 面 B163 ピットから弥生土器片 1 点が出土した。

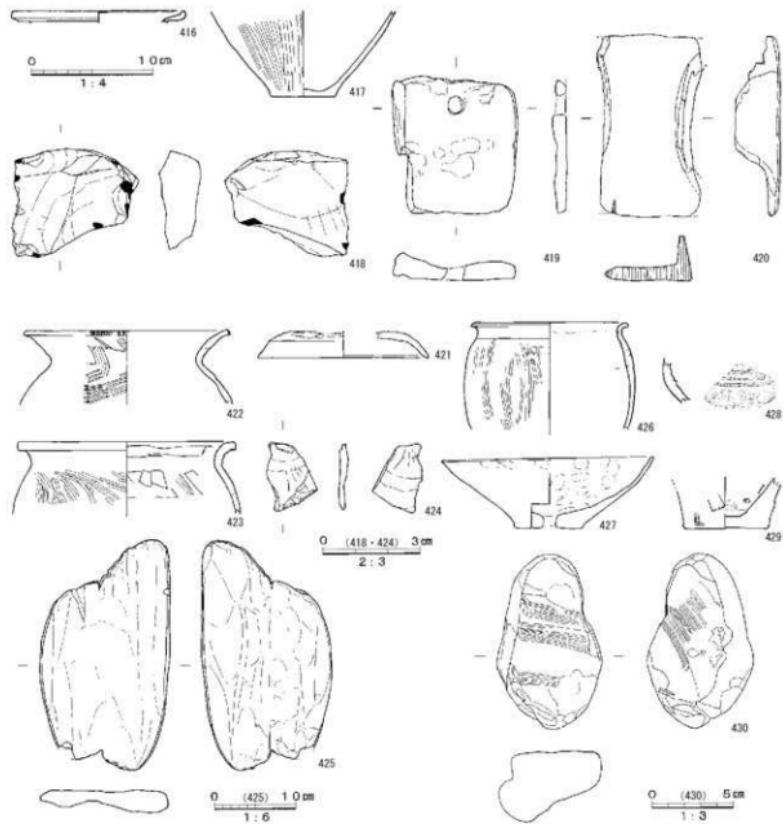
第 11 面(図 52 - 421)から須恵器杯蓋 1 点が出土した。外面底部を持ちでヘラケズリしているが、形から考えると 6 世紀末から 7 世紀初めかと思うものである。陶邑産ではないのかもしれない。10 面の時期から混入と考えられる。

第 11 層(図 52 - 422)から須恵器、土師器、弥生土器が少量出土した。422 は弥生土器甕で、弥生 V 様式のものである。

第 11 b 面 B140 土坑から弥生土器片 1 点が出土した。

第 11 b 面 B165 土坑から薄手で内外面ハケメ調整の弥生土器壺脣部片 1 点が出土した。弥生後期かと思う。

第 11 b 面 B173 落ち込みから弥生後期かと思う弥生土器甕底部 1 点が出土した。



416～420：(02-1) 第11 b用、421：(06-2) 第11面、422：(06-2) 第11面、423～425：8197流路、426～430：(06-2) 第11 b用

图 52 第11面 出土遗物

第 11 b 面 B197 流路 (図 52 - 423 ~ 425、図版 34) から弥生土器が少量、サヌカイト片 1 点 (424)、不明木製品 1 点 (425) が出土した。

423 は甕で、外面ヘラミガキ調整で口縁部端部にススが多く付着している。弥生 V - 0 様式である。425 はヒノキ材である。

第 11 b 層 (図 52 - 426 ~ 430) から弥生土器、石製品が少量出土した。

426 は甕、427 は有孔鉢、428 は甕頸片、429 は甕底部、430 は砥石? である。426 は外面ヘラミガキ調整で、弥生 IV - 4 様式かと思うものである。427 は弥生 V から VI 様式、428 は段上沈線文 2 条の文様が施され弥生 I - 2 ~ 3 様式、429 は弥生 I 様式末から II 様式のものである。430 は 2 面に擦痕があり、砥石として使ったのかもしれない。

池島 I 期地区の第 11 面の遺構は弥生 V ~ VI 様式の遺物を出土し、第 11 b 層は弥生 IV 様式の遺物が主に出土している。今回報告する遺物は少ないが、池島 I 期地区の様相に顔面をきたすものはない。(陣内)

2) 第12面・第12面ベース(第12 b面)

第12面(図53、図版15~17)

遺構面の状況と検出遺構

第12面は、第11 b層の氾濫堆積物を除去して検出した遺構面である。調査区全域を第11 b層が覆っており、極細砂~細砂を含む粘土~シルトの第12層上面が良好な状態で遺存していた。第12層は從来、当遺跡で「第2黒色粘土(泥)層」と呼称されている土壤に対応すると考えられる。

第12面の地形は、全体に南から北に向かって標高を減じており、調査区南西のA532微高地南端がT.P.2.9 mと最も高い。微高地は3ヶ所検出され、いずれも南東からやや北西方向に向かってのびている。低地部分は微高地に挟まれているため同方向にのび、3本の流路も同様である。これらの地形は第14層を覆う氾濫堆積物である第13 b層と、第13層を覆う氾濫堆積物である第12 b層によって形成されており、第13面の地形と比べると、地形の逆転現象が見られることが以前から指摘されている(廣瀬編2007)。

また、第12層は部分的に細分することができたが、範囲が限られているため、第12面では記述せず、第12 b面でまとめて記述することとした。

遺構面からは高まり、流路、溝、畦畔、水口などを検出した。以下、第12面検出地形、遺構について詳述する。

流路について(図54、写真34・35、図版15~17)

3つの流路の帰属面については、第11 b層中と考えられ、本来は第11 b面の記述とすべきであるが、自然堆積の連続であって、平面的な調査を行っておらず、第12面で記述することとした。

B197流路は、長さ約35 m、幅約15 m、深さ約1 m前後で、断面逆台形を呈し、更に南北にのびている。やや南南東から北北西に走向し、地形の状況から南から北に向かって流れていると考えられる。流路中央部では、第12層を削平しているが、西側の部分では第12層の削平が少なく、B210畦畔を確認することができた。

図54はB197流路の縮小断面図である。最も下部の線が第12層(5層)、上部の線が第11層(1層)で、その間に第11 b層(2・3・4層)である。先述したように第11 b層は大きく3層に分けられ、最も下部の4層は第12層の直上を覆う極細砂を主体とするシルト、3層は4層の上位に堆積し、4・5層を切り込む。3層はその氾濫堆積作用によって、部分的にT.P.3 mまで堆積が進み、自然堤防を形成する。2層はそれを埋める湿地状の堆積である。

流路部分で水田畦畔が確認されたことは、流路によって削平されていた部分が第12面段階で水田だったことを示唆しており、平面的に見ても微高地、高まりと流路部分は主軸が同一である。よって、低地部分である水田に氾濫堆積物が押し寄せ、水田部分を削平しながら埋没した可能性が考えられる。

A509流路は、長さ約80 m、幅約15 m、深さ約2 m前後で、断面逆台形を呈し、更に南北にのびている。南南東から北北西に走向し、地形の状況から南から北に向かって流れたと考えられる。埋土の状況はB197流路とほぼ変わらず、同じ層番号で記述する。

3層は4・5層を切り込み、3層を堆積させて自然堤防となって埋没している。流路中央では3層による下刻と削平が大きく、平面図上で、T.P.2 m以下の部分は第12・13層が削平されており、第13 b層が露出している状況であった。特に、X=-149.890ライン付近の流路底面ではT.P.1.5 m付近まで削平が及んでおり、流路肩付近のA528・A531・B244高まりも部分的に削られている。

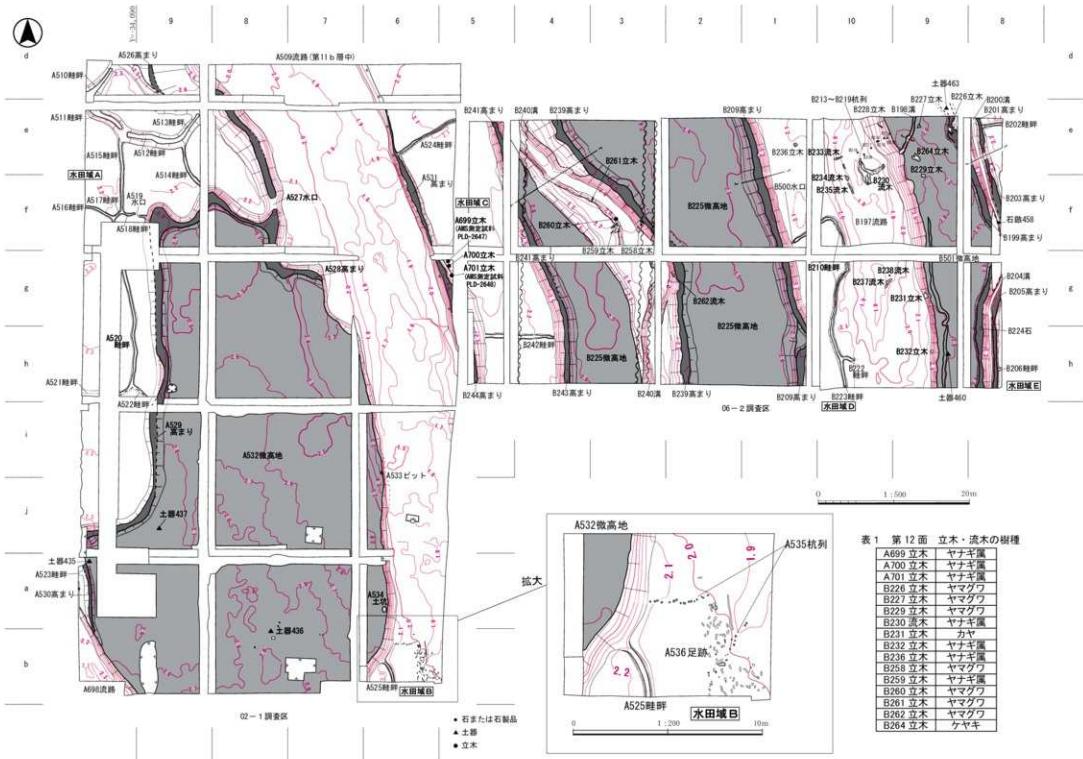


図 53 第12面 平面図

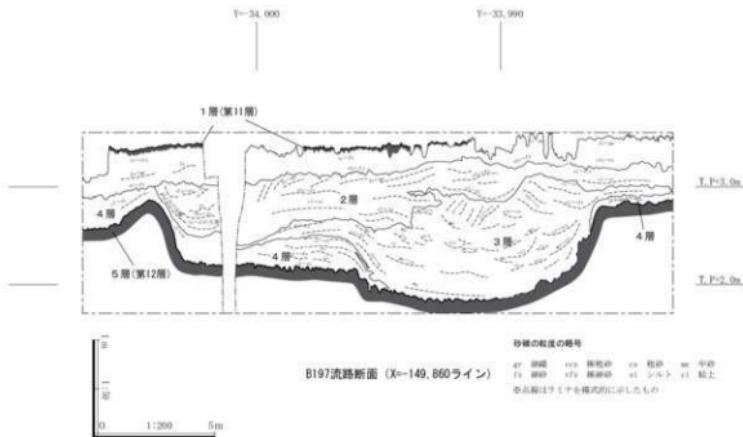


図 54 第 12 面 遺構図 (1)

また、流路南端部分では第 12 層の削平が及んでいない部分があり、A525 畦畔が検出された。その東側では、A535 杭列、A536 足跡が検出された。

A698 流路は、長さ約 15 m、幅約 5 m、深さ約 0.5 m で検出され、大半は調査区外であった。そのため、細かな状況は不明であるが、先述の流路と同様のものと考えられる。池島 I 期地区の 102 流路に対応する。

これらの第 11 b 層は、「池島・福万寺遺跡 3」で井上氏が指摘されている「第 12 - 1 層」に対応し、3 層が「第 12 - 1 層上部」、4 層が「第 12 - 1 層下部」にあたる可能性が考えられる（井上 2007）。

また、これらの流路は埋没後、古墳時代まで微高地として存続しており、土地利用に大きな影響を与えている。

微高地と高まりについて（図 55、写真 36・37、図版 16・17）

微高地とは、氾濫堆積物を主体とした層によって形成された広範囲に高い地形で、高まりとは、主として微高地端部分に盛土によって形成された遺構である。

A532 微高地は、南北約 60 m、東西約 40 m の範囲で検出され、更に南側にのびている。不整の長方形を呈し、南西側に張り出し部が存在する。北側、西側端にはそれぞれ A528・A529・A530 高まりが形成されている。南と北ではその高さに 0.5 m の違いがあり、なだらかに北側に向かって傾斜している。微高地を形成する土は第 12 b 層の細砂～粗砂を主体とする氾濫堆積物である。

B225 微高地は、南北約 35 m、東西約 30 m の範囲で検出され、更に南北にのびている。X = -149.870 以南は南北方向にのびるが、以北ではやや西に方向を変える。東端に B209、西端に B241・B243 高まりが形成されており、微高地中央を B239 高まり、B240 溝が縦断する。南端と北端ではその高さに 0.2 m の違いがあり、なだらかに北側に向かって傾斜している。微高地を形成する土は、東側



写真34 第12面 A509流路 断面（南から）



写真35 第11b面 B197流路 断面（東から）



写真36 第12面 B209高まり 断面（東から）



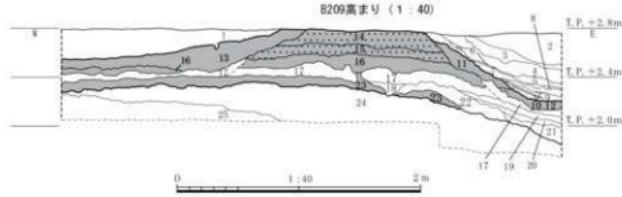
写真37 第12面 B199高まり、B200溝、B203高まり
断面（東から）

は第13 b面のB499流路によって形成されたシルト～中砂からなる第13 b層の自然堤防である。西側はそれを覆う極細砂～シルトからなる第12 b層の後背湿地状の堆積によって形成されている。

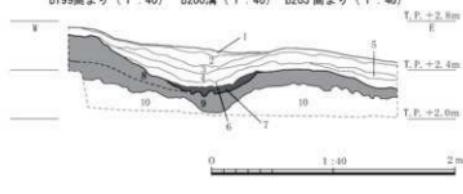
B501微高地は、南北約35m、東西約5～10mの範囲で検出され、更に南北にびている。不整の長方形を呈し、中央東側に張り出し部が存在する。東接する04-2調査区では、この張り出し部の統一是確認されていないため、あと1m以内で屈曲部が存在すると思われるが、調査区法面の崩壊などで確認できなかった。B225微高地と同じようにX=-149.870以南は南北方向にびるが、以北ではやや西に方向を変える。微高地東端にはB199高まり、B200溝、B201・B203・B205高まりが形成されている。南端と北端ではその高さに0.2mの違いがあり、なだらかに北側に向かって傾斜している。微高地を形成する土は、主に第13 b層の自然堤防形成時の堆積であり、B225微高地の東側と同様である。

A528高まりは、A532微高地の北端に形成されており、長さ約27m、幅約1.5～3m、微高地からの高さ約0.2m、水田面からの高さ約0.4mである。高まりはA509流路によって削平されており、本来は微高地東側一帯に形成されていたものと考えられる。

A529高まりは、A532微高地の西端に形成されており、長さ約63m、幅約1.5～3m、微高地からの高さ約0.2m、水田面からの高さ約0.4mである。西側で調査区外に出てしまうが、すぐ南側でA530高まりが検出されるため、同一のものであると思われる。また、A530高まりも南側でA698流



- 1:堆オリーブ灰 5G14/1 細緻混シルト 柱状に鉛分充着
汚黄 2.57/3 塵細～粗砂混シルトとオリーブ灰 5G3/2の有機物細長く横に堆積
2:灰白～黃 5G7/1～2, 5G7/2, 5G7/3 塵細～粗砂混シルト 2層、ラミナあり
水平層積で細～粗砂の互層 左端には3～5mmの礫混じる
3:堆オリーブ灰 5G14/1 細緻混シルト 柱状に鉛分充着シルト 下層で有機物堆積あり
粒度やや強い、層全体に鉛分体多量に混じる
5:灰 5G4/1 細緻混シルト 4層と見ると粒度は弱い
所々に4層の木片が層上半に混じる 東側でシルトの水平層積あり
6:灰 5G4/1 細緻混泥シルト 5層と比較性強い
7:オリーブ灰 5G7/1 粘質シルト 6層と比較性同様
東側はシルトより多く含む
8:灰 5G4/1 細緻混泥質シルト 7層と比較性弱い
9:オリーブ灰 5G7/2 細緻混泥質シルト 8層と比較性弱い
10:オリーブ灰 5G7/3 細緻混泥質シルト 9層と比較性弱い
11:緑灰 5G7/2 粘質シルト 8層と比較性は同じ(厚さ)
層全体には薄青灰 10H6/4の小さなブロック含む 層の半分以上鉛分あり
12:オリーブ灰 5G2/1 細緻混泥質シルト 11層と同じく層全体に
薄青灰 10H6/4の小さなブロック含む 層の半分以上鉛分あり
13:黒 10H2/1 粘質シルト 11層と同じく層全体に
薄青灰 10H6/4の粘質シルトブロック含む 粘性弱い、細緻な小塊層全体に含む(第12層)
14:堆灰 10H2/1 粘質シルト 11層と同じく層全体に鉛分 10H6/1の粘質シルトブロック含む
有機物少含む (13層に比べ粘性弱い、鉛分少含む)(10H6/4まで含む)
15:堆灰 10H2/1 粘質シルト 14層と比較性同様 有機物少含む
16:オリーブ灰 5G2/1 粘質シルト 12層と比較性(第12～2層)
17:オリーブ灰 10H2/1 粘質シルト 16層と比較性強い 層の下層で細～中砂多く含む
東側では薄 10H6/1のブロック含む(第12b層)
18:堆綠灰 10H2/1 粘質シルト 層上半に細～中砂の層があり 粘性17層と同じ
19:堆綠灰 5G3/1 粘質シルト 西側では細～中砂ブロック状に多く含む
17層に比べ粘性強い 細緻な少量含む
20:緑黒 5G2/1 細緻混泥質シルト 19層に比べやや弱い色調 粘性より弱い
21:オリーブ灰 10H2/1 粘質シルト 20層に比べ粘性非常に強
22:オリーブ灰 10H2/1 粘質シルト 層下部で細～中砂や多く含む
23:緑黒 5G2/1 シルト～中砂 層全体で細～中砂多く含む
24:層に比べ粘質シルト多く(第13層)
25:堆オリーブ灰 5G4/2～5G2/1 粘質シルト～中砂 西から東へと色調異なる
中砂多く含む(第13b層)
25:緑黒 10H2/1 粘質シルト 24層に比べ粘性強い 細～中砂層上半に少量含む(第13b層)



- 1:堆オリーブ灰 5G4/2 細緻混泥シルト
ラミナ堆積(レンズ状) 層全体に有機物10%程度じる(第11b層)
2:灰 NS/ シルト 低い部分に細綈砂主体とする
砂少量堆積 または植物遺体多く含む(第11b層)
3:灰 NS/ シルト 部分的に細綈砂のラミナあり
層全体に鉛分含む(第11b層)
4:灰 10H4/1 粘質シルト 細綈砂主体に少量含む
203面より以降は植物遺体少含む(第11b層)
5:灰 10H4/1 粘質シルト 6層に似るが、層全体に
細綈砂のラミナ少量混じる(第11b層)
- 6:灰 10H4/1 シルト 層全体に灰白10H7/2 細綈やや多く含む
第12層のブロック(φ 2～3cm)層全体に少量含む(第11b層)
7:オリーブ灰 10H5/2 シルト 層はa層ブロック状に
層全体に入る(第11b層)
8:堆灰 NS/ 粘質シルト 9層と層境不明確 層中に
カルシウム酸少量含む(φ 1mm)(第12a層)
9:堆灰 NS/ 粘質シルト 3mm人のカルシウム酸多く含む(第12b層)
10:灰 NS/ 粘質シルト 鉛分含む しまり強い(第12b層)

図55 第12面 遺構図(2)

路によって削平されている。

A526 高まりは、A527 水口以北に形成された高まりである。X = - 149.840 以南では畦畔状、以北では幅が広くなだらかで、長さ約 23 m、幅約 2 ~ 5 m 前後、高さ約 0.4 m 前後である。北側は、第 13 面の A634 微高地を踏襲した形で、南側は、A532 微高地とのあいだを繋ぐように畦畔状に形成されている。また A526 高まりは、池島 1 期地区の 12 微高地として検出されている。

A531、B244 高まりは同一であり、長さ約 40 m、幅約 2 m、高さ約 0.3 m 前後である。南南東から北北西にのび、更に調査区外にのびている。東側に水田畦畔が接続している。

B209 高まりは、B225 微高地の東端に形成されており、長さ約 35 m、幅約 3 m 前後、微高地側の高さは約 0.2 m、水田面からの高さは約 0.6 m である。X = - 149.870 付近で東側に屈曲するが、高まり頂部が側溝内に入ってしまい、確認できなかった。図 55 は B209 高まりの断面図である。断面の 1 ~ 12 層まではラミナを含む第 11 b 層の自然堆積層であり、13 ~ 16 層までは第 12 層に対応する。そのうち、14、15 層は高まりの盛土と考えられ、16 層は高まり造成前に形成された土壤層である。

B241・B243 高まりは、B225 微高地の西端に形成されており、長さ約 35 m、幅約 3 m 前後、微高地側の高さは約 0.2 m、水田面からの高さは約 0.6 m である。B209 高まりと同様に盛土によって形成されており、第 11 b 層に覆われていた。

上述したように微高地は、自然地形の変遷の結果、形成されたものであるが、高まりはその形状や形成される土によれば、盛土による人為的なものと判断される。また、微高地はある程度、その形を成形されていると考えられ、やや南北ラインを志向し、06-2 調査区側では、X = - 149.870 以北は北北西に方向を変化させる。微高地の成形は水田部分を広げ、水をまわす目的によって行われ、高まりは微高地から水田への土砂流入を防ぐとともに、それ自体が微高地成形によって生じた土を盛ったものである可能性が考えられる。よって、第 12 面では、自然地形を少ない範囲で改変しつつ、利用した水田経営が考えられる。

溝と付属の高まりについて（図 55 ~ 57、図版 16・17）

溝は微高地土でのみ 3 条が確認された。

B199・B201・B203・B205 高まり、B200・B204 溝は、B501 微高地の東側に位置する。調査区外に分断されているが、B201・B203・B205 高まり、B200・B204 溝は同一の遺構である。

B199 高まりは検出長約 30 m、幅約 1 m、微高地からの高さ約 0.1 m、溝底からの高さ約 0.5 m である。主軸は X = - 149.868 ライン以南は南北であるが、以北は北東にのび、X = - 149.858 ライン以北は北西にのびる。B203 高まり、B200・B204 溝も同様である。

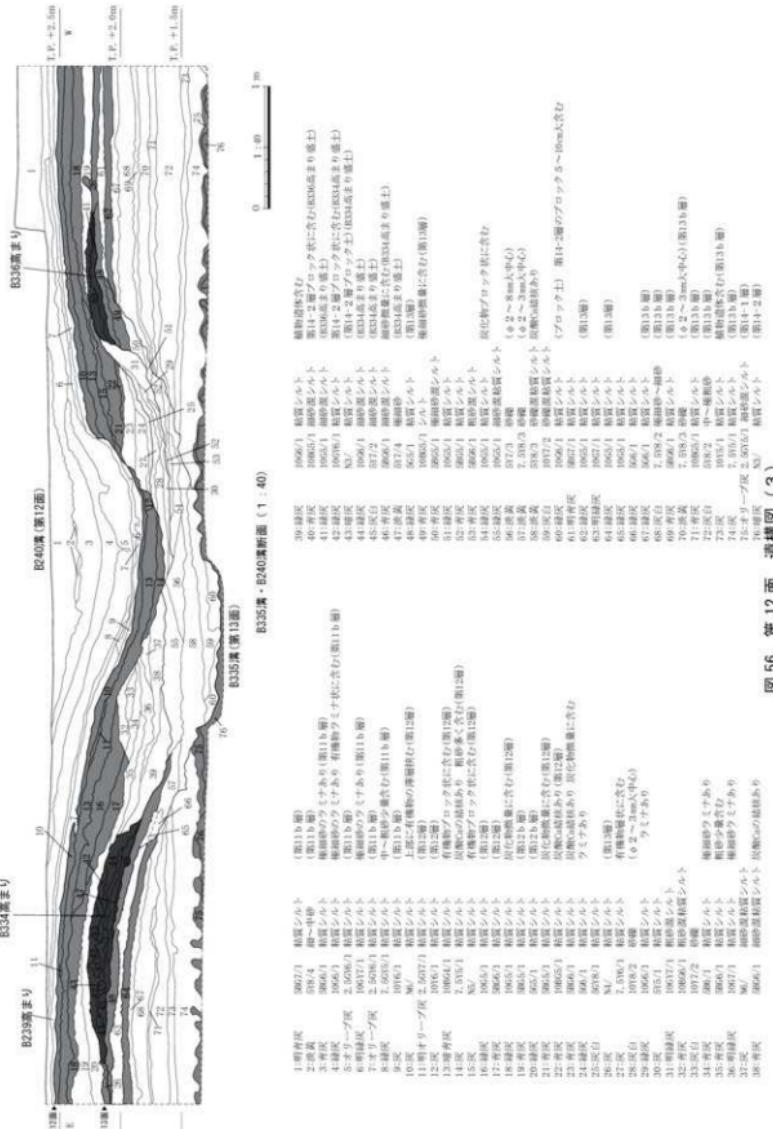
B203 高まりは検出長約 30 m、幅約 0.5 m、田面からの高さ約 0.1 m、溝底からの高さ約 0.3 m である。

両高まりとも、断面観察の結果からは盛土であるとの確証は得られなかった。また、水田域 E の畦畔はこの高まりに接続しており、高まり以東が水田域となっていると考えられる。

B200・B204 溝は検出長約 30 m、幅約 1 m である。埋土は 1 ~ 7 層まで細分されたが、1 ~ 6 層までは第 11 b 層の堆積である。7 層は第 11 b 層とは異なって暗色の度合いが強く、第 12 層のブロックが層全体に混じっている状況が観察されたため、溝機能時の堆積と考えられる。

これらの高まりと溝の関係は、堤と溝の関係と考えることができ、溝の機能としては、東側の水田に伴う取排水の溝であると考えられる。

また、B224 石としたものが B199 高まりの直上で確認された。石は、長軸 0.33 m、短軸 0.23 m、



高さ 0.08 m で絹雲母片岩である。石は、第 12 面検出段階で半ば以上が露出し、下方は第 12 層に埋没していた。掘り込みは確認されなかつたため、高まりを造成する際に置いて埋めた状況が想定される。A526・A528 高まり付近からも、長軸 0.21 m、短軸 0.14 m、高さ 0.06 m の花崗岩が出土している。また、東接する 04-2 調査区でも、同じような状況で石が出土しており（廣瀬編 2008）、共通性があるとも考えられる。

B240 溝は先述のように B225 微高地の中央に形成され、検出長約 37m、幅約 5 ~ 7.5m、深さ約 0.6m 前後で、X = -149,860 以南では南北方向、以北では南東-北西方向に主軸を置き、地形的に南から北に流れていたと考えられる。溝の東肩に沿って B239 高まりが形成され、検出長約 37m、幅約 2m、高さ約 0.1m である。断面図から、溝、高まりは第 13 面の B335 溝と B334 高まりを踏襲していることがわかる。ただ、B239 高まりは B334 高まりの影響を受けて自然に盛り上がっているものとも考えられる。西肩では高まりは確認されなかった。

溝の断面は図の部分では両肩ともなだらかに傾斜し、椀状にくぼむ形となっているが、全体を通して見ると、西肩がゆるい傾斜で、東肩は急な傾斜になっている。溝埋土は基本的に第 11 b 層で埋没しており、1 ~ 9 層までは第 11 b 層である。溝底部にのみ 7 層の一部と 8・9 層が堆積しており、流水堆積ではあるが、確実に機能時の堆積であるとは言い切れない。

第 12 面の最終埋没ラインは、10 層の上面で、10 ~ 18・21・22 層は第 12 層である。それより下層の B335 溝は、主に第 12 b 層で埋没している。ラミナが観察される 24・34・36 層は本来、溝の形を踏襲してレンズ状に堆積していたと考えられるが、第 12 層によって削られている。よって、第 12 面最終埋没にいたるまでに溝は何回かの再掘削が行われたと考えられる。

また、B240 溝では調査区南端の法面で、植物遺体、珪藻化石分析を行なった（表 4・5、註 2）。断面 1・2 は 6 ~ 9 層に対応する第 11 b 層である。断面 3・4 は 10 ~ 14 層に対応する溝埋土である。検出数、同定種は各表に示したとおりである。珪藻化石に関しては、断面 3・4 からの検出数が少なく、古環境を復元しづらいが、断面 1・2 と似たような状況を示している。以下に全体の特徴を述べる。

塩分濃度を示す種は、貧塩-不定性種が 32% 程度、貧塩-好塩性種が 2% である。よって、溝内の塩分濃度は高くないと考えられ、閉鎖水域ではない可能性が指摘できる。

酸性、アルカリ性を示す種は、好アルカリ性種が 32%、好酸性種 22% 程度である。酸性を示す割合が高ければ、湿地環境であることを指摘できるが、分析結果からはどちらともいえない。

流水性を示す種は、流水不明種が 46%、流水不定種 40% である。その多くは水生植物に付着するものであり、陸生珪藻は 5% 以下しか検出されなかった。よって、溝内の古環境は、流水域もしくは止水域で、あまり乾燥しない状況にあったことがわかる。

B198 溝は、B501 微高地の北側で検出され、検出長 4.9m、幅約 0.3 ~ 0.7m、深さ約 0.2m である。B197 流路とは高さの違いがあるが平面上は接続しており、接続部から北東方向にのびる。埋土の大半を占める 1 層は、基本的には第 11 b 層の堆積であり、おそらくは B197 流路との接続部分から溝に流れ込み、埋没させた氾濫堆積物であると考えられる。そのため、溝上部の堆積はやや削平されていると考えられるものの、溝底の状況はパックされて良好に遺存していた。

溝底は北側に向かって若干低くなってしまっており、最大 0.04m の差がある。また、溝底には長軸約 0.2m、短軸約 0.08m、深さ約 0.03m、平面菱形を呈し、断面は逆三角形や四角形の凹みが多く確認された。溝の底幅に長軸をあわせて存在し、その形状から鋤痕跡と考えられる。埋土は中砂を主体としてシルト



図 57 第12面 遺構図(4)

ブロックが混じっており、4層と共通している。これらの4・5層は1層による埋没以前に堆積しており、機能時堆積の層と考えられる。よって、4・5層に含まれる砂は1層以前に溝を埋めた堆積であり、溝は機能時に流水していたことがわかる。また、鋤痕跡は溝開削時、もしくは溝の再掘削時のものであると考えられる。

水田と畦畔について（図版 15～17）

水田は5ヶ所で確認された。池島1期地区K地区に続く9筆が確認された水田域A、畦畔のみが確認された水田域B、3筆が確認された水田域C、1筆が確認された水田域D、04-2調査区につながる部分で畦畔のみが確認された水田域Eである。

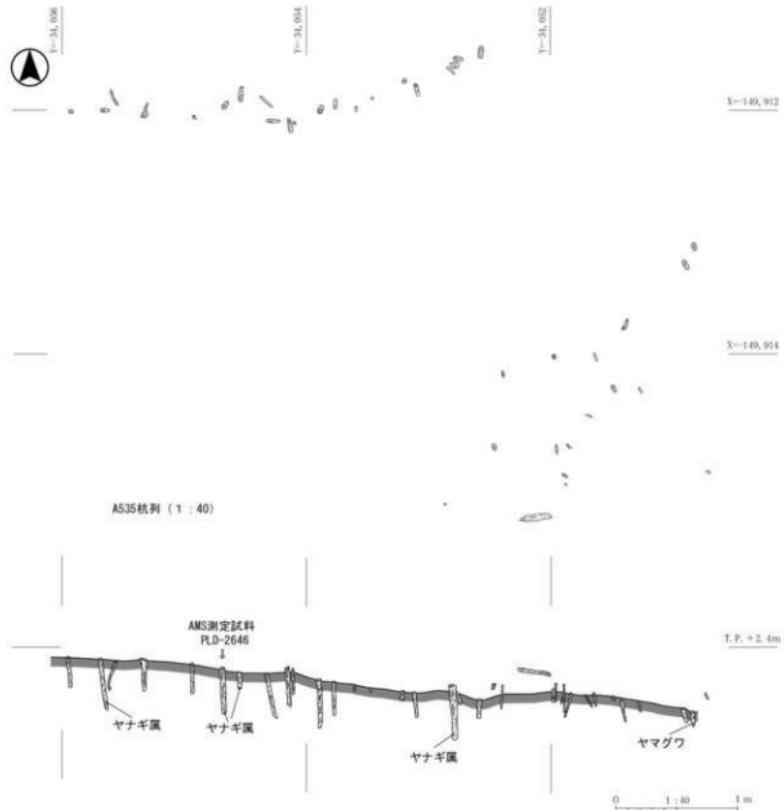


図58 第12面 遺構図(5)

水田域Aは、全体に東から西にむかって低くなっている。東側では取水口と思われるA527水口を検出した。池島I期地区でもK地区は東から西、南から北に水が回されたことが述べられており、矛盾しない。畦畔の検出長は約3~15mで一定ではなく、そのため不整形となるが、基本的には主軸を等高線にあわせて形成している。幅は約0.5m前後、高さは約0.05m前後であるが、A510~A513畦畔は異なり、幅約1.8m前後、高さ約0.1m前後で、A511畦畔とA515畦畔の接続部では、約0.2mの比高差がある。その規模から支線となる大畦畔と考えられるが、第13面でも同じ場所に畦畔が形成されており、A526高まりと同様に第13面の高まりを踏襲した可能性がある。

水田域Bでは畦畔を確認したが、水田を復元するには至らなかった。畦畔は検出長約3m、幅約0.5m、高さ0.05mである。A527水口の存在からA509流路の部分が第12面段階でも流路であった可能性があり、畦畔も検出されたことから、流路際に形成された水田とも考えられる。また、現在調査中の南側07-2調査区では水田域Bの続きが検出されている。

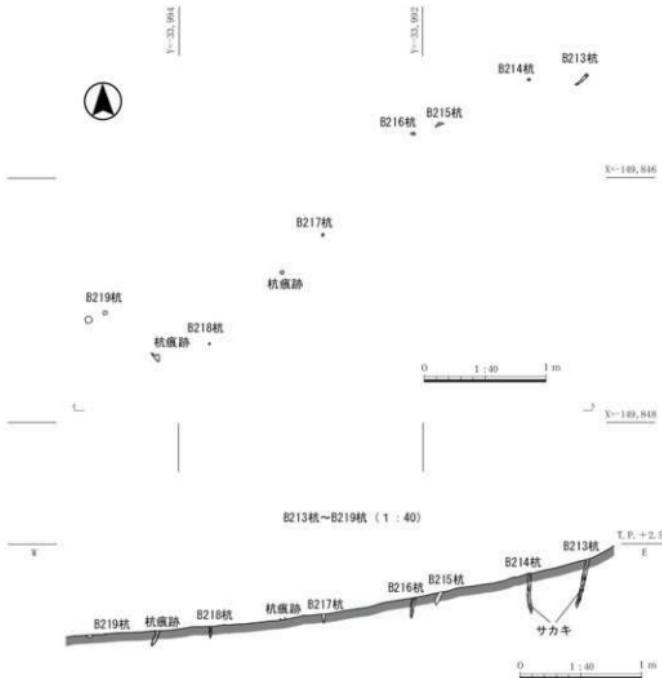


図 59 第 12 面 遺構図 (6)

水田域 C では、A531・B244 高まりと B241・B243 高まりにはされて水田が形成され、南から北にむかって低くなっている。水口などは確認されないが、南から北へ水を回したと考えられる。畦畔は検出長約 9m、幅約 0.5m 前後、高さ約 0.1m 前後である。1 筆は南北約 25 ~ 30m、東西約 9m で、長方形を呈し、標高差の激しくなる部分で東西畦畔を形成したと考えられる。

水田域 D では、B209 高まりに接続する形で畦畔が検出され、B500 水口も検出された。流路部は若干第 12 層が削られている可能性があるが、現状では西から東にむかって低くなっている。B210・B223 畦畔は検出長約 20m、幅約 0.5m 前後、高さ約 0.05m 前後である。東にのびる B222 畦畔は途中で途切れてしまう状況で、B197 流路によって削平されていると判断される。B197 流路部分は第 13 面段階でも流路であるが、第 12 面ではやや安定した状況であり、その部分に水田が形成されたと考えられる。

水田域 E では、B201・B205 高まりに接続する畦畔を確認した。東接する 04-2 調査区では B206 畦畔と連続する畦畔が確認されているが、南側に屈曲し 1 筆としては復元できない。東西長は 04-2 調査区とあわせると約 5m である。幅約 0.7m 前後、高さ約 0.05m 前後である。

杭について (図 58・59、図版 15・16)

A535 杭列は、大きく分けて北側の 21 本が長軸約 3.2m、短軸約 0.3m で東西方向にのび、南側の 17 本が長軸約 2.6m、短軸約 1m でやや南西-北東方向にのびる。杭の検出面は第 12 面ではなく、第 11

b層下部のシルト～細砂の面である(B197 流路の4層)。本来は第12面の畦畔を検出するために行なった、第12層直上に堆積する第11 b層のシルト層内の精査で検出した。A536 足跡も同様である。足跡は第11 b層の中砂～極粗砂(B197 流路の3層)で埋没しており、踏み込まれたのがシルト層上面か、中砂～極粗砂が堆積してからかは明らかではないが、砂の堆積は約1mあり、その上面からの踏み込みでないことは明らかである。よって、踏み込みの時期は4層上面もしくは、3層が浅く堆積していた時期に限られる。細かく図示しえなかつたが、杭列周辺にも足跡が多く存在しており、両者が関係を持っている可能性も考えられる。杭列の機能に関しては、杭以外の施設が検出されなかつたため、明らかではない。樹種については、サンプル採取した6本のうち、5本がヤナギ属、1本がヤマグワであった。

B197 流路の北東側では、B213～B219 杭列が検出された。杭列は痕跡を含めて9本が長さ約4mにわたって検出され、北東～南西方向にのびる。A535 杭列とは異なつて、検出面は第12面であるが、第11 b層下部の層が削られている部分もあつたため、明らかではない。杭は長さ0.3m前後、幅0.03m前後で、先端を加工しているが、表面は皮が残存していた。

杭列の機能に関しては、杭以外の施設が検出されなかつたため、明らかではないが、東接するB501 微高地上でB198溝が検出されており、B198溝の取排水に関係があつた可能性がある。樹種については、サンプル採取した2本はともにサカキであった。

立木、流木について（図版16）

第11 b層中、および第12層直上で、立木、流木を検出した。前述した「第12～1層下部」との関係性があるため、特に記述する。立木、流木の差は根が生えているかどうかで判断し、どの面に帰属するかについては、根株と面の関係から判断した。

まず、流木に関しては、その全てが第11 b層中に埋没していたため、第11 b層のいすれかの時に流されてきたものと考えられる。立木は、B501 微高地上で確認されたB226・B227・B229・B264 立木と、A531高まりで確認されたA699・700・701 立木は第12層中に根株が入り込んでいることから、第12面段階のものと考えられる。他の立木については、状態が良くないものもあり、判断が難しいが、水田域Dの北側で確認されたB236 立木は第11 b層中に根株が存在し、第12面検出時には根株が面から浮いている状態であったため、第11 b層中に生えたものと判断された。B236 立木の生えた時期は「第12～1層下部」の面であったと考えられ、ある程度、地面が安定する時期を経ながら第11 b層が堆積していったことが想定できよう。樹種については、A699・700・701 立木、B230 流木、B232・236・259 立木がヤナギ属、B231 立木がカヤ、B226・227・229・258・260～262 立木がヤマグワ、B264 立木がケヤキ、ヤナギ属とヤマグワが大半を占めていた。

また、杭、立木については、計3点をAMS測定にかけ、年代測定を行なつた（表3、註3）。A699立木の試料でやや古い年代が測定されたが、A701立木、A535杭列の試料の暦年代較正値においては、同じ年代と推測された。

地表面直上検出土器について（図60、図版17）

微高地上の第12層直上から、土器435・436・437（図67）、460・463（図68）が出土した。第11 b層によって覆われていたため、第12面廃絶時の状況を残している。そのうち、土器435・437・460については、残りが良好であったため出土状況図を作成した。特に土器460はほぼ完形に復元でき、もととは微高地上に正置されていた可能性もある。（乾）

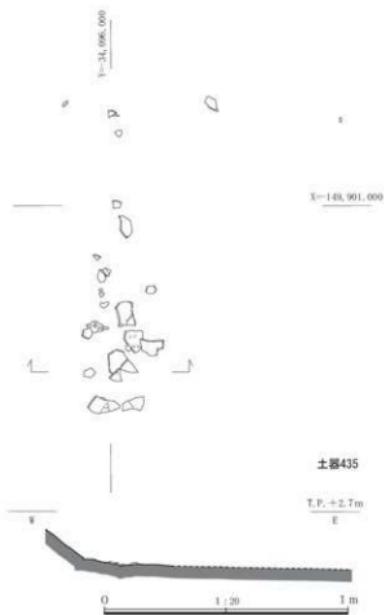
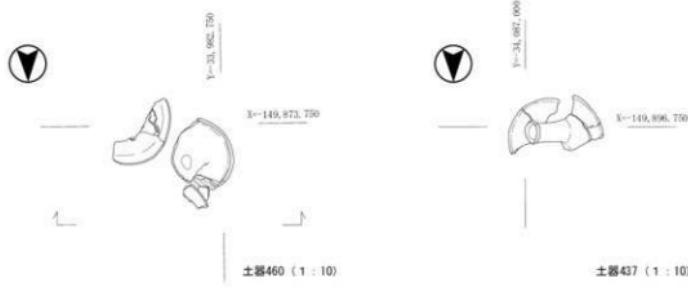


図 60 第 12 面 遺構図 (7)

第12面ベース（第12 b面）（図61、図版18）

遺構面の状況と検出遺構

第12 b面は、土壤化層の第12 a層を除去して検出した遺構面である。また、前述したように第12 a層は部分的に細別できため、当面で部分的に記述することとする。

第12層は、A532、B225微高地で細分が可能であった。A532微高地では第12-1～12-3層に細分したが、遺構は確認されなかった。B225微高地では、第12層である灰色の粘土～シルトの直上に、灰色の粘質シルトがラミナ状に堆積し、その上部に植物を多く含む黒褐色の粘質シルトが堆積し、さらにそれを覆うように第11 b層が堆積していた。第12面としたものは第11 b層を掘削して検出した黒褐色の粘質シルトである。上記の灰色のラミナ状堆積を除去した部分を第12層下面とした。

地形は第12面と変化なく、全体に南から北へ低くなっている。第12 b層の堆積は調査区全体に及んでいるが、場所によってその層厚に違いがあり、約0.1～0.5mである。

遺構は、第12層下面遺構として畝溝、第12 b面遺構として畝溝、溝、ピットを検出した。以下、検出遺構について詳説する。

畝溝について（図62・63、写真38・39、図版18）

畝溝は調査区中央のB225微高地上のB243高まりとB240溝の間で検出された。第12層下面と第12 b面で検出され、両面ともほぼ同じような形で検出されており、その規模も同様である。第12層下面（図62）の南側では畝部分と畝溝部分が検出されたが、畝部分は遺存状況が不良で、畝溝にあたる凹部分の間が畝であったと考えられる。そういう状況から、畝溝にのみ遺構番号をつけ記述する。

両面ともに、畝・畝溝は西南西～東北東方向にのび、長さ約2～5m、幅0.2～0.5m、畝溝の深さは約0.05mである。畝溝間の距離は約1mである。ただ、第12 b面で検出された畝溝は途切れる部分が多く、良好には遺存していない。畠にともなう耕作作痕の可能性も考えられる。

畝および畝溝の作土はシルト質で砂礫等を含まない。畝溝（図63）が検出された微高地の層序は下層から第12 b層が弱く土壤化した粘土～シルト（5層）、極細砂混シルト（4層）、極細砂混シルト（3層）、植物遺体・灰白シルト偽礫を含む極細砂混粘質シルト（2層）、第11 b層である粘質シルト・砂礫層（1層）である。このうち、4層は3層の細別で土質はほとんど変わらず、暗色の度合いで上下を区別した。2層は微高地が水没するような環境下で泥質な堆積が進行していく過程で、草根などの植物が生えたのちに人为的な搅乱（耕作）によって形成された地層と考えている。この植物は層中に炭化しており、地層にラミナ状に本来含まれていたものであるが、耕作によって灰白シルトとともに細かく偽礫化している。

畝溝が検出された部分のB225微高地は北東方向にやや低くなってしまっており、畝溝底面のレベルも同様である。畝溝の底は断面観察では凹凸が顕著ではなく平滑である。また、畝溝部分については部分的に掘り下げを行なって平面的な調査を行なっているが、落ち込んでいる部分やベースの隆起などは観察できなかった。ただし、先に述べたように畠が検出された微高地では土壤が連続しているため暗色化しているベースの地層と判別することができなかつた可能性もある。

畝・畝溝は北東方向に低くなる地形に対して北東～南西方向に配置させているが、南西側の高所からB240溝に向かって若干放射状に並ぶ可能性もある。

畝・畝溝部分で行なった自然科学分析について（図65・66）

検出された畝・畝溝部分の性格を考えることを目的にして、軟X線写真、珪藻化石、花粉、植物珪酸

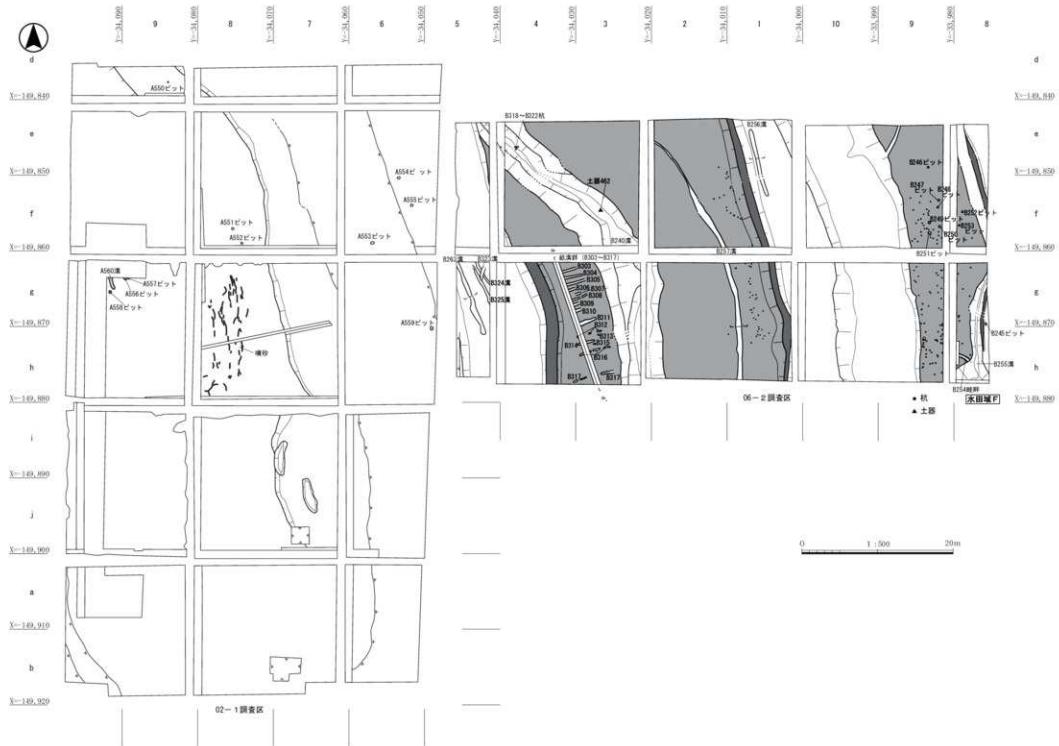


図 61 第12 b面 平面図

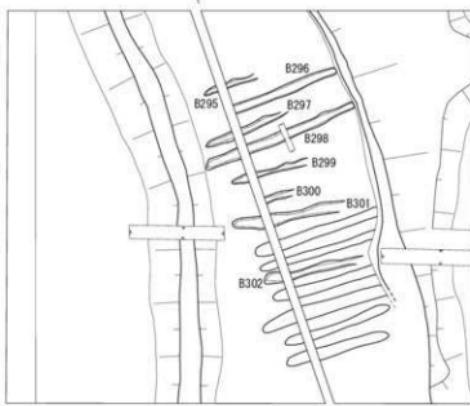


X = -149,860

Y = -31,640

X = -149,879

Y = -31,630



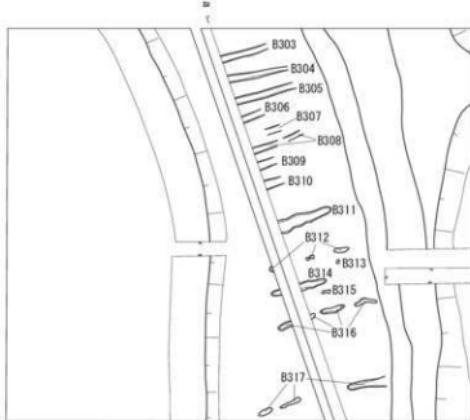
第12層下面 敗溝



X = -149,880

Y = -31,660

X = -149,879



第12b面 敗溝

X = -149,880

0 1 : 200 10m

図 62 第12b面 遺構図(1)

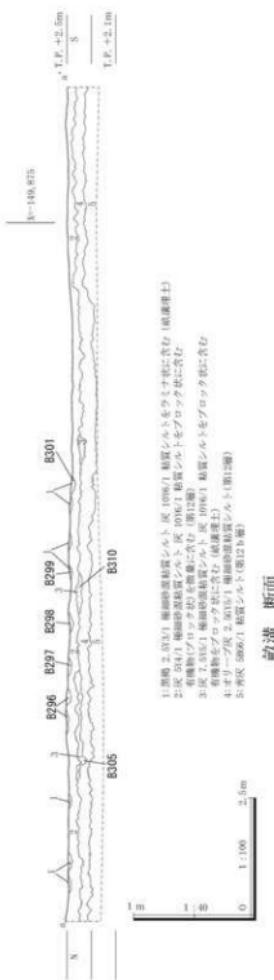


図 63 第 12 b 面 造構図 (2)



写真 38 06-2 調査区 第 12 b 面 訓満底部分
(南から)

写真 39 06-2 調査区 第 12 層下面 訓満底部分
(南から)

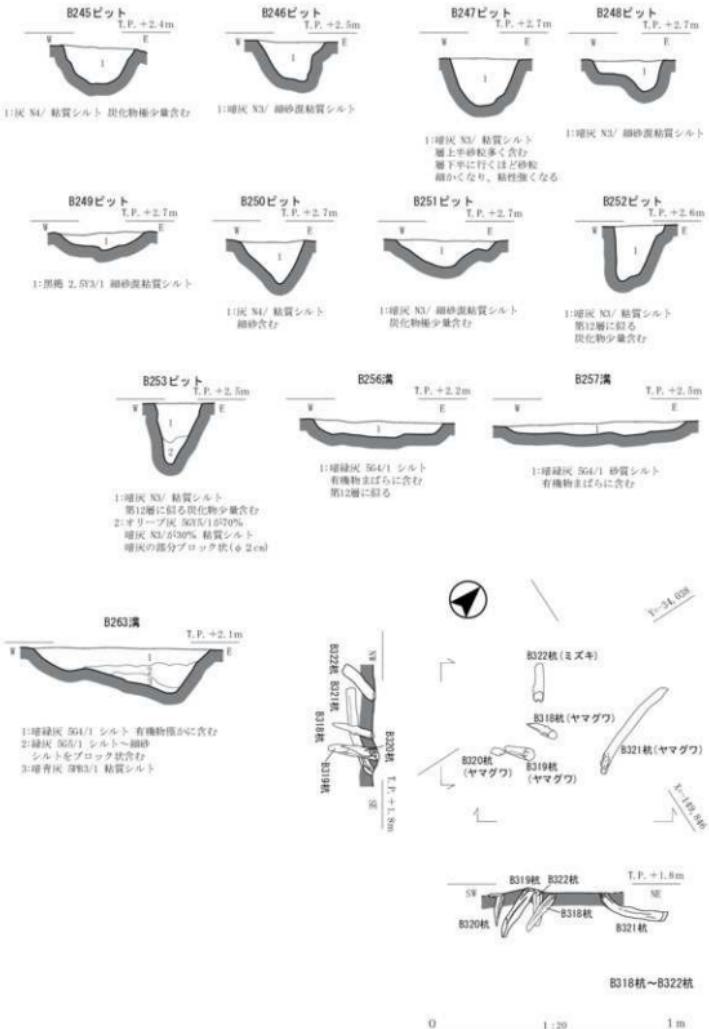


図 64 第 12 b 面 遺構図 (3)

体分析を行なった。

軟X線写真分析では、畝、畝溝部分での堆積物、土壤構造についての観察を行なった(註4)。珪藻化石、花粉、植物珪酸体分析では、畝、畝溝部分の形成要因を明らかにする目的で行なった(註5)。

・軟X線写真分析

畝、畝溝部分とともに、細かいブロック土が認められ、よく攪拌された土壤であることが認められたが、畠作土に観察される粒團の発達がないことから、畠作土とは考えられず、水田作土の状況に近いと観察された。

・珪藻化石、花粉、植物珪酸体分析

珪藻化石分析では、畝、畝溝部分ともに陸生珪藻がやや多くみられ、好気的環境であったことがわかつた。現在の畠作土では陸生珪藻が多く検出される。

花粉化石分析では、花粉化石の遺存状態が悪く、良好な観察結果が得られなかつた。

植物珪酸体分析では、畝、畝溝部分ともに機動細胞珪酸体でイネ属が多くみられ、ほかにタケア科、ヨシ属がやや多くみられた。

溝について(図64)

第12面の微高地から確認されたものが4条、水田部分から確認されたものが5条である。

B240溝は、第12面で検出された溝であるが、第12面でも記述したように、当面において再掘削が確認された。溝の形状などはほぼ変化がないが、北西部の溝底でB318～B322杭が検出された。

B255溝は第12面のB204溝の下層から検出され、長さ約12m、幅約4m、深さ約0.4mである。

B257溝はB225微高地で検出され、長さ約32m、幅約0.9m、深さ約0.05mである。

B256溝は、第12面の水田域D部分で、B263・B323・B324・B325溝は水田域C部分で検出された。規模は幅約0.3m前後、深さ約0.1mで、南南東～北北西に走行する。帰属面、時期に関しては、一部に切り合ひがみられるが、水田域C部分においては、第13層が露出しており、明確な帰属面がとらえられなかつた。溝の性格は不明である。

水田について

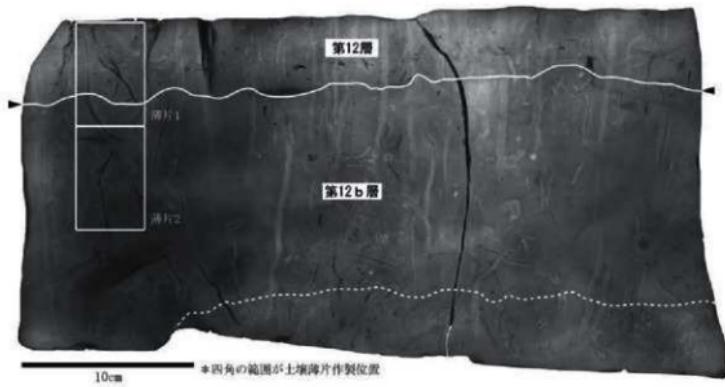
B501微高地南東で畦畔を確認し、水田域Fとした。検出されたB254畦畔は長さ約1.5m、幅約0.4m、高さ約0.01mであるが、畦畔周辺は、生痕と考えられる無数の凹凸によって遺構面が乱されており、そういう凹凸を検出した可能性がある。

杭について(図64)

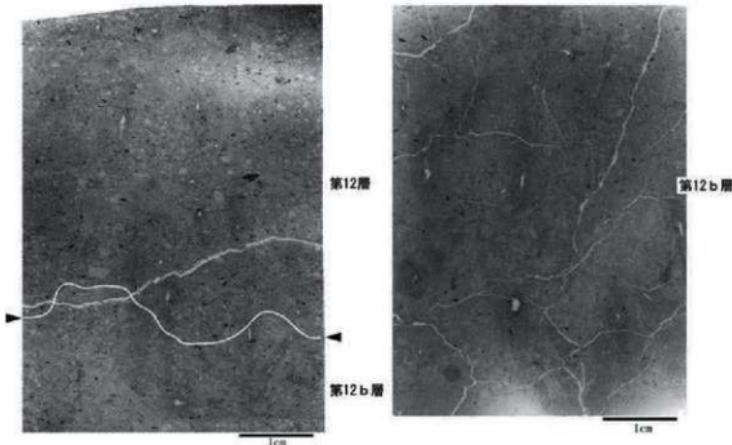
B240溝の北西においてB318～322杭を確認した。長さ0.1～0.4m前後、幅0.04m前後で、大半は先端を加工している。杭の性格については不明であるが、溝の機能時に打ち込まれたと考えられる。樹種については、B318～321がヤマグワ、B322がミズキであった。

その他の遺構(図64)

主に第12面の微高地部分においてピットを15基検出した。径0.3m前後、深さ0.1m前後で、平面で柱の並びは認められず、柱痕も検出されなかつた。埋土は第12層に似る暗灰色のシルトで埋没しているものが多く、第12面のくぼみを検出した可能性もある。また、B225・B501微高地部分では植物によると思われる生痕が多く検出されている。(乾・後川)



a) 軟X線写真



b) 土壤薄片（左：試料1 右：試料2）

図 65 第 12 b 面 自然科学分析(1)

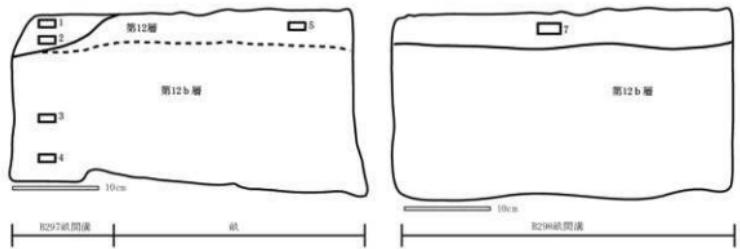
第 12 面出土遺物（図 67・68）

【02-1 調査区】

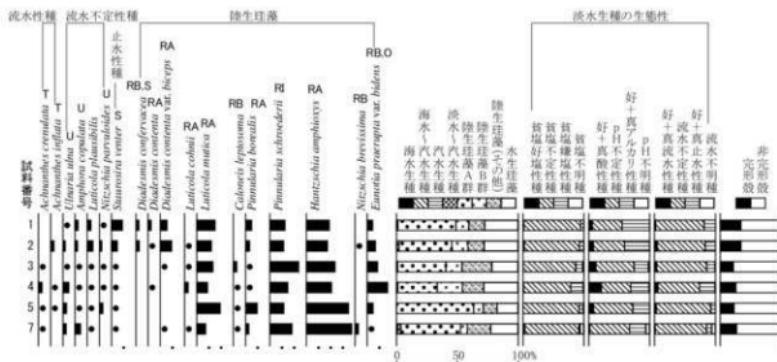
第 12 面 A509 流路（図 67-431～434）から弥生土器、縄文土器が少量出土した。

431・432 は弥生土器壺で弥生IV-2～3 様式である。431 は口縁端部に凹線文 1 条を施され、内外面は粗いハケメと細かいハケメ調整である。432 は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整である。433・434 は縄文土器深鉢で長原式である。細片であるが弥生前期の土器片も出土している。

第 12 面 A530 高まり（図 67-435、図版 34）から弥生土器壺 1 点が出土した。外面に簾状文 6 帯



試料採取位置

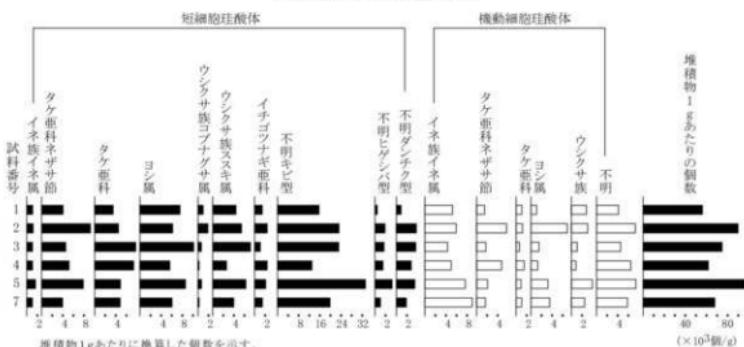


海水→淡水→淡水生産率×各種出率=形態殻産出率は全体算数、淡水生産の生産性の比率は淡水生産の合計を基準として百分率で算出した。

いづれも100個体以上検出された試料にについて示す。なお、●は2%未満の産出を示す。

RA:好淡水種、RC:底域適応性種、RD:好海水種、RE:淡水生珪藻群、RF:未区分生珪藻

主要珪藻化石群集の層位分布



植物珪酸体含量
図 66 第12b面 自然科学分析(2)

と円形浮文2列が施されている。弥生IV-3様式かと思うものである。

第12層(図67-436~451、図版35)から弥生土器、サヌカイト片が出土した。436~449は第12-1層、450・451は第12-3層からの出土である。436は壺、437・446は高杯脚、450は甕蓋、438~440は甕、441~445・451は甕底部、447・448はサヌカイト片、449はサヌカイトチップである。436・437・440・445・446は弥生IV様式、451は弥生IV-1様式、438・439・444・450は弥生III様式、441~443は弥生II様式かと思うものである。436は外底面ヘラミガキ調整で、外面にススが付着している。437は脚裾内面にススが厚く付着している。447・448は製品としては厚みがあり、A面に自然面が残るのでサヌカイト片で掲載した。

第12b層(図68-452~455、図版35)から弥生土器、石製品が少量出土した。452・453は甕、454はサヌカイト製の凸基II式石鐵、455は投彈?である。452は弥生IV様式、453は弥生II様式かと思うものである。454は片側縁を鋸歯状に調整している。455は一部にススが付着し、二次焼成で赤色化している。

遺物量は少ないが、第12層(第12-1層、12-3層)、第12b層の遺物を見ると、弥生IV様式が主で弥生III様式、II様式が混じる状況である。第12面の遺構出土や第12面上から出土した弥生IV様式はやや新しいものである。

【06-2調査区】

第12面(図68-460、図版34)から弥生土器把手付鉢1点(460)が出土した。輪状の底部で内面粗いハケメ調整で、弥生IV-1様式かと思うものである。

第12面B199高まり(図68-456・457)から弥生土器が少量出土した。456・457は甕で、457は口縁端部に刻目が施されている。それぞれ弥生IV様式、II様式かと思うものである。細片であるが、中期の壺、甕蓋片もある。

第12面B200溝(図68-458、図版35)から石鐵1点が出土した。サヌカイト製で、凸基I式で周縁を鋸歯状に調整している。

第12面B204溝(図68-459)から弥生土器片が3点出土した。459は甕で、弥生IV様式かと思うものである。

第12面B239高まり(図68-461、図版34)から石庖丁1点が出土した。II類直線刃半月形で、A・B面とも紐孔をあけるときの敲打痕と使用痕がある。

第12面B240溝(図68-462)から弥生土器甕1点が出土した。外面ヘラミガキ調整、内面ハケメ、板ナデ調整である。底部と胴部は接合しなかった。弥生IV-2様式かと思うものである。

第12層(図68-463~466、図版34・35)から弥生土器、サヌカイト片が少量出土した。463は把手付鉢で、畦畔から出土している。外面に刻目と列点文を施し、把手はヘラミガキで胴部に押し付け、取り付けている。内外面ススが付着している。弥生IV-1様式かと思うものである。464・465はサヌカイト片で、464は上面に自然面が残り、全体に白く風化している。465はA面の突出した部分に叩いた痕跡がある。466は第12層と確定はしないがここに掲載した。甕蓋で弥生中期である。

第12b面B249ピットから中期の弥生土器甕片1点が出土した。

第12b面B255溝(図68-467)から弥生土器甕1点が出土した。467は弥生II様式かと思うものである。

第12b層(図68-468、図版34)から弥生土器少量と石庖丁1点(468)が出土した。468はI

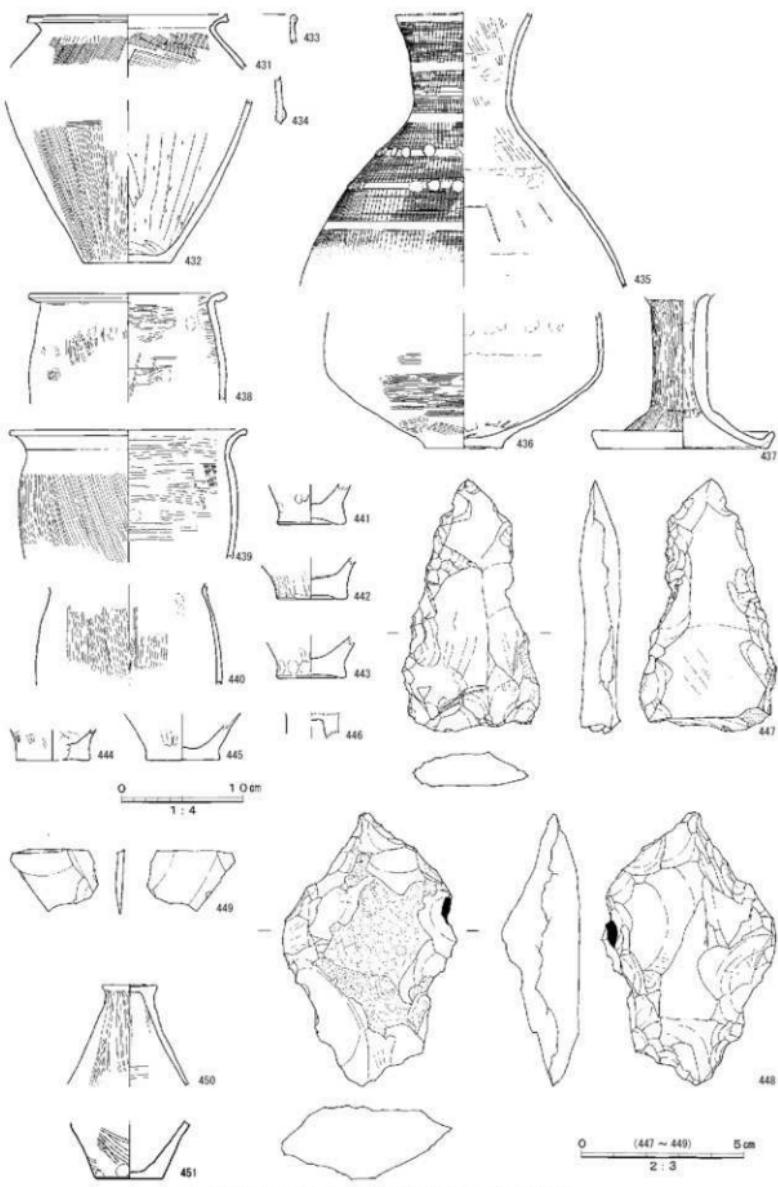
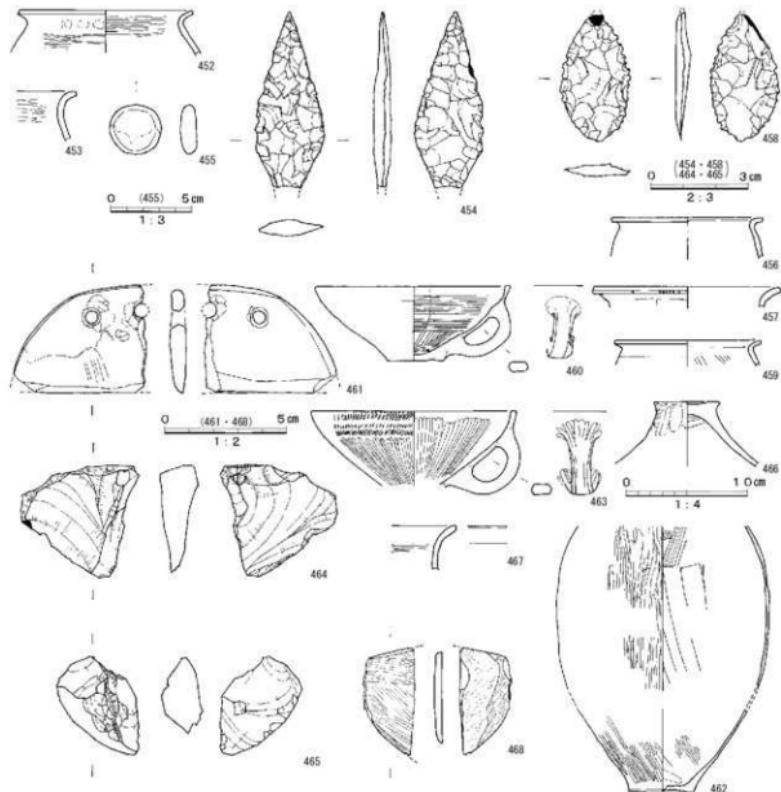


図 67 第 12 面 出土遺物 (1)



452～455：(02-1) 第12 b層、456・457 8199高まり、458:8200溝、459:8204溝、460:(06-2) 第12面、461:8239高まり、462:8240溝、463～466：(06-2) 第12層、467:8255溝、468:(06-2) 第12 b層

図68 第12面 出土遺物(2)

類外湾刀半月形で、A・B面とも研磨痕がある。

池島I期地区の第12面・12層出土遺物は弥生II-3様式からIV様式のものが多く、第12b層出土遺物は弥生I様式後半からII様式のもののが多かった。今回報告する第12面・12層の遺物は池島I期地区の様相と齟齬をきたさないが、第12b層出土の遺物は少ないので不確かであるが、弥生I様式はない。(陣内)

3) 第13面・第13面ベース(第13 b面)

第13面(図70、写真41、図版19~21)

第12層と第12 b層を除去した遺構面である。第13層は暗青灰色~黒色の極細砂~細砂を含むシルトが主体の土壤層であり、当遺跡で「第3黒色粘土(泥)層」と通称されてきた層に相当する。地形は、全体としては東から西へと標高を減じており、最高地点は東側のB271微高地におけるT.P.2.6 m、最低地点は西側の水田域におけるT.P.1.67 mである。02-1調査区側では、北端で微高地と水口を検出し、微高地の南側、第12面段階のA509流路より西側のT.P.1.67 m~2.11 mの緩斜面では水田域(図版19)を確認した。06-2調査区側ではB267流路を挟んだ2つの微高地(標高T.P.1.95 m~2.6 m)が調査区の約半分の面積を占めており、微高地上ではB335溝や土坑・ピットを検出した。

02-1調査区北側に位置するA634微高地は標高T.P.1.9~2.1 mであり、南側の水田面との比高差は0.15~0.2 mを測る。第13 b層のシルト~中砂を主体とする氾濫堆積物によって形成されており、池島I期地区の7微高地と同一の微高地と考えられる。尚、微高地上から弥生時代前期に属すると考えられる弥生土器壺底部1点(469)が出土した。微高地の南側中央では、検出長2.5 m、最大幅1.3 m検出面からの深さ0.25 mのA633水口を確認した(図69、写真40、図版20)。埋土の大部分は青灰色の粘土~シルトからなり、部分的に有機物が見られた。水田側に向かって傾斜しており、接続する水田面上に水流による抉れが観察されたことから、水田への給水の機能を具備していたと考えられる。水田域はA509流路西岸付近がT.P.2.0~2.1 mで最も高く、西に向かって下がって行き、調査区南西付近でT.P.1.7 m前後の最も低い箇所が見られる。調査区内では少なくとも35筆前後が確認された。畦畔の遺存状況の比較的良好な水田1筆の面積は、最小で35.8 m²、最大で202.3 m²である。水田を区画する畦畔の規模は、下端幅がおよそ0.2~0.5 m、高さが0.03~0.07 m程度であった。A561・563・572の畦畔、A564・571の畦畔、A579・580・590・605・606の畦畔、A593・595・

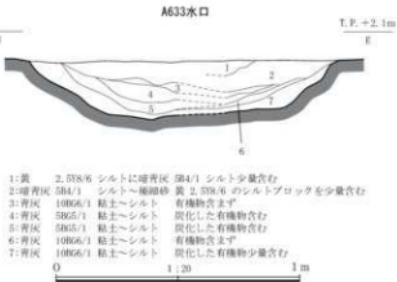


図69 第13面 遺構図(1)



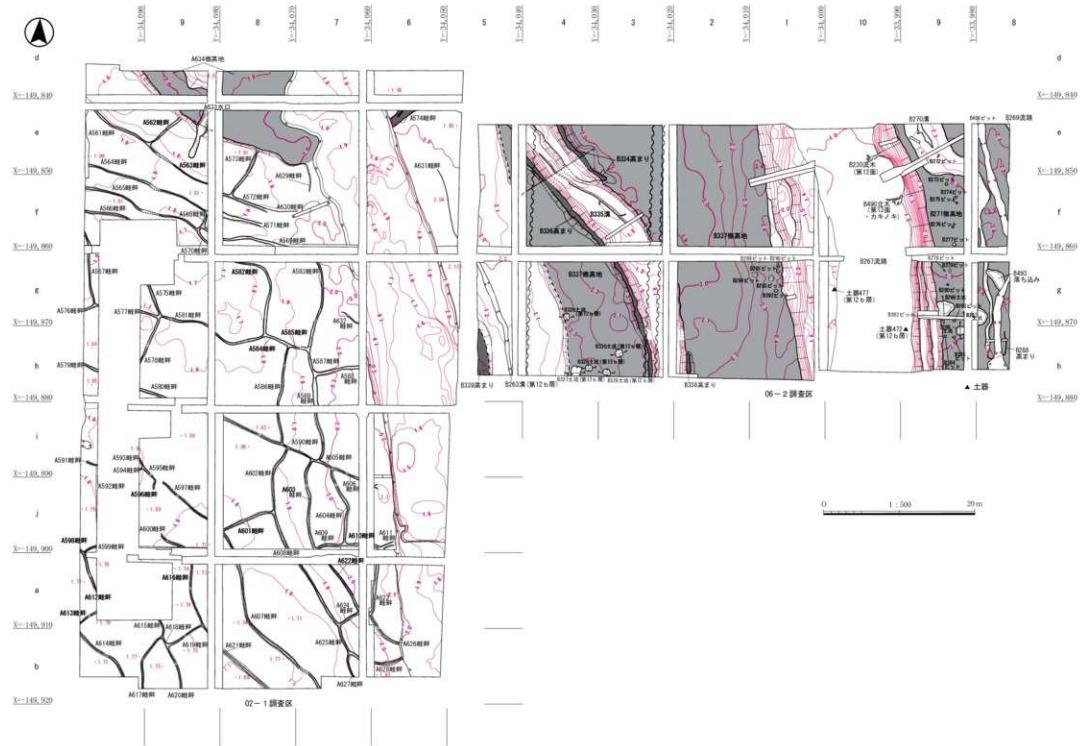


図 70 第 13 面 平面図

597・607の畦畔などが、幹線畦畔として南東から北西方向に直線的に配置され、その間に支線畦畔が廻らされている。A509流路より東側においてA574やA631などの畦畔が部分的に検出されており、また流路西岸の畦畔の検出状況などから、第13段階ではA509流路の範囲にも水田が本来存在し、A509流路により削平された可能性を考えられる。水田への給水については、調査区北側の水田はA633水口から取水していたと考えられるが、調査区中央や南側のT.P.2m前後の水田については、A509流路の範囲などに給水のための水路や水口などが存在し、それらから取水が行われた可能性も考えられよう。畦畔には水口などの施設は確認されておらず、水田区画への配水は主に畦越しにより行われたと推定される。

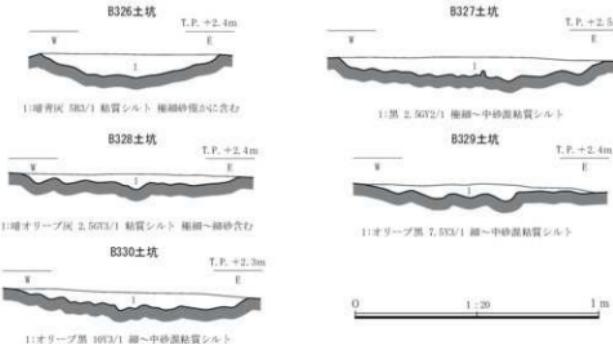
02-1調査区で確認された水田は、調査区に西接する池島Ⅰ期地区のK地区（廣瀬編2007）の統計に相当する。A633水口はK地区の21流路からの取水が想定される。排水についてはK地区と同様に17流路への排水が考えられ、北側の水田についてはK地区北西の低い部分から、中央および南側の水田は南側から流路へ排水されていたと考えられる。尚、02-1調査区においても排水用の水口等は確認されなかった。

06-2調査区西半のB337微高地は、微高地東側のB267流路沿い付近がT.P.2.4m前後と最も高く、北西に向かって傾斜しており、微高地北側でT.P.1.9m台の最も低い箇所がみられる。この微高地は、主に第13b層の細砂～粗砂を中心とする氾濫堆積物によって形成されていた。遺構については、微高地の西寄りでB335溝、微高地の南西隅でB326～330土坑、東側中央でB289～294ピットを検出した。B335溝（図56、図版20・21） 南から北西方向へと走る溝で、幅4.5～5.9m、検出面からの深さは0.2～0.5mを測る。断面の観察から、底部付近の埋土には第14～2層に由来するブロック土が見られ、掘削が第14～2層にまで及んでいた。溝の両側に見られる第13b層の内、68層が溝側に重れ込んでいる様相が見られることから、第13b層が堆積する過程で生じた、低くなった自然地形を利用して掘削されたと推察される。溝の埋土の堆積状況より、溝が埋まるごとに再加工が繰り返されたことが想定される。溝の西側ではB336高まり、溝の東側の北と南ではそれぞれB334・B338高まりを検出した。幅は2m前後を測り、最も厚い部分で厚さ0.2m程の盛土が施されていた。断面の観察から、盛土内に第14～2層に由来するシルトのブロックが含まれていることが確認され、溝の加工が第14～2層に及んだ際、排出した土を利用して高まりを構築したことが推定される。

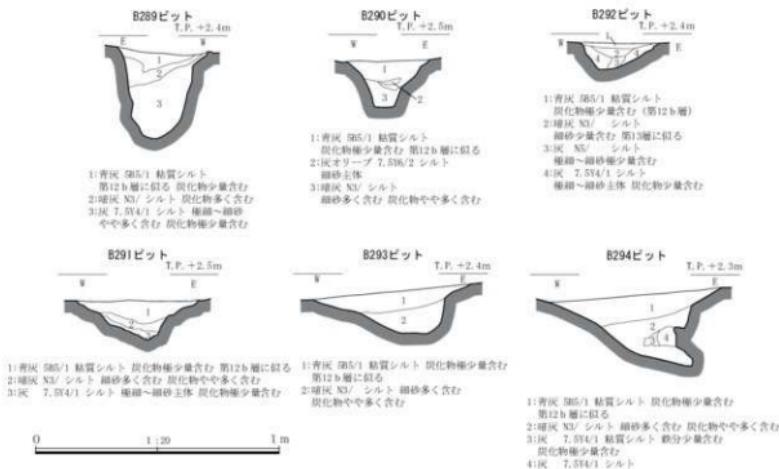
B326～330土坑（図71①） これらは円形もしくは隅丸方形を呈する径1m前後の土坑である。検出面からの深さは0.06～0.1mと比較的浅い。埋土は主に細砂～中砂を含む粘質シルトであり、ベースの第13層と比べ砂粒が目立つ。埋土の様相や検出面からの深さが浅いことなどから、上面に帰属する可能性が高いと考えられる。遺物は出土していない。

B289～294ピット（図71②） これらはB337微高地東端のB267流路西岸に相当するT.P.2.3～2.4mのやや高い箇所で確認した。平面はいずれも円形であるが、深さは浅いもので0.1m前後、深いもので0.38mであり、底部の形状は不整形なものが多い。埋土は2～3層程度に細分可能で、いずれも上部には第12b層に由来すると考えられる青灰色の粘質シルトがみられ、下部には炭化物の見られる暗灰色のシルトを含んでいた。位置に規則性は見られず性格は不明である。また、遺物は出土していない。

B337微高地と調査区東側のB271微高地との間に位置するB267流路は、X=-149.860ラインの断面観察部分付近で幅20～21mを測る（図72、写真43）。第11b層段階のB197流路とほぼ同じ位置において確認した流路であり、第13層段階から第12b層段階にかけて流れていたと推定される。



① B337 微高地 土坑 (第 12 b 面)



② B337 微高地 東端のピット

図 71 第 13 面 遺構図 (2)

流路底は掘削限界の T.P. 0.9m より下にあるため、正確な深さは不明であるが、2.5m 前後はあったと考えられる。流路の東岸はベースの地層が抉られ急角度で傾斜しており、攻撃面と考えられるのに対し、西岸は傾斜が比較的緩やかである。流路内堆積物は、西肩付近に見られるシルトを間に挟む極細～細砂の堆積物と、流路幅のおよそ 3 分の 2 を占める中砂～細礫からなる堆積物、およびその上部に見られる木片などの有機物を多く含む粘土～シルトの堆積物に大別される。まず、西肩付近の堆積物が流路によりもたらされた後、急流により粗い砂礫の堆積物が流路内に堆積し、さらにその後は緩やかな流水により有機物を含む粘土～シルトの堆積物が形成されたと考えられる。

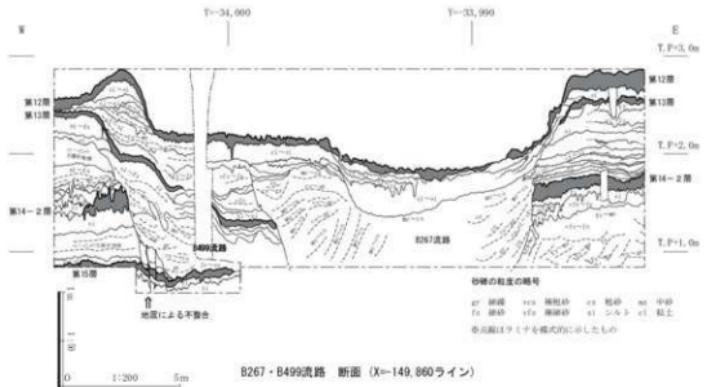


図 72 第 13 面 遺構図 (3)

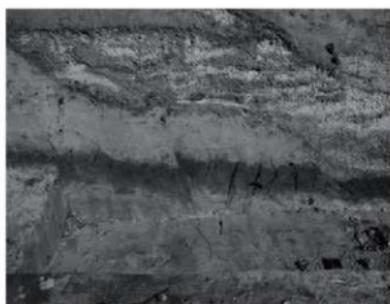


写真 42 B499 流路 下部 断面 (南から)



写真 43 B267 流路 東肩 断面 (南から)

B267 流路堆積物中から弥生時代前期～中期初頭に属すると考えられる土器が出土している。図 70 に出土位置を示した土器 472・477 は、いずれも前期の所産と考えられる。

調査区の南西隅では、B339 高まりを検出した。検出長 7.3 m、検出幅 1.8 m、高さ 0.1 ~ 0.15 m を測る畦畔状の高まりである。02-1 調査区の水田域と一連の遺構の可能性が考えられる。

06-2 調査区東側で検出された B271 微高地は、検出範囲の中ほどが T.P.2.6 m と最も高く、北側に向かって下がっていき、最も低い北東部分で T.P.2.07 m を測る。この微高地は第 13 b 層の粘土～細砂主体の氾濫堆積物により形成されていた。微高地の西側、B267 流路東岸付近では、比較的多数の土坑・ピットを検出した。これらのうち微高地南半で確認した B266・287 の 2 基の土坑については、断面の観察から第 13 b 面に帰属すると考えられるが、当面で存在を確認したため、本項にて記述することにした。なお、第 13 b 面段階の B419 微高地において、さらに多くの土坑やピットを検出した。当面検出の土坑・ピットと第 13 b 面検出のものとでは、あまり時期差がなく関係性があると考えられるため、これら遺構の性格等については、次項および総括で詳述する。また、微高地の南端では畦畔を確認した。



写真 44 第 13 b 面 B266 土坑（西から）

B269 流路 調査区北東隅で部分的に検出された流路である。東接する 04-2 調査区第 13 面の 358 流路の一部と考えられる。

B270 溝 B271 微高地北側で検出された、検出長 3.64 m、幅 0.48 ~ 0.62 m、検出面からの深さ 0.1 m 前後の溝である。

B266 土坑（図 73、写真 44）楕円形の土坑で、長軸の方向は西一東である。長軸 2.08 m、短軸 1.85 m、検出面からの深さは 0.51 m を測る。埋土は灰～オリーブ灰色のシルトの混じる細砂である層と、加工時に形成されたと考えられる褐灰色

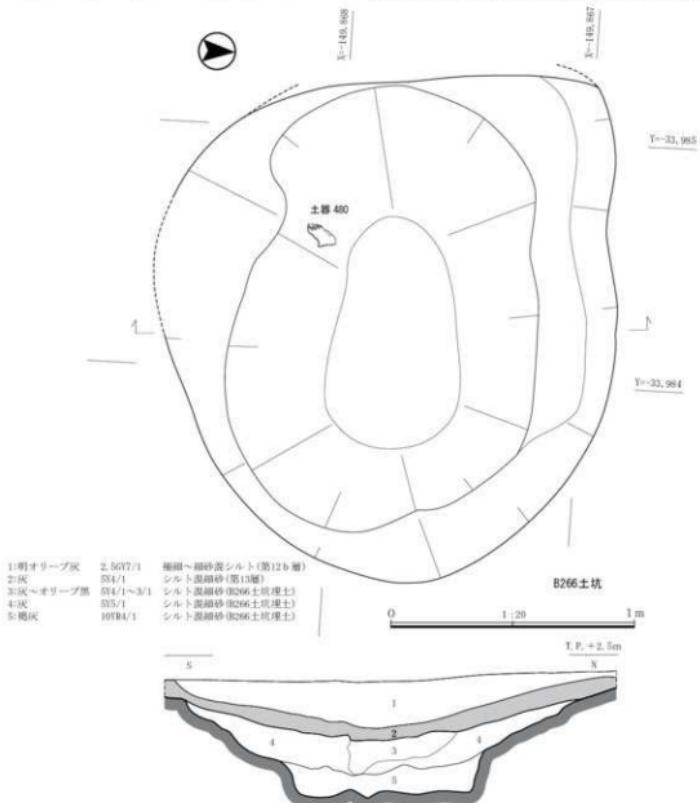




写真45 第13 b面 B287土坑（東から）

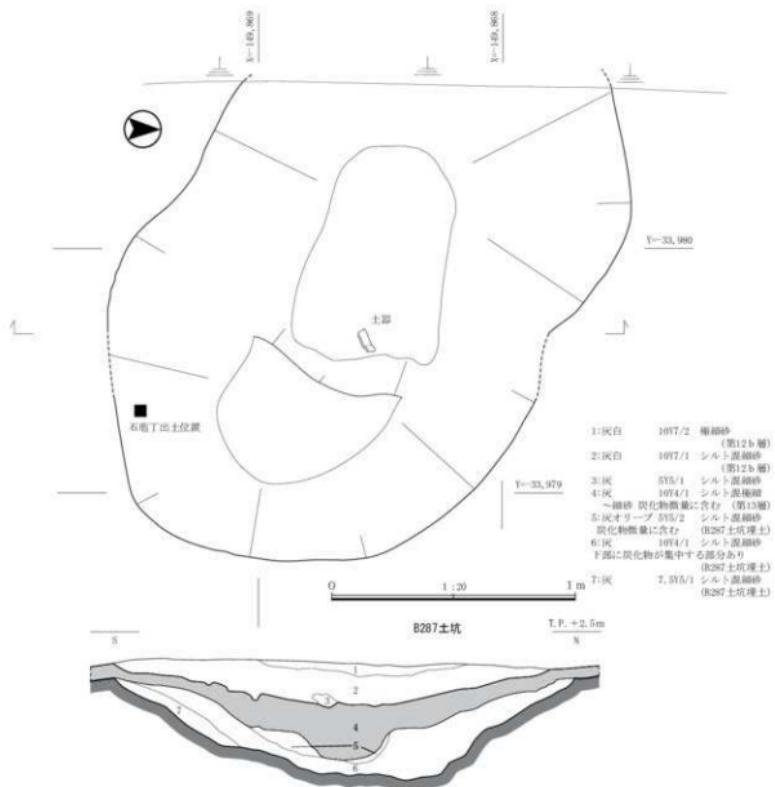
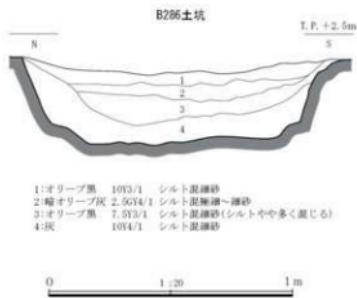
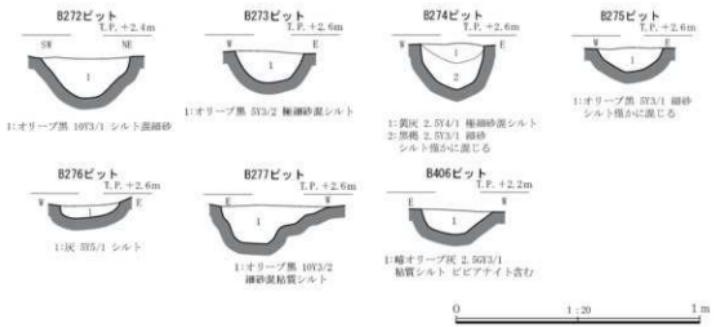
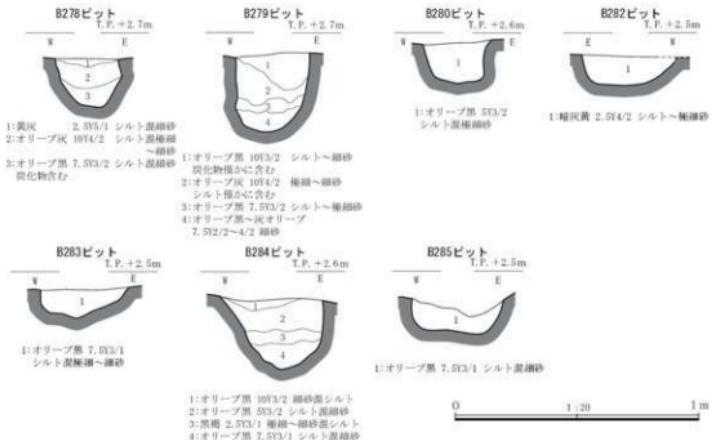


図74 第13面 遺構図(5)



① B271 微高地北半のピット



② B271 微高地南半のピット

図 75 第 13 面 遺構図 (6)

でシルト混じりの細砂の層からなる。埋土上面には第 12 b 層および第 13 層が落ち込んでいる状況が確認され、第 13 b 層に帰属すると考えられる。遺物は弥生時代中期初頭に属すると考えられる鉢(480)が出土した。尚、この土器は第 13 b 面 B399 土器出土地点の土器と接合した。

B286 土坑(図 74) 長軸 1.31 m、短軸 1.07 m、検出面からの深さ 0.42 m を測る楕円形の土坑であり、長軸は南北の方向をとる。埋土はシルトの混じるオリーブ黒色や灰色の細砂からなる。遺物は出土していない。

B287 土坑(図 74、写真 45) B266 土坑とほぼ同規模で、やはり平面形が楕円を呈する土坑である。長軸 2.55 m、短軸 1.75 m、検出面からの深さ 0.5 m を測り、長軸の方向は西北西一東南東をとる。埋土はシルトの混じる灰オリーブ～灰色の細砂からなり、部分的に炭化物が見られた。埋土上面には B266 土坑と同じように第 13 層と第 12 b 層が落ち込んでおり、第 13 b 層に帰属すると考えられた。

遺物は弥生時代前期に属すると考えられる壺（478）・甕（479）、および石庖丁（481）が出土している。また、埋土を洗浄したところ炭化米が2点出土した。

B272～277、406 ピット（図75①） 微高地北半で確認された、直径0.26～0.42m、検出面からの深さは浅いもので0.06m、深いもので0.19mのピットである。いずれも平面は円形もしくは楕円形を呈しており、埋土はB274ピットが2層に細分される以外は単層であり、オリーブ黒色で細砂の混じるシルトのものが多い。

B278～280、282～285 ピット（図75②） B271微高地南半のピットについて一括して述べる。いずれも平面は円もしくは楕円形を呈し、直径0.25～0.42m、検出面からの深さは0.12～0.33m程度である。埋土はB278・279・284ピットの3基が3～4層に細分可能で、これら以外は単層であった。埋土の多くはオリーブ黒色で細砂の混じるシルトである。遺物はB280・B282ピットからそれぞれ弥生土器片が1点ずつ出土したが、いずれも図化し得ない細片であった。

B493 落ち込み B271微高地南半の20N-8g区で確認した、楕円形に近い不整形を呈する、深さ約0.05mのくぼみである。自然地形の落ち込みと考えられる。

B288 高まり B271微高地南端、20N-8h区において畦畔状の高まりを検出した。検出長約3m、高さは0.3m前後を測る。

B490 立木 20N-9f・10f区のB267流路内で出土した立木である。樹種はカキノキであった。（飯田）

第13 b面（第13面ベース）（図76、巻頭図版1、写真46・47、図版22～25）

土壤層の第13層を除去し、検出した遺構面であり、主に氾濫堆積物のシルト～中砂からなる第13b層の上面に相当する。地形は第13面とほぼ同じで、全体的には東から西へと下がっており、最高地点は東側のB419微高地におけるT.P.2.58 mであり、最低地点については西側の1N-9g区付近でT.P.1.62 mの箇所が見られる。02-1調査区側では、北側で微高地、くぼみ、溝群、畦畔の痕跡が確認され、また南西側の1N-10i区では溝が確認された。06-2調査区側では調査区の3分の1程度の面積を微高地が占めており、東端の微高地では多数の土坑、ピット、小規模な溝を検出した。これら東端の微高地の遺構の多くは第13層が形成される過程で掘り込まれたと考えられ、第13面検出の遺構と一連の時期のものと考えられる。

02-1調査区北側のA696微高地は、第13面段階のA634微高地に相当し、標高はおよそT.P.1.8～2.0 mである。微高地の南辺に沿ってA648くぼみを検出した。くぼみは長さ40 m、幅4～6 m、検出面からの深さ0.05 m前後を測り、灰色の粘土～シルトで埋まっていた。また、くぼみの内側および南側で畦畔の痕跡（A635～639畦畔）を確認した。自然地形の可能性が考えられるこのようなくぼみが水路として利用された後、水田が次第に形成されていき、第13面段階において、調査区の大半に広がる水田域が成立するという景観の変遷が想像される。

A648くぼみの北西側、1N-10d区では地震の液状化現象に伴う噴砂を検出した。第13b層上層の粘土～シルトの面に、第13b層下層の粗砂～極粗砂の砂脈が約0.1 mの長さで、約20カ所見られた。02-1調査区北東隅から06-2調査区北西側の平坦な箇所では、溝を8条（A640～645溝、B416・417溝）確認した。幅0.2～1 m、検出面からの深さ0.1～0.3 m前後の溝が様々な方向で掘削されていた。埋土については、A640～645溝が暗緑灰色（5G4/1～10G4/1）のシルト～極細砂、B416・417溝が灰色（N4/）の細砂～中砂の混じるシルトであり、いずれもベースに比べやや砂礫が多く含まれていた。また、02-1調査区の1N-10i区においても幅0.7～1 m、検出面からの深さ0.1 m前後の溝（A646・647溝）が部分的に確認された。これら溝のうちA644・645溝については、第13面段階の畦畔に近接した位置であり、これら畦畔の造成に関わる可能性が考えられる。それ以外の溝については位置関係や方向に規則性は見出せず、性格は不明である。また、いずれの溝からも遺物は出土していない。

06-2調査区西側では、標高T.P.2.03～2.37 mのB495微高地を確認したが、微高地上面では遺



写真46 06-2調査区 第13b面 西半（北東から）



写真47 06-2調査区 第13b面 遺構集中部（南から）



図 76 第13 b面 平面図

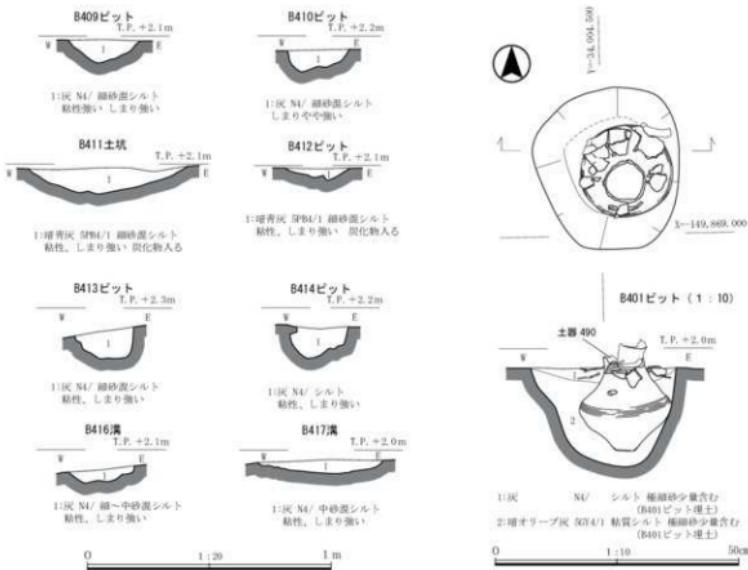


図 77 第 13 b 面 遺構図 (1)

構は確認されなかった。この微高地の西側、T.P.2.16 ~ 2.18 m の箇所で微高地の縁辺に沿って土坑 1 基 (B411)、ピット 4 基 (B409・410・412・413) を、また調査区西端の 1N - 5h 区でピット 1 基 (B414) を検出した。

B411 土坑 (図 77) 長軸 0.8 m、短軸 0.65 m、検出面からの深さ 0.1 m の円形に近い不整形の土坑である。埋土は第 13 層に由来すると考えられる暗青灰色の細砂混シルトからなり、細砂～中砂主体のベースと容易に区別することができた。

B409・410・412 ~ 414 ピット (図 77) いずれも、直径 0.21 ~ 0.29 m、検出面からの深さ 0.1 ~ 0.15 m 前後の円形のピットである。やはり第 13 層に由来すると考えられる灰～暗青灰色の細砂混シルトが入っており、周囲の細砂～中砂主体のベースとの違いが明瞭であった。

これらの土坑・ピットの内、B411 土坑と B410・412 ~ 413 ピットは微高地縁辺に沿って 2 ~ 3 m の間隔で 1 列に存在し、性格は不明であるが、人為的に掘削された可能性は比較的高いと考えられる。

B495 微高地の東では、第 13 面で既に述べたが、第 13 b 層段階で掘削されたと考えられる B335 溝が南から北西方向へと走っていた。

06-2 調査区のほぼ中央では標高 T.P.2.2 ~ 2.4 m の B496 微高地を検出した。この微高地は、B499 流路により形成された自然堤防に相当すると考えられる。微高地上では遺構は確認できなかった。微高地の東側斜面、B499 流路西岸の 1N - 1g 区では、第 13 b 層掘削中に B401 ピット (図 77、図版 25) を検出した。長軸 0.34 m、短軸 0.3 m、検出面からの深さ 0.2 m を測る円形に近い不整形のピットである。埋土は灰色で極細砂を含むシルトと暗オリーブ灰色の極細砂を含む粘質シルトの 2 層からなる。ピット

内には、口縁付近が一部破損しているが、ほぼ完形の弥生時代前期後半に属すると考えられる壺(490)が正位置で1個体据えられていた。

06-2調査区東側のB419微高地(図78、図版22)は、第13面のB271微高地に相当する。中央の20N-9e区付近におけるT.P.2.58mの箇所が最も高く、北東方向と南東方向に向かって下がっており、北東の20N-8e区でT.P.1.98m、南東の20N-8h区でT.P.2.2mを測る。微高地上では土坑・ピット・小溝を多数確認した。まず土坑について、遺構番号順で述べる。

B340土坑(図79、写真48、図版22)微高地北半の20N-8e・9e区で確認した、平面形が若干いびつな楕円形を呈する土坑である。長軸2.27m、短軸1.35m、検出面からの深さ0.47mを測り、掘削は第14-2層まで及んでいた。長軸の方向は北北西-南南東である。埋土、垂れ込み土については7層に細分可能であった。1層は第12b層と考えられる明緑灰色のシルト～極細砂、2層は第13層と考えられる灰色の細砂混シルトであり、いずれも遺構埋土上に垂れ込んでいた。3層は灰色の炭化物をラミナ状に含む細砂混シルト、4層はオリーブ灰色の細砂混粘質シルトで炭酸カルシウムの結核を含み、5層は灰色の粘質シルト、6層はオリーブ灰色の炭化物を多量に含む細砂混シルトであった。最下層の

7層は第14-1・14-2層に由来すると思われる細砂混シルトのブロックを含むオリーブ灰色の粘質シルトであり、土坑の加工時に形成された層と考えられる。埋土中から弥生I様式の壺の底部(484)を含む、弥生土器の細片が出土している。尚、484とは別の壺の底部がB428土坑出土の壺(492)と接合した。また、埋土を洗浄したところ、ノブドウ属の種子が1点出土した。

B341土坑(図80、図版23) 微高地南半の20N-8g区で検出した円形に近い楕円形の土坑である。



図78 第13b面 B419微高地 平面図



写真 48 第13面 B340土坑（南西から）

長軸 0.83 m、短軸 0.74 m、検出面からの深さ 0.08 mを測る。埋土の上面には被熱して灰色に変色した砂礫の混じるシルト（1層）や黄色の被熱したブロック土（2層）が見られた。3層は明緑灰色の細砂～中砂の混じるシルト、4層は炭化物を僅かに含む青灰色の細砂混シルトであった。遺物は出土していない。

B342 土坑・B404 ピット（図 80、図版 23） 微高地 南半の 20N-9h 区で確認した土坑・ピットである。B404 ピットが土坑を切っていたため、ピットにつ

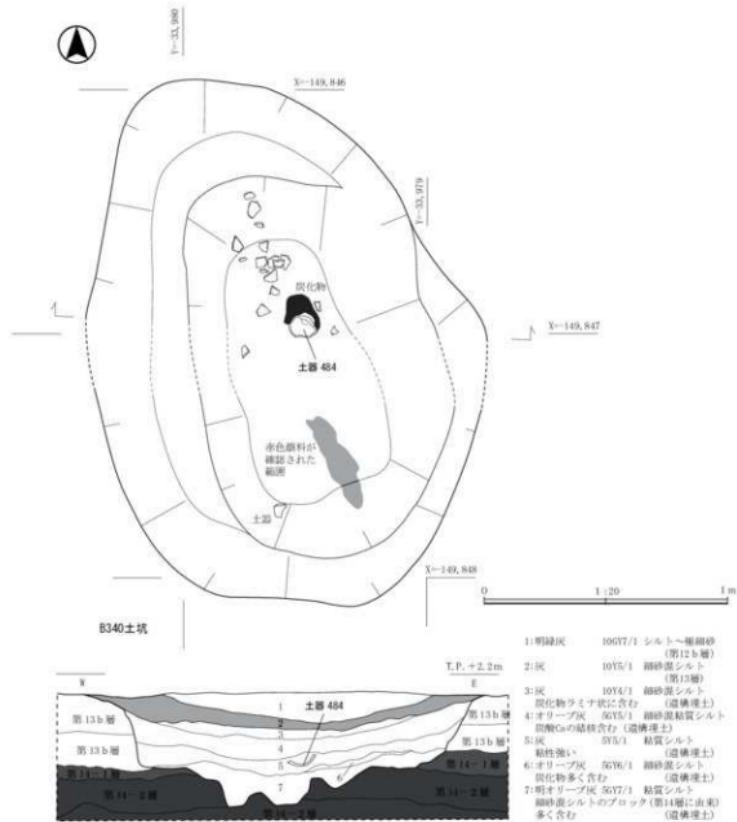


図 79 第13b面 遺構図（2）

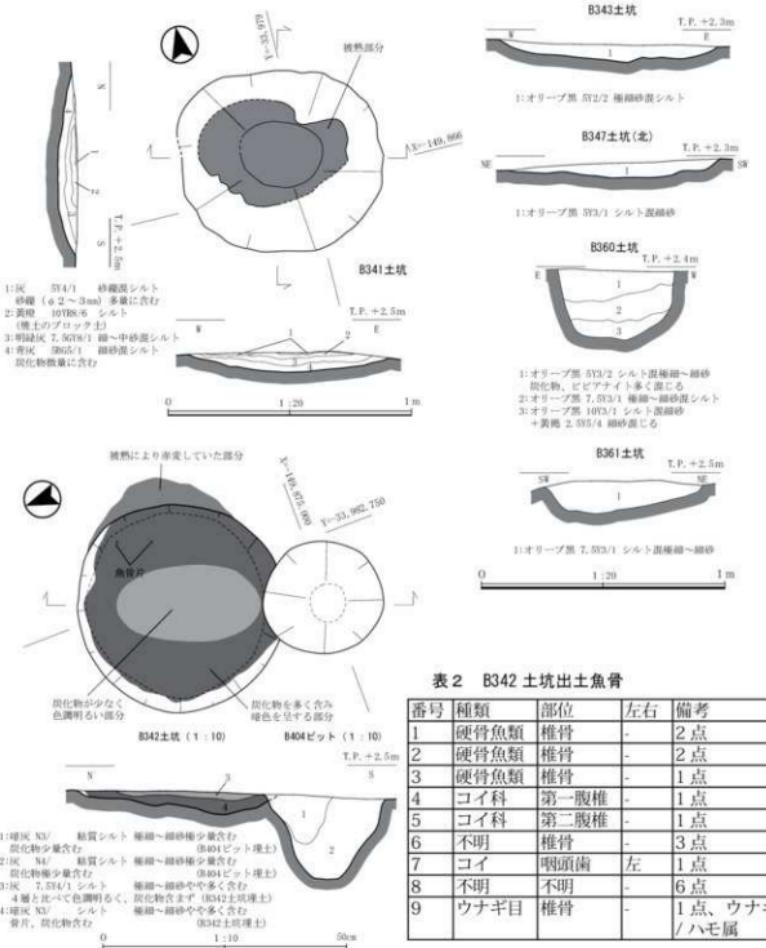


図 80 第13 b面 遺構図(3)

いてもここで併せて詳述する。土坑の平面はほぼ円形であり、規模は、直径0.45m前後、検出面からの深さ0.05mを測る。埋土は2層に分層可能であり、下層はB341土坑と同じく被熱した土を含んでいた。上層は灰色の極細砂～細砂を含むシルトであり、炭化物を含まないに対し、下層は暗灰色の極細砂～細砂を含むシルトで、焼土・炭化物を含んでいた。尚、埋土下層から被熱した小動物の骨片が出土した。京都大学大学院(現 標原考古学研究所)の丸山真史氏に鑑定していただいたところ、コイの咽頭歯やコイ科の魚類の腹椎、ウナギ目の魚類の椎骨などが含まれており、いずれも白色を呈すること

から強く被熱したことが考えられるとのことであった(表2)。また、埋土を洗浄したところ、炭化米2点、タカサゴウの種子2点が出土した。B404 ピットは平面が円形で直径0.25m、検出面からの深さ0.17mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は暗灰色を呈する極細砂～細砂を微量に含む粘質シルト、下層は灰色で極細砂～細砂を微量に含む粘質シルトであり、両層に炭化物が少量混じっていた。埋土を洗浄したところ、カナムグラの種子が1点出土した。

B343 土坑(図80) 微高地南半の20N-8g区で検出した、平面が円形を呈する土坑である。直径0.9m、検出面からの深さ0.09mである。埋土はオリーブ黒色の極細砂の入るシルトである。

B347 土坑(図80) 微高地南半の20N-8h区で確認した、平面が楕円形に近い不整形の土坑である。長軸1.7m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.08mであり、長軸は北北西～南南東の方向である。埋土はオリーブ黒色のシルトの混じる細砂であった。埋土中から弥生土器の細片が1点出土しているが、図化し得ず、時期は不詳である。

B348 土坑(図81) 微高地南半の20N-9h区で確認した、不整形の土坑である。調査区南端で部分的に検出し得た土坑であり、規模は、断面を観察した箇所で幅4.4m、検出面からの深さ0.8mを測る。掘削は第14-2層にまで及んでいた。埋土直上には第13層が重ね込んでいる状況が確認できた。埋土は6層に細分可能であり、2～5層については灰オリーブ色のシルトと灰色のシルトが互層状に堆積していた。6層はオリーブ黒色の細砂～中砂を含むシルトである。最下層の7層は第13b、14-1、14-2層の各層に由来するブロック土が混じる青灰色のシルト層であり、土坑の加工時に生じたと考えられる層である。

B349 ピット(図81、図版24) ピットであるが、遺物の出土状況がやや特殊だったので、ここで土坑と一緒に詳述する。微高地南半の20N-9g・9h区で検出した平面円形のピットである。直径0.4m、検出面からの深さ0.1mを測り、シルトの混じる灰色の細砂で埋まっていた。埋土中から数cm大の土器の細片が多数出土した。これら土器細片の中には弥生時代中期初頭の所産と考えられる甕(485)が含まれていた。出土状況から意図的に破碎された可能性も考えられる。

B360 土坑(図80) 20N-9g区で確認した平面が円形を呈する土坑であり、直径0.48m、検出面からの深さ0.29mを測る。埋土は3層に分けることが可能で、大半はオリーブ黒色のシルト混極細砂～細砂、ないしは同色の極細砂～細砂混シルトであった。

B361 土坑(図80) B360 土坑の南西1.5mの位置で検出した平面が楕円形の土坑である。規模は長軸0.65m、短軸0.6m、検出面からの深さ0.14mであり、長軸の方向は東北東～西南西である。埋土はオリーブ黒色のシルト混極細砂～細砂の単層であった。

B367 土坑(図81) 20N-9h区で確認した、平面が楕円形に近い不整形を呈する土坑である。東西に細長い土坑であり、長軸0.69m、短軸0.58m、検出面からの深さ0.21mを測る。埋土は、黒褐色でシルト～中砂の1層と、オリーブ黒色で炭化物を含むシルト～細砂の2層からなる。1層から弥生時代前期に属すると考えられる甕底部(486)を含む土器の細片と風化した砂岩が出土している。

B374 土坑・B415・418 ピット(図81、図版24) 20N-9h区で検出した、平面形が円形に近い不整形の土坑と、土坑内で検出した円形のピット2基である。土坑は比較的浅く底部は皿状であり、東西0.91m、南北1.01m、検出面からの深さ0.06mを測る。埋土は灰～褐色の極細砂～細砂を含むシルトであり、被熱し赤変した部分が観察された。特に2層には炭化物が多く含まれており、また弥生時代中期に属する甕口縁片を含む弥生土器片やサヌカイト片2点(487・488)が出土した。埋土を洗浄したところ、

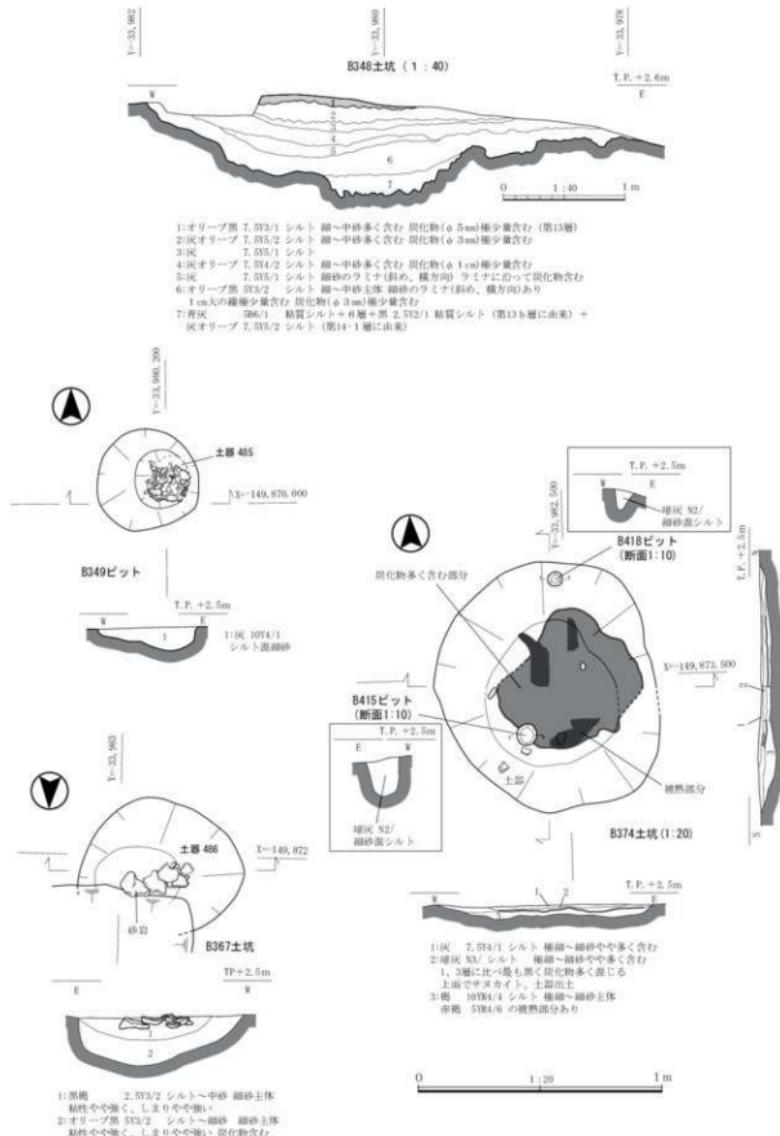


図 81 第13 b面 遺構図 (4)

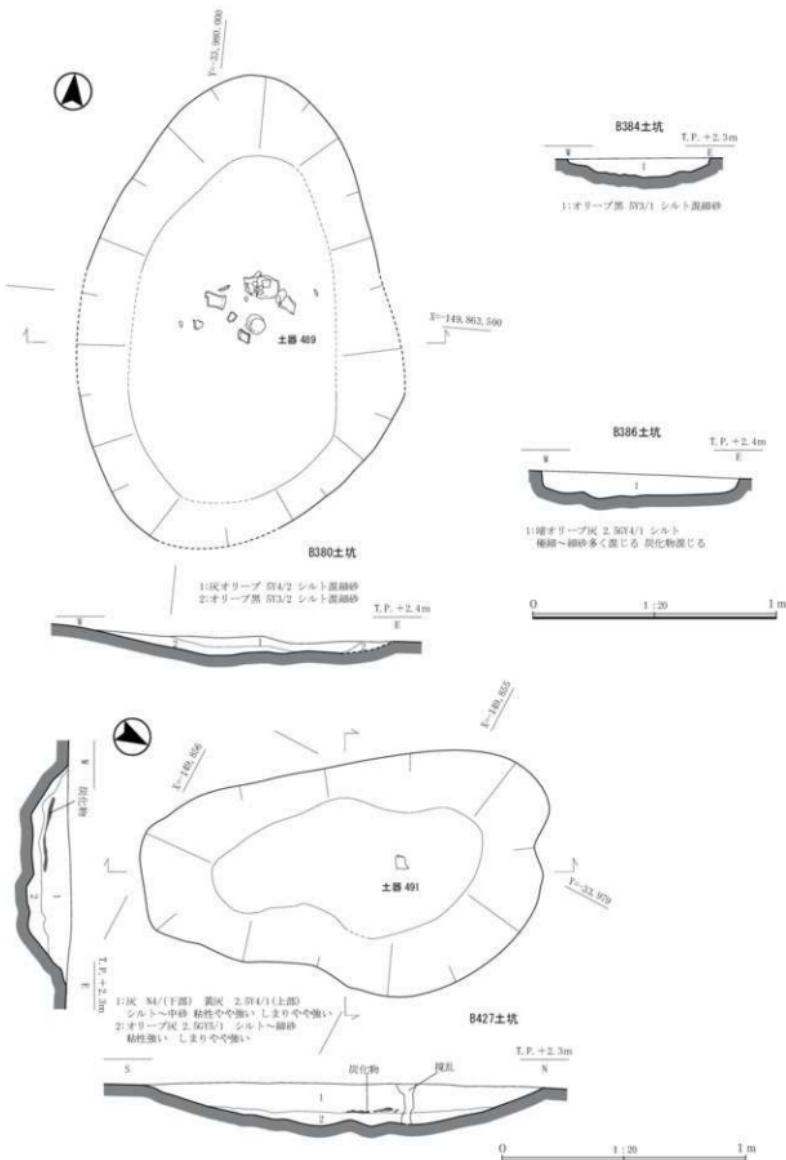


図 82 第13 b面 遺構図(5)

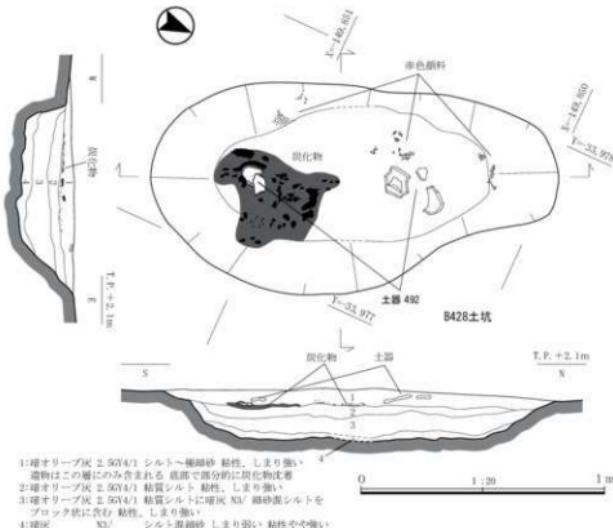


図 83 第 13 b 面 遺構図 (6)

炭化米 44 点、ナデシコ科の種子 6 点を確認した。2 基のピットについては、いずれも直徑 0.1 m、深さ 0.1 m 前後の小形のものであり、暗灰色の細砂混シルトで埋まっていた。

B380 土坑 (図 82) 20N - 8g・9g 区で確認した、平面が南北に細長い楕円形の土坑である。規模は、長軸 2.01 m、短軸 1.41 m、検出面からの深さ 0.1 m を測る。埋土は 2 層に分層可能であり、上層の灰オリーブ色のシルト混細砂と、下層のオリーブ黒色のシルト混細砂からなる。土坑の中央付近で弥生時代中期と考えられる甕 (489) を含む弥生土器が出士した。

B384・386 土坑 (図 82) 20N - 8g 区で検出した、2 基ともに平面が円形を呈し、比較的浅い皿状の土坑である。B384 土坑は直徑 0.59 m、検出面からの深さ 0.08 m を測り、埋土はオリーブ黒色のシルトの混じる細砂の単層であった。B386 土坑は直徑 0.81 m、深さ 0.07 m を測り、埋土は暗オリーブ灰色の極細砂～細砂の混じるシルトの単層であり、炭化物が含まれていた。

B427・428 土坑 (図 82・83・90、写真 49) 微高地北半の 20N - 8f 区で検出した、いずれも長軸が北北西～南南東をとる、ほぼ楕円形を呈する土坑である。規模は B427 土坑が長軸 1.64 m、短軸 0.9 m、検出面からの深さ 0.23 m、B428 土坑が長軸 1.68 m、短軸 0.86 m、検出面からの深さ 0.23 m を



写真 49 第 13 b 面 B428 土坑 (南から)

測る。B427 土坑の埋土は、1 層が灰～黄灰色のシルト～中砂、2 層がオリーブ灰色のシルト～細砂となり、1 層下部で炭化物を検出した。また、1 層から弥生時代前期後半に属すると考えられる甕（491）が出土した。B428 土坑の埋土は 1 層が暗オリーブ灰色のシルト～極細砂、2 層が暗オリーブ灰色の粘質シルト、3 層が暗灰色のシルトのブロックが混じる暗オリーブ灰色の粘質シルト、4 層は暗灰色のシルト混細砂であり、1 層から炭化物、赤色顔料を検出した。また、1 層から弥生時代中期初頭に属すると思われる甕（492）が出土した。尚、この土器は先述のように 4 m 北西に位置する B340 土坑出土の甕底部と接合した。さらに、B428 土坑の埋土を洗浄したところ、スミレ科 9 点、ナデシコ科 2 点、タデ属 6 点、ブドウ属 1 点、キイチゴ属 2 点、カナムグラ 1 点の各種種子が出土した。尚、これらの土坑はそれぞれ第 14 ～ 1 面・第 14 ～ 2 面で検出した。しかし、検出位置、長軸の方向、規模、埋土の様相、出土遺物、埋土に赤色顔料や炭化物が含まれる点など、第 13 b 面の B340 土坑と共通する特徴が多く見られることから、B340 土坑と同時に、同様の目的で掘削された遺構と考えられるため、本項で記述することにした。

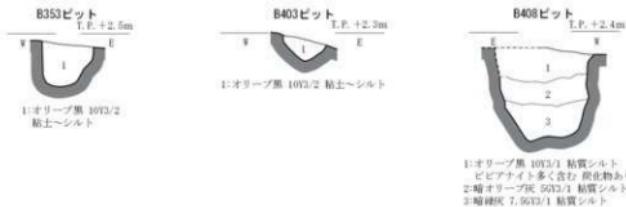
次に、ピットについて B419 微高地の北側から、地区ごとにまとめて詳述する。

B353・403・408 ピット（図 84 ①） 微高地北側の 20N ～ 8e・9f 区で検出したピットである。平面形は B353・408 ピットの 2 基が円形、B403 ピットは不整形である。B353・403 ピットは直径・幅 0.2 m 前後、検出面からの深さ 0.2 m 未満の小規模なピットであり、埋土もオリーブ黒色の粘土～シルトの単層であった。これらに対し B408 ピットは復元直径 0.39 m、検出面からの深さ 0.38 m とやや大きく、粘質シルトの埋土も炭化物を含むオリーブ黒色、暗オリーブ灰色、暗緑灰色の 3 層に細分可能であった。3 基それぞれ間隔が 5 m 以上離れており、明確な関連性は見出し難い。

B355・356・358・359・362・405 ピット（図 84 ②） 微高地南側の 20N ～ 9g 区で確認したピット群についてまとめる。いずれも平面は円形であり、直径は B405 ピットの 0.26 m を除いて、0.3 m 以上 0.4 m 未満の範囲に収まる。検出面からの深さについては 0.1 m 以上～ 0.2 m 未満のやや浅いもの（B355・356）、0.2 m 以上～ 0.3 m 未満のもの（B362・405）、0.3 m 以上～ 0.4 m 未満のやや深いもの（B358・359）に分かれる。これらピットの埋土の大半はオリーブ黒色のシルトの混じる細砂である。配置については、同地区内の B360・361 土坑や第 13 面検出の B278・279・280 ピットを含めた場合でも、等間隔に並ぶような規則性は見出せない。

B377 ～ 379・382・383・387 ～ 389 ピット（図 84 ③） 微高地南側の 20N ～ 8g 区を中心としたピット群である。いずれも平面は円形であり、直径については 0.2 m 以上～ 0.3 m 未満のもの（B378・387 ～ 389）、0.3 m 以上～ 0.4 m 未満のもの（B379）、0.4 m 以上～ 0.5 m 未満の比較的大形のもの（B377・382・383）が見られる。検出面からの深さは、0.1 m 未満～ 0.1 m 前後の浅いもの（B377 ～ 379・382）、0.2 m 以上～ 0.3 m 未満のもの（B387・389）、0.3 m 以上～ 0.4 m 未満のやや深いもの（B388）、0.5 m 以上のかなり深いもの（B383）が見られる。埋土については、B377 ～ 379・382 の浅いピットはいずれも単層で、オリーブ黒色のシルト～細砂である。B383・388 ピットはいずれも 2 層からなり、粘質のシルトが含まれる点が共通している。B387 ピットの埋土は 3 層、B389 ピットは単層であるが、やはりオリーブ黒色のシルト混細砂が主体を占める。配置については、B341・343・380・384・386 の 5 基の土坑も含めて検討した場合でも、やはり規則性は見出せない。尚、B383 ピットから石（花崗岩）が 1 点出土している。

B354・365・366・368 ～ 370・372・373・376・390・393 ～ 398・407・424 ～ 426 ピット（図 85） 微



① B419 微高地北側 (20N - 8e・9f区) のビット



② B419 微高地南側 (20N - 9g区) のビット



③ B419 微高地南側 (20N - 8g・9g区) のビット

0 1:20 1m

図 84 第 13 b 面 遺構図 (7)



微高地南半南側のピット

0 1:20 1m

図 85 第13 b面 遺構図 (8)



図 86 第 13 b 面 遺構図 (9)

高地南側、第 13 面検出の B266・287 土坑より南のピット群について詳述する。このピット群が最も密集度が高く、また深さ 0.5 m 前後の比較的深いピットが多く見られた。平面形は、南北に細長い楕円形の B407 ピット、不整形の B426 ピットを除く殆どが円形である。直径は 0.2 m 未満のもの (B425)、0.2 m 以上～0.3 m 未満のもの (B365・368・370・393～397・424)、0.3 m 以上～0.4 m 未満のもの (B366・369・372・373・376・390・398・426) があり、0.4 m を超えるものは見られない。検出面からの深さは 0.1 m 未満のもの

(B425)、0.1 m 以上～0.2 m 未満のもの (B366・368・370・397・407・424)、0.2 m 以上～0.3 m 未満のもの (B365・376・394)、0.3 m 以上～0.4 m 未満のもの (B354・369・373・398・426)、0.4 m 以上～0.5 m 未満のもの (B372・393)、0.5 m 以上のもの (B390・395・396) に分かれる。埋土についてはオリーブ黒色～灰オリーブ色を呈する、細砂の混じるシルトの見られるものが多い。最も深い B390 ピット (図 85、写真 50) の埋土下層には第 14 層に由来すると考えられる青黒色のシルトのブロックが含まれていた。配置について、土坑や第 13 面検出の土坑・ピットを含めて比較・検討したが、



写真 50 第 13 b 面 B390 ピット (南から)

建物を構成するような規則的な傾向は見出しえなかった。

統いて B419 微高地で確認した溝について北側から述べる。

B344～346・350～352・402 溝（図 86 ①） 微高地の北半で検出した溝（B351 溝の一部は微高地南半まで及んでいる）である。B350・351 溝は、微高地西側縁辺に沿う方向に、それ以外の溝は西側縁辺に直交する方向に走っていた。検出長は最も短い B402 溝で 1.9 m、最も長い B351 溝で 6 m であり、幅は 0.1～0.4 m、検出面からの深さは 0.04～0.08 m 前後の小規模な溝である。これら溝は、近隣のビットや土坑の埋土とほぼ同じ、暗オリーブ灰色のシルト混細砂、もしくはオリーブ黒色の極細砂混シルトで埋まっていた。切り合い関係については、B346 溝は B350 溝を、B351 溝は B352 溝を切っていた。

B363・364・385・391・392 溝（図 86 ②） 微高地南半で検出した小規模な溝についてまとめる。検出長はいずれも 2 m 未溝であり、幅は 0.17～0.3 m 前後、検出面からの深さは 0.03～0.05 m である。埋土はオリーブ黒色のシルト混細砂あるいは極細砂混シルトであり、付近の土坑やビットの埋土とほぼ同じである。B385 溝は B380 土坑を切っていた。

B371 溝（図 86 ②） 微高地南側、B374 土坑の西側を取り巻くように位置していた溝である。検出長 3.65 m、最大幅 0.65 m、検出面からの深さ 0.12～0.25 m 前後の溝である。底部の断面はゆるい V 字を呈していた。埋土はオリーブ黒色のシルト～中砂であり、この付近の土坑・ビットの埋土とほぼ同じである。B342 土坑、B372・373・404 ビットに切られており、B354 ビットを切っていた。このような切り合い関係から、付近の土坑、ビットが掘削された時期と比較的近接した時期に掘削された溝と推定される。（飯田）

第 13 面・第 13 層出土遺物（図 87）

A634 微高地（図 87－469）から弥生土器壺底部 1 点（469）が出土した。外底面はヘラケズリ調整で、外面は底面まで黒色物質が塗布されており、弥生 I 様式である。

B266 土坑（図 87－480、図版 35）から弥生土器少量が出土した。480 は鉢である。直線文 3 帯と鋸歯状の波状文を施され、弥生 II 様式に入ると思うもので、第 13 b 面 B399 土器出土地点の土器と接合した。

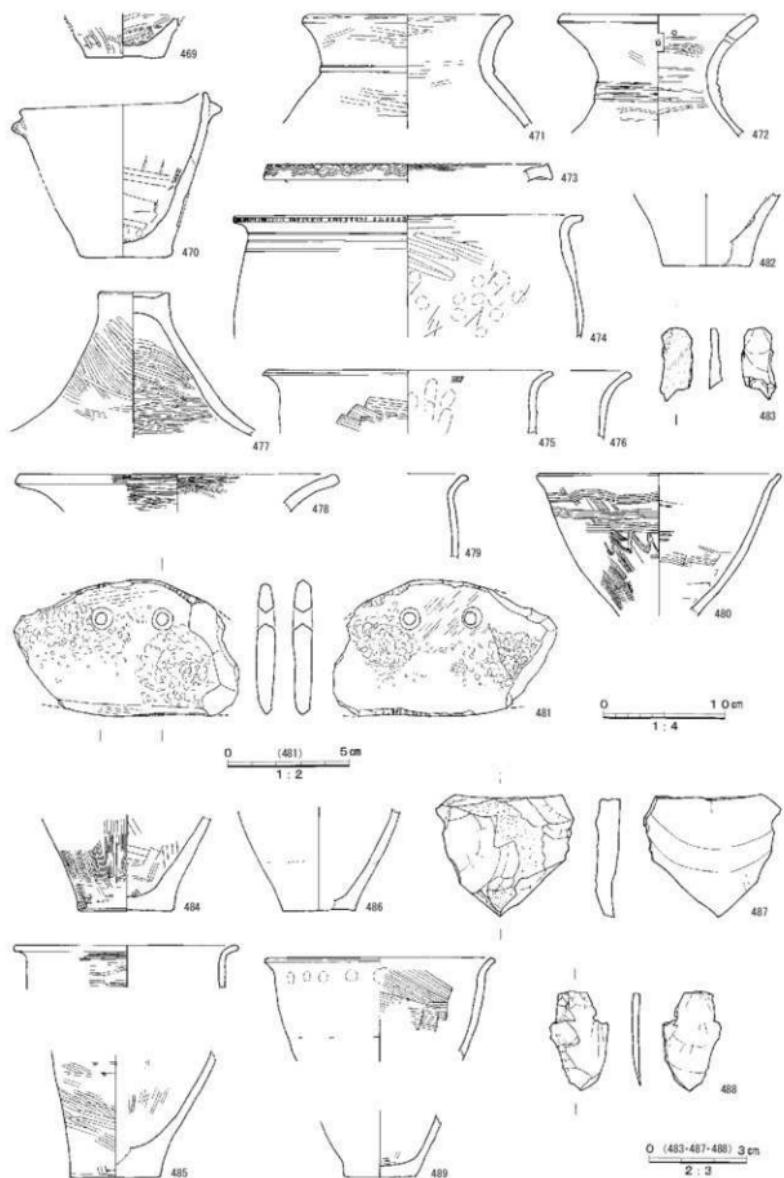
B267 流路（図 87－471～477）から弥生土器が出土した。471～473 は壺、474・476 は甕、475 は鉢、477 は甕蓋である。473・476 は弥生 II 様式でそれ以外は弥生 I 様式である。471・472 は頸部に削り出し凸帯を施され、472 は口縁部に 2 箇所穿孔されている。473 は口縁端部に刻目と櫛描波状文を施され、内面は細いヘラミガキ調整である。

B287 土坑（図 87－478・479・481、図版 36）から弥生土器、石庖丁（481）が少量出土した。478 は壺、479 は甕で、弥生 I 様式と思うものである。478 は内外面に黒色物質を塗布され、ヘラミガキ調整である。481 は緑泥石片岩製の II 類直線刃半月形で、A・B 面ともに敲打痕があり、研磨痕がある。背流れ痕は背と刃にある。

06-2 調査区 第 13 層（図 87－482・483、図版 36）から弥生土器片、サヌカイトチップ（483）が出土した。482 は底部で弥生 I 様式かと思うものである。

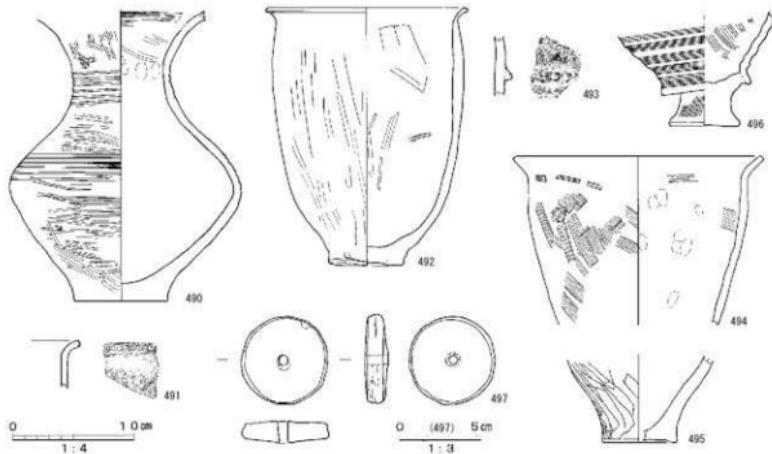
第 13 b 面・第 13 b 層出土遺物（図 87・88）

B340 土坑（図 87－484）から弥生土器片が極少量出土した。484 は甕底部で弥生 I 様式かと思うものである。外面は粗いハケメと細かいハケメ調整後ヘラミガキ調整で、ススが付着し、内面は粗いハケメ調整後ヘラミガキ調整で、一部コゲが付着している。



469 : A634 高高地。470 : (02 - 1) 第 13 b 層。471 ~ 477 : B267 流路。480 : B266 土坑。478 - 479 - 481 : B287 土坑。482 - 483 : (06 - 2) 第 13 層。484 : B340 土坑。485 : B349 ピット。486 : B367 土坑。487 - 488 : B374 土坑。489 : B380 土坑。

图 87 第 13 面 出土遗物 (1)



490 : B401 ピット、491 : B427 土坑、492・493 : B428 土坑・周辺、494 ~ 497 : (06-2) 第 13 b 層

図 88 第 13 面 出土遺物 (2)

B347 土坑から弥生土器片 1 点が出土した。

B349 ピット (図 87-485) から弥生土器壺 1 点 (485) が出土した。485 は口縁部と底部が接合しないが同一個体とした。外面はハケメ調整後ヘラミガキ調整で、ススが付着し、内面はナデ、ヘラミガキ調整でコゲが付着している。弥生 II-1 様式かと思うものである。

B367 土坑 (図 87-486) から弥生土器壺底部 1 点 (486) と砂岩 1 点が出土した。486 は外面一部にススが、内面に薄くコゲが付着している。弥生 I 様式である。

B374 土坑 (図 87-487・488、図版 36) から弥生中期と思う弥生土器壺口縁片 1 点、サヌカイト片 2 点 (487・488) が出土した。487 は A 面に自然面が残っている。

B380 土坑 (図 87-489) から弥生土器片少量が出土した。489 は弥生土器壺で口縁部と底部が接合しないが、同一片である。弥生 II 様式である。

B401 ピット (図 88-490、図版 36) から弥生土器壺 1 点 (490) が出土した。頭部と体部に 6 条の沈線文が施され、内外面ハケメ、ヘラミガキ調整である。弥生 I-4 様式である。

B427 土坑 (図 88-491) から弥生土器壺 1 点 (491) が出土した。口縁端部に刻目を施され、外面ハケメ、ヘラミガキ調整で、内面ナデ、ヘラミガキ調整である。弥生 I-4 様式かと思うものである。

B428 土坑・周辺 (図 88-492・493、図版 37・38) の埋土中から弥生土器片、土坑近くから繩文土器片が少量出土した。492 は弥生土器壺、493 は繩文土器深鉢片である。492 は B340 土坑から出土した破片と接合した。外面は板ナデ後ヘラミガキ調整でススが付着し、内面は板ナデ後ハケメ・ヘラミガキ調整で一部コゲが付着している。弥生 II-1 様式かと思うものである。493 は B428 土坑周辺から出土した D 字刻目凸帯が施された長原式である。

02-1 調査区 第 13 b 層 (図 87-470、図版 35) から弥生土器鉢 1 点 (470) が出土した。口縁部に把手が 1 個残存しているが、本来は対になっていたと考えられる。二次焼成で外表面が剥離し、赤

色化しており、内面にコゲが付着している。弥生 I 様式である。

06-2 調査区 第13 b 層(図88-494~497、図版36)から弥生土器片・少量と土製紡錘車1点(497)が出土した。

494・495は甕、496は脚付鉢?である。494は弥生 I 様式末か II 様式初めか、495は弥生 II 様式かと思うものである。496は柱実の脚がつき、体部に櫛描直線文(6条1帯)5帯が施されている。弥生 II 様式かと思うものである。497は焼成前に上から下に孔をあけたことにより、下の孔の周辺が突出している。

池島 I 期地区の第13-1層出土遺物は弥生 I - 3~4 様式のものが主だが II 様式も含んでいる。第13 b 層出土遺物は弥生 I - 2~4 様式のものが多い。今回報告する第13層は池島 I 期地区的様相と齟齬をきたさないが、第13 b 層は弥生 II 様式が目立つ。(陣内)

4) 第14-2面・第14-2面ベース(第14-2b面)

第14-2面(図90、写真51、図版26~28)

第14層は、池島I期地区において、第14-1・14-2層の2つの土壤化層と第14-2b層の洪
水堆積層に分層されているが、02-1・06-2の両調査区においても同様に3つの層に分層が可能で
あった。第14-1層は、暗灰色~オリーブ黒色の粘土~シルトで、ヒシの実などの有機物を比較的多く含んだ湿地性の堆積物層であり、第14-2層は当遺跡において「第4黑色粘土(泥)層」と通称して
いる、黒~青黒色のシルトである。

第14-1面は、洪水堆積層の第13b層を除去し検出した遺構面である。池島I期地区の当該面では、
人為的な遺構は確認されず、人・イノシシ・シカ・鳥類の足跡が検出されている。今回の2つの調査区
においても、やはり遺構は検出されず、第13b層で埋没したヒトや動物の足跡が検出された。02-
1調査区北半では人・トリ・イノシシ・シカの足跡を、06-2調査区では1N-4f区や1N-2g区
でヒトの足跡を比較的多数検出した。また、02-1調査区北半中央の1N-7e区では第14-1層掘
削中にイノシシの牙製装飾品が出土した。

第14-2面は第14-1層、及び部分的に確認できる薄い水成堆積層を除去し検出した遺構面である。
地形については、02-1調査区中央及び06-2調査区東端に微高地が見られ、2つの微高地の南側
にはいずれも水田域が形成されていた。最高地点は06-2調査区の微高地東端のT.P.2.02m、最低地
点は02-1調査区北西隅のT.P.1.11mである。両調査区で検出した遺構は、微高地、水田畦畔のほか、
溝、溝に伴う高まり、土坑、杭列などである。以下、02-1調査区から東に向かって地形と遺構につ
いて詳説する。

02-1調査区では中央にA680微高地を確認した。検出した範囲は東西約41m、南北約40mである。
微高地上は南東隅がT.P.1.72mと最も高く、北西に向かって標高を減じており、北西部分にT.P.1.39
mの最低地点が見られる。なお、この微高地は池島I期地区の8微高地につながると考えられる。微高
地を取り巻く平坦面との比高差は0.05m~0.12mである。微高地上の縁辺沿いにおいて、土器が一
個体分出土する土坑や、ほぼ完形の土器が出土する地点が数箇所見られた。以下、それらについて詳述
する。

A677 土坑(図89、写真52) 微高地南西の1N-9j区で検出した、平面が圓丸長方形を呈していた
と考えられる土坑である。長軸は遺存部分で0.86m、短軸0.8m、検出面からの深さ0.07mを測り、
底部は浅い皿状を呈していた。埋土は暗緑灰色の細
砂混シルトである。遺物は弥生時代前期前半に属す
ると考えられる壺(509)がほぼ1個体出土してい
る。

A678 土坑(図89、写真53) 微高地南東の1N-
6i区で確認した平面が円形を呈する浅いくぼみ状
の土坑である。規模は直径0.6m、検出面からの深
さ0.02mであり、埋土は暗緑灰色の粘質シルトで
あった。弥生時代前期後半に属すると考えられる壺
(510)が出土している。

土器511(図91) 微高地の南縁辺、A677土坑の



写真51 06-2調査区 第14-2面 西半(南東から)

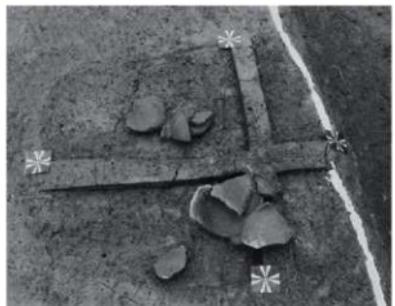


写真 52 第 14-2 面 A677 土坑 出土土器（北から）



写真 53 第 14-2 面 A678 土坑 出土土器（東から）

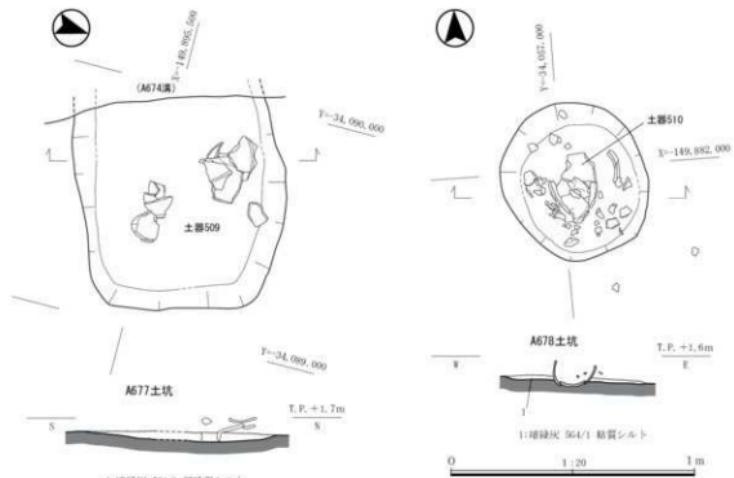


図 89 第 14-2 面 遺構図 (1)

北東 9 m の地点において、弥生時代前期と考えられる壺 (511) が、破片の状態で直径約 1 m の円形の範囲内にまとまって出土した。

土器 512・513 (図 91) 土器 512 は微高地北辺、土器 513 は微高地の北東隅で出土した、ともに弥生時代前期後半と考えられる甕である。いずれも破片の状態で、直径 0.5 m の円形状にまとまって出土した。

土器 500・503・504 土器 513 の南側で出土した。土器 500 は弥生時代前期の壺、土器 503 も弥生前期の鉢、土器 504 は縄文時代晩期の土器である。土器 511～513 とほぼ同様の出土状況を呈していた。

これらの土坑や土器はいずれも微高地縁辺の隅角などの位置を占めており、微高地の縁辺以外では確認されなかった。このような出土位置から、意図的に埋納あるいは配置された可能性も想定される。

A680 微高地南側の標高 T.P. 1.31 ~ 1.61 m の平坦な箇所において、水田域を確認した (図 92、写真 54、図版 26・27)。微高地と水田域との比高差はおよそ 0.08 ~ 0.1 m を測る。水田域は中央の 1N -



図90 第14-2面 平面図

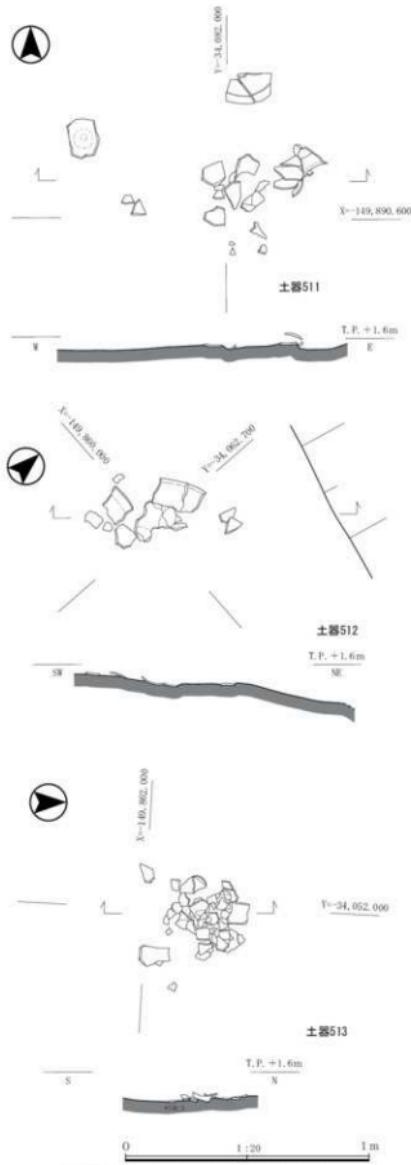


図 91 第 14-2 面 遺構図(2)

7j・8j 区付近が T.P. 1.55 ~ 1.6 m と最も高く、西側・南側・東側に向かって下がっていた。水田面は暗灰色の粘土～シルトに覆われていた。検出した畦畔は幅 0.25 ~ 0.55 m、高さは 0.03 ~ 0.07 m を測る。畦畔の配置から、少なくとも 9 筆の水田を復元することができる。中央の標高の高い部分で正方形に近い形状の水田が 2 筆みられ、その西側では幅 3 m と 5 m 前後の 2 筆、東側では幅 2.5 ~ 3 m の 3 筆の水田が、北西から南東方向に細長く配置されていた。面積は、最も遺存状況のよい A653・656・657 の各畦畔で囲まれる水田で約 50.9 m²、その南東隣の A657・659・660・661 の畦畔で囲まれる水田で約 49.5 m² を測る。水田域と微高地の間にみられる幅 0.5 ~ 3 m の細長い部分は、水路として利用されていたと考えられる (A675 水路)。畦畔には水口などの施設は確認されておらず、水田区画への配水は主に畦越しにより行われたと推定される。この水田域に水を供給していたと考えられる構造としては、A672・673・674 の 3 つの溝がある。いずれも北西から南東方向に走っていた。

A672 溝 1N - 10h 区で部分的に検出した溝であり、検出長 4.6 m、幅 0.55 ~ 0.75 m、検出面からの深さ 0.1 ~ 0.2 m を測る。南側で A674 溝に合流していたと推測され、また池島 1 期地区の 25 溝と同一と考えられる。

A673 溝 1N - 10i 区で部分的に検出した溝であり、検出長 1.3 m、幅 0.5 ~ 0.7 m、検出面からの深さ 0.05 m 前後を測る。やはり A674 溝に接続していると考えられる。

A674 溝 (図 92、写真 55、図版 27) 1N - 10i・9j 区および 10 - 9b 区で確認した溝である。検出長 16.4 m、幅 0.5 ~ 1.2 m、検出面からの深さ 0.1 ~ 0.25 m を測り、比較的規模の大きい溝である。西側に A676 高まりが付随しており、また南側では両側に高まりが付く状況 (A676・697 高まり) が見られた。



写真 54 02-1 調査区 第14-2面 畦畔（東から）



写真 55 第14-2面 A674溝・A676高まり（南から）

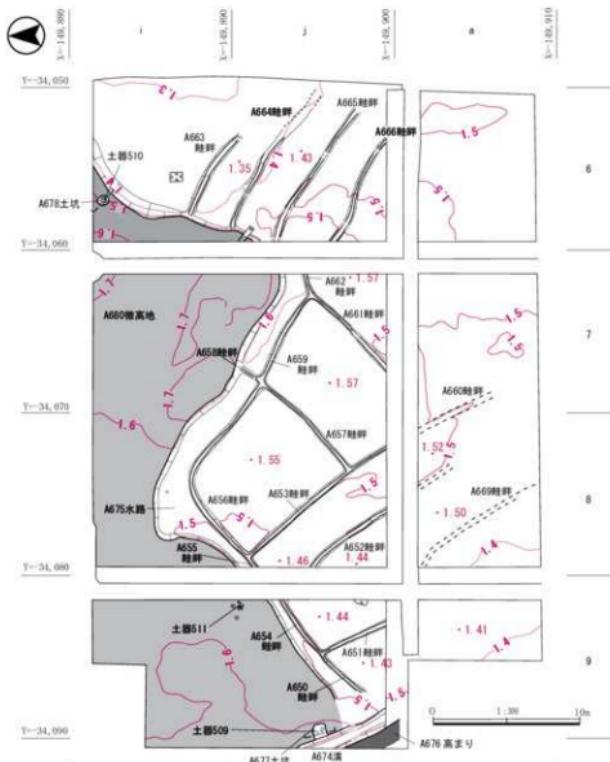


図 92 02-1 調査区 第14-2面 水田域 平面図

A673・674 溝は池島Ⅰ期地区の 26 溝に相当する
と考えられる。

A674 溝の西側でも A649・667・668 の畦畔を
検出した。幅 0.4 ~ 0.5 m、高さ 0.03 ~ 0.05 m を
測る。A674 溝を中心に、両側に水田域の広がる景
観が想像され、この溝が基幹水路として重要な役割
を果たしたと考えられる。

微高地の北西においても幅 0.3 m の畦畔を 1 条検
出した (A670 畦畔)。池島Ⅰ期地区の水田域 F 地
区がこの付近まで及んでいたと思われる。

微高地北側の標高 T.P.1.11 ~ 1.38 m の平坦な部
分では、遺構は見つからなかった。池島Ⅰ期地区においても、やはり 8 微高地と水田域 F 地区より北側
では遺構は検出されていない。

02-1 調査区北側の 1N-6e 区では第 13 b 層掘削中に杭が 2 点出土した (A702 杭)。約 0.1 m の
間隔で互いに若干傾けて打ち込まれていた。尚この杭の内、先端が加工され遺存状況の良好であった南
側の 1 点 (A702 杭) の樹種はヤナギ属であり、これに対し放射性炭素年代測定を実施したところ、2,130
± 40 (yrBP ± 1 σ) の補正炭素年代値が算出され (表 3、PLD - 2650)、紀元前 3 ~ 2 世紀の年代を
示していることが判明した。

06-2 調査区では、調査区中央を南北に走る B422 溝より西側は、西へ向かって標高を減じる緩や
かな斜面が広がる。B422 溝付近の標高がおよそ T.P.1.6 m、調査区西端付近の標高が T.P.1.2 m 程度で
あり、およそ 0.4 m の比高差がある。この斜面では水田畦畔などは見られず、溝と杭列を確認した。な
お、B420 溝については第 14-2 b 面に帰属すると考えられるため、次項で述べる。

B429 ~ 436・480・481・483・484 杭 (図 93、写真 56) 北北西～南南東の方向で約 20 m にわたって
打設されていた杭である。計 12 本を確認でき、長いもので 32 cm 程遺存していた。存在する方向より、
上面で検出した B335 溝の位置に沿って打設されているとも考えられ、上面に帰属する可能性がある。
樹種は B429 杭がムクノキ、B430 杭がサカキ、B431・432 杭がアカガシ亞種、B433 杭がヤブツバキ、
B434・436・480・483・484 杭がヤマグワ、B481 杭がヤナギ属であった。

B499 流路 (図 72 左) B267 流路とほぼ同位置を流れていたと考えられる、第 13 b 層段階の流路で
あり、図 72 に示した断面の観察において、西側部分の存在を確認した。第 14-2 層～第 15 層を削
り込んでおり、下半部は中砂～細礫の粗い砂礫、上半部はシルト～細砂が堆積し、上方に向かうにつ
れて細粒化が見られた。この流路のもたらした堆積物により、第 13 面の B337 微高地、第 13 b 面の
B496 微高地が形成されたと考えられる。尚、流路の下部では地震に伴うと考えられる不整合を確認し
た (図 72 左下、写真 42)。不整合は T.P.0.5 m 付近の第 15 b 層にまで及んでおり、また不整合の上部
では、流路内に堆積する砂礫が入り込んでいた。寒川 旭氏 (独立行政法人 産業技術総合研究所) より、
この様な状況から、不整合の生じた時期はこの流路内に砂礫が堆積した後と考えられるとのご教示
を受けた。第 13 b 層が堆積する段階で発生したと考えられる地震にともなう、噴砂などの変形構造は
池島Ⅰ期地区 98-1 調査区、池島Ⅱ期地区 02-2 調査区、05-2 調査区などで確認されており (内
田 2008)、寒川氏は弥生時代前期末～中期初頭のこれら地震痕跡について、南海地震に伴う可能性を



写真 56 第 14-2 面 B429 ~ 436 杭 (南から)

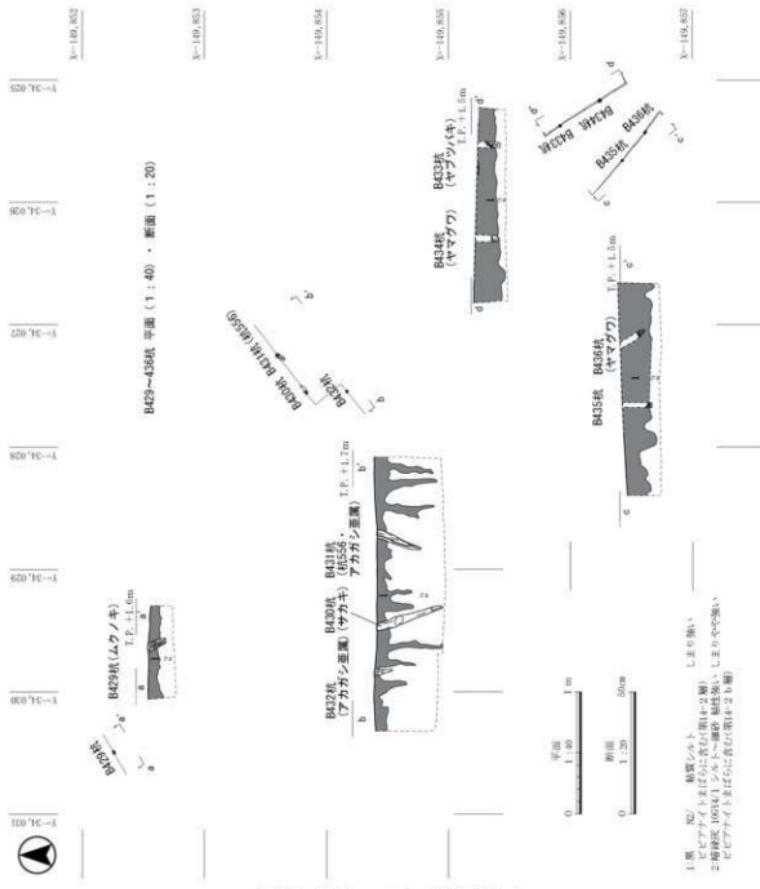


図 93 第 14-2 面 遺構図 (3)

指摘している (寒川 2007)。

B421 溝 (図 94) 調査区のほぼ中央、1N-1f+2g 区で検出した、東北東から南南西方向に走る溝である。検出長 13.6 m、幅 3.5 ~ 5.2 m、検出面からの深さはおよそ 0.2 m を測り、細砂の混じる暗オリーブ灰色あるいは緑灰色のシルトで埋まっていた。Y = -34.003 m 付近より東は B267・499 流路によつて削られていた。埋土から弥生時代前期前半の土器片 (548) と、縄文時代晩期の土器片 (549) が出土している。

B422 溝 (図 94、図版 28) 調査区中央よりやや東で検出した、南北方向に走る溝である。検出長 25.8 m、幅 0.8 ~ 2.3 m、検出面からの深さは浅い箇所で 0.15 m 前後、深い箇所で 0.3 m 前後を測る。オリーブ灰色や暗灰色の粘質のあるシルトが埋積していた。なお、断面の観察から、この溝が B421 溝に切

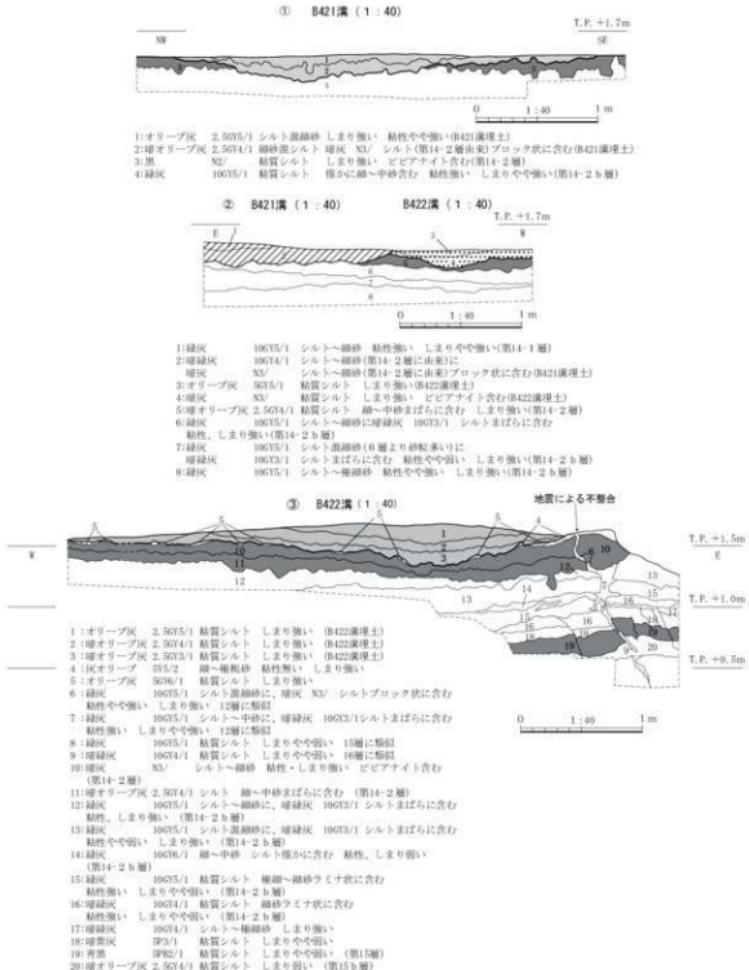
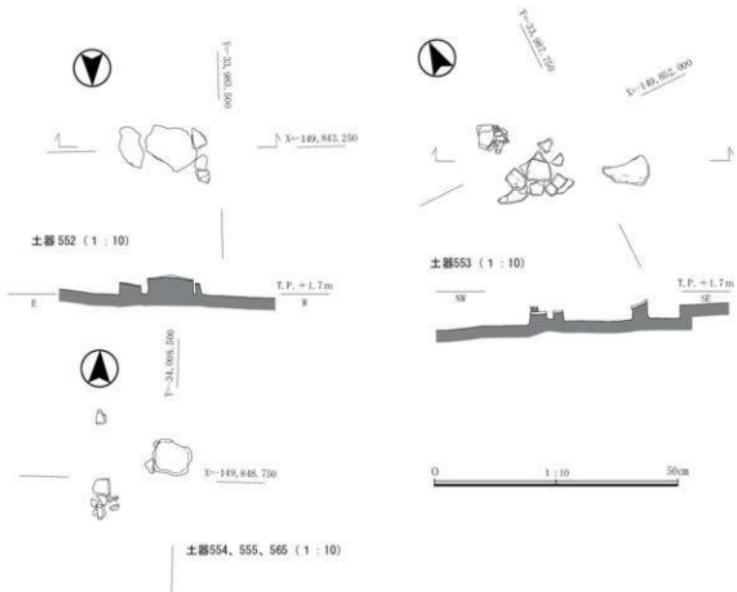
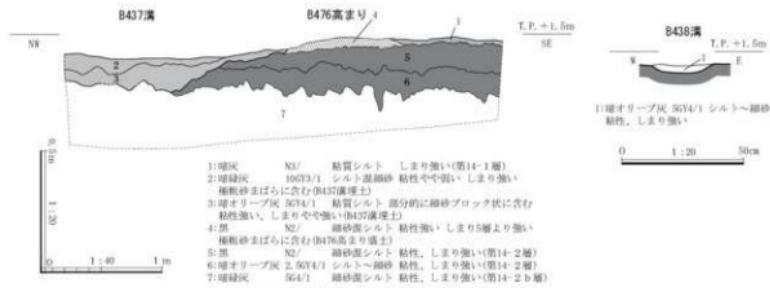


図 94 第 14-2 面 遺構図 (4)

られている状況を確認した。南側では両側に B472・473 高まりを作っており、さらに B472 高まりの東側では B470・471 の水田畦畔が付随する状況を確認した。高まりは幅 0.5 ~ 1 m、高さ 0.05 m 程度であり、畦畔は幅 0.3 ~ 0.5 m、高さ約 0.03 m であった。後述する調査区南東側の水田域が B267・499 流路によって削られた範囲およびこの付近まで広がっていた可能性が想定され、本溝はこの水田域へ配水する主要な水路の一つであったと推察される。溝の埋土からは、弥生土器片、縄文時代晚期の深鉢口縁 1 点 (565)・底部 2 点 (554・555) を含む縄文土器片、砥石? 1 点、砂岩製の投弾? 1 点



が出土した。

尚、B422溝の東側においても、B499流路にみられた地震に伴う不整合と一連のものと考えられる不整合を確認した(図94③)。

06-2調査区東側は、第13面・第13b面と同様に西側に比べ標高が高い。中央付近はT.P.1.78~2.02mのB478微高地であり、微高地の北側は北西方向に向かって傾斜している。北側のT.P.1.5m前後の箇所でB437溝とそれに伴うB476高まりを検出し(図95)、また斜面の2箇所で土器を確認した(図96)。微高地上では、第14-1面の精査の段階で、2基の土坑と1条の溝を確認した(図89)。

B437溝・B476高まり 溝は検出長が4mであり、肩部を部分的に検出したのみである。埋土の様相や

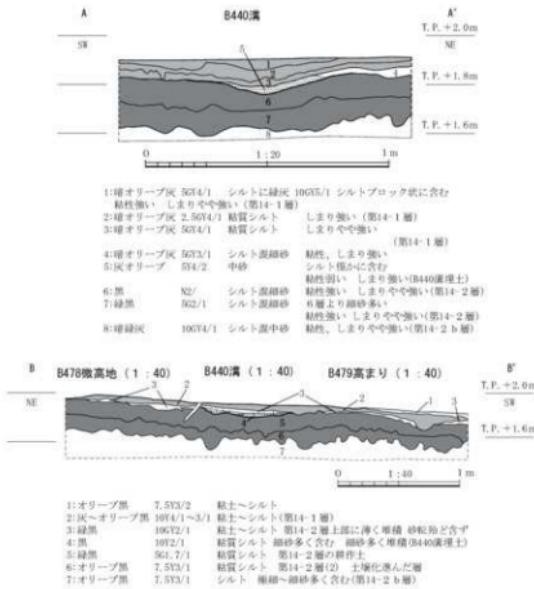


図97 第14-2面 遺構図(7)

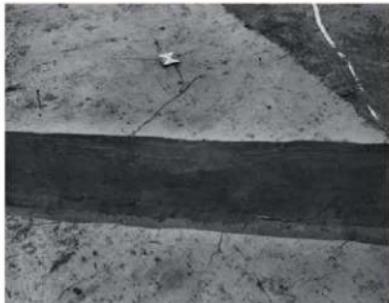


写真57 第14-2面 B440溝 断面(東から)

位置関係から、B421溝と同一の可能性が想定され、B267流路によって南西側を削られたと考えられる。溝の南東側には、黒色の細砂混シルトからなる盛土が高さ0.05m程度で施されていた(B476高まり)。

土器552・553(図96) いずれも破片の状態で1カ所にまとまって出土した。微高地から若干離れてはいるが、O2-1調査区の微高地縁辺で出土した土器と同様の意図で据え置かれた可能性も考えられよう。土器552は弥生時代前期後半に属すると考えられる

無頸壺であった。

B438溝(図95) 調査区北東隅で確認した、検出長2.24m、幅0.26m、検出面からの深さ0.04mの溝である。検出位置、規模、埋土の様相などから、第13b面に帰属する溝と考えられる。

B478微高地南側の標高T.P.1.47~1.89mの東から西へと緩やかに傾斜する部分において、水田域とそれに伴うと考えられるB440溝、B479高まりを検出した。

B440溝・B479高まり(図97・98、写真57、図版28) 微高地の南側で確認した溝と高まりである。B440溝は幅1.2~1.4m、検出面からの深さはおよそ0.04~0.08mを測る。埋土は黒色の細砂を多

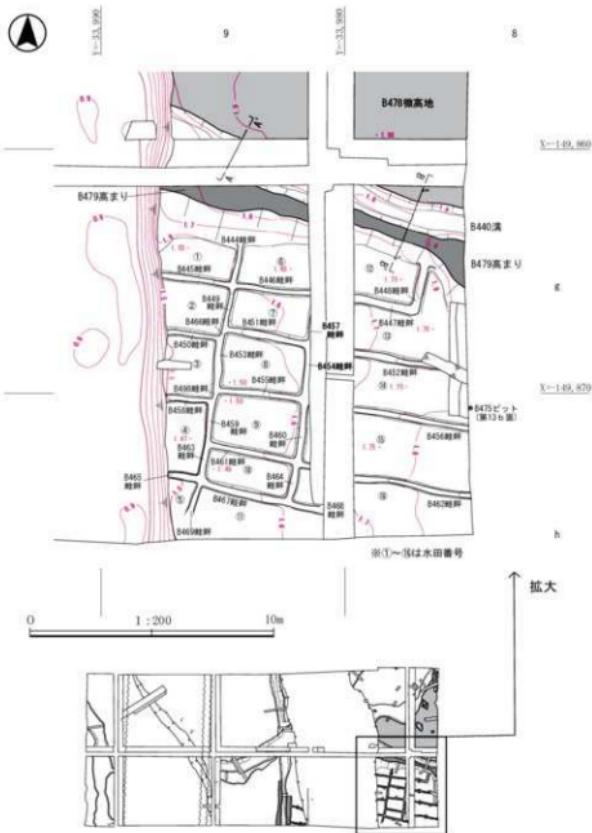


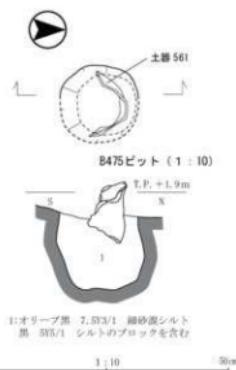
図 98 06-2調査区 第14-2面 水田域 平面図

く含むシルトや灰オリーブ色のシルトを含む中砂からなっており、上層や下層に比べ細砂～中砂が多く含まれる状況が確認された。尚、この溝は東接する04-2調査区の358流路に接続すると考えられ、この流路から取水していた可能性も推測される。溝の埋土中から弥生時代中期初頭に属すると考えられる甕片(560)、縄文土器片が少量出土した。中期初頭の甕片については、第14-2面で出土している他の土器に比べやや新しい。但し、この甕片は第14-2面上面(第14-1層)で一括出土した土器と接合しているため、上面での耕作等により埋土中に混入した可能性も考えら、溝の機能していた時期を直接示す資料とするには問題がある。B440溝の南側で確認したB479高まりは、頂部の幅はおよそ0.5～1.5m、水田面との比高差は0.07～0.2m程度であり、B444・448畦畔が付随していた。

水田域(図98、巻頭図版1)は、灰～オリーブ黒色の粘質シルトおよび緑黒色の粘質シルトで覆われていた。高まりと水田との比高差は0.1～0.2mを測る。畦畔の遺存状況から、少なくとも16筆前

後の水田が存在していたと考えられる。水田一筆の規模は、南北幅が狭いもので 1.4 m、広いもので 2.8 m、東西幅は畦畔の遺存状況の良い水田⑥～⑩で 3～3.5 m を測り、それより東側の⑪～⑯などはさらに細長く、6 m 以上であった可能性がある。一筆の面積については、畦畔の遺存状況が良好な水田⑦・⑧・⑨・⑩が、順に 4.7 m²、6.4 m²、6.6 m²、4.1 m² であった。畦畔の規模は、下端幅がおよそ 0.3～0.5 m、高さは 0.03～0.07 m を測る。水田域への配水については北側の B440 溝や、調査区中央の B422 溝が基幹水路として重要な役割を果たしていたことが推測される。但し、B479 高まりや B472 高まり上では、水口は確認できなかった。また畦畔上にも水口は検出されず、各筆への配水は主に畦越えで行われていたと考えられる。

水田⑩の東側の法面において、B475 ピット（図 99）を確認した。平面は円形と推測され、規模は遺存部の最大幅が 0.16 m、検出面からの深さが 0.16 m であった。埋土はオリーブ黒色の細砂混シルトに黒色のシルトをブロック状に含んでおり、埋土中から弥生時代中期に属すると考えられる壺の頸部（561）が出土している。ピットの検出位置、埋土、遺物の時期などから、第 13 b 面のピット群の中の 1 基である可能性が高いと思われる。（飯田）



第14-2面ベース（第14-2b面）（図100、図版29）

当面は、土壤層の第14-2層を除去し検出した面であり、氾濫堆積物である第14-2b層の上面に相当する。第14-2面の水田遺構の痕跡や第14-2層の形成過程で掘り込まれた遺構、あるいはそれ以前の遺構を検出する目的で調査を行った。

第14-2b層は、主に灰色を呈するシルト～細砂の部分、黄褐色の細砂～粗砂の部分、オリーブ黒色の粘土～シルトの部分が見られる。この中で特に細砂～粗砂の部分は比較的厚く堆積しており、第13面や第14-2面で微高地が形成される要因となつたと考えられる。

地形は、第14-2面と大きな違いはない。02-1調査区では、中央よりやや東でT.P.1.4m台の高い箇所がみられ、それより北側では北西方向に向かって緩やかに標高を減じていた。調査区南側では、第14-2面において水田域を確認した箇所は、T.P.1.3m台の平坦な部分であり、その部分より西側は南西方向に向かって下がっていく様相を呈していた。06-2調査区については、第14-2面で微高地や水田域を確認した東側から中央にかけての部分がT.P.1.4～1.8mと高く、それより西側は、西に向かってT.P.1m前後まで標高を減じていく緩やかな斜面であった。尚、最高地点は06-2調査区東端のT.P.1.8m、最低地点は02-1調査区北西のT.P.0.97mである。遺構については、溝・土坑・ピットを検出した。以下各遺構について詳述する。

A691溝・B420溝（図版29）2つの溝は、検出位置、検出レベル、埋土の様相などから、同一の溝と考えられる。02-1調査区・06-2調査区それぞれにみられるT.P.1.4m台の高い部分の間の、T.P.1～1.1mの谷状の箇所を、蛇行しながら南から北西方向へと走る溝である。幅1.5～4m、検出面からの深さは0.05～0.15mを測り、周囲のベースが緑灰～暗緑灰の細砂～中砂の混じるシルトであるのに対し、埋土は黒色（N2/）の粘土～シルトであった。遺物は出土していない。

A681・686土坑 それぞれA691溝の北側・南側で検出した土坑である。A681土坑は平面円形で直径0.8m、検出面からの深さは0.08mを測り、埋土は灰色（N4/）のシルト～中砂であった。A686土坑は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.22mを測る。埋土は2層に分かれ、上層が黒色（N2/）の粘土～シルト、下層が黒～青灰色（N2/～5BG5/1）の粗砂混シルト～中砂であった。これら土坑からは遺物は出土していない。

A682～685ピット いずれもA691溝の南岸、溝が南南東から北西へとカーブする箇所の南側（標高T.P.1.08～1.12m）で検出した4基からなるピット群である。いずれも円形プランで、直径は0.12～0.2m、検出面からの深さは0.05～0.06m前後の浅いものであった。埋土は黒～暗灰色（N2/～N3/）の粘土～シルトであり、遺物は出土していない。また位置に規則性は見出せない。

A687土坑 02-1調査区中央の高い箇所（標高T.P.1.4m前後）で確認した土坑である。平面形は一辺が0.7mの隅丸方形に近い形であり、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は2層に分層可能であり、上層は黒色（N2/）の粘土～シルト、下層は暗灰色（N3/）の粘土～シルトを含む青灰色（10BG5/1）の粘土～シルトであった。遺物は出土していない。

A690ピット 02-1調査区南端の標高T.P.1.26mの箇所で検出した、楕円形プランのピットである。長軸0.35、短軸0.25mを測り、検出面からの深さは0.07mであった。埋土から縄文土器深鉢片が1点出土した。

02-1調査区では以上の遺構のほか、02-1調査区南西隅の標高T.P.1.18～1.21mの箇所で、A688・689の2基の土坑を部分的に検出した。A688土坑は、遺存部で南北長が0.88m、検出面から



図 100 第 14-2 b面 平面図

の深さは0.09mを測り、A689は遺存部で東西長が0.7m、検出面からの深さは0.1mを測る。いずれも平面が円形もしくは楕円形であったと考えられ、遺物は出土していない。

土器517 02-1調査区南側の10-9a区にて、縄文時代晩期に属すると考えられる深鉢片が1点出土した。

06-2調査区では中央から西側にかけての緩斜面で、土坑とピットを検出した。一方、第14-2面で微高地と水田域を検出した東側の高い箇所では、遺構は全く検出できなかった。

B491ピット（図101、図版29） 1N-1f区で確認した、平面がほぼ円形のピットであり、直径0.4m、検出面からの深さは0.29mを測る。埋土は2層に分かれ、上層はオリーブ黒色の細砂混シルト、下層はオリーブ灰色のシルトのブロックが混じるオリーブ黒色の細砂混シルトであった。上層から、長原式に属すると考えられる縄文土器の深鉢（570）が出土している。埋土より、第14-2層の形成途中の段階で掘削された可能性が考えられる。

B488ピット（図101） 1N-4f区で検出した円形プランのピットである。直径0.17m、検出面からの深さは0.1mをはかり、埋土は灰色の粘質シルト粒の混じるオリーブ黒色の粘質シルトであった。遺物は出土していない。

B485～487ピット（図101） 1N-2e・2f区で検出した3基からなるピット群である。B485・486ピットは円形プランで直径0.2m前後、検出面からの深さは0.15m前後であり、B487ピットは南北に細

長い楕円形プランで長軸0.43m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.08mであった。埋土は黒色の粘質シルトであり、埋土中から遺物は出土していない。これらピットの位置に規則性は見られず、生痕の可能性も考えられよう。（飯田）

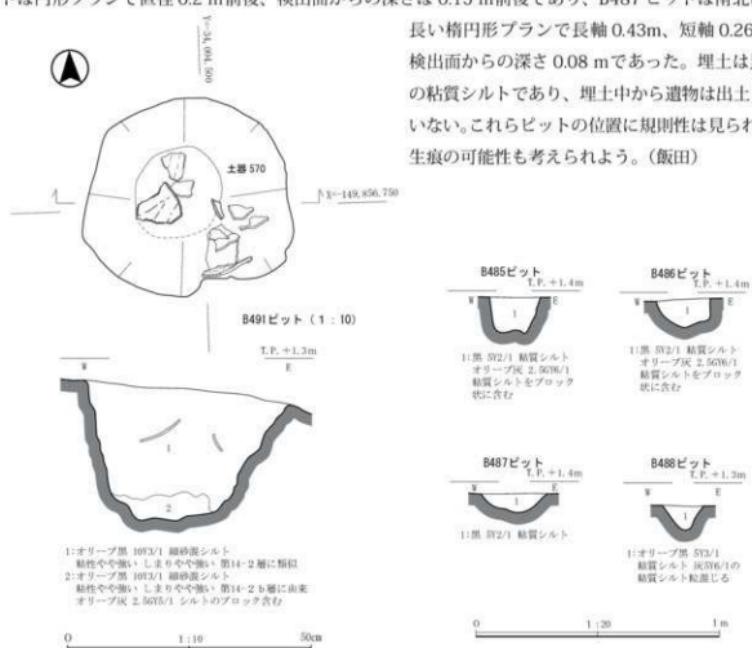


図101 第14-2b面 遺構図

第14-1層・第14-2面・第14-2層出土遺物（図102～105）

A677 土坑（図102-509、図版37）から弥生土器壺1点（509）が出土した。図上復元であるが、外側ヘラミガキ調整、外底面ヘラケズリ調整で、胸部に沈線文2条を施されている。弥生I-2様式かと思うものである。

A678 土坑（図102-510、図版37）から弥生土器壺1点（510）が出土した。口縁端部に刻目を施し、外側ハケメ調整、内面板ナデ調整で、外側面コゲ、ススが付着している。弥生I-3様式かと思うものである。

A680 微高地（図102-500・503・504・図103-511～513、図版36）から弥生土器壺2点（500・511）、壺2点（512・513）、鉢1点（503）、縄文土器（504）が出土した。500、503は弥生I様式である。504は小D字刻目凸帯をもつ長原式である。511は外側タテヘラミガキ、ヨコヘラミガキ調整で頸部と体部に沈線文2条を施され、黒色物質を塗布され、その上に一部赤彩を施されている。内面はヨコヘラミガキ、ナデ調整である。弥生I-2～3様式かと思うものである。512は口縁端部に刻目を施され、外面板ナデ、ヘラミガキ調整、外底面ヘラケズリ調整でススが付着している。内面はナデ、板ナデ調整でコゲが付着している。512・513は弥生I様式後半かと思うものである。

B421溝（図104-548・549、図版38）から弥生土器片1点（548）、縄文土器片2点（549）が出土した。548は胸部に段を持ち、弥生I-2様式かと思うものである。549は小V字刻目凸帯をもつ長原式である。

B422溝（図104-550・551・554・555・図105-565）から弥生土器片と深鉢口縁1点（565）、底部2点（554・555）を含む縄文土器片、砥石1点（550）、砂岩製の投弾1点（551）が出土した。565は長原式で小D字刻目突帯が施されている。554・555はどちらも縄文晩期で、外側ヘラケズリ調整である。554は長原式で、内面にコゲが付着している。550は流紋岩質溶結凝灰岩製で、残存する1面に擦痕と思うものがある。

B440溝（図105-560）から弥生土器片、縄文土器片が極少量出土した。560は弥生土器壺で内外面板ナデ調整、外側にススが付着している。弥生II-1様式かと思うものである。第14-2面上面から一括出土した土器とB440溝の最下層から出土した土器が接合したのでここに掲載したが、土器の時期から上層で掲載すべきだったのかもしれない。

土器552（図104-552）20N-9e区にて、弥生土器壺底部1点（552）が出土した。弥生I様式である。

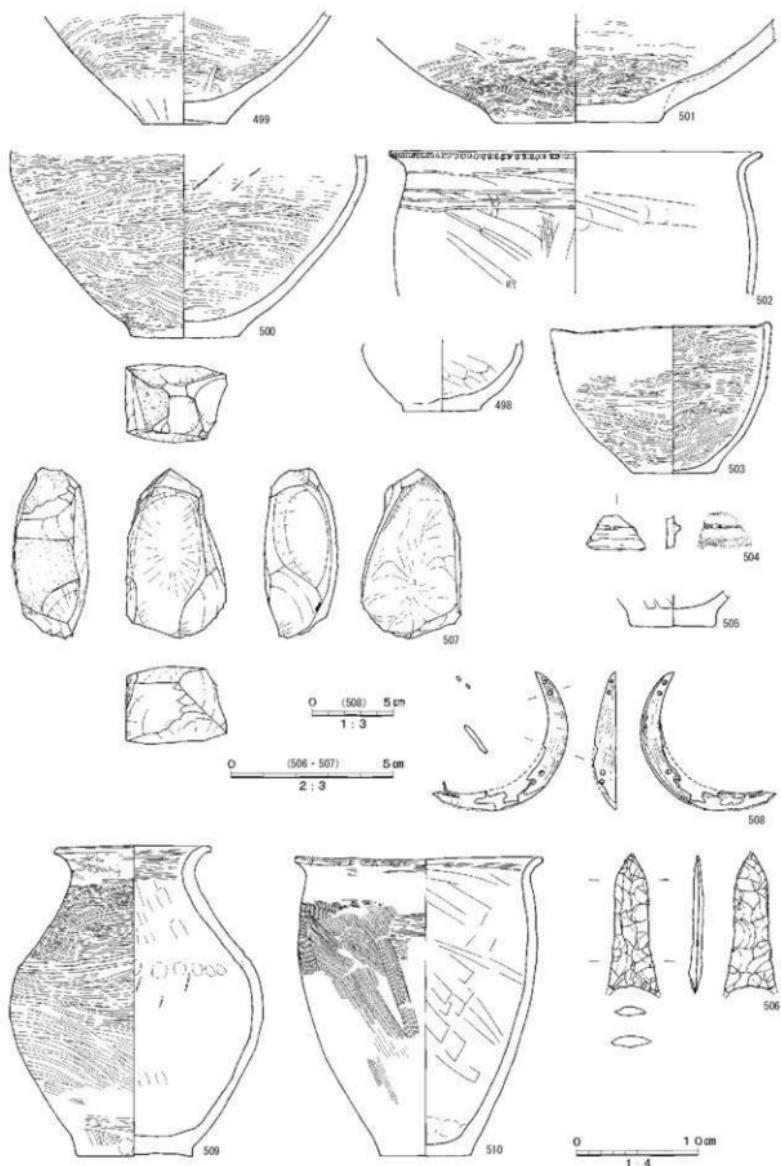
土器553（図104-553）20N-9f区にて、弥生土器無頸壺1点（553）が出土した。553は内外面ヘラミガキ調整で弥生I-4様式かと思うもので、焼成前に外から施された2個1対の穿孔が1対現存している。

図104-556～559はそれぞれB431杭、B481杭、B483杭、B484杭である。556はアカガシ亞属材で先端を9面に、557はヤナギ属材で6面に、558はヤマグワ材で5面に、559もヤマグワ材で3面にカットしている。

B475 ピット（図105-561）から弥生土器壺頸部1点（561）が出土した。外面板ナデ、内面ナデ調整で、弥生II様式かと思うものである。

02-1調査区 第14-1層～第14-2面（図102-498・499・501・502・505～508、図版37・38）から弥生土器、縄文土器、石鏃（506）、サヌカイト石核（507）、牙製垂飾（508）が出土した。

498・499・501は弥生土器壺、502は弥生土器壺、505は縄文土器である。弥生土器は弥生I様式で、



498 - 499 · 501 · 502, 505 ~ 508 : 第 14 - 2 面, 509 : A677 土坑, 510 : A678 土坑, 500 - 503 · 504 : A680 烧高地

图 102 第 14 面 出土遗物 (1) 02-1 调查区

499・502は弥生I様式後半である。501は外面がナデ後ヨコヘラミガミ調整、外底面がヘラケズリ調整、内面がナデ後粗いヘラミガキと密なヘラミガキ調整である。506はサヌカイト製で凹基式である。508はイノシシの牙製で、現存長11.0cm、現存幅1.78cm、現存厚0.34cmを測り、穿孔2個1対で2対残存しており、中央の孔は径0.38cmで両側からの穿孔、先端の孔は径0.34cmで内側からの穿孔である。全体に擦って加工されている。東に隣接する04-2調査区の第14-1面399落ち込みから同じようなイノシシの牙製垂飾が出土している（註6）。それは「オスの右下顎犬歯で作られ、残存長8.5cm、最大幅1.9cm、最大厚0.27cmを測り、残存部のほぼ中央に径約0.4cmの両側から穿孔した円孔2個と基部側に内面から穿孔した円孔2個が施され、外面に黒色物質が塗布されている」と記述されている。

02-1調査区 第14-2層（図103-514～519、図版37・38）から弥生土器片1点と縄文土器片少量とサヌカイトチップ1点（519）が出土した。514～518は縄文土器深鉢である。514・515は外面口縁部に四線文を1条、2条と施された縄文後期の宮滝式後期、516～518は晩期かと思うものである。

06-2調査区 第14-1層（図104-526～536、図版37・38）から弥生土器、縄文土器、石鎌（536）が出土した。縄文土器片の方が弥生土器片より多い。

526～528が弥生土器で、弥生I様式である。526は壺部断片で削り出し凸帯上沈線文1条の文様があり、527は底部で底面にヘラ記号がある。528は壺蓋で穿孔2個1対の1対が残存し、内外面黒色物質が塗布されている。

529～535が縄文土器で、すべて縄文晩期と思うもので、532～534は長原式である。532・533はD字刻目凸帯を施され、534は壺で無文の凸帯を施されている。536はサヌカイト製で凹基式である。

06-2調査区 第14-2面（図104-537～547・図105-568、図版38）から弥生土器、縄文土器、砂岩製の砥石？1点（568）、砂岩製の投弾？2点（546・547）が出土した。縄文土器片が圧倒的に多い。（第14-2面として別枠にしたが、第14-1層として扱ってもいいものかもしれない。）

537・538が弥生土器の壺片で、それぞれ段上沈線文1条、削り出し凸帯上沈線文1条を施され、弥生I-2～3様式である。538は外面に黒色物質が塗布されている。539～545は縄文土器の長原式で、543・544が水走タイプ（註7）である。543は小D字刻目凸帯、544はO字刻目凸帯、545は小O字刻目凸帯を施されている。542が壺で他は深鉢である。

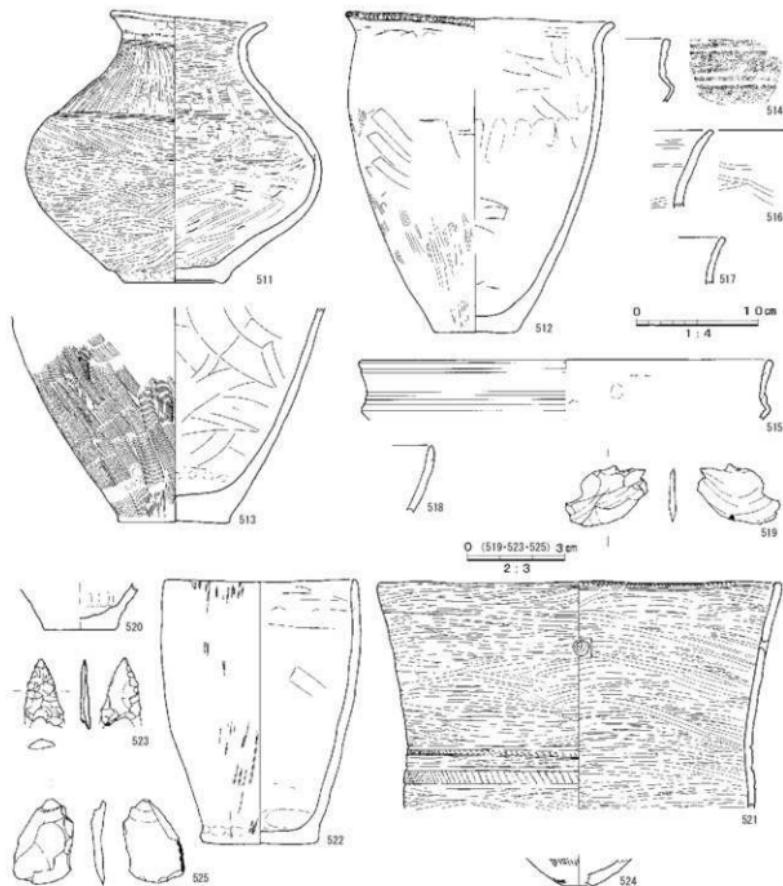
06-2調査区 第14-2層（図105-562～564・566・567・569、図版38）から弥生土器、縄文土器、凹み石1点（569）が出土した。縄文土器片の方が弥生土器片より多い。

562・563は弥生土器壺、564・566・567は縄文土器深鉢である。562は頸部に沈線文が施され、内外面ヘラミガキ調整で弥生I-2様式かと思うものである。563は体部に沈線文2条以上が施され、内外面ヘラミガキ調整で弥生I様式である。縄文土器深鉢は縄文晩期で、564・566は長原式である。564はD字刻目凸帯、566は小D字刻目凸帯が施されている。569は緑泥石片岩製で石棒の破片の可能性はあるが、凹み石として利用されている。

第14-2面ベース（第14-2b面）、第14-2b層出土遺物（図103・105）

B491ピット（図105-570、図版38）から縄文土器片が少量出土した。570は長原式の深鉢で、口縁部にのみ小D字刻目凸帯が施され、外面ヘラケズリ調整でススが付着し、内面板ナデ調整である。

02-1調査区 第14-2b層（図103-520～523、図版37・39）から弥生土器、縄文土器、石鎌（523）が出土した。（第15面上、第15面上層を第14-2b層として扱った。）

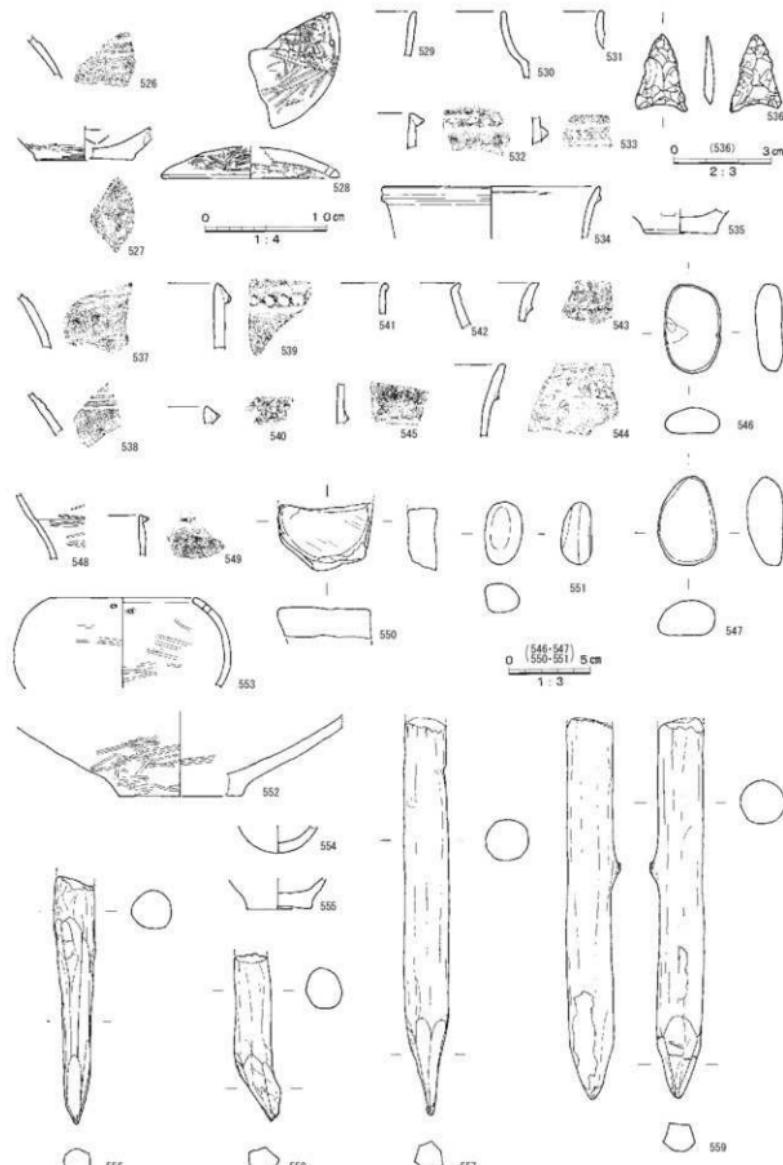


511～513 : A680 微高地、514～519 : 第 14 - 2 層、520～523 : 第 14 - 2 b 層、524 : 第 15 層以下、525 : 第 15 b 層

図 103 第 14 面 出土遺物 (2) 02-1 調査区

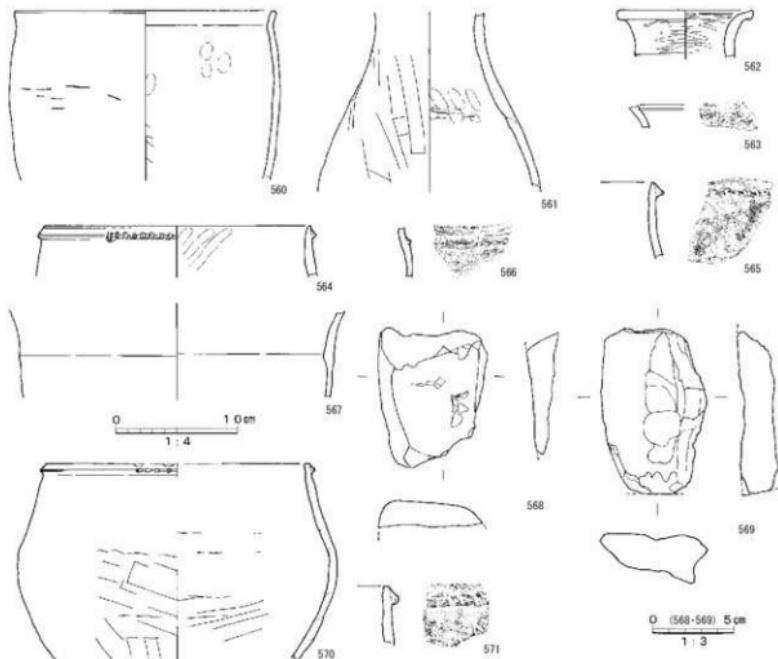
520 は弥生底部で弥生 I 様式である。521 は縄文土器深鉢で一箇所穿孔があり、外面胴部に沈線文 2 条の間に縄文を施したもので 2 帯施され、スヌが付着している。内面白口縁端部に刻目が施されており、コゲが付着している。縄文後期の元住吉山 I 式である。522 は弥生土器かと思う胎土と器形だが、520 と同じ面から出土ということで同じ時期と判断した。外面は条痕かと思う調整でスヌが付着している。523 は、サヌカイト製で凹基式、B 面に大剥離面が残っている。

524 は第 15 層以下から出土した縄文晩期の滋賀里 III b 式かと思う底部である。外面に条痕があり、



526～536：第14—1層、537～547、552・553：第14—2面、548・549：B421溝、550・551・554・555：B422溝、556～559：B431・481・483・484杭

図104 第14面 出土遺物(3) 06-2調査区



560 : B440 滝、561 : B475 ピット、562 ~ 564、566 ~ 567 ~ 569 : 第 14 ~ 2 層、565 : B422 滝、568 : 第 14 ~ 2 面、570 : B491 ピット、571 : 第 14 ~ 2 b 層

図 105 第 14 面 出土遺物 (4) 06-2 調査区

凹み底である。525 は第 15 b 層から出土したサヌカイトチップで、表面の風化が著しい。524・525 は第 15 面で扱わねばならないものかもしれないがここに掲載した。

06-2 調査区 第 14 ~ 2 b 層 (図 105 ~ 571、図版 38) から縄文土器片 2 点 (571)、石 1 点が出土した。571 は D 字刻目凸帯が口縁部に施され、外面ナデ調整で、ススが薄く付着している。長原式である。

池島 I 期地区の第 14 ~ 1 層出土遺物は長原式土器片を多く含むが弥生 I ~ 2 ~ 3 様式段階のもの、第 14 ~ 2 面出土遺物は弥生 I ~ 2 ~ 3 様式のものが中心、第 14 ~ 2 層出土遺物は長原式土器が主体だが縄文晚期後半や後期後半のものの中に少し弥生前期土器も含んでいる。第 14 ~ 2 b 層出土遺物は縄文後期後半の土器と晚期後半の土器である。今回報告する遺物は I 期の様相と齟齬をきたすものではない。(陣内)

5) 第15面(図106、図版30)

第15面は、主に氾濫堆積物からなる第14-2b層を除去し検出した、土壤層の第15層の上面である。第15層は緑黒色(10GY2/1)の粘土からなる層であり、池島1期地区や東接する04-2調査区において第15-2層と呼称している層に対応し、また当遺跡で從来から「第5黒色粘土(泥)層」と通称されてきた層である。02-1調査区では、本層中からヨシなどの植物遺体が多数出土しており、一帯が湿地化していたと考えられる。なお06-2調査区については、第15面の大部分は掘削限界の標高T.P.0.9mより下に位置するため、平面的な調査は行わず、トレンチ断面において第15層の様相を確認した。

地形については、02-1調査区では、南東隅が最も高く、標高T.P.0.73mの箇所がみられる。その部分から西側と北西側で緩やかに標高を減じており、調査区中央付近でT.P.0.5m前後、西側でT.P.0.3



~0.4mを測る。最低地点については、調査区西端の1N-10i・10j区でT.P.0.27mの地点が見られる。06-2調査区についてはトレンチ断面の観察から、調査区西側および中央付近でT.P.0.7~0.8m前後、調査区東側でT.P.0.8~0.9mであったと考えられる。

02-1調査区では、第14-2b層を除去した段階で、洪水堆積物で埋まった人やイノシシの足跡が検出される土壤化の弱い面が確認されている(図版29-4)。この面が池島1期地区における第15

写真58 06-2調査区 深掘トレンチ②断面(南から) —1面に相当すると考えられる。足跡以外の遺構が



図106 第15面 平面図

確認されないことから、さらにこの層を除去し、第 15 面の調査を行った。調査区北側の標高 T.P.0.3 ~ 0.5 m の部分では、A692 くぼみを確認した。東西方向に細長く、検出長はおよそ 24.0 m、幅は 4 ~ 8 m、検出面からの深さは 0.12 ~ 0.32 m を測る。また、調査区南西においても、南北に細長い A693 くぼみを検出した。規模は、検出長 8.2 m、幅 2.3 ~ 3 m、検出面からの深さは 0.11 ~ 0.32 m であった。いずれのくぼみも、遺物は出土しておらず、性格は不明である。

06-2 調査区では、第 15 層やその下の第 15 b 層の様相、および第 13 面の B267 流路の下部や第 14-2 面で確認した地震による不整合の下部などを確認する目的で、東西幅 2 m、南北幅 1 m の深堀トレンチを 2 箇所設定した（図 106）。深掘トレンチ①では不整合部分が T.P.0.3 m 前後まで及んでいることを確認した。深掘トレンチ②では B267 流路が第 15 層を削り込み、流路下部が T.P. 0 m 付近まで及んでいることを確認した（写真 58、上の水糸は T.P.0.5 m、下は T.P.0 m）。

尚、02-1 調査区の第 15 層中に多量に含まれていたヨシの植物遺体に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、補正炭素年代値は $3,305 \pm 40$ (yrBP $\pm 1\sigma$) と算出された（表 3）。（飯田）

第5章 総括

当遺跡では、池島・福万寺両地区ともⅡ期地区の調査が進行している。02-1調査区の調査は池島地区のⅠ期とⅡ期地区をつなぐ連結部の調査である。これまでの調査との連続性とともに新たな展開が期待された。この東側に位置する06-2調査区は、前年度にさらに東側の04-2調査区で縄文晚期～弥生時代前期の集落城の一部や墓域が検出されたことから弥生前期の集落周辺の様相が明らかになるものと期待された。

1. 近世～古墳時代の調査成果

第1層の部分は、現代の搅乱による被害が大きいが、耕作痕跡や水路など調査開始以前の土地利用の状況がかなり遡る可能性が高いことが明らかとなった。第2層は、近世～中世末頃の層である。現状では、従来と大きな相違は無く、最上部の第2-1面が第1b層の氾濫堆積物に覆われて良好に遺存していた以外は、遺存状況は非常に悪かった。第3層は各層間に自然堆積層を挟むことが多く、遺存状況の良好な場合が多い面であったが、今回報告の調査区では氾濫堆積物の供給が少なかったためか、確實な自然堆積層の被覆はわずかで、やや攪拌を受けた自然堆積層の残骸と作土層が連続する状況であった。しかし、いずれも良好に条里地割りに伴う水田景観が検出された。しかし、今回の調査区では島畠などの畠等の遺構は確認されていない。

第4層から第9層にかけては、坪境を挟んで調査区の東西で土壤の状況が非常に相違していることが特徴である。調査区西半の二十ノ坪では、粘性の強い粘土～シルトをベースとする細粒堆積物の層であるのに対し、東半の十七ノ坪では、同様な粘性の強いベース土に細砂～小礫の堆積物が非常に多く混入する層であった。いずれの層間にも自然堆積層が挟まれず、各層の遺存状況は非常に悪かった。東半では、第4層～第9層のうち第8層まではやや層厚を薄くしつつも確認ができたが、東ほど第8層下部の第9層・10層・11層などは層の判別や遺構の帰属面を決定することが非常に困難であった。

第9面で検出した十七ノ坪の溝は、幅のわりに深い溝が多いことが特徴である。溝間には切り合い関係があることから複数回にわたって掘削された集積と考えられる。これまでの調査においても、第8層から第9層にかけてこうした遺構が集中する部分が確認されている。今回の遺構群も、第十七ノ坪でしか検出されていない。帰属面も含めて、今後の調査で解決していきたい。

第10面の02-1調査区および06-2調査区西側では水田畦畔を検出した。注目されるのは、06-2調査区の水田域の北側で小形仿製鏡が出土している。周囲を精査したが明瞭な遺構は確認されなかつた。

このように、古墳時代に相当する第10面以降の各時期の遺構面は遺存状況の悪い面が多かった。このことは、調査成果でも見てきたように、弥生時代に相当する第11面以下の各面が膨大な氾濫堆積物の堆積とそれによりこの部分の地形が高くなり、この時期以降の堆積はあまり進まなかつたことなどが関連しているものと考えられる。(廣瀬)

2. 弥生時代～縄文時代晚期の調査成果

1) 第11面・第11 b面（弥生時代後期の遺構面）

当面を覆う氾濫堆積物である第10 b層は02-1調査区の一部でしか確認されず、また第10面からの攪拌などにより第11層の残りは良好ではなく、そのため水田畦畔の遺存状況は他の弥生時代の面に比べ良好ではなかった。そのような検出状況下で水田域Aにおいて復元できた水田区画はほぼ正方形であり、一筆の面積は約25 m²であった。池島I期地区の当該面の水田では、畦畔の配置については幹線となる畦畔を地形の傾斜に合わせ数条配し、その間を支線畦畔で区切る方法が見られ、水田区画は前段階に比べ小規模で、一筆の面積が20～50 m²前後とされている（岡本2002）。今回報告した水田についても、池島I期地区とほぼ同じ傾向が窺える。（飯田）

2) 第12面・第12 b面（弥生時代中期中葉の遺構面）

当該面では5箇所の水田域が確認された。水田域Cや水田域Dのように、高まりや畦畔を効率よく配置することにより、微高地の間の狭小な部分にも水田を造成している。池島I期地区では、当該期の遺構面で、調査区の南北を貫く基幹水路が確認され、検出された各水田域は、給排水の機能を備えた水路によって結び付けられている。こうした水田域は、全体的な計画のもとに造られているとされ、当遺跡における弥生時代の水田造成技術の最大の画期が当該期の水田に見出されている（廣瀬2007）。今回の2つの調査区においても、微高地の間の狭小な土地の利用状況や、水田を区画する高まりや畦畔の配置、微高地縁辺の高まりやB200溝の両側にめぐらした堤防状の高まりなどのあり方に、第13面や第14-2面の水田域に比べ、技術的な進展を見出せる。（飯田）

【立木・流木の樹種について】

第12面で検出した、第11 b層～第12面段階に生育していたと考えられる立木・流木の樹種については、ヤマグワが7点、ヤナギ属が7点であり、カヤが1点であった。また、杭の樹種については第12面の杭列の内、A535杭列でヤナギ属が5点、ヤマグワが1点、B213・214の杭の樹種はともにサカキであり、第12 b面のB240溝で検出した杭の樹種はヤマグワ4点、ミズキ1点であった。

池島I期地区の第12面では、立木はヤナギ・ヤマグワ・ケヤキなどの河畔林を構成する樹種からなり、杭についてはアカガシ亞属やクスノキなどの陽樹が用いられていた（福田2007）。また福万寺I期地区では、弥生時代後期において、流木にはヤナギ属やヤマグワ、ケヤキなどの河畔林を構成するものが多いのに対し、堰構築材の樹種についてはヤナギ属やヤマグワはほとんど使用されず、アカガシ亞属やクスノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどの照葉樹林の樹種が用いられており、当遺跡では付近の河畔林の樹種に加え、生駒山地の丘陵上の照葉樹林からも木材獲得が可能であり、他の低地の集落に比べ木材獲得が有利であったことが指摘されている（中原2008）。

今回の第12面・第12 b面検出の立木・流木については、河畔林を構成していたと考えられるヤナギ属やヤマグワが多く見られた。一方で、杭の樹種についてもヤナギ属やヤマグワが比較的多く用いられており、付近で生育している木を利用していたと考えられる。池島II期地区南西の05-2調査区における第12面の杭列にもヤナギ属やヤマグワが多用されており（内田編2008）、池島II期地区の当該期の杭材については、近隣の河畔林を利用していた状況が窺える。（飯田）

3) 第12層下面検出の畝溝について

第12層は、池島・福万寺遺跡で通称される「第2黒色粘土(泥)層」に相当する。地形は、北西方向に延びる微高地と微高地の東西にひろがる低地に分けることができる。先述したように、微高地部分で第12層を細分することができ、その部分から畝溝を検出した。総括では、畝溝とした遺構の調査状況とその方法、類例などをあげ、その性格を述べる。

遺構の検出当初、水田畦畔状の高まりが東西方向に1条検出されたため、水田としての土地利用を想定しながら調査を進めたところ、この高まりに平行する高まりが等間隔に複数検出されたことから畠と判断した。また、微高地の畠作土層である第12層と水田作土層である低地の第12層では土質に明瞭な違いが認められ、地層の堆積環境が異なることが断面観察によってわかった。

調査では図63の1層を薄く削ることで2層の上面を検出した。この段階で畝を確認した。次いで、2層を段階的に薄く削っていき、最終的には4層の下面までの調査を行っている。層理面だけではなく、任意に掘り下げるによって層中の平面的な検討も行っている。

これまで近畿地方において、弥生時代の畠として報告されているものの大半が等間隔で連続する小溝群である。代表例としては、兵庫県若松町遺跡、大阪府久宝寺遺跡、三重県筋違遺跡などがある。これらは畠の畝間溝、耕作溝と考えられ、溝の間が畝であろうと考えられており、高まりとなる畝は検出されていない。以上の3遺跡は遺構面が自然堆積層で覆われておらず、凸遺構となる畝が検出されなかつた可能性が考えられる。自然堆積層で畠遺構が覆われていた事例として、大阪府瓜破遺跡、長原遺跡があげられる。

瓜破遺跡では弥生時代後期後半と考えられる畠遺構が検出されている。畝と畝間溝の凹凸が、水成層とされる自然堆積層によって覆われており、確実な地表面を検出している。畝・畝間は、長さ約1~5m、畝幅0.7~1.2mと0.1~0.3mの2種、畝間幅約0.2m、深さ約0.02mである。長原遺跡では、やや時代は下るが古墳時代後期~飛鳥時代と考えられる畠遺構が検出されている。畝・畝間は、長さ0.6~4.5m、幅約0.6m、深さ約0.15mである。両遺跡では畝間溝に挟まれた畝が検出されたが、その高さはいずれも畝間からの高さ0.05m前後で、地表面の高さとは同一であり、畦畔のような凸遺構ではない。

また、畠遺構とは別ではあるが、連続する小溝群が水田遺構中から検出された例として、群馬県同道遺跡があげられる。火山灰で覆われた弥生時代後期~古墳時代初頭の水田区画内に見られる平行する小溝状遺構で、長さ約2~8m、幅0.08m、深さ0.02m、溝間の間隔0.3mである。細長の水田区画に直行あるいは平行し、その方向は水田区画によって異なる。報告では耕作痕としており、性格については言及されていないが、水田形成前に耕起された痕跡である可能性が考えられる。

検出された畝溝はその間に畝と考えられる部分が存在し、遺構面が自然堆積層によって覆われていたが、畝は遺存状況が良くなく、断面観察においても明確な高まりは確認できなかった。畝溝のみの検出では畠と断定することは難しく、同道遺跡のような耕作痕の可能性も考えられる。

自然科学分析においても良好な結果は得られず、水田に近い様相が観察された。特に植物珪酸体分析ではイネ属が多く産出され、当微高地が水田域となることも考えられるが、大阪府北島遺跡の畠土壤からもイネ属が多産する分析結果が出されており、分析結果のみでは断定することはできない。(乾・後川)

4) 第13面・第13b面(弥生時代前期末から中期初頭の遺構面)

第13面では、02-1調査区側で水田域を検出した。第14-2面段階に比べ平坦面が広くなり、水

田1筆の面積も前段階に比べ格段に広いものが見られる。尚、この水田域は調査区に西接する池島Ⅰ期地区のK地区（廣瀬編2007）の続きを相当する。K地区もこの水田域と同じように、南東から北西方向に幹線畦畔を配置している。池島Ⅰ期地区における当該期の水田については、水田区画の長辺を地形の傾斜に直交させる水田と、長辺を地形傾斜に対し並行に置く水田の2つのタイプの存在が指摘されているが（岡本編1998）、02-1調査区とK地区的水田はともに後者に該当する。

第13b面では、06-2調査区のB419微高地上で集落域の一部と考えられる遺構集中部を確認した。遺構集中部は15基の土坑や39基のピット、小規模な溝で構成されていた。土坑の中には、埋土が被熱した土坑（B341・342・374土坑）や、焼けた魚骨や炭化米の出土した土坑（B342・374土坑）が見られ、当時の生業や生活を復元する上で重要な資料を得ることができた。魚骨を鑑定していただいた丸山真史氏によれば、B342・374土坑はともに内部に焼土がみられることから、これら土坑は炉の機能を有していたと考えられ、魚を食用に供した後、骨を炉に投げ込んだことを推定されている。出土した魚骨の内、コイ・コイ科の淡水魚については、周辺の河川、湖沼で捕獲したことを想定している。またウナギ目の骨とされるものについては、淡水産のウナギ、海水産のハモやアナゴのいずれかの可能性が考えられ、もし海水産の種類であれば大阪湾沿岸地域との交易が考えられるとのことである。近年、魚類遺存体の分析から、コイ科魚類を対象とした漁撈は縄文時代から認められ、また愛知県朝日遺跡などの事例から弥生時代には原始的養鯉が行われていた可能性が指摘されている（中島2009）。池島Ⅱ期地区の今後の調査において、こうした動物遺存体のデータを検討することにより、当該期の漁撈や食料獲得の実態がさらに詳細に解明されると予想される。ピットについては、建物を復元し得るような規則的に並ぶものは見られず、また柱痕の確認ができるような例も見られなかったが、埋土や出土遺物、位置関係などから、付近の土坑と同時期のものであることは明らかであり、一定期間の居住の痕跡と考えられる。これら遺構の分布は調査区南側にさらに広がっていたことが予想され、今後の調査により集落の全容が解明されると思われる。尚、近隣で、当該期の集落遺構が確認されている遺跡としては、当遺跡の南西3kmに所在する小阪合遺跡がある。弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）の井戸1基、土坑6基、小穴77基などが200m²の調査区で検出されており、拠点的な集落の一部と推測されている（原田2007）。（飯田）

5) 第14-2面・第14-2b面（縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構面）

弥生時代前期の第14-2面では、02-1調査区の南側および06-2調査区の南東部分で水田域を確認した。池島Ⅰ期地区における当該期の水田域は、調査区南部の標高T.P.1.0～1.65mで検出されている。水田域は、点在する微高地と接する緩斜面や微高地間の谷状地形を利用して造成され、微高地縁辺に掘削された水路から導水していた（廣瀬編2007）。このような地形利用については、比較的乾燥した灌漑に利便な地形が選択されていたとされている（岡本2002）。

一方、池島Ⅱ期地区の当該期の水田域については、05-2調査区が標高T.P.1.7m前後（内田編2008）、今回の02-1調査区側が標高T.P.1.35～1.6m、06-2調査区側が標高T.P.1.5～1.8mで確認している。Ⅱ期地区のこれら水田域についても、微高地に繋がる緩斜面に形成され、また水路も微高地縁辺に開削されており、Ⅰ期地区と同様の地形利用の状況が認められる。また、06-2調査区第14-2面の水田域のように、第13b面段階では集落が形成されるような比較的高い箇所でも水田が確認された。Ⅱ期地区の今後の調査により、当該期の水田開発における土地利用の特色がより詳細に解明

されると考えられる。水田 1 筆の面積については、02-1 調査区で 50 m² 前後のものが見られるのに対し、06-2 調査区では 10 m² 未満のものが見られ、また水田区画の形状は、正方形に近いもの、長方形あるいは短冊状の細長いものなどが見られる。

このように水田区画の面積や形状においても池島 I 地区の当該期の水田と同様の傾向が見いだされ、地形の起伏に合わせて小畦畔を配置している状況が窺われる。(飯田)

【杭の樹種について】

第 14-2 面で検出した杭の樹種は、ヤマグワ 5 点、アカガシ亜属 2 点、ヤナギ属 2 点、サカキ 1 点、ムクノキ 1 点、ヤブツバキ 1 点であった。ヤマグワやヤナギ属が半数を占める一方で、アカガシ亜属やヤブツバキなどの照葉樹林の樹種もみられ、近隣の河畔林の樹種に加え生駒山地などの丘陵に生育していたと推定される樹種を用いている状況が窺える。(飯田)

註

- 註1 湯本 整・飯田浩光 2009「池島・福万寺遺跡出土小形仿製鏡について」『大阪文化財研究』第34号
(財)大阪府文化財センター
- 註2 当センター主査 山口誠治の分析による。
- 註3 当分析は、株式会社パレオ・ラボに委託したものであり、その報告を要約し、掲載している。
- 註4 当分析についても、株式会社パレオ・ラボに委託したものであり、その報告を要約し、掲載している。
- 註5 当分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託したものであり、その報告を要約し、掲載している。
- 註6 廣瀬時習編 2008『池島・福万寺遺跡5』(財)大阪府文化財センター 75 p.
- 註7 林日佐子 2008「長原式土器深鉢の変遷」『古代学研究』第180号で長原式の一形態として凸帯を口縁端部から1cm以上下がった位置に貼り付けるものを水走タイプと命名されている。

引用・参考文献(50音順・敬称略)

- 泉 拓良 1989「近畿地方の繩文土器」『第7回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』
- 市村慎太郎 2006「中田遺跡群の具体(1)」『大阪文化財研究』第29号 (財)大阪府文化財センター
- 市村慎太郎 2007「河内における条里遺構の最近の調査」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会
- 井上智博編 2002『池島・福万寺遺跡2』(財)大阪府文化財センター
- 井上智博 2007「層序対比の問題点—第12層・第14~15層の検討一」『池島・福万寺遺跡3』(財)大阪府文化財センター
- 内田真雄編 2003『池島・福万寺遺跡7』(財)大阪府文化財センター
- 江浦 洋 1991「古墳時代集落の変遷と特質・池島・福万寺遺跡の古墳時代集落の評価をめぐる予察」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』II (財)大阪文化財センター
- 江浦 洋 1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要VII』(財)大阪文化財センター
- 江浦 洋 1994「小区画水田造成技術の変革」『文化財学論集』
- 江浦 洋 1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- (財)大阪市文化財協会 2002『瓜破遺跡発掘調査報告II』
- (財)大阪市文化財協会 2008『長原遺跡発掘調査報告XVII』
- (財)大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII』
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2007『河内古代寺院巡礼』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録44)
- 大野 薫 1997「生駒山西麓域の繩紋集落」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
- 大平 庄編 1992『三田市下相野塙跡』兵庫県教育委員会
- 岡本茂史編 1998『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 XXI』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 岡本茂史 2002「水稻耕作の始まりと展開—池島I期地区の弥生水田—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 XXVI』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 奥井智子 2006「畿内における土製烹炊具の様相」『第25回中世土器研究会-土製烹炊具の諸様相-』 日本中世土器研究会
- 梶山彦太郎・市原実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- 金間 細・大阪府立弥生文化博物館編 1999『弥生文化の成立』角川書店
- 河角龍典 1999『池島・福万寺遺跡およびその周辺地域の地形』『調査研究報告』第2集 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 河角龍典 2000「沖積層に記録される歴史時代の洗水跡と人間活動—大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例—」『歴史地理学』42卷
- 1号 歴史地理学会
- 河角龍典 2002『池島・福万寺遺跡および周辺の地形環境』『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X XVI』(財)大阪府文化財調査研究センター
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983『同道遺跡』

- 神戸市教育委員会 2000『若松町遺跡』
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器I 都域の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1996『古代の土器4 煮沸具 (近畿編)』
- 阪田育功 1997『河内平野低地部における河川流路の変遷』『河内古文化研究集』柏原市古文化研究会
- 寒川 雄 2007『池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡』『池島・福万寺遺跡3』(財)大阪府文化財センター
- 三宮昌弘 2003『平安時代の粗製土師器碗について』『都戸遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 下村晴文 1995『中河内の弥生時代と遺跡』『弥生時代の大坂湾沿岸-河内地域史・弥生編-』大阪経済法科大学出版部
- 積山 洋 1993『律合割期の製塙土器と塩の流通』ヒストリア第141号 大阪歴史学会
- 積山 洋 1999『大阪の土師質土器』『関西近世考古学研究VII』関西考古学研究会
- 高橋 学 1991~1997『河内平野の地形環境分析I~VI』『池島・福万寺遺跡発掘調査概要I~II・VII・X I・X III・X V』(財)大阪文化財センター・(財)大阪府文化財調査研究センター
- 地学団体研究会大阪支部編 1999『大地のおいたち』築地書館
- 千喜良淳 2002(2)『遺物 I 中・南河内における土師器皿の変遷』『庶生堂遺跡第46,47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 趙 哲済 1995『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会
- 塙本浩二編 2008『池島・福万寺遺跡4』(財)大阪府文化財センター
- 辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』『國家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989『河内地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編1 木耳社
- 中島経夫 2009『コイ科魚類の咽頭歯と考古学―フナや鰯を対象とした調査・弥生時代の淡水漁撈―』『考古学研究』第56巻 第1号 考古学研究会
- 中原 計 2008『樹種同定からみた池島・福万寺遺跡の古植生とその利用』『池島・福万寺遺跡6』(財)大阪府文化財センター
- 中村 浩 1978『和泉陶窯出土遺物の時期編年』『陶邑四』大阪府教育委員会
- 栗岡 実 2000『備前焼鉢の編年について』『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 原田昌則 1993『久宝寺遺跡』(財)八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書37 (財)八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則 2007 II 小阪合遺跡第18次調査(K S89-18)』(財)八尾市埋蔵文化財発掘調査報告101 (財)八尾市文化財調査研究会
- 東大阪市遺跡保護調査会 1973『池島町の条里遺構-調査概要-』
- 東大阪市遺跡保護調査会 1975『池島町の条里地割-48年度-49年度発掘調査概要-』
- 東大阪市教育委員会 2001『わが街再発見-東大阪市の古墳(改訂版)』
- (財)東大阪市文化財協会 1996『北島遺跡の耕作地跡と古環境』
- (財)東大阪市文化財協会 2004『生駒山西麓の王と水』東大阪市立郷土博物館
- (財)東大阪市文化財協会 2005『なごの城-発掘調査からみた若江城-』東大阪市立郷土博物館
- 樋口 薫 2007『小阪合遺跡の発掘調査』『大阪府埋蔵文化財研究会(第55回)資料』(財)大阪府文化財センター
- 平井 勝 1991『考古学ライブラリー-64 弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社
- 廣瀬時習 2007『弥生水田の一様相-池島・福万寺遺跡における事例から-』『考古学に学ぶIII』(同志社大学考古学シリーズIX)
- 廣瀬時習編 2007『池島・福万寺遺跡3』(財)大阪府文化財センター
- 廣瀬時習編 2008『池島・福万寺遺跡5』(財)大阪府文化財センター
- 福田由里子 2007『池島・福万寺遺跡の自然科学分析』『池島・福万寺遺跡3』(財)大阪府文化財センター
- 藤井直正 1983『東大阪の歴史』松齋社
- 三重県埋蔵文化財センター 2000『筋造遺跡発掘調査報告 第1分冊』
- 森本 徹・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎 2007『河内高原における古墳時代集落の基礎研究』『調査研究報告』第5集 (財)大阪府文化財センター
- 八尾市立歴史民俗資料館 1995『河内の中世考古学』八尾市教育委員会

- 山崎頼人・秋山浩三・朝田公年 2000「池島・福万寺遺跡における土器埋納遺構ほかの集成とその特質」『池島・福万寺遺跡1』
(財)大阪府文化財調査研究センター
- 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館
- 吉岡 哲也 1988『八尾市史(前近代)本文編』八尾市史編集委員会
- 米田敏幸 1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
- 若松博恵・上野利明 2002「水走遺跡の遺構と遺物」『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡 調査報告書 国道308号関連調査の成果』
(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会

自然科学分析関連の参考文献

- 安藤一男 1990「淡水底珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用」『東北地理』42
- 伊藤 良水 1994「乾田と畑の珪藻植生」日本珪藻学会第14回研究集会講演要旨, 9『珪藻学会誌』103
- 小杉正人 1989「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27
- 後藤 敏一 2002「畑の珪藻」日本珪藻学会第23回大会講演要旨, 16『珪藻学会誌』106
- 中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』
- 松田順一郎 2004「古墳時代と江戸時代の畠地堆積物堆積構造の比較－大阪府久宝寺遺跡、京都府山崎遺跡の事例－」
『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』 日本文化財科学会
- 松田順一郎・別所秀高 1997「大阪府北島遺跡における畠地形成と地形発達」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』
日本文化財科学会
- K. Kramer-H. Lange-Bertalot 1997 Süsswasserflora von Mitteleuropa 1. Teil: Naviculaceae, Gustav Fischer
- Krammer, K. 1992 PENNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER,
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program
Radiocarbon, 35
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J.,
and Spurk, M. 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40
- Vos, P. C. & H. de Wolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal
wetlands: methodological aspects. Hydrobiologia

自然科学分析関係の一覧表

表3 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

| 測定番号 (測定法) | 試料データ | $\delta^{14}\text{C}$ | ${}^{14}\text{C}$ 年代 | ${}^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代 | | |
|---------------------|-----------------------------------|----------------------------------|----------------------|---|---|-------------------------------|
| | | (permil) (yrBP ± 1 σ) | 暦年代較正値 | 1 σ 暦年代範囲 | 2 σ 暦年代範囲 | |
| PLD - 2646 (AMS) | 木片 10 - 6g 第12面 A535 杖列 | -28 | 2090 ± 40 | cal BC 95 | cal BC 165 - 130 (33.8%) cal BC 120 - 55 (66.2%) | cal BC 202 - cal AD 2 (99.5%) |
| PLD - 2647 (AMS) | 木片 1N - 5g 第12面 立木1 | -28.9 | 2115 ± 40 | cal BC 165 cal BC 130 cal BC 120 | cal BC 175 - 90 (81.1%) cal BC 75 - 60 (14.4%) | cal BC 208 - 40 (90.5%) |
| PLD - 2648 (AMS) | 木片 1N - 5g 第12面 立木3 | -26.9 | 2090 ± 40 | cal BC 95 | cal BC 165 - 130 (34.9%) cal BC 120 - 85 (35.5%) cal BC 80 - 55 (29.6%) | cal BC 202 - cal AD 2 (99.5%) |
| PLD - 2650 (AMS) | 木片 1N - 6g 第13 b面 A702 杖 | -28.1 | 2130 ± 40 | cal BC 170 | cal BC 200 - 90 (97.0%) | cal BC 211 - 44 (82.2%) |
| PLD - 2651 (AMS) | 植物片 (ヨシ) 1N - 8g 第15面直上 | -27.9 | 3305 ± 40 | cal BC 1600 cal BC 1565 cal BC 1530 | cal BC 1620 - 1520 (99.1%) | cal BC 1687 - 1497 (100%) |

※当表は株式会社パレオ・ラボによって平成16年3月に実施された、放射性炭素年代測定の一覧である。
以下、株式会社パレオ・ラボによる報告を要約する。

方法 試料を酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨調整の後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。 ${}^{14}\text{C}$ 濃度に対し、同位体分別補正を行い、補正した ${}^{14}\text{C}$ 濃度を用い、 ${}^{14}\text{C}$ 年代を算出した。

結果 ${}^{14}\text{C}$ 年代値(yrBP)の算出は、Libbyの半減期5,568年を使用し、付記した ${}^{14}\text{C}$ 年代誤差($\pm 1\sigma$)は計数値の標準偏差 σ をもとに算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは試料の ${}^{14}\text{C}$ 年代が、その ${}^{14}\text{C}$ 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

暦年代較正 ${}^{14}\text{C}$ 年代の暦年代への較正には、CALIB4.3 (Stuvier,M and Reimer,P.J.(1993) Extended ${}^{14}\text{C}$ Database and Revised CALIB3.0 ${}^{14}\text{C}$ Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.) を使用した。

表4 B240溝植物遺体同定結果一覧

| 試料番号 | 調査区名 | 遺構面 | 出土年月日 | 遺構名 | 同定結果 |
|------|------------------------|---------|--------------------|----------------|--------------|
| 463 | H 6 - 3 - 1 N - 2 g | 第 12 面溝 | 2007 年 10 月 3 日 | 溝 採取 101.3g | イバラモ属 5 個 |
| " | " | " | " | " | ヘラオモダカ属 2 個 |
| " | " | " | " | " | イネ(穂殻) 1 個 |
| " | " | " | " | " | カヤツリグサ科 50 個 |
| " | " | " | " | " | ホタルイ 23 個 |
| " | " | " | " | " | イボクサ 1 個 |
| " | " | " | " | " | コナギ 54 個 |
| " | " | " | " | " | カナムグラ 2 個 |
| " | " | " | " | " | タデ属 35 個 |
| " | " | " | " | " | ヒユ属 1 個 |
| " | " | " | " | " | ノブドウ属 1 個 |
| " | " | " | " | " | ナデシコ科 8 個 |
| " | " | " | " | " | フジ属(芽) 2 個 |
| " | " | " | " | " | アカメガシワ 1 個 |
| " | " | " | " | " | マクワウリの仲間 2 個 |
| " | " | " | " | " | タカサゴロウ 1 個 |

表5 B240溝 珪藻分析結果一覧

| 属・種名 | 出土地点 | | | | | 同定数 |
|-------------------------------|-------|-----|-----|-----|-----|------|
| | 第12地溝 | 断面1 | 断面2 | 断面3 | 断面4 | |
| Achnanthes crenulata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Achnanthes pyrenaeum | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Ampibora capillata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Caloneis bacillum | 1 | 0 | 5 | 0 | 0 | 6 |
| Ceratoneis arcus | 1 | 0 | 9 | 0 | 0 | 10 |
| Cocconeis placentula | 1 | 0 | 17 | 0 | 0 | 18 |
| Cocconeis sp. | 22 | 5 | 0 | 3 | 5 | 35 |
| Cymbella tumida | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Cymbella sp. | 22 | 0 | 10 | 0 | 0 | 32 |
| Cyactopleura sp. | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Diploneis sp. | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Eunotia exigua | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| Eunotia paludosa | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| Enacytina gilleiaceum | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| Encyonopsis microcephala | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Encyonopsis sp. | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Geissleria decussis | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Gomphonema aguir | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Gomphonema sp. | 3 | 0 | 3 | 0 | 5 | 11 |
| Gomphonema quadrivirgatum | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 3 |
| Gomphonema parvulum | 0 | 0 | 9 | 0 | 0 | 9 |
| Gyrosigma spencii | 0 | 0 | 8 | 1 | 0 | 9 |
| Gyrosigma procneum | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Gyrosigma sp. | 0 | 25 | 0 | 1 | 0 | 26 |
| Fragilaria sp. | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Frustulia sp. | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| Frustulia vulgaris | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Navicula cryptcephala | 0 | 0 | 9 | 0 | 0 | 9 |
| Navicula gregorii | 0 | 0 | 14 | 0 | 0 | 14 |
| Navicula pseudosilicula | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Navicula veneta | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Navicula sp. | 8 | 5 | 0 | 0 | 1 | 14 |
| Nitzschia amphibia | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Nitzschia hantzschiana | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 4 |
| Nitzschia palea | 0 | 0 | 16 | 0 | 1 | 17 |
| Nitzschia sp. | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 5 |
| Pinnularia lata | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Pinnularia subcapitata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Pinnularia subgibba | 0 | 1 | 3 | 0 | 1 | 5 |
| Pinnularia sp. | 0 | 6 | 0 | 0 | 2 | 8 |
| Pseudotaurosiira brevistriata | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| Rhoicosphenia abbreviata | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Sellaphora lapponica | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| Sellaphora seminulum | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 5 |
| Staurostria sp. | 6 | 1 | 0 | 0 | 1 | 8 |
| Surirella angusta | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 5 |
| Surirella sp. | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Synedra sp. | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| Synedra ulna | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 4 |
| Synedra acuta | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 遺骸破片 | 219 | 166 | 569 | 30 | 41 | 1025 |
| 計 | 311 | 214 | 699 | 39 | 64 | 1327 |

表 6 掲載遺物一覧

| 遺物番号 | 種別 | 固版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法量(cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・胎土 |
|---------|-----|--------------|---------------|------|-------------|----|-----------|---|--|---|
| 1 9 | 磁器 | | 漸層染付 | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 19c | 高台径:2.8(1/6) 現高:3.6 | 外:施釉、貫付露胎、底面須頭で 縫隙 内:施釉 | 灰白(N8)に須頭、 縫隙 |
| 2 9 | 磁器 | | 波佐見染付 重ね鉢蓋 | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 18c | 口径:7.8(1/11) 現高:1.75 | 外、内:施釉、口縁部露胎 | 灰白(N8)に須頭 |
| 3 9 | 磁器 | | 波佐見染付 美濃手皿 | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 17c | 口径:9.6(1/5) 現高:1.7 | 型づくり 外:施釉(ビンホールあり)、種花 口縁 内:施釉 | 灰白(2.5Y8/1)に 須頭 |
| 4 9 | 磁器 | | 波佐見染付 仏壇器 | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 18c | 底径:3.8(完) 現高:4.3 | 外:施釉、底面露胎 内:施釉 | 灰白(5GY8/1)に 須頭 |
| 5 9 | 陶器 | 京・信楽系 灯明台 | | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 19c | 底径:4.05(完) 現高:3.55 | 外:施釉(貫入あり)、回転ヘラケ ズリ 内:施釉(貫入あり)、回転ナデ | 灰白(7.5Y7/2)・ (10Y7/2) |
| 6 9 | 土師器 | 施塗 | | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 19c | 現高:2.75 | 外:ヨコナデ、ヘラケズリ? 内:ヨコナデ、ナデ | にふり槽(5YR6/4), 灰灰(7.5Y5/1) 石英、長石、チャート、雲母 |
| 7 9 | 陶器 | 備前焼跡 | | 02-1 | 機械削削 絞子面 | | 17c 後半 | 口径:34.0(1/7) 現高:4.8 | 外:回転ナデ 内:回転ナデ、スリ目後ナデ消し スリ目 | にふり赤褐色 (2.5YR4/3), 灰灰(7.5Y4/1) |
| 8 9 | 磁器 | 京・信楽系 灯明皿 | | 02-1 | 1面 A1井# | | 19c | 口径:6.2(3/4) 底径:2.4(完) 現高:1.2 | 外:施釉、回転ナデ、回転ヘラケ ズリ、スリ足着 内:施釉(貫入あり)、リング状の 重ね道具使用 | にふり黄褐色 (10YR7/3) |
| 9 9 31 | 瓦 | 輪相引板 | | 02-1 | 1面 A1井# | | | 径:5.5~5.7 厚:1.6 重さ:53.6g | 西暦研磨 外:タキホ 内:ナデ | 灰(N4/7) |
| 10 9 31 | 瓦 | 井戸瓦 | | 02-1 | 1面 A1井# | | | 長さ:28.6 幅:武道 25.1, 扶端 24.45 厚:3.1 | △:ナデ、ヘラ引き継ぎ 四:側印「山本新田」 | |
| 11 9 | 石製品 | 砥石 | | 02-1 | 1面 A1井# | | | 現長:7.7 現幅:3.0 現厚:0.9 | 複数質貯岩 砥石 | |
| 12 9 | 陶器 | 肥前系京焼系碗 | | 02-1 | 1面 A2井# | | 18c | 高台径:4.9(3/4) 現高:1.6 | 外:施釉(貫入あり)、底面露胎で 「清水」印 内:施釉(貫入あり)、砂粒混入 | 灰黄(5Y8/3) |
| 13 9 31 | 瓦 | 丸瓦 | | 02-1 | 1面 A9殆柔 | | | 現長:30.8 現幅:15.9 現厚:1.8 | 五瓣短い △:端部近くヨコナデ後タテナデ 四:ナデ、布目痕 | |
| 14 9 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02-1 | 1b面 精查 | | 17c 後半 | 口径:8.8(1/9) 現高:4.45 | 外:施釉 内:施釉(ビンホールあり) | 灰白(2.5Y8/1)に 須頭 |
| 15 9 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02-1 | 1層 | | 17c 後半 | 口径:11.8(1/6) 現高:5.0 | 外:施釉 内:施釉(四方擇) | 明暦灰(7.5GY8/1)に 須頭 |
| 16 9 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02-1 | 1層 | | 18c 中頃 | 口径:11.0(1/6) 現高:3.6 | 外:施釉(草花文) 内:施釉 | 明暦灰(7.5GY8/1)に 須頭 |
| 17 9 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02-1 | 1b面 精査 | | 18c | 高台径:3.85(3/4) 現高:4.65 | 外:施釉(貫入あり)、貫付露胎 内:施釉(ビンホールあり) | 灰白(5GY8/1)に 須頭 |
| 18 9 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02-1 | 1b面 精査 | | 18c | 高台径:4.4(1/5) 現高:2.4 | 外:施釉(貫入あり) 内:施釉(貫入あり) | 灰白(10Y7/1)に 須頭 |
| 19 9 | 磁器 | 肥前系青磁碗 | | 02-1 | 1層 | | 18c | 高台径:4.6(1/3) 現高:2.9 | 外:施釉(貫入あり)、ビンホール あり), 贯付露胎 内:施釉(貫入あり)、ビンホール あり) | 灰白(5Y7/2) |
| 20 9 | 磁器 | 波佐見白磁皿 | | 02-1 | 1層 | | 18c | 口径:9.75(1/8) 高台径:3.55(完) 現高:3.0 | 外:施釉、回転ヘラケズリ、高台 露胎 内:施釉(ビンホールあり) △:丸の目剥ぎ | 灰白(N8)に 須頭 |
| 21 9 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02-1 | 1層 | | 18c | 中程径:3.4(1/4) | △:織唐草文 内:露胎(回転ナデ | 灰白(5GY8/1)に 須頭 |
| 22 9 | 磁器 | 波佐見赤輪 仏壇器 | | 02-1 | 1層 | | 18c | 口径:5.8(1/4) 現高:3.0 | 外、内:施釉 外:燒成した後赤で彩色 | 灰白(N8)に 赤(10R4/6) |
| 23 9 | 陶器 | 京・信楽系 灯明皿 | | 02-1 | 1層 | | 19c | 口径:5.7(2/3) 底径:4.5(完) 現高:3.6 | 外:施釉(貫入あり)、脚端露胎 内:施釉 | 灰白(2.5Y8/2) |
| 24 9 | 陶器 | 肥前系刷毛目碗 | | 02-1 | 1b面 精査 | | 18c | 高台径:3.75(1/2) 現高:2.6 | 外:施釉、貫付露胎 内:施釉(刷毛目文) | 灰白(2.5Y8/1) |
| 25 9 | 陶器 | 唐津鉢輪 | | 02-1 | 1b面 精査 | | 17c 第2四半期 | 高台径:4.4(一部欠) 現高:2.9 | △:外一部施釉、回転ヘラケズリ 下半部露胎 内:施釉 | 灰白(2.5Y8/1), 黑灰(2.5Y5/2) |
| 26 9 | 陶器 | 肥前系碗 | | 02-1 | 1層 | | 18c | 高台径:4.8(2/3) 現高:2.4 | 外:施釉(貫入あり)、貫付露胎 重ね道具 内:施釉(貫入あり) | 浅黄(2.5Y7/3) |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 線(cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歴史 |
|----------|------|---------|--------------|------|-----|-----------|-----------|--|---|--|
| 27 9 | 陶器 | | 京・信楽系土瓶? | 02~1 | 1層 | | 19c | 径2.9(1/4) 現高:2.3 | 外:回転ヘラケズリ、回転ナデ 露胎 内:回転ナデ、露胎 | にぶい褐色 (7.5YR5/4), 灰黄(2.5Y7/2) |
| 28 9 | 陶器 | | 備前伊部手蓋 | 02~1 | 1b面 | 精查 | 17c後半 | 口径:10.2(1/4) 現高:2.5 | 外、内:回転ナデ | 赤褐色(2.5YR4/6) |
| 29 9 | 陶器 | | 京・信楽系銷蓋 | 02~1 | 1層 | | 19c | 口径:16.8(1/8) 現高:2.5 | 外、内:施釉(塗沫露胎) | 暗オリーブ(5Y4/4) |
| 30 9 | 土師器 | | 火鉢 | 02~1 | 1層 | | 19cか | 口径:19.6(1/10) 現高:4.6 | 外:回転ナデ、上端一部スヌ付 着、沈線1、スタンプ文様、沈線2 内:回転ナデ?、一部スヌ付、着 | にぶい褐色 (7.5YR5/3), 石黄、長石 |
| 31 9 | 陶器 | | 丹波焼 | 02~1 | 1b面 | | 18c | 口径:30.0(1/20) 現高:5.3 | 外:端部凹痕3、回転ナデ、自然輪 付着 内:回転ナデ、部分的に 自然輪付着 | にぶい褐色 (7.5YR5/2) |
| 32 9 31 | 磁器 | | 転用門板 | 02~1 | 1層 | | 18c | 径:1.8~2.1 厚:3~5 重さ:1.8g | 波足足頭付 外、内:施釉 | 灰白(10Y8/1)に呉 須 |
| 33 9 31 | 瓦質土器 | | 転用門板 | 02~1 | 1層 | | | 径:2.8~3.0 厚:1.0 重さ:9.8g | 外:測離、ナデ 内:ナデ | 灰白(7.5Y8/1) |
| 34 9 31 | 磁器 | | 転用門板 | 02~1 | 1b面 | | 18c | 径:6.35×6.15 厚:2.3 重さ:49.7g | 波佐見染付乳花器 外:施釉(一重刷口文) 内:施釉 | 明オリーブ灰 (2.5G7/1)に呉須 |
| 35 9 31 | 磁器 | | 転用門板 | 02~1 | 1層 | | 17c | 径:4.8~5.4 厚:0.7~1.8 重さ:35.7g | 脚/転輪 内:施釉(買入あり) | 灰白(7.5Y7/2) |
| 36 10 31 | 陶器 | | 転用門板 | 02~1 | 1層 | | 18c | 径:4.35~4.85 厚:1.6~1.9 重さ:32.6g | 肥前系陶 外壁:回転ヘラケズリ 内:施釉(買入あり) | にぶい黄褐色 (10YR7/2) |
| 37 10 31 | 陶器 | | 転用門板 | 02~1 | 1b面 | | 17c前半 | 径:4.0×4.15 厚:0.9 重さ:19.9g | 丹波焼跡 外、ナデ? 内:スリ目 | 灰白(N7/7) |
| 38 10 | 土製品 | | 人形 | 02~1 | 1層 | | | 現高:2.9 | | 灰白(2.5Y8/2) |
| 39 10 | 磁器 | | 波佐見染付碗 | 02~1 | 1b面 | A10溝 | 18c中頃 | 高台径:4.2(1/4) 現高:3.35 | 外:施釉、豊付露胎、離れ砂少し 付着 底面欠損で側縁 内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1) に呉須 |
| 40 10 | 陶器 | | 備前利村 | 02~1 | 1b面 | A24溝 | 18c末~17c初 | 口径:4.8(1/7) 現高:1.9 | 外、内:回転ナデ | にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) |
| 41 10 | 土師器 | | 皿 | 02~1 | 1b面 | A25溝 | 18cか | 口径:9.0(1/8) 現高:1.0 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白(5Y8/2) |
| 42 10 | 陶器 | | 京・信楽系 光明組 | 02~1 | 1b面 | A26溝 | 19c | 口径:6.3(1/11) 底径:2.6(1/3) 現高:1.3 | 外:施釉、回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内:施釉 | 灰白(5Y7/2) |
| 43 10 | 陶器 | | 肥前系碗 | 02~1 | 1b面 | A26溝 | 18c | 高台径:4.1(2/3) 現高:2.3 | 外:施釉(買入あり)、豊付露胎 離れ砂付着 内:施釉(買入あり) | 淡黄(2.5Y8/3) |
| 44 10 | 磁器 | | 肥前系白磁碗 | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 17c | 口径:8.4(1/9) 高台径:3.4(1/3) 現高:4.5 | 外:施釉(ビンホールあり)、豊付 露胎 内:施釉 | 灰白(N8/7) |
| 45 10 | 磁器 | 伊万里染付碗 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 17c | 口径:9.8(1/18) 現高:4.65 | 外:施釉(一重刷口文) 内:施釉 | 明緑灰(7.5GY8/1) に呉須 |
| 46 10 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 18c | 口径:10.8(1/7) 現高:5.4 底径:4.0(1/4) | 外:施釉(草花文)、豊付露胎 内:施釉 | 明青灰(SB7/1)に 呉須 |
| 47 10 | 磁器 | 波佐見染付碗 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 18c | 高台径:9.45(一部欠) 現高:3.65 | 外:施釉(ビンホールあり)、高台 露胎 内:施釉(一部露胎) | 灰白(10Y8/1)に呉 須 |
| 48 10 | 磁器 | 波佐見白磁瓶 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 18c | 高台径:4.8(1/7) 現高:3.15 | 外:施釉、豊付露胎、離れ砂付着 内:露胎、重ね燒痕? | 灰白(10Y7/1) |
| 49 10 | 磁器 | 伊万里染付瓶 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 17c | 口径:14.2(1/9) 高台径:8.2(1/4) 現高:2.2 | 外:施釉、豊付露胎、離れ砂付着、 高台内鉄款? 内:施釉(枝花文) | 灰白(5GY8/1)に呉 須 |
| 50 10 | 陶器 | 肥前系刷毛目瓶 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 17c | 口径:10.2(1/11) 底径:4.0(1/3) 現高:5.3 | 外:施釉、豊付露胎、離れ砂付着 内:施釉 | 暗オリーブ (7.5Y5/2), 灰白(10Y7/1) |
| 51 10 | 陶器 | 肥前系瓶 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 19c | 口径:9.8(1/8) 現高:4.6 | 外、内:施釉(買入あり) | 淡黄(2.5Y8/3) |
| 52 10 | 陶器 | 胡袖壺 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 15~16c | 口径:15.0(1/11) 現高:3.3 | 中国觀か 外:内:施釉(口部無輪) | 黒褐色(7.5YR3/2) |
| 53 10 | 陶器 | 肥前系壺 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 18c | 胴部径:21.1(1/15) 現高:6.1 | 外:施釉、素焼きの上に鉄腔 内:施釉(刷毛目) | 黒褐色(YR3/1), 灰黄(7.5R5/2) |
| 54 10 | 陶器 | 丹波焼跡 | | 02~1 | 1b面 | A1b土 坑 | 17c前半 | 径:9.55×4.15 | 底部: スリ目10条? | にぶい褐色 (7.5YR6/3) 石英、雲母、長石、 チャート |

| 遺物番号 | 件名番号 | 同版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・胎土 |
|------|------|------|--------------------|--------|---------------|------------|-----------|---|--|--------------------------------------|
| 55 | 10 | 31 | 磁器 転用円板 | 02 - 1 | 1 b面 | A1b 土 坑 | 18c | 径:2.35 × 2.25 厚:0.8 重さ:5.5g | 景徳鎮系系盤の底 外:施釉 内:無釉 | 灰白(N7/7)に灰須 |
| 56 | 10 | 31 | 磁器 転用円板 | 02 - 1 | 1 b面 | A1b 土 坑 | 18c | 径:3.7 × 5.3 厚:1.5 重さ:37.5g | 波佐見染付碗 外:施釉(買入あり), 施付露胎 部分的に離れ付着 内:施釉(買入あり), 胎土目? | 明暦灰(7.5GY7/1) に灰須 |
| 57 | 10 | 31 | 陶器 転用円板 | 02 - 1 | 1 b面 | A1b 土 坑 | 17c 第2四半期 | 径:7.2 × 6.7 厚:1.4 重さ:74.8g | 唐津罐 外:豊作系切頭 内:施釉, 見込みに輪状の砂目 | 黄灰(2.5YE6/1) |
| 58 | 10 | 40 | 木製品 差箋下駄 | 02 - 1 | 1 b面 | A1b 土 坑 | | 長:20.7 幅:8.65 厚:4.3 | スギ 萬字, 前足1, 横乳孔2, 仮孔4, 脚 箋分後斜めに摩減, 右足尾? | |
| 59 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 02 - 1 | 1 b層 | | 17c | 口径:6.8(1/3) 高さ:3.5 | 外, 内:施釉 | 灰白(2.5GY8/1)に 灰須 |
| 60 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 02 - 1 | 1 b層 | | 18c | 直径:10.0(1/8) | 外:施釉(買入あり) 内:施釉(買入あり) | 灰白(5Y7/2)に灰 須 |
| 61 | 10 | 31 | 磁器 転用円板 | 02 - 1 | 1 b層 | | 18c | 径:2.3 × 2.6 厚:0.5 重さ:4.6g | 波佐見染付 外:施釉(買入あり, 一重網口文) 内:施釉(買入あり) | 灰白(N7/7)に灰須 |
| 62 | 10 | 40 | 木製品 硝職具巻き | 02 - 1 | 1 b層 | | | 長幅:13.7 幅:2.9 厚:2.55 孔径:1.2 × 1.3 | スギ | |
| 63 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 1 層 | | 18c | 口径:10.6(1/4) 高台径:4.3(穴) 高さ:5.5 | 外:施釉(泡粒あり), 施付露胎 内:施釉, 底面一部離れ付着 口縁:一部熱成段に低くなっている | 灰白(10Y8/1)に灰 須 |
| 64 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 1 层 | | 18c | 高台径:4.4(1/5) 高さ:4.3 | 外:施釉, 施付露胎, 離れ付着 内:施釉, 神ハゼ | 灰白(10Y7/1)に灰 須 |
| 65 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 1 层 | | 18c | 高台径:3.9(1/3) 高さ:2.9 | 外:施釉(買入あり) 内:施釉(部分的に買入あり) | 灰白(5GY8/1)に灰 須 |
| 66 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 1 层 | | 17c 後半 | 高台径:3.8(1/2) 高さ:2.6 | 外:施釉, 施付露胎, 離れ付着 内:施釉(一部熱成段に低くなっている) 内:施釉 | 明暦灰(10GY8/1) に灰須 |
| 67 | 10 | | 磁器 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 1 层 | | 17c 第2四半期 | 口径:13.0(1/16) 高さ:2.5 | 外:施釉 内:施釉 | 明オリーブ灰 (2.5GY7/1)に灰須 |
| 68 | 10 | | 真鍮土器 火鉢 | 06 - 2 | 1 层 | | 18c | 高さ:4.2 | 外:摩滅 内:ヨコナデ | 灰(N4/4), 長石, 黄 チャート, 青母 |
| 69 | 10 | | 土器 壺 | 06 - 2 | 1 层 | | 18c 初か | 口径:30.0(1/16) 高さ:5.0 | 外:ヨコナデ, 植き上げ?, ヘラク ズ牙?, 厚くスヌ付着 内:ヨコナデ, 硬化物付着 | 青母(10YRC3/3) 赤色粒 |
| 70 | 10 | | 陶器 丹波瀬跡 | 06 - 2 | 1 层 | | 18c | 高さ:3.6 | 外:回転ナデ 内:回転ナデ後スリ目 | 暗赤褐(2.5YR3/3) 長石, 石英 |
| 71 | 10 | | 陶器 昂瀬跡 | 06 - 2 | 1 层 | | 18c | 径:18.2(1/4) 高さ:9.1 | 外:回転ナデ, ナデ 内:スリ目, 槌形痕あり | 灰白(2.5YRS/2) 石英, 長石 |
| 72 | 10 | | 陶器 鉢 | 06 - 2 | 1 层 | | ? | 口径:25.7(1/5) 高台径:17.6(1/7) 高さ:9.9 | 外:端部へて横内文様, 回転ナ デ, ヘラで文様の切り込み, 高台 ハレアゲリ 内:回転ナデ | 黒褐色(10YR3/2) |
| 73 | 11 | | 磁器 (伊万里染付碗) | 06 - 2 | 1 b面 | B1b 土坑 | 17c 第2四半期 | 口径:11.0(1/11) 高さ:4.7 | 外:施釉(一重網口文) 内:施釉 | 明青灰(SB7/1)に 灰須 |
| 74 | 11 | | 磁器 (伊万里染付碗) | 06 - 2 | 1 b面 | B1b 土坑 | 17c | 口径:11.0(1/9) 高さ:5 | 外, 内:施釉 | 明暦灰(7.5GY8/1) に灰須 |
| 75 | 11 | | 陶器 肥前系京焼系 赤鉢 | 06 - 2 | 1 b面 | B1b 土坑 | 18c | 口径:10.4(1/7) 高さ:3.9 | 外:施釉(買入あり), 赤と黄色の 色鉢 | 灰白(2.5YR8/1) |
| 76 | 11 | | 土器 羽釜 | 06 - 2 | 1 b面 | B1b 土坑 | 17c | 口径:26.2(1/12) 高さ:3.0 | 外:ヨコナデ, スヌ付着 内:ヨコナデ, ナデ | オリーブ黒 (7.5Y3/1), 石英, 長 石, チャート |
| 77 | 11 | | 土器 鉢 | 06 - 2 | 1 b面 | B1b 土坑 | 17c | 口径:32.0(1/7) 高さ:5.5 | 外:指押丸, 後揚させ上げ, ヘラケス リ, ナデ, スヌ付着 内:指押丸, ヨコナデ | 黒褐(10YR3/2) |
| 78 | 11 | 33 | 金属製品 不明銀製品 | 06 - 2 | 1 b面 | B1b 土坑 | | 幅:6.6 周幅:0.9 周厚:0.4(さびぬき) | | |
| 79 | 11 | | 磁器 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 1 b層 | 坪塙町野 西 | 18c | 高台径:3.9(穴) 高さ:3.2 | 外:施釉, 施付露胎, 離れ付 着 内:施釉 | 灰白(10Y7/1)に灰 須 |
| 80 | 13 | 31 | 磁器 転用円板 | 02 - 1 | 2 - 1 面 | A63 井 戸 | | 径:2.65 × 2.6 厚:0.85 重さ:8.1g | 外:平行タチ牛 内:当て貝齒 | 灰(N4/4) |
| 81 | 13 | 31 | 磁器 那須窯青磁碗 | 02 - 1 | 2 - 1 層 | | 15c 第4四半期 | 径:3.5 | 外, 内:施釉(買入あり) 内:錐形蓮瓣文 | 明オリーブ灰 (2.5GY7/1) |
| 82 | 13 | | 陶器 丹波瀬跡 | 02 - 1 | 2 - 1 層 | | 17c 第2四半期 | 高さ:3.5 | 外:施釉(買入なし) 内:クシ目 | 灰(N6/6) |
| 83 | 13 | | 陶器 肥前系碗 | 02 - 1 | 2 - 1 ~ 2層 | | 18c | 口径:10.8(1/12) 高さ:5.6 | 外:施釉(買入あり), 緑釉流しか け 内:施釉(買入あり) | 灰白(10YR8/2) |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 管 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歴史 |
|-----------|------|--------------|------|--------------|----|-----------|--|---|--------------------------------------|-----------|
| 84 13 | 陶器 | 肥前系灰陶輪 | 02-1 | 2-1~ 2層 | | 18c | 高台径:4.8(1/4) 現高:3.45 | 外:施釉(一部貫入あり),高台部 露胎 内:施釉(貫入あり),削 り出しに二次焼成痕 | オリーブ緑 (2.5Y4/3), にぶい黄(2.5Y6/3) | |
| 85 13 41 | 木製品 | 漆器輪 | 02-1 | 2-1~ 2層 | | | L径:11.4(2/5) 現高:3.9 | 材質不明 外:赤漆に墨塗で丸に亀甲に花葉 文(3方向) 内:赤漆のみ | | |
| 86 13 40 | 木製品 | 不明木製品 | 02-1 | 2-1~ 2層 | | | 現長:12.2 現幅:0.5 | ギヤ 著7,棒状,折れて曲がる | | |
| 87 13 40 | 木製品 | 下駄の歯? | 02-1 | 2-1~ 2層 | | | 現長:5.6 現幅:8.8 現厚:1.2 | ヒノキ | | |
| 88 13 40 | 木製品 | 不明木製品 | 02-1 | 2-1~ 2.3層 | | | 現長:11.4 現幅:2.9 現厚:0.6 | ヒノキ 木目1浅 実:浅い樹脂がある | | |
| 89 13 | 磁器 | 波佐見染付輪 | 02-1 | 2-2層 | | 18c中頃 | 高台径:4.6(1/3) 現高:2.5 | 外:内:施釉(ビンホールあり) 軸がはじけた所もあり 製作露 胎 | 灰白(5GY8/1)に灰 黒 | |
| 90 13 | 磁器 | 波佐見染付輪 | 02-1 | 2-2層 | | 18c | 高台径:4.3(1/3) 現高:2.6 | 外:施釉(貫入あり,一重網目文) 露胎,離れ砂付着 内:施釉(貫入あり,ビンホール あり) | 明暦灰(10GY8/1) に灰黒 | |
| 91 13 | 陶器 | 備前窯 | 02-1 | 2-2層 | | 15c | L径:8.8(1/6) 現高:1.6 | 外:内:回転ナデ 内:自然釉付着 | 灰黒(5Y8/2) | |
| 92 13 31 | 須恵器 | 転用門板 | 02-1 | 2-2層 | | | 径:2.2×3.3 厚:0.7 重さ:9.7g | 外:平行タタキ 内:当て具鉢 | 灰(N5/) | |
| 93 13 31 | 直 | 直用門板 | 02-1 | 2-2層 | | | 径:4.3×4.6 厚:1.4 重さ:35.6g | 凸:指揮及,ナデ 凹:ナデ | 灰(N4/) | |
| 94 13 32 | 金属製品 | 牛セリ | 02-1 | 2-2層 | | 18c後半か | 現長:3.37 現幅:1.46 | 雁口 | | |
| 95 13 | 磁器 | 領德硝窯系 青花瓶 | 02-1 | 2-3層 | | 18c前半 | L径:11.0(1/10) 現高:4.1 | 外:施釉(ビンホールあり) 内:施釉(砂1つ含む) | 明暦灰(10GY8/1) に灰黒 | |
| 96 13 31 | 磁器 | 領德硝窯系 青花瓶 | 02-1 | 2-3層 | | 18c第4四半期 | 高台径:3.8(5/8) 現高:2.4 | 外:施釉,萬古内吉洋文「永保長 春」 内:施釉,鳥文,万承頃 | 明暦灰(10GY8/1) に灰黒 | |
| 97 13 31 | 磁器 | 伊丹窯系青花瓶 | 02-1 | 2-3層 | | 17c初 | L径:12.4(1/5) 現高:4 | 外:施釉(ビンホールあり,草花 文) 内:施釉(ビンホールあり) | オリーブ黄(5Y6/3) に灰黒 | |
| 98 13 | 磁器 | 波佐見染付輪 | 02-1 | 2-3層 | | 17c | 高台径:3.9(1/6) 現高:4.3 | 外:施釉(ビンホールあり),置付 露胎,離れ砂付着,気泡あり 内:施釉 | 灰白(5GY8/1)に灰 黒 | |
| 99 13 | 陶器 | 唐津皿 | 02-1 | 2-3層 | | 17c第2四半期 | L径:11.8(若干のみ) 高台径:4.2(一部欠) 現高:3.25 | 外:施釉(ビンホールあり),回転 ヘラケズリ,スリ付着(灯明面に 転用) 内:施釉(ビンホール あり),砂目3. | 灰黄(2.5Y6/2) | |
| 100 13 | 陶器 | 唐津皿 | 02-1 | 2-4面 | | 17c第1四半期 | 高台径:4.7(一部欠) 現高:1.4 | 外:施釉,ヘラケズリ 内:施釉(織れとビンホールあり) 見込み附土1寸3 | 灰オリーブ(5Y6/2) | |
| 101 13 | 陶器 | 肥前系灰陶輪 | 02-1 | 2-3層 | | 17c | 高台径:4.5(2/3) 現高:1.9 | 外:露胎(部分的に施かかる),三 日月台面 内:施釉(貫入あり) | 灰白(10Y7/1) | |
| 102 13 | 土師器 | 銅 | 02-1 | 2-3層 | | 18cか | L径:33.4(1/20) 現高:3.7 | 外:ヨコナデ,工具痕,ナデ?,ス リ付着 内:ヨコナデ,ナデに による凹み,ハケメ | 灰(10YR6/3) 空母 | |
| 103 13 31 | 直貞土器 | 直用門板 | 02-1 | 2-3層 | | | 径:4.05×4.1 現厚:1.8 重さ:18.6g | 外:ナデ? 内:ナデ | 灰(SV5/1) | |
| 104 13 31 | 直 | 直用門板 | 02-1 | 2-3層 | | | 径:4.15×4.1 厚:1.3 重さ:28.8g | 凸,凹:ナデ | 暗灰(N3/) | |
| 105 13 31 | 陶器 | 転用門板 | 02-1 | 2-3層 | | | 径:3.8×3.2 厚:1.1 重さ:17.8g | 丹波模跡 外:ナデ 内:スリ目 | 模(7.5YR6/6) 石英,長石 | |
| 106 13 32 | 石製品 | 砥石 | 02-1 | 2-3層 | | | 現長:5.5 現幅:6.8 現厚:2.0 | 奥次西質白岩 砥石5,工具痕?,擦痕 | | |
| 107 13 | 石製品 | 不明石製品 | 02-1 | 2-3層 | | | 現長:7.46 現幅:2.96 現厚:1.28 重さ:5.4g | 先端打痕か 長:7.34 幅:4.19 砂岩 | | |
| 108 13 | 石製品 | 不明石製品 | 02-1 | 2-3層 | | | 長:1.28 重さ:62.7g 厚:1.28 重さ:62.7g | | | |
| 109 13 31 | 磁器 | 領德硝窯系 青花瓶 | 02-1 | 2-4層 | | 18c前半 | 現高:3.0 | 外:施釉 | 灰白(7.5GY8/1)に 灰黒 | |
| 110 13 31 | 磁器 | 領德硝窯系 青花瓶 | 02-1 | 2-4層 | | 18c前半 | L径:10.8(1/6) 現高:5.05 | 外:内:施釉 | 明暦灰(7.5GY8/1) に灰黒 | |
| 111 13 31 | 磁器 | 領德硝窯系 青花瓶 | 02-1 | 2-4層 | | 18c末~17c初 | L径:8.9(1/3) 現高:2.15 | 外:底面線状の印,置付露胎,高 台内外離れ砂 内:細密文 | 明暦灰(7.5GY8/1) に灰黒 | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 版権 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・駁土 | |
|-----------|------|--------------|--------|----------------|------------|---------------------------------|--|---|-------------------------------|-----------|--|
| 112 13 | 陶器 | 街津灰釉碗 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 17c 初 | 高台径:4.6(1/2) 現高:3.1 | 外:施釉(買入あり), 高台露胎 内:施釉(買入あり) | 灰白(10Y7/1) | | |
| 113 13 | 陶器 | 丹波器鉢 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 18c | 現高:2.0 | 鉢軸 | 褐黄(7.5YR4/3), 黒褐(7.5YR3/2) | | |
| 114 13 | 陶器 | 丹波器鉢 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 17c 第3四半期 | 現高:6.2 | 外:施釉, 下半露胎 内:施釉 | 灰黄(7.5YR4/2), 石英, 長石, 赤色砂粒 | | |
| 115 13 | 鍍輪陶器 | 底部 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 10c | 底径:7.4(1/8) 現高:1.0 | 京都産? 外:回転ナデ, 鍍輪, 高台端部へ ラケズリ 内:鍍輪 | 灰(N6/7) | | |
| 116 13 | 土師器 | 皿 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 16c か | L1径:8.6(1/6) 現高:1.5 | 外:ヨコナデ, 指押え, スス付着 内:ヨコナデ, スス付着(引明細) | 灰白(2.5YR8/2) 石英, 長石, 金雲母 | | |
| 117 13 | 瓦質土器 | 備跡 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 16c か | 現高:3.3 | 外:ヨコナデ 内:ヨコナデ, スリ付 | 灰(N3/4) | | |
| 118 13 | 瓦質土器 | 土管 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | L1径:15.2(1/8) | 外:ヨコナデ, ナデ?(摩滅) 現高:3.7 | 灰(N4/7), 灰白(2.5YR8/2) 石英, 長石 | | | |
| 119 13 | 瓦質土器 | 土管 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | L1径:13.5(1/2) | 外:ヨコナデ, ヘラナデ, ナデ 現高:9.55 | 灰(7.5Y6/1) 内:ヨコナデ, 指押えナデ, 黏土 接合部 | | | |
| 120 14 31 | 磁器 | 転用円板 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 13c 第3四半期 | 径:4.0 × 5.1 厚:1.2 ~ 1.8 重さ:33.3g | 鹿児島系青磁碗 外:蓮文 内:擦擦 | 明オリーブ灰 (5GY7/1) | | |
| 121 14 31 | 陶器 | 転用円板 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 17c 第2四半期 | 径:4.8 × 4.8 厚:1.7 重さ:30.1g | 肥前系碗 外:ヘラケズリ, 豆付系切り口, ハラ痕 内:施釉 | 浅灰(2.5Y7/3) | | |
| 122 14 33 | 金属製品 | 鉢 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 径:2.15 × 0.97 厚:0.10 | 元通寶(北宋 1086年)か元通 寶(北宋 1078年) | | | | |
| 123 14 33 | 金属製品 | 鉢 | 02 - 1 | 1 b ~ 2 -3層 | | 径:2.41 厚:0.63 厚:0.12 重さ:3.1g | 元通寶(北宋 1086年) | | | | |
| 124 14 41 | 木製品 | 漆器椀 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 高台基部径:5.75 ~ 6.0 | ブナ材 外:赤漆で墨透で鳥の足文様 内:赤漆のみ | | | | |
| 125 14 40 | 木製品 | 不明木製品 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 現長:23.2 厚幅:4.0 厚幅:1.1 | スギ 墨ノ孔 1, 木釘 5(内4は側面) | | | | |
| 126 14 40 | 木製品 | 不明木製品 | 02 - 1 | 2 - 4 層 | | 現長:3.4 厚幅:22.7 厚幅:0.7 | スギ 側面に木釘 5(内1は側面のみ) | | | | |
| 127 14 40 | 木製品 | 差歛下駄 | 02 - 1 | | 側溝 | 長:15.9 幅:6.1 現高:1.8 | スギ 露頭, 前歛 1, 横締孔 1, 純孔 2(内 1空吹) | | | | |
| 128 14 | 磁器 | 龍泉窯系青磁碗 | 06 - 2 | 2 - 1 • 2層 | | 15c | 高台基部径:5.8(2/5) 現高:2.0 | 外:施釉, 底面露胎 内:施釉メンコ?に転用 | オリーブ灰 (10Y6/2) | | |
| 129 14 | 磁器 | 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 2 - 1 • 2層 | 坪境付近 | 18c | 高台径:4.6(1/4) 現高:2.0 | 外:施釉, 豆付露胎, 離れ付着 内:施釉 | 明オリーブ灰 (5GY7/1)に薄い駁 頭 | | |
| 130 14 | 土師器 | 皿 | 06 - 2 | 2 - 1 • 2層 | | 13c か | 口径:8.8(1/8) 現高:2.0 | 外:ヨコナデ, ナデ 内:ヨコナデ, ナデ | 灰白(5Y7/1) チャート | | |
| 131 14 | 瓦質土器 | ミニチュア羽釜 | 06 - 2 | 2 - 1 • 2層 | | 16 ~ 17c か | 口径:9.2(1/7) 現高:2.0 | 外:ヨコナデ 内:指押えナデ | 灰(N5/7) | | |
| 132 14 32 | 土製品 | 大型防護車? | 06 - 2 | 2 - 1 • 2層 | 坪境付近 | 径:8.6 ~ 8.9 厚:3.0 | 外:全体ナデ, 工具痕, 周縁摩滅, 孔から削痕(裏面にもあり) | 灰黄(2.5Y6/2) 牛糞西脛産 | | | |
| 133 14 | 磁器 | 波佐見染付碗 | 06 - 2 | 2 - 3 面 精查 | | 18c | L1径:9.7(1/2) 高台径:3.8(2/3) 現高:5.3 | 外:施釉(気泡多し), 重ね焼痕? 内:施釉(一部気泡あり) | 波佐見(2.5Y7/1)に 貝頭 | | |
| 134 14 | 磁器 | 転用円板 | 06 - 2 | 2 - 3 面 精查 | | 17c 後半 | 径:6.2 × 5.9 厚:1.9 重さ:64.7g | 波佐見青磁碗 外:施釉, 底部露胎, 豆付離れ砂 付着 内:施釉(買入あり), 灰?痕跡 | 明オリーブ灰 (5GY7/1) | | |
| 135 14 | 瓦 | 丸瓦 | 06 - 2 | 2 - 3 面 精查 | | 近世 | 現長:14.5 厚:1.3 厚:1.0 | ヒノキ 2枚に分割, 線刻上に小孔 | 灰(N4/7) 石英, 長石 | | |
| 136 14 39 | 木製品 | 漆器椀 | 06 - 2 | 2 - 2 層 | | | 現高:5.7 | ブナ材 外:黒漆, 土庄で右にひしやげて る 内:赤漆 | | | |
| 137 14 39 | 木製品 | 刷毛? | 06 - 2 | 2 - 1 • 2層 | 坪境付近 | | 現長:11.9 厚幅:6.8 厚:1.0 | ヒノキ 2枚に分割, 線刻上に小孔 | | | |
| 138 14 | 土師器 | 皿 | 06 - 2 | 2 - 3 面 杭 | B12 土 杭 | 17 ~ 18c か | L1径:9.7(1/14) 現高:1.7 | 外:指押え, ナデ, スス付着 内:ヨコナデ, ナデ | 灰黄(2.5Y7/2) 石英, 長石 | | |
| 139 14 31 | 磁器 | 景德鎮窯系 青花碗 | 06 - 2 | 2 - 3 • 4層 | | 16c 第4四半期 | 高台基部径:5.5(1/4) 現高:1.6 | 較慶文 外:施釉, 底部ノッキング痕 内:施釉, 万通心 | 明褐色(7.5GY8/1) に貝頭 | | |
| 140 14 | 土師器 | 皿 | 06 - 2 | 2 - 3 • 4層 | | 16c 末 ~ 17c 初 か | L1径:8.7(1/8) 現高:1.7 | 外, 内:ヨコナデ, 指押えナデ 内:ヨコナデ, 指押えナデ | ぶる黄相 (10YR7/3) | | |

| 遺物番号 | 神岡版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 番 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調 (外面)・胎土 |
|------|----------|--------------------|------|-----------|----------------|----------------------------------|--|---|---------------------------------------|
| 141 | 14 | 土師器 羽釜 | 06-2 | 2-3 4層 | | 16c か | 現高:3.1 大和型(本来は瓦質) 外:ヨコナデ,四線2,スヌ付着 内:ヨコナデ,コグ付着 | 灰灰(7.5YR4/1) 石英,長石,赤色粒 | |
| 142 | 14 | 弥生土器 甕 | 06-2 | 2-3 4層 | 弥生IV-4 | 11c径:11.6(1/7) 現高:8.9 | 外:指押え後ヨコナデ,ヘラミガキ 内:しぼり目,板ナデ | オリーブ黒(5Y3/2) 牛糞土質産 | |
| 143 | 14 39 | 木製品 曲形底板? | 06-2 | 2-3 4層 | | | 現長:13.9 規幅:6.0 厚:1.3 | スギ 側面に釘穴? | |
| 144 | 17 | 磁器 龍泉窯青磁碗 | 02-1 | 3-1層 | | 15c 第4四半期 | 口径:13.7(1/16) | 外:施釉(費人あり),螺旋施文 内:施釉(費人あり) | 灰オーブ (10YR6/2) |
| 145 | 17 | 磁器 景德鎮窯系 端反皿 | 02-1 | 3-1層 | | 16c 未~17c 初 | 高台径:8.9(1/5) | 外:施釉(ビンホールあり),費付 内:無釉 | 灰白(2.5GY8/1) |
| 146 | 17 | 土師器 皿 | 02-1 | 3-1層 | | 15c 後半か | 口径:8.8(1/6) 現高:1.8 | 外:ヨコナデ,指押えナデ,薄く スヌ付着 内:ヨコナデ,ナデ,スヌ付着 | 灰灰(10YR6/1) |
| 147 | 17 | 土師器 羽釜 | 02-1 | 3-1層 | | 16c か | 口径:28.5(若干のみ) 現高:5.15 | 外:四線3,ヨコナデ,工具ナデ, ヘラケリズ,スヌ付着 内:ヨコナデ,ハケメ,コグ付着 ト,赤色砂粒 | ぶい,黄褐色 (10YR6/3) 石英,長石,チャート |
| 148 | 17 | 瓦質土器 鉢 | 02-1 | 3-2層 | | 16c か | 口径:32(1/15) 現高:5.0 | 外:ヨコナデ,指押えナデ 内:ヨコナデ | 灰(4N7), 灰白(10YR8/1) 長石,金芸母,チャート |
| 149 | 17 | 陶器 備前焼鉢 | 02-1 | 3-1層 | | 16c 未 | 口径:23.6(1/7) | 外:回転ナデ,ナデ 内:回転ナデ,スリリ(2.5cm幅9 条),使用痕あり | 灰(7.5YR4/1) |
| 150 | 17 | 陶器 備前焼鉢 | 02-1 | 3-1層 | | 16c 未 | 口径:42.6(1/18) | 外:四線2 外,内:回転ナデ | 灰灰(7.5YR6/1),に ぶい,赤褐(5YR5/4) |
| 151 | 17 | 東播系須恵器 片口鉢 | 02-1 | 3-2層 | | 12c 中~後半か | 現高:4.1 | 外,内:回転ナデ | 緑黒(5G1/1), 灰白(NT7) |
| 152 | 17 | 土師器 羽釜 | 02-1 | 3-3層 | | 16c か | 口径:22(若干のみ) 現高:5.6 | 外:四線3,ヨコナデ,ヘラケリズ 内:ヨコナデ,ナデ及びハ ケメ | ぶい,赤褐色 (10YR6/4),石英,長 石,チャート |
| 153 | 17 33 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 3-3層 | | 径:2.40 邪径:0.55 厚:0.13 重さ:3.2g | 聖宋元寶(北宋 1101 年) | | |
| 154 | 19 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 5 層粘合 | | 径:2.39 邪径:0.69 厚:0.09 重さ:3.1g | | | |
| 155 | 19 | 磁器 龍泉窯青磁碗 | 06-2 | 4層 | 14c 中頃 | 口径:15.0(1/8) | 外:施釉,蓮文 内:施釉 | | |
| 156 | 19 | 土師器 皿 | 06-2 | 4層 | | 口径:7.4(1/5) | 外,内:ヨコナデ,ナデ | 浅黄(2.5Y7/3) 石英,長石,雲母 | |
| 157 | 19 | 土師器 皿? | 06-2 | 4層 | | ? | 口径:不明 現高:4.0 | 外:ヨコナデ,指押え 内:ヨコナデ,ハケメ 内外面スヌ付着 | 黄灰(2.5Y5/1) 石英,長石 |
| 158 | 19 | 瓦器 椀(和泉型) | 06-2 | 4層 | 条里町野 村五 | 14c 前半 | 口径:10.0(1/9) 現高:1.5 | IV-4 ~ 5 初か 外,内:ヨコナデ,ナデ | 灰灰(7.5Y7/1) 石英,長石 |
| 159 | 19 | 瓦質土器 羽釜 | 06-2 | 4層 | | 16c か | 現高:5.0 | 外:ヨコナデ 内:摩滅 | 黒(2N7/2) 長石,石英,チャート? |
| 160 | 19 | 陶器 瀬戸灰釉窓 | 06-2 | 4層 | | 15c | 底径:12.6(1/17) 現高:4.3 | 外:自然釉付着 内:ナデ,自然釉付着 | 灰オーブ (7.5Y5/3) |
| 161 | 19 | 木製品 不明木製品 | 06-2 | 4層 | | | 現長:4.3 規幅:0.7 厚:0.5 | 先鋒化 | |
| 162 | 21 | 土師器 皿 | 02-1 | 5層 | 13c か | 口径:8.2(1/6) | 外:指押えナデ 内:ヨコナデ? | 灰白(5Y7/2) | |
| 163 | 21 | 土師器 皿 | 02-1 | 5層 | 13c 後半か | 口径:8.6(1/7) 現高:1.6 | 外:ヨコナデ(工具による),指 押えナデ 内:ヨコナデ,ナデ | ぶい,黄褐色 (10YR6/3),にぶい 橙(5YR6/4) | |
| 164 | 21 | 土師器 皿 | 02-1 | 5層 | 15c か | 口径:8.0(1/5) 現高:1.6 | 外:ヨコナデ,指押えナデ 内:ヨコナデ | ぶい,黄(2.5Y6/3) | |
| 165 | 21 | 土師器 皿 | 02-1 | 5層 | 15c か | 口径:9.0(1/8) 現高:1.6 | 外:ヨコナデ,指押えナデ 内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄褐色(10YR6/2) 長石,石英,クサリ 鐵,雲母 | |
| 166 | 21 | 土師器 皿 | 02-1 | 5層 | 15c か | 口径:9.8(1/4) 現高:1.85 | 外:ヨコナデ,指押えナデ 内:ヨコナデ,ナデ | にぶい,褐 (7.5YR6/3) | |
| 167 | 21 | 瓦器 椀(和泉型) | 02-1 | 5層 | 13c 中頃~後半 か | 口径:11.6(1/10) 現高:2.45 | IV-1 ~ 2 初か 外:ヨコナデ,指押えナデ 内:ヨコナデ,ヘラミガキ | 灰(4N7) | |
| 168 | 21 | 瓦器 椀(和泉型) | 02-1 | 5層 | | 13c 未 | 口径:11.3(1/11) 現高:2.5 | IV-3 初 外:ヨコナデ,ヨコナデ後ナデ, 指押え 内:ヨコナデ,ナデ | 灰(3)(2.5Y7/1) |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・駆土 |
|-----------|----------------------|------|------|--------------|------------------|----------------------------|---|--------------------------------------|----|-----------|
| 169 21 | 瓦器 椀(和卓型) | 02-1 | 5層 | | 13c 末~14c 初 か | L径:11.1幅:1.1/10 現高:1.8 | IV~3期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白(S5Y7/1), 灰(N4/7) | | |
| 170 21 | 土師器 羽釜 | 02-1 | 5層 | | 15cか | L径:22.4幅:1.1/12 現高:6.9 | 外:ヨコナデ、門輪4、スヌ付着 内:ヨコナデ、ヨコハケメ、部分的にコグ付着 | オリーブ黒(S5Y3/1) 石英、長石、チャート | | |
| 171 21 | 瓦質土器 羽釜 | 02-1 | 5層 | | 15cか | L径:23.5幅:1.1/16 現高:5.4 | 外:西縁2、脚下半スヌ付着 内:ハケメ、ナデ | オリーブ黒 (10Y3/1), 石英、長石、チャート | | |
| 172 21 | 陶器 備前焼跡 | 02-1 | 5層 | | 15c後半 | L径:29.0幅:1.1/12 現高:4.8 | 外:回転ナデ(シワが多い)、自然 輪(内)、内:回転ナデ、クリム、 自然輪付着(ゴマ灰) | オリーブ黒 (7.5RA/3) | | |
| 173 21 32 | 石製品 砥石 | 02-1 | 6面 | | | | 現長:10.15 幅:3.6 現厚:2.65 | 砂鉄 砥面6 | | |
| 174 21 33 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 5層 | | | | 径:4.3 邵径:0.63 厚:0.13 重さ:3.5g | 銅元寶(後周 955年) | | |
| 175 21 33 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 5面精査 | 条理整理 推定位置 | | | 径:2.56 邵径:0.70 厚:0.10 重さ:3.2g | 聖宋通寶(北宋 1038年) | | |
| 176 21 33 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 5層 | | | | 径:2.44 邵径:0.71 厚:0.09 重さ:2.4g | 聖宋通寶(北宋 1038年) | | |
| 177 21 33 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 5層 | | | | 径:2.29 邵径:0.61 厚:0.13 重さ:2.8g | 元豐通寶(北宋 1078年) | | |
| 178 21 33 | 金属製品 錢貨 | 02-1 | 5層 | | | | 径:2.46 邵径:0.63 厚:0.08 重さ:3.2g | 聖宋元寶(北宋 1101年) | | |
| 179 21 32 | 金属製品 鉗鍼 | 02-1 | 6面 | | | | 刃幅:3.15 | 内側にサビ付着、茎部をカギ状に 折り曲げ柄に装着 | | |
| 180 21 | 磁器 閩江窯系白磁皿 | 06-2 | 5層 | | 15c後半 | L径:10.2幅:1.5 現高:1.65 | 外:施釉、下半露胎 内:施釉 | 灰白(10Y8/1) | | |
| 181 21 | 磁器 華南沿海南窯系 白磁皿 | 06-2 | 5層 | | 13c 第1四半期 | 径径:5.2幅:1.7 現高:1.1 | IV 1c類 外:回転ケズリ痕、部分的に露胎 内:施釉 | 灰白(2.5Y8/2) 黑色粒 | | |
| 182 21 | 土師器 皿 | 06-2 | 5層 | | 15cか | L径:8.0幅:1.6 現高:1.3 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、スヌ付着 | 黄灰(2.5Y5/1) 石英 | | |
| 183 21 | 土師器 皿 | 06-2 | 5層 | | 15c | L径:9.0幅:1.7 現高:1.4 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ | 赤色粒、藍母 | | |
| 184 21 | 瓦質土器 椀(和卓型) | 06-2 | 5層 | | 14c 初か | L径:10.0幅:1.8 現高:1.7 | IV~3~4期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ一部ヘラミガキ、ナ デ | 灰白(N8/) | | |
| 185 21 | 土師器 羽釜 | 06-2 | 5層 | | 14c | L径:18.0幅:1.12 現高:1.95 | 外、内:ヨコナデ | 灰白(S5Y8/2), 石 英、長石、チャート | | |
| 186 21 | 土師器 羽釜 | 06-2 | 5層 | | 15c | L径:2.6幅:1.18 現高:6.7 | 外:指押さえ後ナデ、ヨコナデ、 端部と脚下半にスヌ付着 内:ハケメ(太繩あり)、部分的に コグ痕付着 | 黄灰(2.5Y3/1) 石英、長石 | | |
| 187 21 | 瓦質土器 膳鉢 | 06-2 | 5層 | | 14c | L径:34.0幅:1.18 現高:5.4 | 外:回転ナデ、ヘラケズリ 内:ヨコナデ、回転ナデ後スリリ | | | |
| 188 21 | 瓦 丸瓦 | 06-2 | 6面 | B32 鮎 畔 | 宝町か | 側面幅:0.9 側幅:2.6 | 凸:平行タタキ、スヌ付着 凹:面とり広い、布目(ジグ状段 あり) | オリーブ黒 (7.5Y3/1) | | |
| 189 21 | 石製品 不明石器品 | 06-2 | 5層 | | | 現長:4.72 側幅:2.53 現厚:2.22 | 粘土片岩 段? | | | |
| 190 21 | 石製品 | 06-2 | 5層 | | | 現長:4.78 側幅:2.55 現厚:0.42 | 粘土片岩 頭面2、スヌ付着 | | | |
| 191 21 32 | 石製品 砥石 | 06-2 | 6面 | | | 現長:3.0 側幅:3.75 現厚:2.05 | 浅灰色質地粘土片岩 頭面4、使用痕 | | | |
| 192 21 40 | 木製品 不明木製品 | 06-2 | 5層 | | | 現長:1.49 側幅:3.6 厚:0.8 | スギ 腐食 | | | |
| 193 23 31 | 磁器 龍泉窯系青磁碗 | 02-1 | 6層 | | 14c 初 | 胴内径:14.0幅:1.9 現高:4.2 | 外:施釉(蓮瓣文) 内:施釉 | オリーブ灰 (5CYB/1) | | |
| 194 23 | 土師器 皿 | 02-1 | 6層 | | 12c 中頃か | L径:8.4幅:1.9 現高:1.7 | 外:2段ヨコナデ、摩滅 内:ヨコナデ、摩滅 | にぶい黄相 (10YR7/3) | | |
| 195 23 | 土師器 皿 | 02-1 | 6層 | | 13c 後半か | L径:8.4幅:1.7 現高:0.85 | 外:ヨコナデ、摩滅 内:ヨコナデ | 淡赤相 (2.5YR7/4) にぶい相 (2.5YR6/4) | | |
| 196 23 | 土師器 皿 | 02-1 | 6層 | | 14c か | L径:9.2(若干のみ) 現高:1.8 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ | 灰白(7.5Y7/1), 灰灰(10YR5/1) | | |
| 197 23 | 土師器 皿 | 02-1 | 6層 | | 14c 後半か | L径:9.0幅:1.6 現高:1.9 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ | にぶい相 (7.5YR6/4) | | |
| 198 23 | 土師器 皿 | 02-1 | 6層 | | 15c か | L径:8.4幅:1.3 現高:2.1 | 外:ヨコナデ、指押え 内:ヨコナデ | にぶい黄相 (10YR7/2) | | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・駆土 |
|------|----|------|----------|------|--------|----------------|----------------------------------|---|---------------------------|-----------|
| 199 | 23 | | 瓦器皿 | 02-1 | 6層 | 12c 末 ~ 13c 初か | L1径:10.0(1/7) 現高:1.35 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、まばらなヘラミガキ | 灰(N5)/・(N4) | |
| 200 | 23 | | 瓦器皿 | 02-1 | 6層 | 13c か | L1径:9.0(1/12) 現高:1.0 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰(N4)/ 灰白(2.5Y7/1) | |
| 201 | 23 | | 瓦器皿(大和型) | 02-1 | 6層 | 12c 後半か | L1径:14.7(1/17) 現高:1.7 | II A古) 残高か 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ ナデ後一部ヘラミガキ 内:沈継1.ヘラミガキ | 暗灰(N3)/ | |
| 202 | 23 | | 瓦器皿(大和型) | 02-1 | 6層 | 12c 前半か | 高台径:6.0(1/6) 現高:1.55 | B Aか II B段頸か 外:ヨコナデ、ナデ 内:ヘラミガキ、工具によるナデ 後縁輪状暗文 | 暗灰(N3)/ | |
| 203 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 12c 後半か | 高台径:4.4(1/8) 現高:0.95 | II 3 前か 外:ヨコナデ 内:格子状暗文 | 灰(N4)/ | |
| 204 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 12c 末 ~ 13c 初 | L1径:14.0(1/8) 現高:3.05 | Ⅲ 2 前か 外:ヨコナデ(一部ヘラミガキ)、 ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ヘラミガキ | 暗灰(N3)/ 灰(N5) | |
| 205 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 7層 | 13c 初か | 現高:4.25 | Ⅲ 2 前か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヘラミガキ | 灰(N4)/ | |
| 206 | 23 | | 瓦器皿(大和型) | 02-1 | 6層 | 13c 中頸か | L1径:12.2(1/12) 現高:1.45 | Ⅲ C段頸か 外:ヨコナデ後ヘラミガキ?、摩滅 内:沈継1.ヘラミガキ | 暗灰(N3)/ | |
| 207 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 13c 中頸 | L1径:12.8(1/14) 現高:2.5 | IV 1 ~ 2 期 外:ヨコナデ、指押え 内:まばらなヘラミガキ | に赤い黄相 (10YR7/2) | |
| 208 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 13c 中頸 | 高台径:3.8(1/4) 現高:0.5 | IV 1 ~ 2 期 外:ヨコナデ、ナデ、粘土紐高台 内:ナデ後平行線状暗文 | 暗灰(N3)/ | |
| 209 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 13c 中頸か | L1径:12.8(1/11) 現高:1.7 | IV 1 前か 外:ヨコナデ、指押え 内:ヨコナデ、まばらなヘラミガキ | に赤い黄相 (10YR7/2) | |
| 210 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 13c 後半 | L1径:11.8(1/12) 現高:3.05 | IV 2 ~ 3 前か 外:ヨコナデ、指押え後ナデ 内:ヨコナデ、ナデ後まばらなヘラミガキ | 灰(N4)/ | |
| 211 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 7層 | 13c 後半 | L1径:11.8(1/6) 現高:2.6 | IV 2 ~ 3 期 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、まばらなヘラミガキ | 灰(N5)/・(N4)/ 灰白(5Y7/1) | |
| 212 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 02-1 | 6層 | 13c 後半 | L1径:12.0(1/10) 現高:2.0 | IV 2 ~ 3 期 外:ヨコナデ、指押えナデ? 内:ヨコナデ、ナデ後一部ヘラミガキ | 灰(N4)/ 灰白(5Y7/2) | |
| 213 | 23 | | 土師器羽釜 | 02-1 | 6層 | 12c か | 現高:1.3 | 外:ヨコナデ、スス・コダ付着 | 明灰灰(7.5YR7/2) | |
| 214 | 23 | | 石製品砥石 | 02-1 | 6層 | | 現長:3.0 現幅:3.6 現厚:0.6 | 青白片岩 砥石1.スス付着 | | |
| 215 | 23 | 33 | 金属製品銅鏡 | 02-1 | 6層 | | 径:2.52 邪径:0.68 厚:0.08 重さ:3.2g | 銀祐元賀(北宋 1034 年) | | |
| 216 | 23 | 32 | 金属製品鉄鍔 | 02-1 | 6 ~ 7層 | | 現長:1.13 現幅:7.6 現厚:0.2 ~ 0.4 | 外:加工面あり | | |
| 217 | 23 | 32 | 金属製品鉄鍔 | 02-1 | 6層 | | 現長:4.8 現幅:4.5 現厚:0.3 | 全体にサビ付着 | | |
| 218 | 23 | 32 | 金属製品鉄釘 | 02-1 | 6層 | | 現長:9.4 現幅:2.0 | 全体にサビ付着 | | |
| 219 | 23 | 41 | 木製品不明木製品 | 02-1 | 6層 | | 現長:8.2 現幅:4.9 現厚:2.2 | コウヤマキ 下部に突出させるような加工痕 | | |
| 220 | 23 | | 土師器皿 | 06-2 | 6層 | 14c 後半か | L1径:9.8(1/7) 現高:1.8 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰黄(2.5Y6/2) 石英、長石、碧母 | |
| 221 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 06-2 | 6層 | 13c 末 ~ 14c 初 | L1径:10.8(1/4) 現高:2.6 | IV 3 期 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、まばらなヘラミガキ | 灰オリーブ(5Y4/2) | |
| 222 | 23 | | 瓦器皿(和泉型) | 06-2 | 6層 | B28 磚 | L1径:11.8(1/16) 現高:2.4 | IV 3 期 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰(N5)/ | |
| 223 | 23 | | 瓦質土器壺 | 06-2 | 6層 | | L1径:32.4(1/9) 現高:5.7 | 外:ヨコナデ、タタキ 内:ヨコナデ、板ナデ、ハケメ | 灰白(2.5Y1/7)、石英、長石、チャート | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 番(cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歴史 |
|------|----|------|---------------------|--------|--------------|-----------|------------------|----------------------------------|---|------------------------------------|
| 224 | 23 | 33 | 金属製品 小刀? | 06 - 2 | 6層 | | | 現長:4.0 現幅:1.0 現厚:0.19 | 基部? | |
| 225 | 23 | 33 | 金属製品 かすがい? | 06 - 2 | 6層 | 坪境町 西側 | | 現長:1.9 現幅:5.8 現厚:0.25(さびぬき) | 鉄製 | |
| 226 | 23 | 33 | 金属製品 鉄鎌 | 06 - 2 | 6層 | 坪境町 西側 | | 現長:9.7 現幅:4.7 現厚:0.35 | | |
| 227 | 23 | 33 | 金属製品 鉄釘 | 06 - 2 | 6層 | | | 現長:4.1 現幅:0.4(さびぬき) 現厚:0.3 | | |
| 228 | 25 | | 瓦器 椀 | 02 - 1 | 7面 | A117坪 | 11c 後半 | 高台径:6.6(1/6) 現高:1.4 | 外:ヨコナデ 内:ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 229 | 25 | 31 | 磁器 单南泊南窯系 白磁碗 | 02 - 1 | 7層 | | 13c 第1四半期 | 現高:2.6 | N: 2類 外、内:施釉(貫入あり) | 灰白(7.5Y7/1) |
| 230 | 25 | 31 | 磁器 单南泊南窯系 白磁碗 | 02 - 1 | 8曲 | | 13c 前半 | 現高:3.8 | 外、内:施釉(ピンホールあり) | 灰白(7.5Y7/1) |
| 231 | 25 | 31 | 磁器 龍皇室系青磁碗 | 02 - 1 | 8面 | | 13c 第4四半期 | 現高:4.3 | 外:施釉(鍋底升文) 内:施釉 | 绿灰(7.5G6/1) |
| 232 | 25 | | 土師器 皿 | 02 - 1 | 7層 | | 13c 前半か | L1径:9.0(1/8) 現高:1.0 | 外:ヨコナデ、指押え、ナデ(摩 滅) 内:ヨコナデ、表面剥離 | にぶい緑 (7.5YR6/3), 灰灰(10YR5/1) |
| 233 | 25 | | 土師器 皿 | 02 - 1 | 7層下部 | | 13c 後半か | L1径:7.8(1/8) 現高:1.05 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ハメ又後ナデ | 浅黄緑(7.5YR8/4) |
| 234 | 25 | | 土師器 皿 | 02 - 1 | 7層 | | 13c 後半か | L1径:7.1(1/10) 現高:1.2 | 外:磨滅(ナデか)、指押え 内:磨滅(ナデか) | 浅黄(2.5Y7/3) |
| 235 | 25 | | 土師器 皿 | 02 - 1 | 7層 | | 13c 前半か | L1径:11.4(1/7) 現高:2.05 | 外:ヨコナデ、指押え、ナデ 内:ヨコナデ | 灰黄(2.5Y7/2) |
| 236 | 25 | | 土師器 皿 | 02 - 1 | 7層 | | 12c か | L1径:14.5(若干のみ) 現高:1.8 | 外:ヨコナデ、摩滅 内:ヨコナデ、ナデ | (10YR7/3) 赤色砂粒 |
| 237 | 25 | | 土師器 皿 | 02 - 1 | 8面精查 | | 12c 末~13c 初 か | L1径:14.3(1/11) 現高:2.15 | 外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ | 浅黄(7.5YR8/4) |
| 238 | 25 | | 瓦器 椀(輪葉型) | 02 - 1 | 7層 | | 12c 前半か | 現高:3.7 | 外: 1 期か 内: ナデ後まばらなヘラミガキ 内: 沈線1、ハメ後密なヘラミ ガキ | 暗灰(N3/) |
| 239 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7曲 or 7 坪 | | 12c 前半 | L1径:14.3(1/15) 現高:4.05 | II: 1 ~ 2 期 外:ヨコナデ、指押え後ナデの後 ヘラミガキ、粘土接合痕? 内:ヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 240 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 12c 中頃 | 高台径:5.0(1/3) 現高:1.25 | B: 2 ~ 3 期か 外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後斜格子状暗文 | 灰(N5/) |
| 241 | 25 | | 瓦器 椀(大和型?) | 02 - 1 | 7層 | | 12c 後半か | 高台径:5.7(1/4) 現高:1.08 | ■ A(吉)と圓印か 外:ヨコナデ、ナデ 内:ハメ又後続輪状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 242 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 前半か | L1径:13.8(1/8) 現高:3.4 | ■ 3 期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:まばらなヘラミガキ、スス付 着 | 灰白(5Y7/1), 灰(N5/) 石英、長石 |
| 243 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 前半 | 高台径:4.0(1/2) 現高:1.08 | ■ 3 かIV: 1 期か 外:指押えナデ、ヨコナデ、ナデ 内:工具によるナデ後平行線状暗 文 | 灰(N4/) |
| 244 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 前半 | 高台径:4.8(1/7) 現高:1.9 | ■ 2 ~ 3 期か 外:指押え後ナデ、ヨコナデ 内:ナデ後一部ヘラミガキ、見込 み平行線状暗文 | 灰(N4/) |
| 245 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 前半 | 高台径:3.8(1/2) 現高:0.7 | ■ 3 期か 外:ナデ、ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後平行線状暗文 | 灰白(N7/) |
| 246 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 中頃か | L1径:12.8(1/5) 現高:2.8 | N: 2 期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、数条のヘラミガキ | 灰(5Y4/1) |
| 247 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 中頃か | L1径:12.0(1/6) 現高:2.1 | N: 2 期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、数条のヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 248 | 25 | | 瓦器 椀(和泉型) | 02 - 1 | 7層 | | 13c 末~14c 初 か | L1径:10.8(1/6) 現高:2.3 | N: 3 期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:一部ヘラミガキ | 灰白(5Y7/1), 灰(10Y4/1) |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歴史 |
|------|--------|------|--------------|------|------|-----------|-------------------------|---|---|------------------------------|
| 249 | 瓦器 | 25 | 碗(大和型) | 02-1 | 7層 | | 13c 後半か | 高台径:5.4(1/10) 現高:1.0 | ■ D.E段階か 外:ナデ、ヨコナデ、指押え 内:ナデ後ヘラミガキ | 灰(N4/4) |
| 250 | 瓦質土器 | 25 | 鉢 | 02-1 | 7層 | | 14cか | 現高:2.7 | 片口 外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白(N8/), 灰(N4/) |
| 251 | 東播系須恵器 | 25 | 費 | 02-1 | 7層 | | 13c か | 口径:22.4(1/8) 現高:4.3 | 外:回転ナデ、タタキ、指押え? 内:回転ナデ | 灰(7.5Y5/1) |
| 252 | 東播系須恵器 | 25 | 鉢 | 02-1 | 7層 | | 12c 中頃か | 現高:3.9 | 外:回転ナデ、回転ナデ後不定方 向ナデ 内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 253 | 東播系須恵器 | 25 | 鉢 | 02-1 | 7層 | | 12c 末~13c 初 | 口径:33.0(1/16) 現高:3.1 | 外、内:自然輪付着、回転ナデ | 灰白(N7/), 灰(N4/) |
| 254 | 須恵器 | 25 | 杯 | 02-1 | 8層 | | II-6 7c 前半 | 口径:9.2(若干のみ) 受御径:11.0(1/8) 現高:2.6 | 外:回転ナデ、板状ナデ、未調整 内:回転ナデ、ナデ | 灰(N6/) 石英、長石、チャート |
| 255 | 金属製品 | 32 | 不明鉄製品 鍔? | 02-1 | 7層 | | | 幅幅:0.5 現厚:0.15 | 真金物か 全幅にサビ付着 | |
| 256 | 金属製品 | 32 | 不明鉄製品 鍔? | 02-1 | 7層 | | | 口径:1.3 | 刃が曲がっている | |
| 257 | 金属製品 | 32 | 不明鉄製品 | 02-1 | 7層 | | | 現径:4.2 | 飾釘の頭部か 全体に破損 | |
| 258 | 木製品 | 41 | 木製品 不明木製品 | 02-1 | 7層 | | | 現長:10.95 現幅:2.25 現厚:0.62 | コヤマキ 内:表面が凹凸 | |
| 259 | 木製品 | 39 | 漆器 | 06-2 | 7面 | B36坪 境 | | 現長:3.0 現幅:5.9 厚:0.5 | 漆片 カツラ 外:赤漆 内:赤漆に墨漆の文様 | |
| 260 | 磁器 | 31 | 单柄油漏系 白磁 | 06-2 | 7層 | | 13c 第1四半期 | 直径:7.0(1/5) 現高:0.65 | BX 1c類 外:施釉、回転ヘラケズリ 内:施釉 | 灰白(7.5Y7/1) |
| 261 | 土師器 | 06 | 皿 | 06-2 | 7層 | | 13c 後半か | 口径:8.4(1/6) 現高:1.5 | 外、内:全体に摩滅 | 灰白(10YR8/2) |
| 262 | 土師器 | 06 | 皿 | 06-2 | 8面精查 | | 13c か | 口径:7.0(1/7) 現高:1.6 | 外:ヨコナデ、ナデ? | 明鏡褐(10YR7/6) |
| 263 | 瓦器 | 06 | 皿 | 06-2 | 7層 | | 13c か | 口径:7.8(1/3) 現高:1.2 | 外:ヨコナデ、指押え 内:ヨコナデ、回転状ナデ | 灰白(5Y7/1) |
| 264 | 瓦器 | 06 | 碗(和泉型?) | 06-2 | 7層 | | 12c 前半か | 高台径:5.4(1/4) 現高:1.5 | 外:ヨコナデ、ナデ? 内:摩滅 | 浅黄褐(10YR8/3), 暗灰(10YR4/1) |
| 265 | 瓦器 | 06 | 碗(袖型) | 06-2 | 7層 | | 12c 中頃か | 現高:2.8 | II-2期か 外:ヨコナデ、ナデ、指押え、摩滅 内:沈線1,ヘラミガキ(摩滅) | 灰白(N8/), 灰(N6/) |
| 266 | 土師器 | 25 | 羽釜 | 06-2 | 7層 | | 14c か | 現高:2.8 | 内型? | 灰白(7.5YR8/2) 長石、石英、チャート |
| 267 | 東播系須恵器 | 25 | 鉢 | 06-2 | 7層 | | 12c 末~13c 初 | 口径:23.2(1/6) か | 外:回転ナデ 内:回転ナデ後ナデ | 灰(N6/) |
| 268 | 東播系須恵器 | 25 | 鉢 | 06-2 | 7層 | | 12c 末~13c 初 | 口径:32.4(1/14) 現高:4.4 | 外、内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 269 | 瓦質土器 | 25 | 鉢 | 02-1 | 7~9層 | | 13~14c か | 頭部径:25.0(1/8) 頭部径:25.0(1/8) | 外:ヨコナデ?、格子状タタキ 内:摩滅、ヨコナデ、ナデからヘラケズリ | 灰(10Y5/1)・ (10Y6/1) |
| 270 | 須恵器 | 25 | 杯蓋 | 02-1 | 7~9層 | | II-4(IIK43) 6c 第4四半期 | 口径:14.4(1/9) 現高:3.2 (砂) | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ | 灰白(N7/) |
| 271 | 須恵器 | 25 | 杯 | 02-1 | 7~9層 | | II-4(IIK43) 6c 第4四半期 | 口径:11.0(1/12) 現高:3.25 (砂) | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ | 灰白(N7/) 石英、長石 |
| 272 | 石製品 | 25 | 風石 | 02-1 | 7~9層 | | | 現長:5.67 現幅:3.72 現厚:3.0 重さ:94.3g | 奥底質頁岩 右側面:削られたような段あり | |
| 273 | 黒色土器 | 25 | A類 碗 | 02-1 | 8層 | | 10c か | 現高:3.8 + 1.1 + a | 外:ヨコナデ、摩滅、ナデ、ヨコナ デ、ナデ 内:ヘラミガキ、ナ デ後ヘラミガキ | ぶい黄褐 (10YR7/2) 金雲母 |
| 274 | 黒色土器 | 25 | B類 | 02-1 | 8層 | | 10c か | 口径:14.4(1/8) 現高:2.9 | 外:ヨコナデ、指押えナデ後ヘラ ミガキ 内:沈線1,ヘラミガキ | 黒(N2/) |
| 275 | 土師器 | 25 | 皿 | 02-1 | 8層 | | 10c か | 現高:5.35 | 外:ヨコナデ、指押えナデ、スス 付着 内:ヨコナデ、ナデ | (7.5YR6/3) |
| 276 | 土師器 | 25 | 皿 | 02-1 | 8層 | | 12c か | 口径:8.8(1/9) 現高:1.6 | 外:2段目コナデ 内:ナデ、摩滅 | 黄褐(10YR8/6) |
| 277 | 土師器 | 25 | 皿 | 02-1 | 8層 | | 12c か | 口径:9.6(1/7) 現高:1.50 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 橙(7.5YR6/6) |
| 278 | 土師器 | 25 | 皿 | 02-1 | 8層 | | 12c 後半か | 口径:8.8(1/5) 現高:1.75 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | ぶい黄褐 (10YR7/2) |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 番(㎝) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・駆土 |
|------|----|------|---------------|--------|----|----|---------|---------------------------|--|--------------------------------|
| 279 | 29 | | 土師器 | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | L1径:9.0(1/8) 現高:1.25 | 外:ヨコナデ、ナデ及び指押丸 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白(10YR8/2) |
| 280 | 29 | | 土師器 | 02 - 1 | 8層 | | 13c か | L1径:7.9(1/4) 現高:1.25 | 外、内:ヨコナデ、摩滅 | 灰黄(2.5Y6/2) |
| 281 | 29 | | 土師器 | 02 - 1 | 8層 | | 12c 中頃か | L1径:15.8(1/12) 現高:2.0 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白(7.5Y7/3) |
| 282 | 29 | | 土師器 | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | L1径:14.0(1/6) 現高:2.2 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ | 灰白(10YR8/2)・ 灰白(10YR8/2) |
| 283 | 29 | | 土師器 | 02 - 1 | 8層 | | 12c か | L1径:13.6(1/10) 現高:2.2 | 外:全體に摩滅、ヨコナデ、指押丸 内:全體に摩滅、ヨコナデ | 灰白(10YR8/3) |
| 284 | 29 | | 瓦器 | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半か | L1径:9.2(1/2) 現高:1.6 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、ナデ後1条のヘラミガキ | 灰白(N8/1) |
| 285 | 29 | | 瓦器 楕(大和型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 前半か | L1径:14.8(1/9) 現高:2.8 | ■ A か B段階か 外:ヨコナデ後ヘラミガキ、指押丸後ヘラミガキ 内:沈線1,密なヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 286 | 29 | | 瓦器 楕(大和型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 中頃か | L1径:14.2(1/12) 現高:2.45 | ■ B か C A古)段階か 外:ヨコナデ後ヘラミガキ、指押丸ナデ後ヘラミガキ 内:沈線1,ヘラミガキ | 灰(N4/) |
| 287 | 29 | | 瓦器 楕(大和型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | L1径:13.6(1/8) 現高:3.25 | ■ A古)段階か 外:ヨコナデ、ヨコナデ後ヘラミガキ、指押丸ナデ後まばらなヘラミガキ 内:沈線1,ナデ後ヘラミガキ、ナデ | 暗灰(N3/) |
| 288 | 29 | | 瓦器 楕(大和型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | L1径:13.0(1/13) 現高:2.6 | ■ A古)段階か 外:ヨコナデ、指押丸ナデ後まばらなヘラミガキ 内:沈線1,ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 289 | 29 | | 瓦器 楕(輪葉型?) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | L1径:12.2(1/10) 現高:3.1 | ■ B ~ 3 刻か 外:ヨコナデ後ヘラミガキ?、指押丸ナデ 内:沈線1,ヘラミガキ | 灰(N4/), 灰白(2.5Y8/1) |
| 290 | 29 | | 瓦器 楕(大和型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 中頃か | L1径:若干ののみ 底径:4.0(1/8) | ■ C段階か 外:ヨコナデ、指押丸後一部ヘラミガキ、指押丸ナデ、ヨコナデ 内:沈線1,まばらなヘラミガキ | 灰白(5Y7/1), 灰(7.5Y4/1) |
| 291 | 29 | | 瓦器 楕(大和型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半 | 高台径:4.8(1/2) 現高:1.0 | ■ A古)段階か 外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後が點輪状陥凹 | 灰(N4/) |
| 292 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 前半か | 現高:3.8 | ■ 1 ~ II 1 刻か 外:ヨコナデ、ヘラミガキ 内:ヘラミガキ | 灰(N4/), 暗灰(N3/) |
| 293 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 9面 | | 12c 前半 | 現高:3.9 | ■ 1 ~ 2 刻 外:ヨコナデ後ヘラミガキ、ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 294 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 中頃か | 現高:3.65 | ■ 2 刻か 外:ヨコナデ後ミガキ、指押丸ナデ後ヘラミガキ 内:ナデ後ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 295 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | 現高:3.75 | ■ 3 ~ III 1 刻か 外:ヨコナデ、指押丸後一部ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ヘラミガキ | 灰(N4/), 灰白(5Y 7/1) |
| 296 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半か | L1径:14.5(1/7) 現高:4.0 | ■ 1 刻か 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ、指押丸ナデ後一部ヘラミガキ 内:ヨコナデ(一部ヘラミガキ)、ヘラミガキ | 暗灰(N3/) |
| 297 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半 | L1径:15.0(1/7) 現高:4.05 | ■ 3 刻か 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、まばらなヘラミガキ、工具痕 | 灰(N4/) |
| 298 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半 | L1径:13.0(1/8) 現高:2.8 | ■ 3 刻か 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、ナデ後ヘラミガキ | 灰(N4/), 灰白(5Y8/1)・ (N8/) |
| 299 | 29 | | 瓦器 楕(和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半か | L1径:12.8(1/7) 現高:2.9 | ■ 3 刻か 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:まばらなヘラミガキ、ヌス得く付羽 | 暗灰(N3/) |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調 (外面)・歴史 |
|------|----|------|---------------------|--------|------|----|---------------------------------------|--|--|------------------------|
| 300 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 14c 前半 | 口径:11.0(1/4) 現高:2.25 | N・4期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ナデ後数条のヘラミガキ | 灰白(N8)/ 石英、長石、チャート |
| 301 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 中頃か | 高台径:5.6(1/5) 現高:1.6 | B・3期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:平行線状暗文? | 灰白(2.5Y8/1) |
| 302 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 中頃か | 高台径:5.2(1/6) 現高:1.7 | B・3期か 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ナデ後平行線状暗文 | 灰(N4/7) |
| 303 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 12c 末か | 高台径:4.6 ~ 4.85(2/3) 現高:1.3 | B・2期か 外:ナデ?、ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後平行線状暗文 | 灰白(10YR8/1) |
| 304 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半 | 高台径:4.8(1/3) 現高:1.05 | B・3期か 外:指押え、ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後平行線状暗文 | 灰(N5/) |
| 305 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半 | 高台径:4.8(1/4) 現高:1.3 | B・2 ~ 3期か 外:指押え、ヨコナデ 内:ナデ後平行線状暗文 | 暗灰(N3/) |
| 306 | 29 | | 瓦器 椀 (和泉型) | 02 - 1 | 8層 | | 13c 中頃か | 高台径:3.8(2/3) 現高:1.4 | N・2期か 外:指押えナデ、ヨコナデ、粘土 高台、ナデ 内:ナデ後数条のヘラミガキ | 黒(2.5Y2/1) |
| 307 | 29 | | 土器器 羽釜 | 02 - 1 | 9面精査 | | 12c か | 口径:20.8(1/12) 現高:6.25 | 外:ヨコナデ、ナデ?、部分的にス 内:石着 内:ヨコナデ、ナデ、指押えナデ | 灰灰(2.5Y5/1) |
| 308 | 29 | | 瓦質土器 鉢 | 02 - 1 | 8層 | | 13c か | 現高:4.8 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ | 灰(N5/) |
| 309 | 29 | | 東播系須恵器 | 02 - 1 | 8層 | | 12c 末 ~ 13c 初 か | 高台径:2.4 | 外、内:回転ナデ、ナデ 内:ナデ | 灰白(N7/), 灰(N6/) |
| 310 | 29 | | 灰釉陶器 瀬戸山茶碗 | 02 - 1 | 8層 | | 13c | 口径:10.4(1/12) 底径:5.5 ~ 5.9(一部 欠) 現高:3.6 | 外:施釉(一部無釉)、回転ナデ、 氣切痕 内:施釉、回転ナデ、 自然釉?付着、重ね焼痕 | 灰灰(N8/) |
| 311 | 29 | | 陶器 信楽?鉢 | 02 - 1 | 8層 | 7 | | 現高:4.5 | 外、内:自然釉付着 | 灰(5Y5/1), 灰白(5Y7/1) |
| 312 | 29 | 31 | 磁器 單南沿海窯系 白磁瓶 | 02 - 1 | 8層 | | 12c 後半 | 現高:3.0 | N・1期 外、内:施釉(ピンホールあり) | 灰白(7.5Y7/1) |
| 313 | 29 | 31 | 磁器 單南沿海窯系 白磁瓶 | 02 - 1 | 8層 | | 13c 前半 | 不明 | V・2期か 外、内:施釉 内:網線 | 灰白(7.5Y7/1) |
| 314 | 29 | 31 | 磁器 龍谷窑系青磁碗 | 02 - 1 | 8層 | | 13c 第3四半期 | 現高:3.8 | 外:施釉(貫入あり、網進作文) オリーブ灰 内:施釉(貫入あり) | オリーブ灰 (2.5G5Y5/1) |
| 315 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B・1か (MT15号) 6c 第 1四半期か | 口径:10.4(1/7) 現高:3.0 | 外、回転ナデ、磨滅 内:回転ナデ | |
| 316 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B・4か (TK43 か) 6c 第4四半期 か) | 口径:14.2(1/11) 現高:2.3 | 外、内:回転ナデ | 灰(N5/) |
| 317 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B・4か (TK43 か) 6c 第4四半期 か) | 口径:12.6(1/8) 現高:2.3 | 外、内:回転ナデ | 灰(N6/), (N5/) |
| 318 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B・4か (TK43 か) 6c 第4四半期 か) | 口径:若干のみ 受部径:15.4(1/5) 現高:3.6 | 外、内:回転ナデ | 灰(N6/) |
| 319 | 29 | | 須恵器 杯蓋 | 02 - 1 | 9面直上 | | B・5 ~ 6 (TK209 ~) 6c 末 ~ 7c 前半 | 口径:10.6(1/4) 現高:3.6 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ(砂 砂~)、ヘラ記号 内:回転ナデ | 灰白(N7/) |
| 320 | 29 | | 須恵器 杯蓋 | 02 - 1 | 8層 | | B・6 7c 前半 | 口径:10.6(1/5) 現高:2.9 | 外、内:回転ナデ | 青灰(5PB6/1), 灰(N6/) |
| 321 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B・6 7c 前半 | 口径:9.15(1/6) 現高:1.8 | 外、内:回転ナデ | 灰(N5/) |
| 322 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | 不明 | | 底部厚 外:回転ヘラケズリ(砂 石(N6/), 石英、長石 砂~)、ヘラ記号 内:回転ナデ | 長石、石英 |
| 323 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B型式 6c 代 | 不明 | 破片 外:回転ナデ、回転ヘラ ケズリ(砂~), ヘラ記号 内:回転ナデ、ナデ | 灰(N6/) 石英、長石 |
| 324 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 9面精査 | | | 不明 | 破片 外:回転ナデ、ヘラ記号 内:回転ナデ | 灰(N6/) 石英、長石 |
| 325 | 29 | | 須恵器 杯 | 02 - 1 | 8層 | | B・1か 7c 前半か | 底径:5.5 ~ 5.6(完) 現高:1.7 | 外:回転ナデ、ナデ、ヘラ記号 内:回転ナデ、ナデ | 灰(N6/) 石英、長石 |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歴史 |
|--------|------|-----------------|------------------------|---------------------|-------------------------------|--------|--|--|-------------------------------|-----------|
| 326 29 | 須恵器 | 須恵器 壺 | 02-1 8層 | | IV-1 ~ 2 (MT21~) 8c前半 | | 口径:17.9(1/12) 現高:1.4 | 外:回転ナデ 内:回転ナデ、自然輪付着 | 紫灰 (SP6/1) | |
| 327 29 | 須恵器 | 須恵器 杯蓋 | 02-1 8層 | | IV-4か (TK7) か9c第1四半期か? | | L口径:16.7(1/15) 現高:0.9 | 外、内:回転ナデ | 灰白 (N7/1) | |
| 328 29 | 金属製品 | 金屬製品 抜鉗 | 02-1 8層 | | | | 径:2.49 邪径:0.63 厚:0.11 重さ:3.3g | 元販通賣(北宋 1078年) | | |
| 329 29 | 金属製品 | 金屬製品 千両こぎの歯? | 02-1 8~9層 | | | | 現長:20.4 現幅:1.55 現高:0.5 | 鉄製全体にサビ付着 | | |
| 330 29 | 金属製品 | 金屬製品 馬頭の歯 | 02-1 8層 | | | | 現長:24.8 現幅:1.5 現厚:~0.8 | 鉄製全体に厚くサビ付着 | | |
| 331 30 | 金属製品 | 金屬製品 鉄齒 | 02-1 8~9層 | | | | 現長:14.1 現幅:1.7 現厚:0.5 | サビ付着、上端に曲がる | | |
| 332 30 | 金属製品 | 金屬製品 ヤリガンナ? | 02-1 8層 | | | | 現長:15.15 現幅:1.38 現厚:0.55 | 鉄製全体にサビ付着、付着物あり | | |
| 333 30 | 金属製品 | 金屬製品 鉄釘? | 02-1 8層 | | | | 現長:3.73 現幅:0.34 | | | |
| 334 30 | 金属製品 | 金屬製品 鉄釘 | 02-1 8層 | | | | 現長:9.5 現幅:0.88 | 全体にサビ付着 | | |
| 335 30 | 木製品 | 木製品 防護柵? | 02-1 8層 | | | | 現長:6.4 現幅:2.0 現厚:0.6 | スギ 切り倒? | | |
| 336 30 | 木製品 | 木製品 不明木製品 | 02-1 8層 | | | | 長:1.75 幅:3.0 厚:1.0 | スギ 上端に段 | | |
| 337 30 | 木製品 | 木製品 作物蓋? | 06-2 8面 B41 壁 罐 | | | | 現長:11.1 現幅:3.0 厚:0.5 | スギ 細穴か? 槌跡存在 | | |
| 338 30 | 木製品 | 木製品 不明木製品 | 06-2 8面 B42 土 坑 | | | | 現長:10.4 現幅:1.4 厚:0.6 | コロヤマキ 折れ曲る | | |
| 339 30 | 土師器 | 土師器 皿 | 06-2 8層 | | 13cか | | L口径:12.4(1/8) 現高:3.0 | 外:ヨコナデ、指押丸、板ナデ、指 押えナデ 内:摩減 | 灰白 (7.5YR8/2) | |
| 340 30 | 瓦器 | 瓦器 皿 | 06-2 8層 | | 13cか | | L口径:8.6(1/7) 現高:1.3 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ | 灰白 (2.5YR8/1) | |
| 341 30 | 瓦器 | 瓦器 椀(和型) | 06-2 8層 | | 12c 中頃 | | 現高:3.4 | 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ 指押丸ナデ後一部ヘラミガキ 内:まばら後ヘラミガキ | 灰白 (N3/1) | |
| 342 30 | 瓦器 | 瓦器 椀(大和型?) | 06-2 8層 | | 12c 後半か | | 現高:3.4 | 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ ヘラケズリ後ヘラミガキ 内:沈線1,ナデ後一部ヘラミガキ キ | 青灰 (5PB6/1) | |
| 343 30 | 磁器 | 单南沿海窯系 白磁碗 | 06-2 8層 | 坪境段部分 | | 13c 前半 | 高台基部径:7.0(1/5) 現高:2.9 | V型 外:施釉(ビンホールあり)、高台 盛胎 内:施釉(觸造文) | 灰白 (5Y7/1) | |
| 344 30 | 須恵器 | 須恵器 杯? | 06-2 8層 | | 8cか | | 現高:5.3 | 外、内:回転ナデ | 青灰 (5PB6/1) | |
| 345 30 | 土師器 | 土師器 製塙土器 | 06-2 8層 | | 8c 中頃 ~ 9c 初か | | 小明 | 外:摩減 内:指押丸 | 淡黄 (2.5YR8/3,石 英,長石,チャート) | |
| 346 30 | 瓦 | 瓦 平瓦 | 06-2 8層 | | 平安後期以降中 世前半 | | 現厚:2.7 | 凸:平行凸タキ、面取り 凹:平行凸タキ、凹 内:一部スス付着 | 灰白 (7.5YR8/1,石英,長 石,チャート) | |
| 347 35 | 土師器 | 土師器 杯か盤 | 02-1 9面 A120坪 壇溝 | 11c 末 ~ 12c 初 か? | L口径:16.0(1/10) 現高:3.0 | | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白 (10YR8/1), 灰白 (10YR8/2) | | |
| 348 35 | 瓦器 | 瓦器 椀(和型) | 02-1 9面 A120坪 壇溝 | 12c 前半 | L口径:15.2(1/9) 現高:3.6 | | B-1か2期 外:ヨコナデ、ヘラミガキ 内:ヨコナデ、ヘラミガキ | 灰白 (N3/1) | | |
| 349 35 | 瓦 | 瓦 丸瓦 | 02-1 9面 A120坪 壇溝 | 中世か | 現長:10.4 現幅:3.7 現厚:2.3 | | 凸:ハケナデ?,ナデ 凹:布目直 | 灰黄 (2.5Y7/2),石 英,長石,チャート | | |
| 350 35 | 土師器 | 土師器 椀 | 02-1 9層 | | 9cか | | L口径:15.65(1/2) 現高:4.1 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ? 内:ナデ | 黄橙 (10YR8/6) | |
| 351 35 | 須恵器 | 須恵器 杯 | 02-1 9層 | | III-3か (TK48 か)7c 後半か | | 底径:8.0(1/6) 現高:2.3 | 外:回転ナデ、ナデ? 内:回転ナデ、ナデ | 灰白 (N8/1) | |
| 352 35 | 須恵器 | 須恵器 杯 B | 02-1 9層 | | IV-1か (MT21か)8c 第 1四半期か | | 高台径:11.7(1/2) 現高:2.3 | 外、内:回転ナデ、ナデ | 灰 (N6/1) | |
| 353 35 | 須恵器 | 須恵器 壺 | 02-1 9層 | | 9cか | | 腹部内径:15.0(1/7) 現厚:2.3 | 外:ナデ 内:回転ナデ | 青灰 (5B6/1) 長石 石英 | |
| 354 35 | 須恵器 | 須恵器 壺 | 02-1 10面 | | 9cか | | 底径:10.8(1/4) 現高:10.9 | 外:回転ナデ、糸切り痕? 内:回転ナデ、ナデ | 灰 (N6/1) | |
| 355 35 | 土師器 | 土師器 皿 | 02-1 9層 | | 12c 前半か | | L口径:9.8(1/5) 現高:1.4 | 外:2段ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ | にぶい黄橙 (10YR7/3) 呂雲、赤色砂粒 | |
| 356 35 | 土師器 | 土師器 皿 | 02-1 9層 | | 12c 後半か | | L口径:8.8(1/9) 現高:1.1 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 浅黄橙 (10YR8/3) 石英,長石 | |
| 357 35 | 土師器 | 土師器 皿 | 02-1 9層 | | 12c 後半か | | L口径:9.2(1/5) 現高:1.1 | 外:ヨコナデ、指押丸ナデ 内:ヨコナデ、ナデ | 灰白 (10YR8/2) | |

| 遺物番号 | 種別 | 銘版番号 | 器種 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歴史 |
|-----------|------|---------------|------------------|------|----------------|--|--|---|--|-----------|
| 358 35 | 土師器 | | 02 - 1 9層 | | | 13c か | 口径:8.0(1/2) 現高:1.1 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ、ナデ | にぶい黄褐色 (10YR7/4) | |
| 359 35 | 土師器 | | 02 - 1 9層 | | | 12c 前半か | 口径:10.0(1/8) 現高:2.3 | 外:2段ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ | にぶい黄褐色 (10YR7/3) 長石、石英 | |
| 360 35 | 瓦器 | | 02 - 1 9層 | | | 12c 末～13c 初 か | 口径:9.0(1/8) 現高:1.5 | 外:ヨコナデ、指押えナデ 内:端部凹凸、ヨコナデ、ナデ、平 行線状暗文 | 暗オリーブ灰 (5G4/1) | |
| 361 35 | 瓦器 | | 02 - 1 9層 | | | 12c 初か | 現高:3.8 | 口 - 1期か | 灰 (N5/1)・(N4/1) | |
| 362 35 | 瓦器 | | 02 - 1 9層 | | | 12c 初か | 高台径:6.0(2/5) 現高:1.7 | 口 - 3期か 外:ナデ、ヨコナデ、指押えナデ 内:ヨコナデ後ナミガキ | 暗灰 (N3/1) | |
| 363 35 | 瓦器 | | 02 - 1 9層 | | | 12c 後半か | 高台径:4.8(1/4) 現高:1.05 | 口 - 3期か 外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後格子状暗文 | 暗灰 (N3/1) | |
| 364 35 | 瓦器 | | 02 - 1 9層 | | | 12c 後半か | 高台径:5.6(1/3) 現高:1.1 | 口 - A1古) 残留か 外:ヨコナデ、ナデ 内:ナデ後ナミガキあり、連結輪状暗文 | 灰 (N4/1) | |
| 365 35 | 瓦器 | | 02 - 1 9層 | | | 13c 中頃 | 口径:13.6(1/4) 現高:2.9 | N - 1～2期か 外:ヨコナデ、指押え 内:主 ばらなヘラミガキ、スヌ付着 | 灰白 (2.5Y7/1) 明灰灰 (7.5YR7/2) | |
| 366 35 | 土師器 | 羽釜 | 02 - 1 9層 | | | 12c か | 口径:20.0(1/12) 現高:3.3 | 外:ヨコナデ、スヌ付着 内:ヨコナデ、指押えナデ | 浅黄 (2.5Y7/3) 黒 (2.5Y2/1) 石英、長石、片岩? | |
| 367 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 3か (MT 85分) 6c 中頃 | 口径:15.7(1/9) 現高:3.5 | 外:回転ナデ、凹輪2回転ヘラケ ズリ(砂-) 内:回転ナデ | 緑灰 (10GY6/1) | |
| 368 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 5～6 (TK209～) 6c 木～7c 前半 | 口径:12.7(1/7) 現高:4.0 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-)、ヘラ記跡 内:回転ナデ、ナデ | 灰白 (N7/1) | |
| 369 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 4(TK43) 6c 第4四半期 | 口径:11.0(1/6) 現高:3.8 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:回転ナデ、ナデ | 灰 (7.5Y6/1) | |
| 370 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 4～5TK 43～TK209 6c 第4四半期 ～7c 初 | 口径:13.0(若干のみ) 現高:4.1 | 灰白(復元) 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:回転ナデ | 灰灰 (7.5YR6/1) | |
| 371 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 4～5(TK209) 6c 第4四半期 ～7c 初か | 口径:12.4(1/15) 現高:2.9 | 外:回転ナデ 内:回転ナデ | 灰 (N6/1) | |
| 372 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 5～6 (TK209～) 6c 木～7c 前半 | 口径:10.1(1/2) 現高:3.2 | 外:回転ナデ、ヘラ切り?未調整 内:回転ナデ、ナデ | 灰白 (N7/1) | |
| 373 35 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 9層 | | | B - 5～6 (TK209～) 6c 木～7c 前半 | 口径:9.9(1/4) 現高:2.7 | 外:回転ナデ、ヘラ切り未調整 内:回転ナデ、ナデ | 灰白 (N7/1) | |
| 374 35 | 須恵器 | 碗? | 02 - 1 9層 | | | B型式か 6c か | 最大底径:10.0(1/6) | 外、内:回転ナデ | 青灰 (5PB6/1) | |
| 375 35 | 土師器 | 高杯 | 02 - 1 9～10 層 | | | 7c か | 口径:9.6(1/5) 脚部径:8.9(1/5) 現高:8.5 | 岡上復元 外:ヨコナデ、表面剥離、タテナ デ、ボリ目、摩滅 内:ヨコナ デ、表面剥離、ボリ目、指押え | 橙 (2.5YR6/8)・ (2.5YR7/6) | |
| 376 35 41 | 木製品 | 不明木製品 | 02 - 1 9層 | | | | 現高:15.6 脚幅:6.0 小孔1 表:一部焼けゴ 小孔1 裏:裏・無数の細割 | | にぶい黄褐色 (10YR7/2) 長石、石英、青母、 チート | |
| 377 35 | 黑色土器 | A類 輪 | 06 - 2 9面 | B43満 | 10c 中頃か | 高台径:5.8(1/4) 現高:2.5 | 外:ヘラケズリ後ヘラミガキ、ヨ コナデ、ナデ 内:ヘラミガキ (摩滅) | 黒 (10YR7/2) 長石、石英、青母、 赤色粒 | | |
| 378 35 | 須恵器 | 杯 | 06 - 2 9面 | B45満 | B - 6 7c 前半 | 口径:9.2(1/10) 現高:1.7 | 外、内:回転ナデ、ナデ | 明青灰 (5B7/1) 石英、長石 | | |
| 379 35 31 | 磁器 | 单南山海窯系 白磁碗 | 06 - 2 9面 | B45満 | 13c 前半 | 高台径:5.2(1/3) 現高:2.6 | V領 外:施釉、回転ヘラケズリ、下平 底露胎 内:焼付着 | 灰白 (2.5Y8/1) 灰白 (2.5Y7/3) | | |
| 380 35 | 土師器 | 杯B | 06 - 2 9層 | | | 8c ～ 9c 8c 末～9c 初 か | 不明 | 底部分 外:スヌ付着 | 灰白 (10YR8/1), 長 石、青母、赤色粒 | |
| 381 35 | 須恵器 | 壺 | 06 - 2 9面精查 | | | 9c か | 頭部径:6.0(1/4) 部 | 外、内:回転ナデ 内:自然釉付着 | 灰白 (5Y8/1) | |
| 382 35 33 | 土師器 | 製造土器 | 06 - 2 9層 | | | 8c 末～9c 初 か | 口径:12.0(1/7) 現高:4.5 | 外:指押え、摩滅 内:摩滅、ボリ目 チャート | 灰 白 (5YR8/1), 長 石、石英、チャート | |
| 383 35 | 須恵器 | 杯蓋 | 06 - 2 9層 | | | B - 4(TK43) 6c 第4四半期 | 口径:12.4(1/5) 現高:3.6 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-), 鏡切か 内:回転ナデ | 灰 (N6/1) | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・歴史 |
|-----------|------|----------|--------|-----|----------|--|---------------------------------|---|--|-----------|
| 384 43 | 石製品 | サヌカイト片 | 02 - 1 | 10面 | A140 溝 | | 長:4.03 幅:3.94 厚:0.42 重さ:8.0g | | | |
| 385 43 | 須恵器 | 壺 | 02 - 1 | 10面 | A212 土坑 | II - 1.2 か 坑 か1 6 c 前半か | 脚径:14.8(1/4) | 外:回転ナデ、自然輪付着、力牛 目、ナデ、格子状タキ 内:回転ナデ、自然輪付着 | 暗オリーブ灰 (2.5G4/1), 青灰(PB6/1) | |
| 386 43 33 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 | 10面 | A243 ピット | B - 2 ~ 3TK 10 ~ MT85 6c | U径:13.5(3/4) 高:4.1 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:回転ナデ、ナデ | 緑灰(10GY6/1) | |
| 387 43 34 | 須恵器 | 杯蓋 | 02 - 1 | 10面 | A244 土坑 | II - 2(TK10) 6 c 第2四半期~中 | U径:14.2(完) 高:4.6 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:段の名残り、回転ナデ、 ナデ | 青灰(PB6/1) | |
| 388 43 34 | 須恵器 | 杯蓋 | 02 - 1 | 10面 | A260 ピット | II - 4(TK43) 6 c 第4四半期 | U径:12.6(一部欠) 高:4.0 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:回転ナデ、ナデ | 緑灰(10GY6/1) | |
| 389 43 | 土師器 | 布留式瓶 | 02 - 1 | 10面 | A279 土坑 | 布留且~瓶 | U径:15.9(1/6) 高:3.6 | 外:ヨコナデ、スス付着 内:ヨコナデ、粗いハケメ、ナデ、 指押 | ふい黄褐色 (10YR6/3), 石英、長石、雲母 | |
| 390 43 | 土師器 | 布留式瓶 | 02 - 1 | 10面 | A279 土坑 | 布留崩中段削 高:5.6 | 頭部径:10.9(1/4) 高:5.6 | 外:ヨコナデ、ヨコハケメタデ ハケメ、うすくスス付着、内:ヨ コナデ、指押ナデ、ヘラケズリ | 灰黄褐色(10YR6/2) 石英、長石、雲母 | |
| 391 43 | 弥生土器 | 壺 | 02 - 1 | 10面 | A279 土坑 | 弥生IV - 4 か 高:2.15 | U径:15.0(1/11) 高:2.15 | 外:ナデ、四線文之条、ヨコナデ 摩滅 内:ヨコナデ、摩滅 | 灰黄褐色(10YR6/2) 牛胸西龍產 | |
| 392 43 33 | 土師器 | 杯 | 02 - 1 | 10面 | A374 土坑 | 8 c 初か | U径:12.6(一部欠) 高:3.55 | 外:ヨコナデ、指押ナデ、 内:段、ヨコナデ、ナデ?, 摩滅, 一部にスス付着 | ふい黄褐色 (10YR7/2) | |
| 393 43 33 | 土師器 | 杯 | 02 - 1 | 10面 | A390 ピット | 8 c 初か | U径:14.2(一部欠) 高:3.5 | 外:ヨコナデ、指押ナデ、 内:ヨコナデ、放射状助輪 | 明褐色(10YR6/6) | |
| 394 43 34 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 | 10面 | | B - 4 ~ 5TK 43 ~ 209 6 c 第4四半期~ 7 c 初 | U径:11.6(完) 高:4.1 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:回転ナデ、ナデ | 灰(N6/6) 石英、長石、チャート | |
| 395 43 | 須恵器 | 杯蓋 | 02 - 1 | 10面 | | II - 2(TK10) 6 c 第2四半期 | U径:13.8(1/9) 高:4.1 | 外:回転ナデ、棱、回転ヘラケズリ (砂-) 内:段、回転ナデ | 灰(SY6/1) 石英、長石 | |
| 396 43 | 須恵器 | 杯 | 02 - 1 | 10面 | | B - 6 7 c 前半 | U径:9.0(1/5) 高:3.5 | 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ (砂-) 内:回転ナデ | 青灰(PB5/1) 石英、長石 | |
| 397 43 | 弥生土器 | 壺 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | U径:11.6(1/5) 高:4.5 | 外:ヨコナデ、複数四線文之条、 ナデ? 内:ヨコナデ、摩滅? | ふい黄褐色 (2.5Y6/4), ふい 黄褐色(10YR6/4) 石英、長石、雲母、 ナデ?チャート | |
| 398 43 | 弥生土器 | 壺 | 02 - 1 | 10面 | 弥生IV - 2 | | U径:14.0(1/9) 高:3.6 | 外:ヨコナデ、ヘラミガキ(摩滅)、スス一部付着 内:ヨコナデ、摩滅 | 稻(7.5YR6/6) 牛胸西龍產 | |
| 399 43 | 弥生土器 | 壺 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:3.7(1/2) 高:3.6 | 外:タタキ、ナデ、凹み底 内:摩滅、工具痕 | 明赤褐色(10YR5/6) 牛胸西龍產 | |
| 400 43 | 弥生土器 | 壺 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:4.7(1/6) 高:4.0 | 外:タタキ内:ハケメ | 褐(10YR4/4) 牛胸西龍產 | |
| 401 43 | 弥生土器 | 跡 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:4.0(3/4) 高:2.3 | 外:ハケメ、凹み底 内:ハケ メ後ナデか、底面にハケメ | 稻(7.5YR4/4) 牛胸西龍產 | |
| 402 43 | 弥生土器 | 跡 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:5.0(4/5) 高:3.0 | 外:タタキ、指押 内:ハケメ | ふい黄褐色 (10YR6/4) 牛胸西龍產? | |
| 403 43 | 弥生土器 | 跡 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:4.3(一部欠) 高:3.0 | 全内:摩滅 外:指押丸 | 稻(7.5YR7/6) 牛胸西龍產 | |
| 404 43 | 弥生土器 | 底部 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:4.35(完) 高:1.85 | 外:指押丸、摩滅 内:表面剥離 | 黑褐色(10YR3/1), 灰黃褐色(10YR6/2) 牛胸西龍產 | |
| 405 43 | 弥生土器 | 有孔底部 | 02 - 1 | 10面 | 弥生V | | 底径:4.2(一部欠) 高:3.1 孔徑:0.7 | 全体に摩滅 外:指押丸、穿孔 内:工具痕 | 灰褐色(10YR5/6) 牛胸西龍產 | |
| 406 43 | 石製品 | サヌカイトチップ | 02 - 1 | 10面 | | | 長:1.24 幅:1.62 厚:0.29 重さ:0.6g | | | |
| 407 43 | 須恵器 | 高杯 | 06 - 2 | 10面 | | I - 3 ~ 4 か (TK208~ TK23 か)5c 中 ~ 第4四半期 | 脚部径:7.8(1/6) 高:4.6 | 脚部 外:三方スカシ孔、回転ナデ、沈 線 I 内:回転ナデ | 青灰(PB5/1) 石英 | |
| 408 43 | 須恵器 | 杯蓋 | 06 - 2 | 10面 | | II - 2(TK10) 6 c 第2四半期 | U径:15.0(1/4) 高:3.2 | 外:回転ナデ 内:段、回転ナデ | 灰白(N7/7) | |
| 409 43 | 須恵器 | 提瓶? | 06 - 2 | 10面 | | II - 5 以降 (TK43 以降)6c 第4四半期以降 | U径:5.4(1/4) 高:3.8 | 外、内:回転ナデ | 青灰(PB6/1) | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調 (外側)・歯土 |
|-----------|---------------|--------|---------------|----------|--------------|-----------------|---|--|--|---------------------------------------|
| 410 43 | 須恵器 杯 | | 杯 B | 06 - 2 | 10層 | | 8c | 高台基部径: 7.6(1/4) 現高: 2.9 | 外: 内: 回転ナデ | 灰 (N6/7) |
| 411 43 | 土師器 杯 | | | 06 - 2 | 10層 | | 8cか | 口径: 1.8(1/13) 現高: 2.9 | 外: ヨコナデ, 指押丸 内: 表面剥離 | 浅黄褐 (7.5YR8/4) |
| 412 43 | 土師器 製塩土器 | | | 06 - 2 | 10面直上 | | 8cか | 現高: 3.1 | 外: 内: 表面剥離 内: 二次焼成で赤色化 口沿: 渡行つ | 浅黄褐 (10YR8/3) 石英, 長石, チェート, 赤色鉛 |
| 413 43 | 赤生土器 台付鉢 | | | 06 - 2 | 10層 | | 赤生IV未~V | 胴部径: 16(1/8) | 吉備系? 外: 棒状浮文 (3 条 1対か), 赤彩 内: 陶器の産地 ナデ? | にぶい黄褐色 (10YR8/3) 生駒西館産 |
| 414 43 | 赤生土器 台付鉢 | | | 06 - 2 | 11面 | | 赤生IV 4かV | 胴部径: 19(1/10) | 胴部内: 吉備系か (吉備V-2) 外: 接合面, 棒状浮文 (現存 3 条 + 1) 帯, 赤彩 | 暗黄 (2.5Y4/2) 生駒西館産 |
| 415 43 33 | 金属製品 小形彷彿鏡 | | | 06 - 2 | 9層 (第10面直上) | | | 径: 3.59 × 3.60 高さ: 0.54 厚: 0.12 ~ 0.18 重さ: 9.1g | 銅製 表: 横曲文, 円頭 1, 孔 1 | |
| 416 52 | 赤生土器 甕 | 02 - 1 | 11b層 | | 赤生IV - 2 ~ 3 | | L径: 14(1/8) | | 外, 内: ヨコナデ, スス・コゲ付着 | 黄灰 (2.5Y4/1) 石英, 長石 |
| 417 52 | 赤生土器 甕 | 02 - 1 | 11b層 下部 | | 赤生IV | | 底径: 5.2(一部欠) 現高: .7 | | 外: ヘラミガキ, ナデ, スス付着 内: 摩滅 | 暗褐 (10YB3/4) 生駒西館産 |
| 418 52 34 | 石製品 サヌカイト片 | 02 - 1 | 11b層 (最下層) | | | | 長: 3.22 幅: 3.80 厚: 1.41 重さ: 16.6g | | | |
| 419 52 41 | 木製品 不明木製品 | 02 - 1 | 11b層 (下部) | | | | 現径: 1.11 厚幅: 10.2 現高: 2.2 孔径: 1.45 | | | |
| 420 52 41 | 木製品 不明木製品 | 02 - 1 | 11b層 (下部) | | | | 現径: 1.45 厚幅: 8.4 現高: 3.65 | | | |
| 421 52 | 須恵器 蓋 | | | 06 - 2 | 11面 | B171 土器 | B - 5か (TK 209g) 6c 未~ 7c 初か | L径: 13.8(1/6) 現高: 2.15 | 外: 回転ナデ, 手持ちヘラケズリ 内: 回転ナデ, ナデ | 灰 (N5/7) 石英, 長石 |
| 422 52 | 赤生土器 甕 | | | 06 - 2 | 11層 | | 赤生V | 口径: 16.6(1/9) 現高: 6.0 | 外: 目口, ハケメ, 平行タタキ 内: 摩滅 | にぶい相 (7.5YR7/3), 石英, チャート, 長石 |
| 423 52 | 赤生土器 甕 | | | 06 - 2 | 11b面 | B197 土器 | 赤生V - 0か 路 | L径: 17.5(1/5) 現高: 5.9 | 外: ヨコナデ, ヘラミガキ, スス付着 (1線端部多く) 内: ヨコナデ, ヘラナデ, 摩滅 | にぶい相 (7.5YR6/3) 生駒西館産 |
| 424 52 34 | 石製品 サヌカイト片 | 06 - 2 | 11b面 | B197 流路 | | | 現長: 2.15 厚幅: 1.53 現厚: 0.28 重さ: 0.9g | | | |
| 425 52 | 木製品 不明木製品 | 06 - 2 | 11b面 | B197 流路 | | | 現長: 28.7 厚幅: 16.1 厚: 2.7 | | | |
| 426 52 | 赤生土器 甕 | | | 06 - 2 | 11b層 | B211 土器 | 赤生IV - 4か 路 | L径: 12.4(3/8) 現高: 3.7 | 外: ヨコナデ, タテヘラミガキ, スス付着, 粘土接合痕 内: ヨコナデ, 摩滅, 粘土接合痕 | 褐 (10YR4/4), 黒泥 (10YR3/1) 生駒西館産 |
| 427 52 | 赤生土器 有孔鉢 | | | 06 - 2 | 11b層 | B220 土器 出土地点 | 赤生V ~ VI | L径: 17.4 (楕円形) 底径: 4.9 ~ 5.5 (楕円形) 現高: 5.9 | 外: 摩滅, 指押えナデ 内: 指押えナデ, 空孔 1 (焼成前 ケタリ取り) | 黄褐 (2.5Y5/4) 生駒西館産 |
| 428 52 | 赤生土器 甕 | | | 06 - 2 | 11b層 | | 赤生I - 2 ~ 3 不明 | 胴部 外: 段上沈線文 2 条, ヘラミガキ? 内: 摩滅 | 黄灰 (2.5Y4/1), 石英, 長石, チャート? | |
| 429 52 | 赤生土器 甕 | | | 06 - 2 | 11b層 | | 赤径: 6.7 ~ 7.0 (完) 現高: 4.2 | 外: ハケメ, ナデ 内: 工具痕, 指押丸? | 灰褐 (7.5YR4/2) 生駒西館産 | |
| 430 52 | 石製品 砥石? | | | 06 - 2 | 11b層 | | 現長: 10.71 厚幅: 0.64 現厚: 4.22 重さ: 274.9g | 奥又石質滑粘板状灰岩 2面に擦痕 | | |
| 431 67 | 赤生土器 甕 | 02 - 1 | 12面 | A509 流路 | 赤生IV - 2 ~ 3 | | L径: 16.2(1/7) 現高: 4.5 | 外: ヨコナデ, 四線文 1 条, 斜1, ハケメ後継か/ハケメ 内: ヨコナデ, 斜1/ハケメ後継か/ハケメ | 褐 (5YR6/8) 石英, 長石, チャート | |
| 432 67 | 赤生土器 甕 | 02 - 1 | 12面 | A509 流路 | 赤生IV - 2 ~ 3 | | 底径: 7.1(1/2) 現高: 13.3 | 外: ヨコヘラミガキ, タテヘラミ ガキ, 全体にスス付着 内: ハラケズリ, 強い指ナデ, 一部コゲ付着 | 灰オーリー (5Y6/2) 石英, 長石, チャート | |
| 433 67 | 縄文土器 深鉢 | 02 - 1 | 12面 | A509 流路 | 長原式 | | 現高: 2.5 | 外, 内: 摩滅 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) 生駒西館産? | |
| 434 67 | 縄文土器 体部片 | 02 - 1 | 12面 | A509 流路 | 長原式 | | 不明 | 外: 凸沿 内外面摩滅 | 灰 (5Y4/1) 生駒西館産 | |
| 435 67 34 | 赤生土器 甕 | 02 - 1 | 12面 | A530 高まり | 赤生IV - 3か | | 胴部径: 8.0(2/3) 最大幅: 26.8 現高: 22.3 | 外: 縱状文 帯, 内形浮文 (2 列) 内: ハケメ後ナデ, 指押丸, ナデ?, 粘土接合痕, 指押 えナデ, ハケメ? 後ナデ, 指押丸 | にぶい相 (7.5YR5/4) 生駒西館産 | |

| 遺物番号 | 種別 | 同版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・駆土 |
|------|----|------|-----------------|------|------|---------------|--|---|---|--|
| 436 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12面 | | 弥生IV-3~4 | 底径.6.2~6.4(完) 現高:11.1 | 外:ヘラミガキ(摩減), スス付着 底面ヘラミガキ 内:指押えナデ, 摩減, ハケナデ | 黄褐色(2.5YR5/4), 灰褐色(7.5YR5/3) 生駒西麓産 |
| 437 | 67 | | 弥生土器 高杯 | 02-1 | 12面上 | | 弥生IV-2~3 | 脚部径:13.9(2/3) 現高:12.5 | 外:タテヘラミガキ, 一部ハケメ 残る, ヨコナデ 内:指押え, シボリ目, 工具痕, ナ デ, 粘土接合痕, スス厚く付着 | 灰褐色(10YR5/2) 生駒西麓産 |
| 438 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 口径:16.2(1/4) 現高:9.0 | 外:ヨコナデ後一部ヘラミガキ, タテヘラミガキ 内:ナデ?一部ヘラミガキ, ヨコヘ ラミガキ, 指押え | 橙(2.5YR6/6) 生駒西麓産 |
| 439 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | L1径:19.2(1/4) 現高:10.5 | 外:ヨコナデ, ナデ, タテヘラミ ガキ, 全体にスス付着 内:ヨコナデ, 指押え・ハケナデ 脚部ヘラミガキ | 黑(10YR2/1) 生駒西麓産 |
| 440 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生IV-1か | 脚部径:15.0(1/5) | 外:ヨコナデ, タテヘラミガキ, スス付着 内:指押えナデ, ナ デ後タテヘラミガキ | 黒(10Y2/1) 生駒西麓産 |
| 441 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生IIか | 底径.5.3(完) 現高:3.2 | 外:ヘラナデ?, 指押え, ヨコナデ 内:摩減 | 灰白(2.5Y7/1) 長石, 石英, 青母, チャート |
| 442 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生IIか | 底径.5.8(1/2) 現高:3.4 | 外:タテヘラミガキ, 底面ヘラミ ガキ 内:ヘラミガキ, 表面剥離 | 黑褐色(5YR3/1), 灰褐色(10YR5/2) 生駒西麓産 |
| 443 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生IIか | 底径.5.6(完) 現高:3.4 | 外:ヘラミガキ?, 指押えナデ 内:摩減 | 灰褐色(10YR5/2), にぶい相(5YR6/4) 生駒西麓産 |
| 444 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 底径.6.0(1/5) 現高:2.55 | 外:ヘラミガキ, ナデ, 底面部分 的にヘラミガキ 内:指ナデ(摩減) | 灰褐色(2.5YR4/2), 黑褐色(7.5YR3/2) 生駒西麓産 |
| 445 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生IVか | 底径.6.03(4) 現高:3.8 | 外:ヘラミガキ, スス付着 内:摩減 | 灰褐色(10YR5/2) 生駒西麓産 |
| 446 | 67 | | 弥生土器 高杯 | 02-1 | 12層 | | 弥生IVか | 脚部径:4.3(1/9) | 脚片 外:ナデ? 内:ナデ | にぶい黄相 (10YR7/2), 石英, 長石, チャート |
| 447 | 67 | 35 | 石製品 サヌカイト片 | 02-1 | 12層 | | | 長:7.74 帽:4.13 厚:1.19 重さ:41.2g | A面:下面に自然面残る | |
| 448 | 67 | 35 | 石製品 サヌカイト片 | 02-1 | 12層? | | | 長:8.36 帽:5.40 厚:2.37 重さ:82.1g | A面:下面に自然面残る | |
| 449 | 67 | 35 | 石製品 サヌカイトチップ | 02-1 | 12層 | | | 長:1.88 帽:2.73 厚:0.22 重さ:1.5g | | |
| 450 | 67 | | 弥生土器 壺蓋 | 02-1 | 12層 | | 弥生Ⅲか | 頂部径:4.2~4.4(一 部欠) 現高:8.3 | 外:ヘラミガキ, 薄くスス付着 内:ヘラミガキ?, シボリ目, ナデ | にぶい相 (7.5YR6/4) 生駒西麓産 |
| 451 | 67 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12層 | | 弥生IV-1か | 底径.5.5(完) 現高:4.7 | 外:ヘラミガキ?, ナデ 内:表面剥離 | にぶい相 (7.5YR6/3) 生駒西麓産? |
| 452 | 68 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12b層 | | 弥生IV | L1径:14.0(若干の砂) 頭部径:12.8(1/6) 現高:3.7 | 外:ヨコナデ, 指押え, ヨコヘラ ミガキ, スス付着 内:ヨコナ デ, ヨコヘラミガキ, ナデ | 灰褐色(10YR4/2) 生駒西麓産 |
| 453 | 68 | | 弥生土器 壺 | 02-1 | 12b層 | | 弥生IIか | 現高:4.0 | 外:ヨコナデ, ナデ, スス付着 内:ヨコナデ, ヘラミガキ, 板ナ デ? | 灰褐色(7.5YR6/2) |
| 454 | 68 | 35 | 石製品 石繩 | 02-1 | 13面 | | | 現長.5.37 規幅.2.13 規厚.5.3 重さ.5.2g | サヌカイト 凸凹式, 片側断面状加工 | |
| 455 | 68 | | 石製品 投掷? | 02-1 | 12b層 | | | 長:3.05~3.18 厚:0.98 重さ:14.1g | 砂岩 一部スス付着, 二次焼成で赤色化 | |
| 456 | 68 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 12面 | B199高 まり直上 | 弥生IVか | L1径:12.2(1/8) 現高:3.4 | 外:ヨコナデ, ハケメ? 内:ヨコナデ, ナデ, 指押えナデ か内外面コグ, スス付着 | 灰褐色(7.5YR4/2) 生駒西麓産 |
| 457 | 68 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 12面 | B199高 まり | 弥生IIか | L1径:15.2(1/7) 現高:1.6 | 外:斜目, ヨコナデ, 板ナデ, ス ス付着 内:ヨコナデ | にぶい黄相 (10YR7/4) 生駒西麓産 |
| 458 | 68 | 35 | 石製品 石繩 | 06-2 | 12面 | B200溝 | | 現長.3.88 規幅.2.12 規厚.0.42 重さ.3.5g | サヌカイト 凸凹式, 斜面断面状 | |
| 459 | 68 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 12面 | B204溝 | 弥生IVか | L1径:12.0(1/7) 現高:2.05 | 外:ヨコナデ, ナデ 内:ヨコナデ, 和いハケメ | にぶい黄(2.5Y6/3) 生駒西麓産 |
| 460 | 68 | 34 | 弥生土器 把手付鉢 | 06-2 | 12面 | B207土 器 | 弥生IV-1か (一部欠損) 底径.4.6(完) 現高:5.9~6.2 | L1径:16.0(一部欠損) 底径.4.6(完) 現高:5.9~6.2 | 外:ヨコナデ, ナデ, 輪状底部, 把 手ナデ 内:粗いハケメ(一 部タテハケメ) | 明黄色(10YR7/6) 生駒西麓産 |

| 遺物番号 | 種別 | 同番号番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・歯土 |
|------|-----|--------------|--------|-------|---------------|-----------------------------------|----|---------------------------------------|--|---|
| 461 | 石製品 | 石庖丁 | 06 - 2 | 12面 | B239 高 まり内 | | | 長:4.4 幅:5.4 厚:0.7 孔径:0.8 | 碌泥石片岩 日輪直線刃半月形 A:使用痕、敲打痕 | |
| 462 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 12面 | B240 溝 | 秀生IV - 2か | | 底径:5.3(完) 現高:6.8 + 13.3 | <底面>外:ヘラミガキ、一部ス ズベ着、指ナデ 内:ハケメ、指ナデ ・胴部:外:ヘラミガキ 内:板ナギ、粘土接合痕 | <底部>灰オリーブ (5Y5/3) <胴部>にぶい黄褐 (10YR5/3) 生卵西體産 |
| 463 | 石製品 | 秀生土器 把手付鉢 | 06 - 2 | 12層 | B208 土 器 | 秀生IV - 1か | | 口縁:16.6(完) 現高:6.8 | 外:刻目、斜立文、ヘラミガキ 内:ヘラミガキ 外、内:スズ付着、把手はヘラミ ガキで取り付け | にぶい相 (7.5YR7/4) 黒(7.5YR1.7/1) 生卵西體産 |
| 464 | 石製品 | サヌカイト片 | 06 - 2 | 12層 | | | | 長:3.45 幅:3.65 厚:1.2 重さ:11.4g | 上面自然面あり、全体に白く風化 | |
| 465 | 石製品 | サヌカイト片 | 06 - 2 | 12 b面 | | | | 長:3.15 幅:2.48 厚:1.26 重さ:7.8g | A面:叩き痕あり | |
| 466 | 石製品 | 秀生土器 甕蓋 | 06 - 2 | 12層? | | 秀生中期 | | 頂径:5.2(完) 現高:5.3 | 外:ナデ、指ナデ、爪痕からラ痕 内:ナデ内外面スコ、コゲ付着 ・ヨコナデ、枕縫、ハケメ?、薄 くスズ付着 内:ヨコナデ、ヘラミガキ? | 褐色(10YR5/1) 生卵西體産 |
| 467 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 12 b面 | B255 溝 | 秀生IIか | | 現高:3.5 | 外:ヨコナデ、枕縫、ハケメ?、薄 くスズ付着 内:ヨコナデ、ヘラミガキ? | 褐色(10YR4/1) 雲母 |
| 468 | 石製品 | 石庖丁 | 06 - 2 | 12 b層 | | | | 長:4.4 幅:2.1 厚:0.35 | 碌泥石片岩 日輪直線刃半月形か A、B:研磨痕 | |
| 469 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 02 - 1 | 13面 | A634 頭 | 秀生I 高地 | | 底径:6.6(2/3) 現高:3.3 | 外:接合面直線、ヘラミナデ、ナデ 底面:ラケグリ、黒色物質(赤 底模も) 内:ヘラミガキ | 黒褐(10YR3/1) 生卵西體産 |
| 470 | 石製品 | 秀生土器 鉢 | 02 - 1 | 13 b層 | | 秀生I | | 口径:15.3(1/4) 底径:7.0 ~ 7.4(一部 欠) | 外:把手残存1、二次沈成で削離 と赤色化 内:板ナデ、工具痕、底面指印 ・コゲ付着 | にぶい黄褐 (10YR7/2) 石英、長石、チャート |
| 471 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 I - 2か 路内側 | | 口径:16.4(1/2) 現高:8.8 | 外:ヘラミガキ(摩滅の為不明瞭) 1.粘土接合痕、削り出し凸凹 内:ヘラミガキ(摩滅の為不明瞭) | 黃褐(2.5Y5/3) 生卵西體産 |
| 472 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 I - 3か 路 265 土 器 | | 口径:15.85(8/8) 現高:9.6 | 外:穿孔(2焼成前内から穿孔) 削り出し凸凹(沈線文2条、ナデ 後)ヘラミガキ 内:ヨコヘラミ ガキ、指押えナデ? | 暗灰黄(2.5Y5/2) 生卵西體産 |
| 473 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 II - 3か 路内側 | | 口径:22.8(1/7) 現高:1.5 | 外:刻目、櫛縫波状文(4条)、ヨコ ナデ 内:ヘラミガキ(細い) | 黃褐(2.5Y5/3) 生卵西體産 |
| 474 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 I - 3 ~ 4 路 | | 口径:28.3(1/20) 現高:10.0 | 外:刻目、沈線文3条、ナデ、薄 くスズ付着 内:ヨコナデ、ヘ ラミガキ7、筋ナデ、工具痕あり | 黒褐(2.5Y3/2) 生卵西體産 |
| 475 | 石製品 | 秀生土器 鉢 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 I - 4 路 | | 口径:23.0(1/12) 現高:4.9 | 外:指押え後ヨコナデ、ハマス 内:ヨコナデ一部ハケメ、指押え ナデ | にぶい黄褐 (10YR5/4) 生卵西體産 |
| 476 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 II - 1か 路内 (12 b層 下部) | | 現高:5.5 | 外:ヨコナデ、ナデ、スズ付着 内:ヨコナデ、指押えナデ全体に 一部分ヘラミガキ? | 黃褐(2.5Y4/1) 生卵西體産 |
| 477 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B267 溝 | 秀生 I | | 頂径:5.8(完) 現高:10.9 | 外、内:ヘラミガキ、ナデ薄くス ズコゲ付着 | 明赤褐(10YR5/6) 石英、チャート、長 石 |
| 478 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B287 土 坑 | 秀生 I | | 口径:26(1/14) 現高:3.0 | 外、内:ヘラミガキ、黒色物質生 じ 内:粘土接合痕 | 暗灰黄(2.5Y4/2) 生卵西體産 |
| 479 | 石製品 | 秀生土器 甕 | 06 - 2 | 13面 | B287 土 坑 | 秀生 I - 4か | | 現高:6.8 | 外、内:摩滅の為調整不明 | 褐(7.5YR4/6) 生卵西體産 |
| 480 | 石製品 | 秀生土器 鉢 | 06 - 2 | 13面 | B266 土 坑 | 秀生 II - 1か | | 口径:20.0(1/4) | 外:ヨコナデ、直線文(4条)帯 波状文(2条) 内:ハケメ、板ナデ、ナデ、粘土接 合痕 | にぶい黄 (2.5Y6/3) 黒(2.5Y2/1)、石英、 長石、チャート |
| 481 | 石製品 | 石庖丁 | 06 - 2 | 13面 | B287 土 坑 | | | 長:5.6 幅:9.2 厚:0.8 孔径:0.9 | 碌泥石片岩 日輪直線刃半月形 A、B:背 滑れ痕、敲打痕、研磨痕 | |
| 482 | 石製品 | 秀生土器 底部 | 06 - 2 | 13層 | | 秀生 Iか | | 底径:6.8(1/6) 現高:5.9 | 外:ヘラミガキ? 内:摩滅の為調整不明 | にぶい黄褐 (10YR5/3)、石英、 長石、雲母、チャート |
| 483 | 石製品 | サヌカイトチップ | 06 - 2 | 13面 | | | | 長:2.21 幅:0.9 厚:0.38 重さ:0.9g | A面:自然面 | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 順序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・駆土 |
|------|-----|------|---------------|--------|---------------------------|--------------|------------------------|---|---|---|
| 484 | 87 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B340 土坑 | 弥生 I か | 底径:7.3 ~ 7.5(完) 現高:7.6 | 外:ハケメ(粗、縦あり)後ヘラミガキ、スス付着 内:粗いハケメ後ヘラミガキ、一部ゴザ付着 | 黄褐色(2.5YS/3) 生駒西麓産 |
| 485 | 87 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B349 ピット | 弥生 II - 1 か | <口縁部> 口径:18.0(1/6) 現高:3.5 <底部>底径:7.3 ~ 7.5(一部欠) 現高:13.1 | <口縁部>外:ヨコナデ、ハケメ 後ヘラミガキ 内:ヨコナデ 内、外:ゴザ、スス付着 <底部>外:ヘラミガキ、工具痕、 スス付着 内:ナデ後ヘラミガキ ナデ | 黄褐色(2.5YS/3) 生駒(10YR3/2) 生駒西麓産? <底部> |
| 486 | 87 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B367 土坑 | 弥生 I | 底径:6.0(1/8) 現高:8.1 | 外:内:荒れの均調整不明 外:一部スス付着、粘土接合痕 内:薄くゴザ付着 | にぶい橙 (7.5YR6/4)石英、 長石、チャート |
| 487 | 87 | 36 | 石製品 サヌカイト片 | 06 - 2 | 13 b面 | B374 土坑 | | 長:3.70 厚:4.26 厚:0.8 重さ:12.5g | A面:自然面あり | |
| 488 | 87 | 36 | 石製品 サヌカイト片 | 06 - 2 | 13 b面 | B374 土坑 | | 長:3.04 厚:1.84 厚:0.19 重さ:1.0g | | |
| 489 | 87 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B380 土坑 | 弥生 II | <口縁部> 口径:18.25(1/2) 現高:10.3 <底部>外:底径:5.6(完) 現高:5.5 | <口縁部>外:ヨコナデ、ナデ、 粘土接合痕、スス付着 内:粗 ゴザ後ハケメ、一部ゴザ付着 <底部>外:ヘラナデ?, スス付着 内:ヘラミガキ? | 黒褐色(10YR3/1) <底部> にぶい橙(SYR6/3) 生駒西麓産 |
| 490 | 88 | 36 | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B401 ピット | 弥生 I - 4 | 底径:7.2(完) 現高:23.7 | 外:ハケメ後ヨコヘラミガキ、ヨ コハケメ後一部ヨコヘラミガキ、 沈殿文 6 条、ヨコヘラミガキ、沈 殿文 6 条、ヨコハケメ後ヘラミガ キ、ナデ?, 黑毛質質塗布 内:ハケメ、ヘラミガキ、粗押え ナデ?, 板ナデ? | 灰黃褐色(10YR6/2) 石英、長石、チャート |
| 491 | 88 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B427 土坑 | 弥生 I - 4 か | 現高:3.8 | 外:削目、ハケメ後ナデ、ハケメ 後ヘラミガキ、スス付着 内: ヨコナデ、ナデ一部ヘラミガキ | 黒褐色(10YR3/1) |
| 492 | 88 | 37 | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b面 | B428 土坑 | 弥生 II - 1 か | 口径:16.0(若干のナ 底径:5.8 ~ 5.9(完) 潜高:21.0 | ナデ、板ナデ後ヘラミガキ、 スス付着 内:ヨコナデ、板ナ デ後ハケメ・ヘラミガキ、ナデ、 工具痕、ゴケ付着 | 黄褐色(2.5YS/3) 生駒西麓産 |
| 493 | 88 | 38 | 縄文土器 深鉢 | 06 - 2 | 13 b面 | B428 土坑周辺 | 長原式 | 不明 | 体部片 | にぶい黄褐色 (10YR6/4) 生駒西麓産 |
| 494 | 88 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b層 | | 弥生 I - 4 か II - 1 か | 口径:20.4(1/3) 現高:13.7 | 外:ヨコナデ、ハケメ、スス付着 内:ヨコナデ、指押えナデ一部ハ ケメ、ヘラミガキ? | 明褐色(7.5YR5/6) 黒褐色(7.5YR3/2) 生駒西麓産 |
| 495 | 88 | | 弥生土器 甕 | 06 - 2 | 13 b層 | | 弥生 II か | 底径:6.0(1/4) 現高:7.0 | 外:板ナデ、ヘラナデ、ナデ 接合痕、ゴザ付着 | 明褐色(10YR6/6) 生駒西麓産 |
| 496 | 88 | 36 | 弥生土器 脚付鉢? | 06 - 2 | 13 b層 | | 弥生 II か | 底径:5.4 ~ 5.6(殻部 1/3) 現高:9.3 | 外:脚付鉢縁文(6 条 1 帯)5 帯 ヨコナデ、ハケメ、ナデ 内:ハケメ、ナデ、測量の為不明 | にぶい橙 (7.5YR7/4) 石英、長石、赤色粒 |
| 497 | 88 | 36 | 土製品 鈎輪車 | 06 - 2 | 13 b層 | | | 径:5.3 × 5.1 厚:1.41 孔 径:0.54 重さ:50.1 g | 孔、焼成崩上から下に穿孔。 灰褐色(2.5Y/2/2), にぶい橙 (7.5YR7/4) 石英、長石、赤色粒 | |
| 498 | 102 | | 弥生土器 甕 | 02 - 1 | 14 - 2 面精查 | | 弥生 I か | 底径:6.2 ~ 6.5(完) 現高:5.8 | 外:ナデ、工具痕、底面ヘラミガ キ? 内:ナデ | にぶい黄褐色 (10YR4/3) 生駒西麓産 |
| 499 | 102 | | 弥生土器 甕 | 02 - 1 | 14 - 2 面(14 - 1 b層) | | 弥生 I - 3 ~ 4 | 底径:6.7 ~ 7.0(完) 現高:9.2 | 外:ナデ、ヘラミガキ、ナデ、底面 ゆるい凹み 内:ヘラミガキ? ナデ、コザ付着 | 灰褐色(10YR5/2) 生駒西麓産 |
| 500 | 102 | | 弥生土器 甕 | 02 - 1 | 14 - 2 面 | A680 露 高地 | 弥生 I | 底径:8.5 ~ 8.7(完) 最大幅:29.3 現高:15.4 | 外:ヨコヘラミガキ、工具痕、粘 土接合痕、底面ヘラミガキ? 内:板ナデ後一部ヘラミガキ | 灰褐色(7.5YR4/2) 生駒西麓産 |
| 501 | 102 | | 弥生土器 大型甕 | 02 - 1 | 14 - 2 面直上 | | 弥生 I | 底径:13.5 ~ 13.7(完 0) 現高:8.5 | 外:ナデ後ヨコヘラミガキ、粘土 接合痕、底面ヘラケズリ 内:ナデ後削・ヘラミガキ、粘土 接合痕、邊なヘラミガキ、底面ヘ ラミガキ | にぶい黄褐色 (10YR6/3) 生駒西麓産 |
| 502 | 102 | | 弥生土器 甕 | 02 - 1 | 14 - 2 面 | | 弥生 I - 3 か | 口径:30.6(1/6) 現高:11.6 | 外:削目、ナデ、板ナデ後沈縁文 3 条、一部ハケメ、スス付着 内:ヨコナデ、指押え後板ナデ?, コザ付着 | 灰褐色(2.5YS/2) 生駒西麓産 |
| 503 | 102 | | 弥生土器 鉢 | 02 - 1 | 14 - 2 面 | A680 露 高地 | 弥生 I | 口径:17.8(1/3) 底径:6.6 ~ 6.8(完) 現高:11.5 ~ 12.3 | 外:ナデ、ヘラミガキ、底面ヘラ ミガキ 内:ヘラミガキ | 灰褐色(7.5YR5/1) 生駒西麓産 |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 層序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・駆土 |
|------|-----|------|-----------------|------|-----------|--------------|-------------------|---|---|--|
| 504 | 102 | | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 14-2 | A680 鉢 高地 | 後原式 | 不明 | 体部 外:ナデ、小D字刻目凸帯、ヘラ ケツリ、スス付着? 内:摩滅 | 灰黄褐(10YR4/2) 生駒西體産 |
| 505 | 102 | | 縄文土器 底部 | 02-1 | 14-2 | | 晚明 | 底径 6.8 ~ 6.9(完) 現高: 2.9 | 外:ヘラケツリ、ヨコナデ、底面 周縁 内:指押えナデ | にぶい褐色 (7.5YR5/4) 生駒西體産 |
| 506 | 102 | 37 | 石製品 石鍬 | 02-1 | 14-2 | 面直上 | | 長径: 4.24 規幅: 1.92 厚厚: 0.33 重さ: 1.9g | サメダイト | |
| 507 | 102 | 37 | 石製品 石核 | 02-1 | 14-2 | 面 | | 長: 5.11 幅: 2.97 厚: 2.29 重さ: 51.6g | サヌカイト | |
| 508 | 102 | 38 | 骨製品 牙製垂飾 | 02-1 | 14-2 | 面直上 | | 長: 11.0 規幅: 1.78 厚厚: 0.34 孔径: 0.34 ~ 0.38 | イシシの牙 穿孔を1対で2対残し(両面か ら穿孔と内面から穿孔あり)。全 体に削って加工。 | |
| 509 | 102 | 37 | 弥生土器 甌 | 02-1 | 14-2 | A677 土 坑 | 弥生 I - 2 か | L.I径: 12.4(2/3) 底径: 8.8 ~ 9.4(完) 現高: 20.7 + a | 円筒形 外:ヨコナデ、指押えナデ後一部 ヘラミガキ、ヘラミガキ、一部板 ナデ後ヘラミガキ。沈線文2条、 タテヘラミガキ後ヨコヘラミガ キ。指押え、底面ヘラケツリ 内:ヨコヘラミガキ、板ナデ?、ナ デ、指押え、工具痕、ナデ | 灰黄褐(10YR6/2) 生駒西體産 |
| 510 | 102 | 37 | 弥生土器 甌 | 02-1 | 14-2 | A678 土 坑 | 弥生 I - 3 か | L.I径: 19.9(1/2) 底径: 7.3(完) 現高: 24.6 | 外: 刻目、ヨコハケメ?、ハケメ? 摩滅により調査不明。ナデ?、スス 付着 内: ヨコナデ、ハケメ?、板 ナデ、指押え、ナデ、コゲ付着 | にぶい褐色 (7.5YR7/4) 石英、長石、雲母 |
| 511 | 103 | 36 | 弥生土器 甌 | 02-1 | 14-2 | A680 鉢 高地 | 弥生 I - 2 - 3 か | L.I径: 12.5(3/4) 底径: 7.7 ~ 8.4(完) 現高: 22.3 | 外: ヨコナデ後工具痕、ヘラミガ キ、沈線文2条、タテヘラミガキ 内: 沈線文2条、ヨコヘラミガキ。 指押え、黒色物質塗布一部赤彩 内: ナデ後ヘラミガキ | 灰黄褐(10YR6/2) 生駒西體産 |
| 512 | 103 | 36 | 弥生土器 甌 | 02-1 | 14-2 | A680 鉢 高地 | 弥生 I - 3 か | L.I径: 21.9(2/3) 底径: 6.5 ~ 6.6(完) 現高: 26.3 | 外: 刻目、ヨコナデ、指押え、工具 痕、板ナデ、ヘラミガキ、底面ヘ ラケツリ、スス付着 内: ヨコナデ、ナデ、一部板ナデ 指押え、工具痕、コゲ付着 | にぶい黃褐 (10YR6/4), 褐灰(10YR4/1), 赤褐(5YR8/8) 生駒西體産 |
| 513 | 103 | | 弥生土器 甌 | 02-1 | 14-2 | A680 鉢 高地 | 弥生 I - 4 か | 底径: 8.4 ~ 8.8(一部 欠) | 外: 表面剥離、タテハケメ、部分 的にスス付着、底面未整一部ナ デ 内: 板ナデ、指押え、ナデ、 コゲ付着 | 灰黄褐(10YR4/2) 生駒西體産? |
| 514 | 103 | 38 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 14-2 | | 宮窓式後期 | 現高: 5.2 | 外: 開窓文(1/2条) | 褐(10YR4/4) 生駒西體産 |
| 515 | 103 | 38 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 14-2 | b面 | 宮窓式後期 | L.I径: 33.4(1/9) 現高: 4.9 | 外: 摩滅、四窓文(1/2条) 内: 指押えナデ、工具によるナデ | にぶい黄褐 (10YR5/3) 生駒西體産 |
| 516 | 103 | 38 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 14-2 | | 追加里Ⅲ b式か | 現高: 6.4 | 外: ヨコナデ、ヘラミガキ 内: ヘラミガキ(摩滅) | 黒褐色(10YR3/2) 生駒西體産 |
| 517 | 103 | 38 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 14-2 | | 縄文窓期か | 現高: 3.9 | 外: ナデ? 内: 摩滅 | にぶい黄褐 (10YR5/3) 生駒西體産 |
| 518 | 103 | 38 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 14-2 | b面 | 縄文窓期か | 現高: 5.5 | 外: ナデ?, 黏土接合痕、ヨコナ デヘラケツリ 内: 摩滅 | 灰黄褐(10YR4/2) 生駒西體産 |
| 519 | 103 | 37 | 石製品 サヌカイトチップ | 02-1 | 14-2 | 層 | | 長: 1.74 幅: 2.71 厚: 0.18 重さ: 0.8g | | |
| 520 | 103 | | 弥生土器 底部 | 02-1 | 14-2 | b層 | 弥生 I | 底径: 5.9 ~ 6.1(完) 現高: 3.7 | 外: 摩滅、スス付着 内: 指押えナデ | 灰白(7.5Y7/1), 石 英、長石、チャート |
| 521 | 103 | 39 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 15面 | 上 | 元住吉山土式 | L.I径: 33.3(1/3) 現高: 18.5 | 外: ヘラミガキ、沈線文2条間縫 文2帶、一ヶ所穿孔あり、スス付 着 内: 手目、板状ナデ後ヘラ ケツリ、一部コゲ付着 | 褐灰(10YR5/1) 石英、長石、チャ ート |
| 522 | 103 | 39 | 縄文土器 深鉢 | 02-1 | 15面 | | 元住吉山土式か | L.I径: 15.6(1/5) 底径: 9.0 ~ 9.3(完) 現高: 21.6 | 外: 案痕?, ナデ後工具痕、スス付 着 内: 板ナデ?、ナデ | 灰暗黃(2.5Y4/2) 石英、長石、チャ ート |
| 523 | 103 | 37 | 石製品 石鍬 | 02-1 | 15面 | | | 現長: 2.5 規幅: 1.22 現厚: 2.3 重さ: 0.6g | サヌカイト 凹型式、B面大削離面残る | |
| 524 | 103 | | 縄文土器 底部 | 02-1 | 15層以 下 | | 追加里Ⅲ b式か | 底径: 2.0 ± 0.0174 | 外: 案痕?, ナデ, 案痕?, 四み底 内: 摩滅 | 灰オーリー(5Y5/2) 石英、長石 |
| 525 | 103 | 37 | 石製品 サヌカイトチップ | 02-1 | 15b層 | | | 長: 2.53 幅: 1.75 厚: 0.43 重さ: 2.3g | 表面風化著しい | |

| 遺物番号 | 種別 | 国版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 畳 (cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外面)・歴史 |
|------|-----|------|---------------|------|------|----------------|--------------|------------------------------------|---|--|
| 526 | 104 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 14-1 | | 弥生 I - Z ~ 3 | 不明 | 体部片 外:削り出し凸帯上沈線文 I 条 内:ヘラミガキ、黒色物質塗布か | にぶい褐色 (7.5YR5/3) 生駒西體産 |
| 527 | 104 | | 弥生土器 底部 | 06-2 | 14-1 | | 弥生 I | 底径:7.9(1/4) 現高:1.8 | 外:ヘラミガキ、底面ヘラ記号 内:ナデ、工具痕? | にぶい黄褐色 (10YR5/3) 生駒西體産 |
| 528 | 104 | | 弥生土器 壺蓋 | 06-2 | 14-1 | | 弥生 I | 口径:14.2(1/4) 現高:2.6 | 内、外:黒色物質塗布 外:ヘラミガキ、穿孔 2 個 1 対 内:指押え後ヘラミガキ | オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 生駒西體産 |
| 529 | 104 | | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-1 | | 晚期 | 現高:3.75 | 外:ヨコ・タテヘラケガリ 内:ナデ? | にぶい黄褐色 (10YR5/4) 生駒西體産 |
| 530 | 104 | | 縄文土器 鉢か浅鉢? | 06-2 | 14-1 | 壺 | 晚期後半 | 現高:5.5 | 外:ナデ?、ヨコヘラケズリ 内:ヨコナデ。一部ヘラミガキ? ナデ | オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 生駒西體産 |
| 531 | 104 | | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-1 | | ? | 現高:3.1 | 外、内:ナデ? | 黄褐色 (2.5Y5/3) 生駒西體産 |
| 532 | 104 | 38 | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-1 | | 長原式 | 現高:3.1 | 外:D字削目凸帯、ナデ | 灰褐色 (7.5YR5/2) 生駒西體産 |
| 533 | 104 | | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-1 | | 長原式 | 不明 | 体部片 外:D字削目凸帯 | 黄褐色 (2.5Y5/3) 生駒西體産 |
| 534 | 104 | 38 | 縄文土器 壺 | 06-2 | 14-1 | | 長原式 | 口径:17.6(1/10) 現高:4.2 | 外:凸帯、ヘラミガキ? 内:凹線?、ヘラミガキ? | 黄褐色 (2.5Y5/3) 生駒西體産 |
| 535 | 104 | | 縄文土器 底部 | 06-2 | 14-1 | | 晚期 | 底径:5.8 ~ 6.0(完) 現高:2.0 | 外:ヘラケズリ、ナデ 内:工具痕?、ナデ | にぶい黄褐色 (10YR5/4) 生駒西體産 |
| 536 | 104 | 37 | 石製品 石器 | 06-2 | 14-1 | | | 現長:2.34 現幅:1.56 現厚:0.31 重さ:1.0g | サヌカイト 円盤式 | にぶい黄褐色 |
| 537 | 104 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 14-2 | | 弥生 I - Z | 不明 | 体部片 外:段上沈線文 I 条、ヨコヘラミ ガキ 内:摩滅 | にぶい黄褐色 (10YR7/4), にぶい 黄褐色 (10YR5/4) 生駒西體産 |
| 538 | 104 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 14-2 | | 弥生 I - Z ~ 3 | 不明 | 体部片 外:削り出し凸帯上沈線文 I 条、ナ デ?、ヘラミガキ、黒色物質塗布 内:ナデ後ヨコヘラミガキ? | 灰褐色 (10YR4/1) 生駒西體産 |
| 539 | 104 | 38 | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-2 | | 長原式 | 現高:5.4 | 外:ヨコナデ D字削目凸帯、ナデ 薄くスズ付着 内:ナデ | 灰褐色 (2.5Y5/2) 生駒西體産 |
| 540 | 104 | | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-2 | 水田耕作 | 長原式 | 現高:1.4 | 外:ヨコナデ、小D字削目凸帯、 スズ付着 内:ヨコナデ | 黄褐色 (2.5Y5/4) 生駒西體産 |
| 541 | 104 | | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-2 | 土 | 長原式 | 現高:2.6 | 外:凸帯、ヨコナデ、ヘラケズリ? 内:ヨコナデ、ナデ | にぶい黄褐色 (10YR6/3) 生駒西體産 |
| 542 | 104 | 38 | 縄文土器 壺 | 06-2 | 14-2 | | 長原式 | 器高:3.8 | 外、内:ヨコナデ、ナデ | 灰褐色 (10YR6/2) 生駒西體産 |
| 543 | 104 | 38 | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-2 | | 水走タイプ | 現高:3.3 | 外:ヨコナデ、小D字削目凸帯、 一部崩れ? 内:ヨコナデ、指押えナデ | 灰褐色 (2.5Y7/2), 黄褐色 (2.5Y4/1) 石斧、長石 |
| 544 | 104 | 38 | 縄文土器 壺 | 06-2 | 14-2 | 水田耕作 | | 現高:6.0 | 外:ヨコナデ D字削目凸帯、薄く スズ付着 内:ナデ | オリーブ黒 (5Y3/1) 石斧、長石 |
| 545 | 104 | | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-2 | | 長原式 | 不明 | 体部片 外:ナデ、小O字削目凸帯 内:指押えナデ | にぶい黄褐色 (10YR7/4) 生駒西體産 |
| 546 | 104 | | 石製品 投擲? | 06-2 | 14-2 | | | 長:5.5 幅:3.3 厚:1.7 重さ:49.0g | 砂岩 自然石 | |
| 547 | 104 | | 石製品 投擲? | 06-2 | 14-2 | | | 長:5.4 幅:3.5 厚:2.2 重さ:58.8g | 砂岩 自然石 | |
| 548 | 104 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 14-2 | B421溝 | 弥生 I - 2か | 不明 | 体部片 外:ヘラミガキ、段 内:ナデ一部ヘラミガキ? | 灰褐色 (10YR5/2) 生駒西體産 |
| 549 | 104 | 38 | 縄文土器 深鉢? | 06-2 | 14-2 | B421溝 | 長原式 | 現高:3.4 | 外:小V字削目凸帯、推進、スズ 付着 内:ナデ | 灰褐色 (5Y4/1) 生駒西體産 |
| 550 | 104 | | 石製品 砥石? | 06-2 | 14-2 | B422溝 | | 現長:5.5 現幅:2.32 現厚:1.97 | 波状刃削溶結凝灰岩 頭面 17° 摘痕? | |
| 551 | 104 | | 石製品 投擲? | 06-2 | 14-2 | B422溝 | | 長:3.86 幅:2.32 厚:1.97 重さ:25.8g | 砂岩 自然石 | |
| 552 | 104 | | 弥生土器 壺 | 06-2 | 14-2 | B442土 器出土地點 | 弥生 I | 底径:10.0(1/6) 現高:6.7 | 外:ヘラミガキ、黒色物質塗布か 内:ナデ後ヘラミガキ? | 黒 (10YR2/1), 灰褐色 (10YR5/2) 生駒西體産 |
| 553 | 104 | | 弥生土器 無底壺 | 06-2 | 14-2 | B443土 器出土地點 | 弥生 I - 4か | 口径:12.0(1/5) | 外:ヘラミガキ (摩滅)、穿孔 (被 成前から 12 個 1 対で 1 対現存) 内:ヘラミガキ | 灰褐色 (10YR4/1), に ぶい褐色 (7.5YR6/3) 生駒西體産 |

| 遺物番号 | 種別 | 國版番号 | 器種 | 調査区 | 相序 | 遺構 | 時期 | 法 番(cm) ()は残存率 | 特徴 | 色調(外側)・駁土 |
|------------|------------|------|------|---------------------|-------------|----------------------|---------------------------------|--|--|-----------|
| 554 104 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | B422溝 | 長原式 | 現高:2.1 | 底部外:ヘラケズリ 内:指揮丸ナデ,コゲ付着 | 暗灰黄(2.5Y5/2) 生駒西體産 | |
| 555 104 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | B422溝 | 輪削 | 底径:5.2(完) 現高:2.5 | 底部外:ヘラケズリ,ナデ 内:指揮丸ナデ | にふく黄褐 (10YR7/3) 生駒西體産 | |
| 556 104 | 木製品 机 | | 06-2 | 14-2 | B431 桟 面 | | 現長:20.2 径:3.2~3.3 | アカガシ地属 先端断面位置で9面にカット | | |
| 557 104 | 木製品 机 | | 06-2 | 14-2 | B481 桟 面 | | 現長:32.3 径:3.4~3.5 | ヤナギ属 表面に部分的に薄皮あり、先端6面カット | | |
| 558 104 | 木製品 机 | | 06-2 | 14-2 | B483 桟 面 | | 現長:13.7 径:3.0~3.3 | ヤマグワ 外:裏面に筋1がある。先端5面にカット | | |
| 559 104 | 木製品 机 | | 06-2 | 14-2 | B484 桟 面 | | 現長:31.3 径:3.6 | ヤマグワ 一部樹皮残存、先端3面にカット | | |
| 560 105 | 弥生土器 壺 | | 06-2 | 14-2 | B440溝 | 弥生II-1か 面 | 胸部径:22.0(1/5) 現高:13.8 | 外:ヨコナデ,工具痕,板ナデ? スス付着 内:ヨコナデ,指揮 丸ナデ,板ナデ | 黒(5Y2/1) 生駒西體産? | |
| 561 105 | 弥生土器 壺 | | 06-2 | 14-2 | B475ビ ット | 弥生IIか 面 | 頭部径:9.5(1/2) | 面部 外:板ナデ 内:ナデ,指揮丸ナデ | にふく黄褐 (10YR5/4) 生駒西體産? | |
| 562 105 | 弥生土器 壺 | | 06-2 | 14-2 | | 弥生I-2か 14-2 b唇 | 口径:11.1(1/6) 現高:4.4 | 外:ヘラミガキ,沈線文 内:ヘラミガキ | 灰黄(2.5Y5/2) 生駒西體産 | |
| 563 105 | 弥生土器 壺 | | 06-2 | 14-2 | | 弥生I | 不明 | 体部 外:沈線文(2条+a),ヨコナ ミガキ 内:指揮丸ナデ後ヘラミガキ | にふく黄褐 (10YR7/3) 生駒西體産 | |
| 564 105 38 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | | 長原式 | 凸縁下部径: 22.0(1/13) 現高:4.15 | 外:D字刻目凸縁,ヨコナデ,ナ デ,スス付着 内:指揮丸ナデ | 灰黄褐(10YR5/2) 生駒西體産 | |
| 565 105 38 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | B422溝 | 長原式 | 現高:6.6 | 外:ヨコナデ,小D字刻目凸縁 ナデ,スス付着 内:指揮丸ナデ | 黒(2.5Y3/1) 生駒西體産 | |
| 566 105 38 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 ~14- 2b唇 | | 長原式 | 不明 | 体部 外:小D字刻目凸縁,ヘラケズリ 内:ナデ | 褐色(5Y5/1) 生駒西體産 | |
| 567 105 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | | 輪削 | 胸部内径:24.0(1/4) | 灰黄褐(10YR6/2), にふく黄褐 内:ヘラミガキ?,摩滅 | 灰黄褐(10YR6/2), にふく黄褐 (10YR7/4) 生駒西體産 | |
| 568 105 | 石製品 砥石? | | 06-2 | 14-2 | | | 現長:8.6 現幅:6.7 現厚:1.8 | 砂岩 砥面? | | |
| 569 105 | 石製品 凹み石 | | 06-2 | 14-2 | | | 現長:10.1 現幅:6.5 現厚:2.7 | 錫泥石片岩 凹み | | |
| 570 105 38 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | B491ビ ット | 長原式 | 最大胸部径:26.0(1/6) 現高:16.1 | 外:ヨコナデ,小D字刻目凸縁 ナデ,ヘラケズリ,スス付着 内:指揮丸ナデ,板ナデ | 灰(5Y5/1), オリーブ黒(5Y3/1) 生駒西體産 | |
| 571 105 38 | 縄文土器 深鉢 | | 06-2 | 14-2 | b唇 | 長原式 | 現高:4.9 | 外:ヨコナデ,D字刻目凸縁,ナ デ,スス薄く付着 内:ヨコナデ,ナデ | 灰黄褐 (10YR4/2) 生駒西體産 | |

写 真 図 版

図版 1 遺構



1 02-1 調査区 第2-1面 北半 全景（北東から）



2 第2-1面 A57 水口（北から）

図版2 遺構



1 06-2調査区 第2-1面 西半 全景（北東から）



2 第2-1面 B1・B2 烏晶と水田（北から）

図版3 遺構

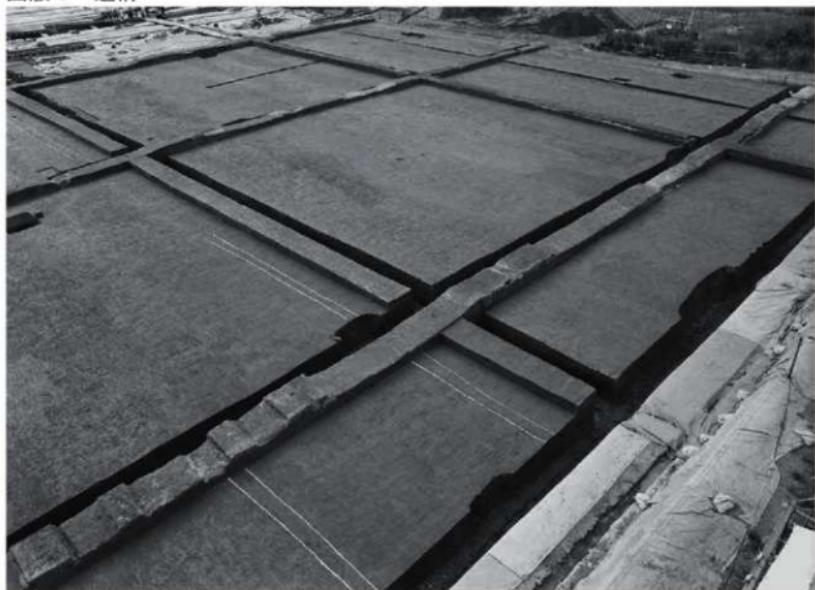


1 06-2調査区 第2-1面 東半 全景（北西から）



2 02-1調査区 第3-1面 南半 全景（北東から）

図版4 遺構



1 02-1調査区 第3-2面 北半 全景（北東から）



2 06-2調査区 第3-2面 東半 全景（南から）

図版5 遺構



1 第3-3面 A101 坪境（東から）



2 第3-3面 A105 畦畔（南から）

図版6 遺構

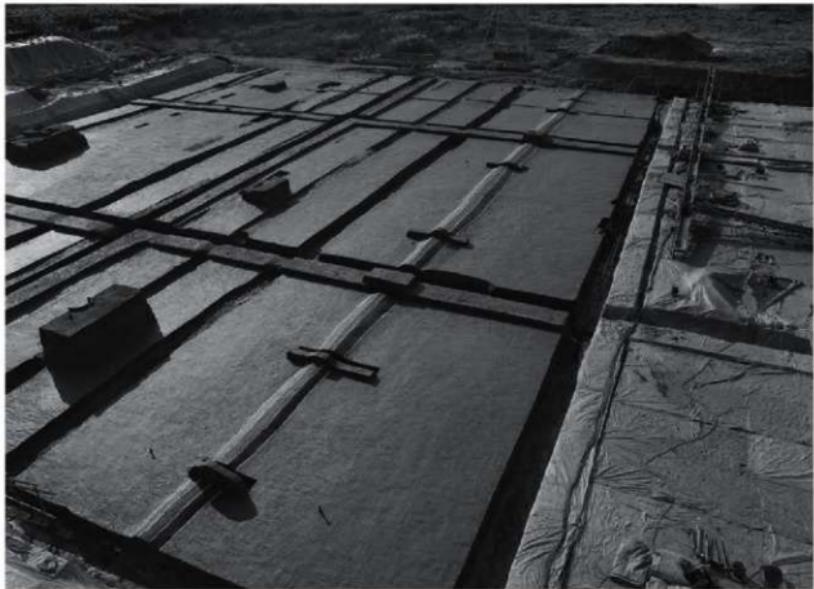


1 02-1 調査区 第4面 北半 全景（西から）



2 06-2 調査区 第4面 西半 全景（南から）

図版 7 遺構



1 02-1調査区 第6面 南半 全景（北東から）



2 06-2調査区 第7面 東半 全景（南東から）

図版8 遺構

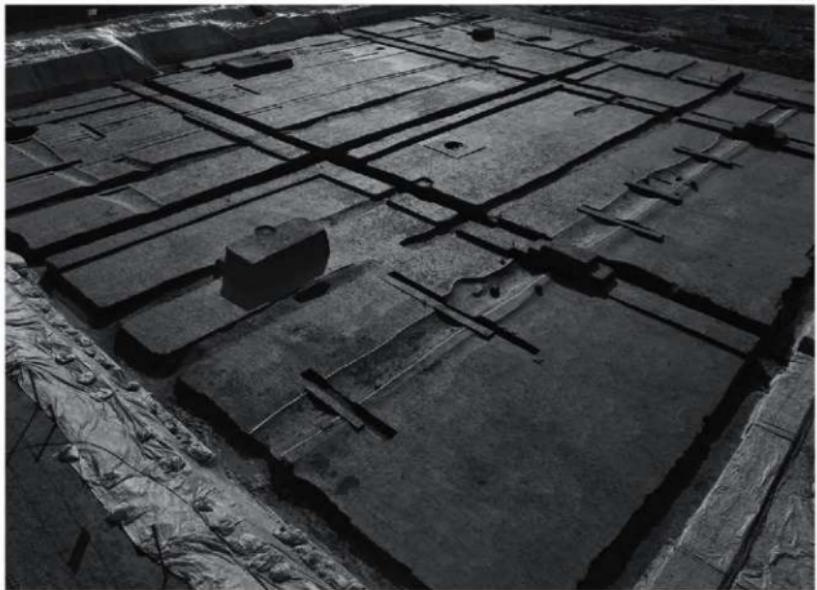


1 02-1調査区 第8面 南半 全景（北東から）



2 第8面 B42 土坑（北西から）

図版9 遺構



1 02-1調査区 第9面 南半 全景（北東から）



2 02-1調査区 第9面 南半 全景（南から）

図版10 遺構



1 06-2 調査区 第9面 東半 全景（南から）



2 02-1 調査区 第10面 北半 全景（南東から）

図版11 遺構



1 第10面 A391 微高地（北から）



2 第10面 A242 土坑・A243 ピット（南から）



3 第10面 A243 ピット（西から）



4 第10面 A282 土坑（北から）



5 第10面 A374 土坑（南東から）

図版12 遺構



1 06-2調査区 第10面 西半 全景（北東から）



2 06-2調査区 第10面 東半 全景（南から）

図版13 遺構



1 02-1 調査区 第11面 南半 全景（南東から）

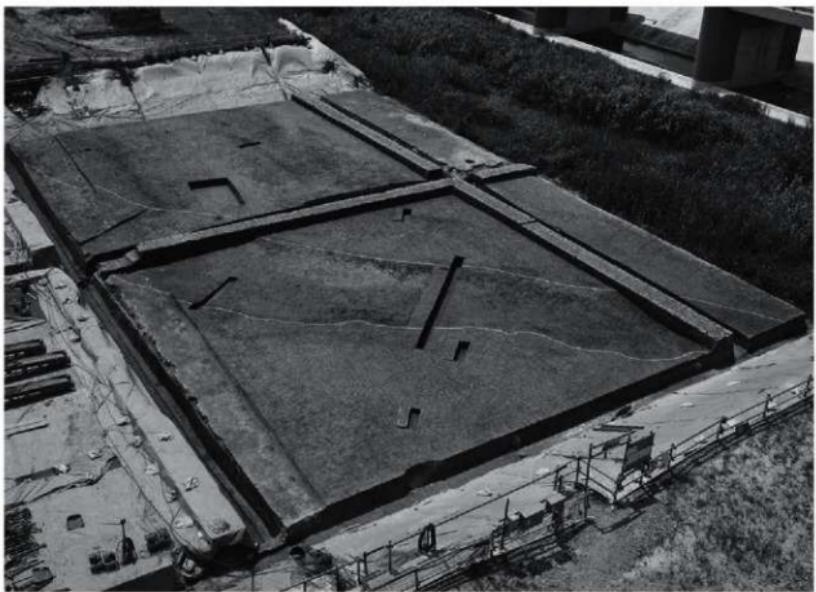


2 02-1 調査区 第11面 畦畔（西から）

図版14 遺構



1 06-2調査区 第11面 西半 全景（南から）



2 06-2調査区 第11b面 西側 全景（北東から）

図版15 遺構



1 02-1 調査区 第12面 北半 全景（西から）



2 第12面 南半 水田域B（南東から）

図版16 遺構



1 06-2調査区 第12面 西半 全景（南から）



2 第12面 B213～219杭と立木・流木（南西から）

図版17 遺構



1 06-2調査区 第12面 東半 全景（南から）



2 第12面 A527水口（南東から）



3 第12面 B198溝（北から）



4 02-1調査区 第12面 土器437（南東から）

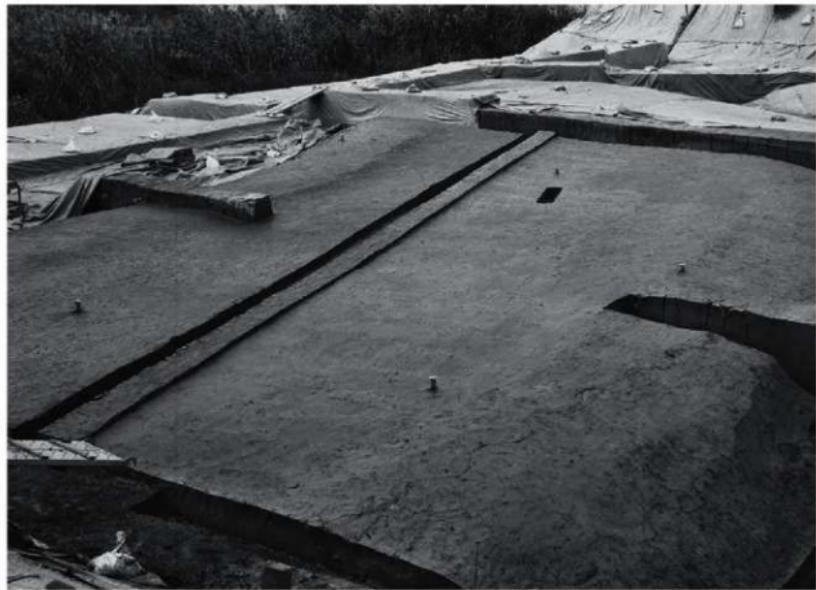


5 06-2調査区 第12面 土器460（北から）

図版18 遺構



1 06-2調査区 第12 b面 西半 全景（南から）



2 06-2調査区 第12 b面 敝溝（南東から）

図版19 遺構



1 02-1調査区 第13面 北半 全景（西から）



2 02-1調査区 第13面 南半 全景（西から）

図版20 遺構



1 第13面 A561～563畦畔、A633水口（西から）



2 06-2調査区 第13面 西半 全景（南から）

図版21 遺構



1 第13面 B335溝（南東から）



2 第12面 B240溝・第13面 B335溝 断面（北西から）

図版22 遺構



1 06-2調査区 第13 b面 東側 土坑・ピット群（南から）

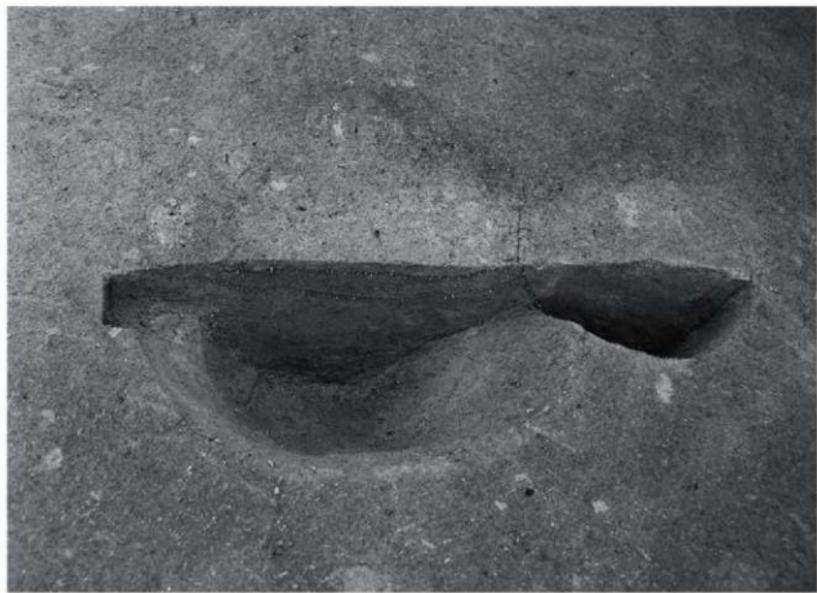


2 第13 b面 B340 土坑（南から）

図版23 遺構

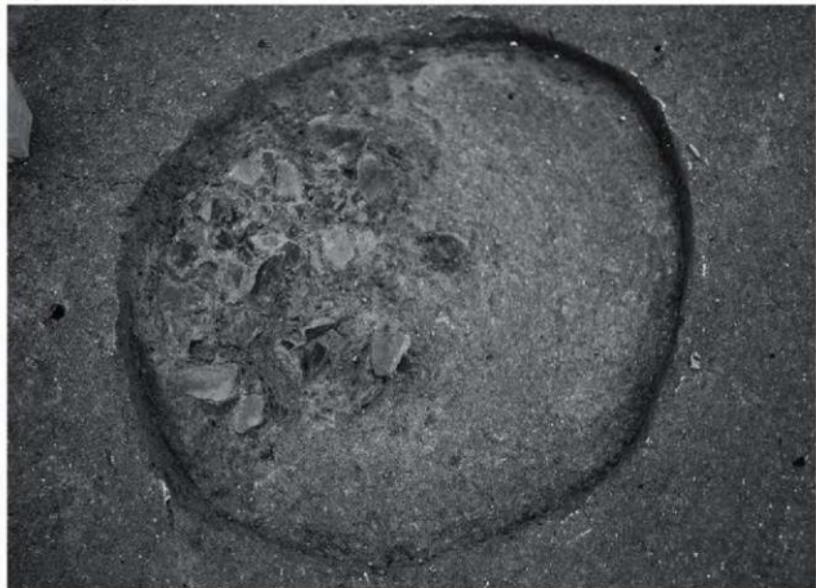


1 第13 b面 B341 土坑（西から）

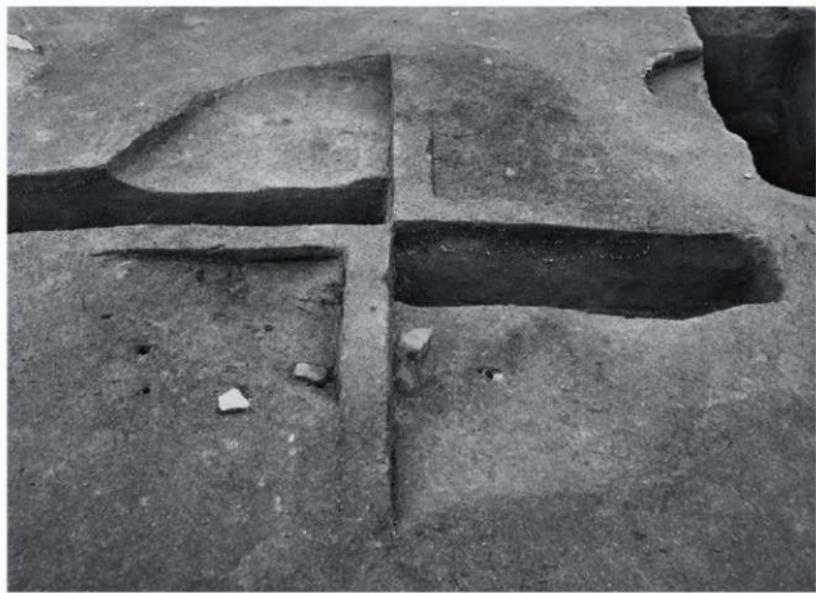


2 第13 b面 B342 土坑（左）・B404 ピット（右）（西から）

図版24 遺構



1 第13 b面 B349 ピット（北西から）



2 第13 b面 B374 土坑（南から）

図版25 遺構



1 第13 b面 B401 ピット（南から）



2 02-1 調査区 第14-1層 牙製垂飾 508（南西から）

図版26 遺構



1 02-1調査区 第14-2面 南半 全景（西から）



2 06-2調査区 第14-2面 東半 全景（南から）

図版27 遺構



1 第14-2面 A674溝と水田域（南西から）



2 06-2調査区 第14-2面 畦畔検出状況（南から）

図版28 遺構



1 第14-2面 B440溝と水田（北西から）



2 第14-2面 B422溝 土器出土地点と断層（南東から）

図版29 遺構



1 06-2調査区 第14-2b面 東半 全景(南から)



2 第14-2b面 A691溝(東から)



3 第14-2b面 B491ピット(南から)



4 02-1調査区 第14-2b層除去面 足跡(南から)



5 02-1調査区 第14-2b層中 土器出土状況(西から)

図版30 遺構

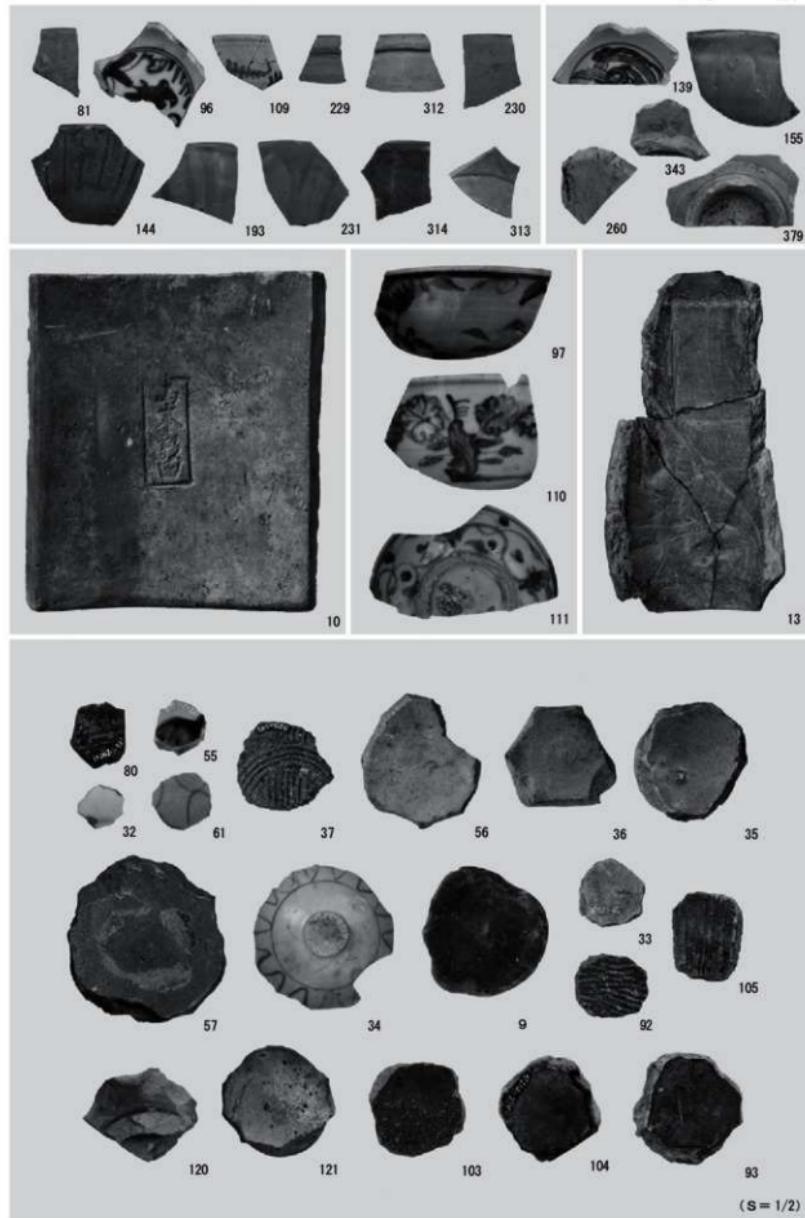


1 02-1 調査区 第15面 北半 全景（南から）



2 06-2 調査区 北側法面（南から）

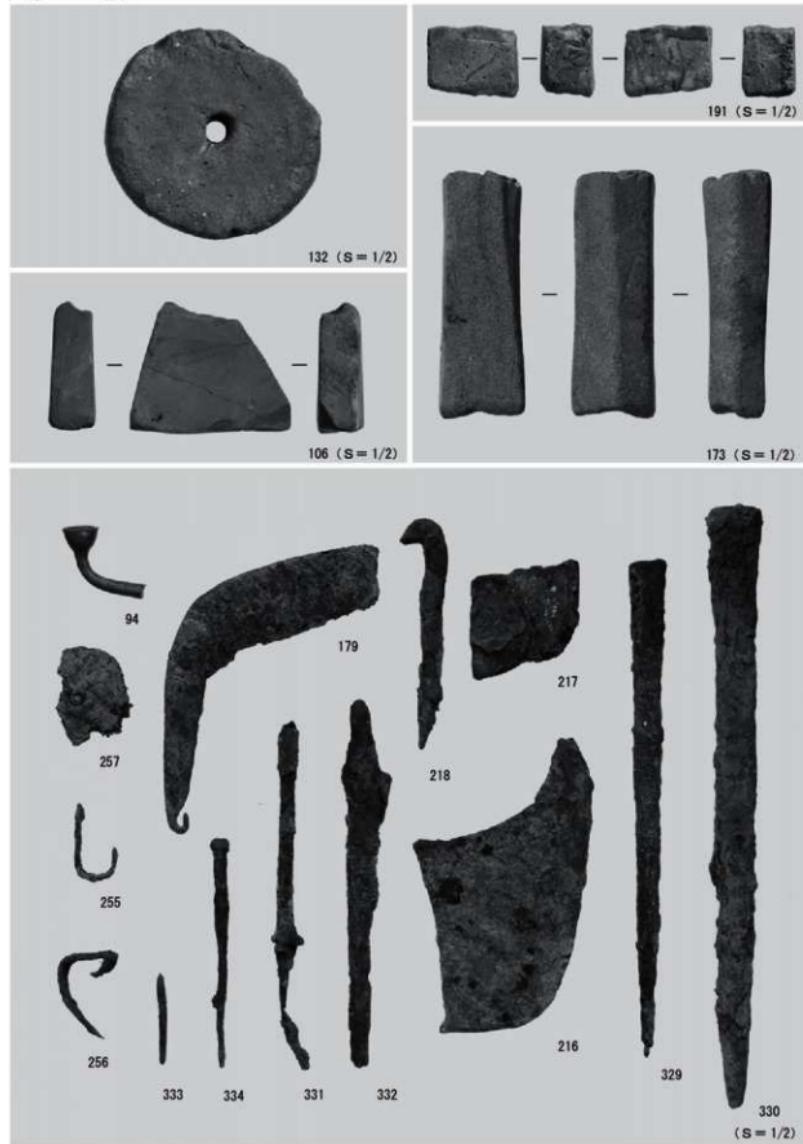
図版31 遺物



陶磁器、瓦、転用円板

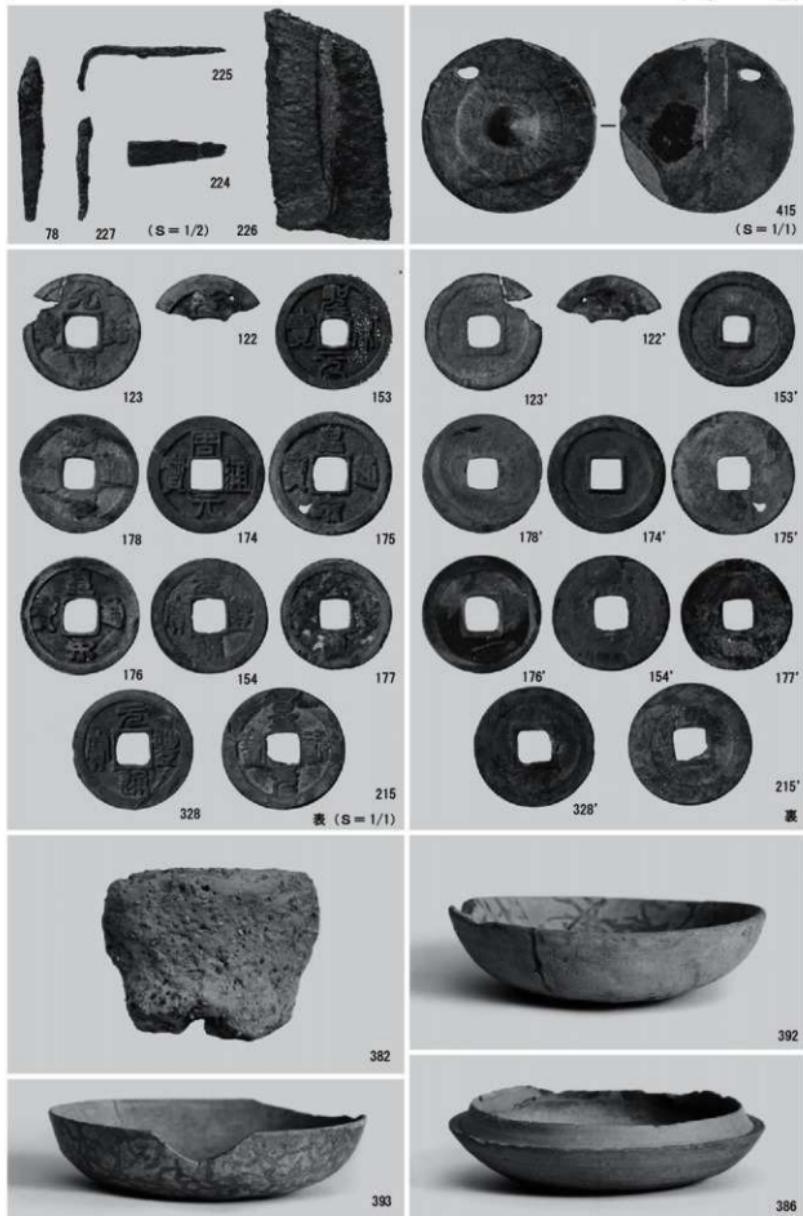
(S = 1/2)

図版32 遺物



土製紡錘車、砥石、金属製品

図版33 遺物



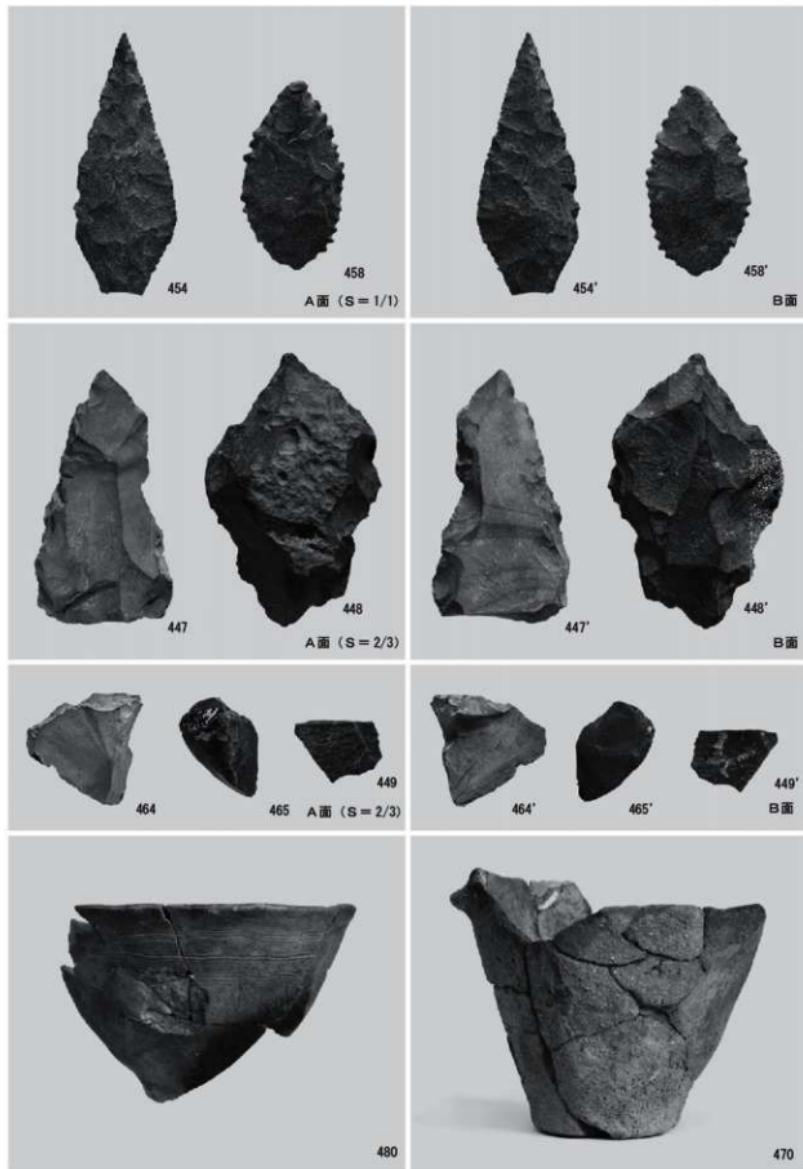
金属製品、小形仿製鏡、錢貨、土師器、須恵器

図版34 遺物



須恵器、サヌカイト片、弥生土器、石庖丁

図版35 遺物



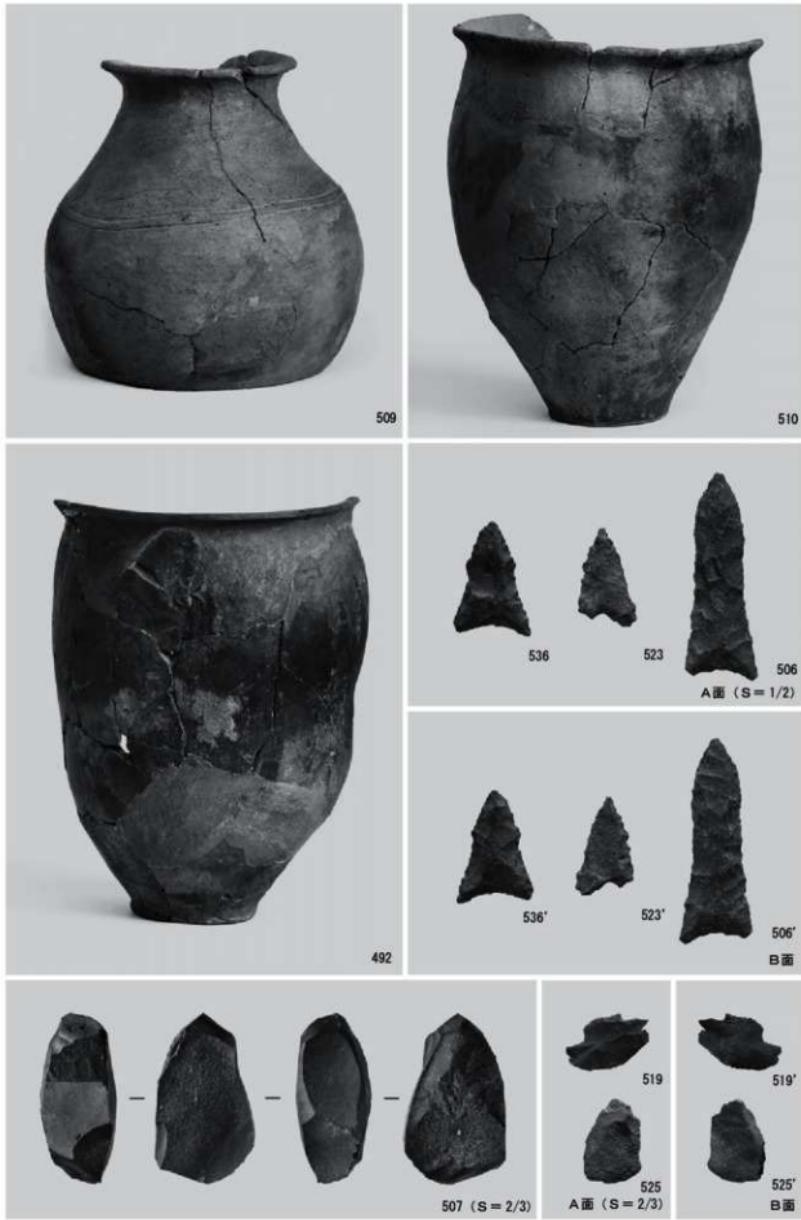
石鏃、サヌカイト片、弥生土器

図版36 遺物



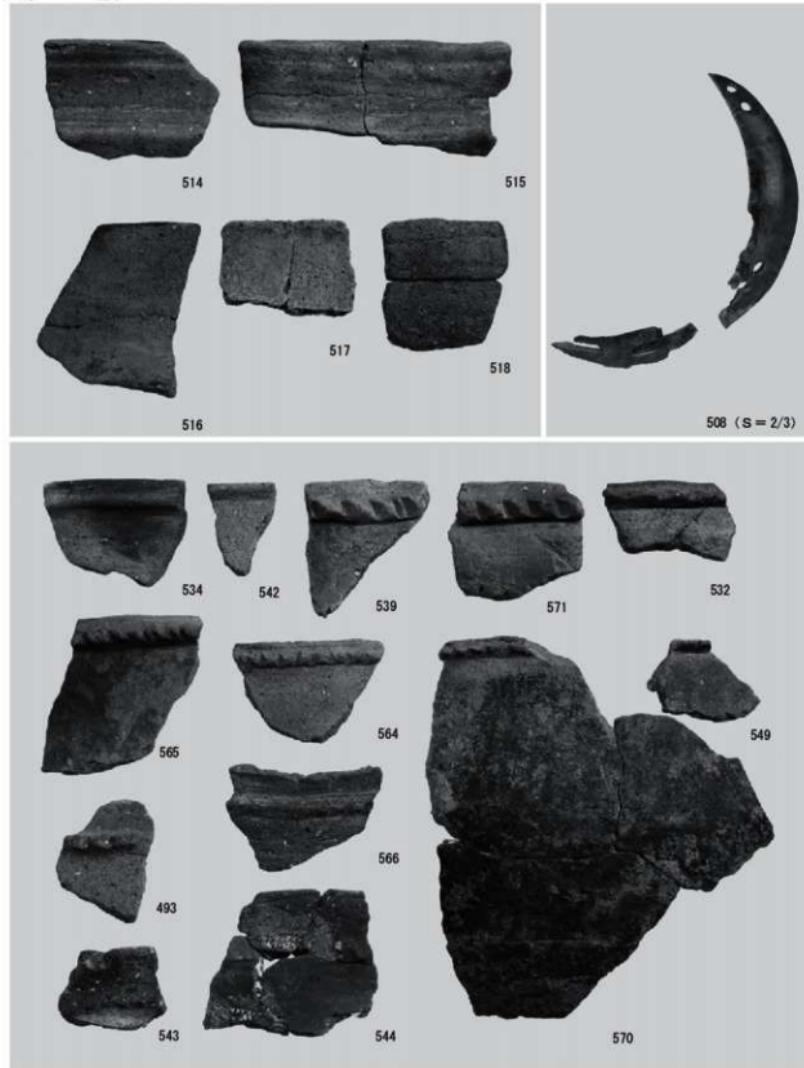
弥生土器、土製紡錘車、石庖丁、サヌカイト片

図版37 遺物



弥生土器、石鏃、サヌカイト石核、サヌカイト片

図版38 遺物



縄文土器、牙製垂飾

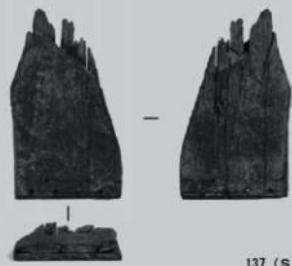
図版39 遺物



522



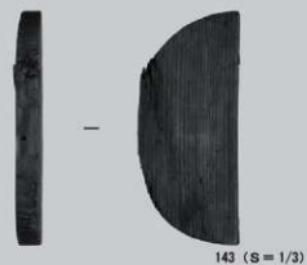
521



137 (S = 1/3)



136 (S = 1/2)



143 (S = 1/3)



259 (S = 1/2)

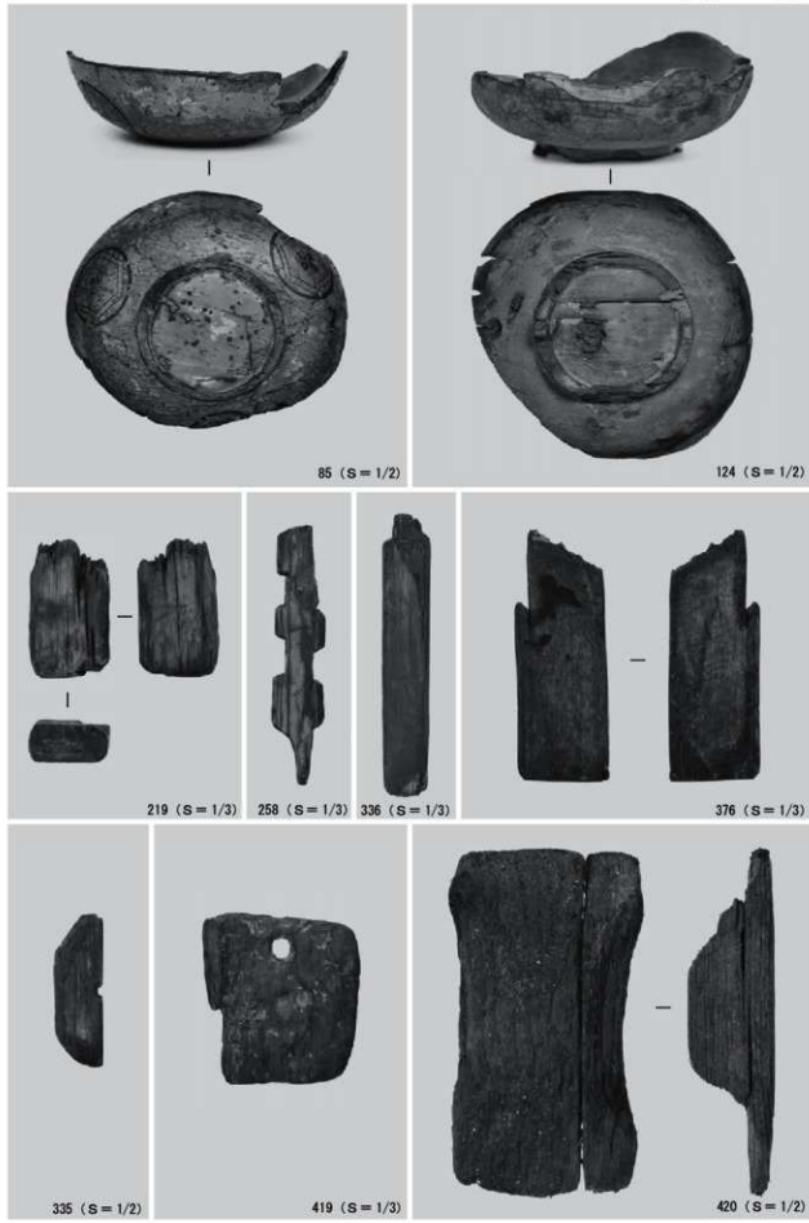
縄文土器、木製品

図版40 遺物



木製品

図版41 遺物



木製品

報 告 書 抄 錄

報告書抄録

| | | | | | | | | | |
|---------------------------|--|--------------------|-------------|-------------|-----------------------|-------------------------|--------------------------|---------------------|----------------------------|
| ふりがな | いのじま・ふくまんじいせき 9 | | | | | | | | |
| 書名 | 池島・福万寺遺跡 9 | | | | | | | | |
| 副書名 | 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書 (池島Ⅱ期地区02-1調査区・06-2調査区) | | | | | | | | |
| シリーズ名 | (財)大阪府文化財センター調査報告書 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第196集 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 廣瀬時習・飯田浩光(編)・陣内暢子・乾哲也・後川恵太郎 | | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)大阪府文化財センター | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3-21-4 TEL:072-299-8791 | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2009年 12月 28日 | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 遺跡番号 | 調査区 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | |
| いのじま・ふくまんじいせき 池島・福万寺遺跡 | あおいたまつりじまおおかかし 大阪府東大阪市 いのじままちょうわい 池島町地内 | 27227 | 93 | 02-1 調査区 | 34度 38分 56秒 | 135度 37分 41秒 | 2002年6月3日 2004年2月27日 | 4,371m ² | 一級河川 恩智川 治水緑地 の建設 |
| | | | | 06-2 調査区 | 34度 38分 55秒 | 135度 37分 45秒 | 2006年10月6日 2008年4月30日 | 2,406m ² | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 池島・福万寺 遺跡 | 田畠 | 現代~古代 | 島畠・溝・ピット | | 陶器器・瓦器・土師器・ 須恵器・鉢 | 条里型水田の変遷と 土地利用の推移 | | | |
| | 水田 | 古墳時代 | 溝・土坑・ピット・畦畔 | | 土師器・須恵器・ 小形彷彿鏡 | | | | |
| | 集落 | 古墳時代 | 溝・土坑・ピット | | 土師器・須恵器 | 微高地に溝・土坑・ ピット | | | |
| | 水田 | 弥生時代 | 大畦畔・畦畔 | | 弥生土器・石塼 | 弥生時代の地形変遷と 各時期の水田の変遷 | | | |
| | 集落 | 弥生時代 | 溝・土坑・ピット | | 弥生土器・石塼・石壠丁・ 魚類遺存体 | 微高地に溝・土坑・ ピット | | | |
| | 縄文時代 | | 縄文土器 | | | 水田經營以前の景観 | | | |

当遺跡における発掘調査は、1981年に発掘調査が開始され、現在も継続中である。既往の調査において、条里地割の変遷や、古墳時代~弥生時代前期中頃の水田面などの農耕関連遺構と古墳時代の初頭~前期および古墳時代中期後半~後期にかけての集落関連遺構などが重層的に検出されている。

今回の調査は、縄文時代から弥生時代にかけての堆積物が非常に厚く、古墳時代以降の堆積が各時期の人の行為によって大きく削平を受けており、東の06-2調査区ほど遺存状況が悪かった。しかし、これまでの各調査区同様に池島地区の基本的な遺構面が確認された。特筆されるのは、06-2調査区の水田部分と考えられる位置から小形彷彿鏡が見つかっている。遺構については確認できなかったが、興味深い。また、弥生時代の各面については、従来からの各面の水田遺構のほかに特筆すべき成果が上がっている。それは06-2調査区東端部の第13面で、同時に集落域と考えられる遺構群が確認されていることである。遺構は、土坑・ピット多数を確認し、出土土器は少ないものの、一部の土坑から魚類の骨なども確認されている。これまで、当遺跡内では弥生時代の居住域が確認された例は無く、今後の池島Ⅱ期調査の中で、これがどのように広がるのか興味深い。

要約

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第196集

東大阪市池島町・八尾市福万寺町

池島・福万寺遺跡9

(池島Ⅱ期地区02-1調査区・06-2調査区)
—一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 : 2009年12月28日

編集・発行 : 財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 : 株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地